(5) 西手取遺跡（にしてどり）

(6) 手取遺跡（てどり）

調 査 要 項

	手取遺跡	西手取遺跡
遺跡所在地	宮城県栗原郡高清水町小山田字西手取	同左
遺跡記号	ＢＥ（宮城県遺跡地名表登載番号：44011）	ＢＤ（同左）
調査期間	昭和48年7月23日～8月11日（第1次） 昭和49年7月18日～9月12日（第2次）	昭和49年7月3日～9月6日
調査面積	約16,500㎡	約6,300㎡
発掘面積	約3,955㎡	約2,395㎡
調査員	(第1次)文化財保護課 技師　藤沼邦彦 嘱託　阿部　恵 (第2次)文化財保護課 技師　鈴木惣之助、佐藤好一 嘱託、阿部恵、阿部博志、森貢喜 芳賀寿幸、柳田俊雄、林和男 中島直、後藤幸雄	文化財保護課 技術主査　早坂春一 技師　鈴木惣之助、小井川和夫、佐藤好一 嘱託　森貢喜、芳賀寿幸、阿部恵、阿部博志 柳田俊男、林和男、後藤幸雄
調査協力員	(第1次)金野　正（宮城県築館女子高等学校教諭） 三宅宗議（宮城県古川工業高等学校教諭） 遠藤智一（岩出山町立真山中学校教諭） 佐藤信行（栗原郷土研究会会員） 佐藤好一（高清水町立高清水小学校教諭） 築館女子高等学校社会クラブ員 (第2次および西手取遺跡) 遠藤智一（岩手山町立真山中学校教諭） 渋谷勝麿（三本木町立三本木中学校主事） 木村敏郎（石巻市立住吉中学校教諭） 佐藤信行（栗原郷土研究会会員）	
調査補助員	青山　均（早稲田大学学生） 磯本明彦（　〃　） 泉　信次（国学院大学学生） 小山　純（宇都宮大学学生）	柳瀬和幸（東北大学学生） 小泉道典（東北学院大学学生） 上村淳一（東洋大学学生）

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境
1. 位置と自然環境 …… 259
2. 歴史的環境 …… 259
Ⅱ．調査の方法と経過
1. 発掘調査の方法 …… 265
2. 発掘調査の経過 …… 266
Ⅲ. 発見された遺構と遺物
1. 西手取遺跡 …… 270
(1) 基本層序 …… 270
(2) 遺構の分布 …… 272
(3) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 272
(4) その他の遺構と出土遺物 …… 303
(5) 遺構以外の出土遺物 …… 304
2. 手取遺跡 …… 308
(1) 基本層序 …… 308
(2) 遺構の分布 …… 309
(3) 竪穴住居跡と出土遺物 …… 311
(4) その他の遺構と出土遺物 …… 334
(5) 遺構以外の出土遺物 …… 339
Ⅳ. 遺構と遺物に関する問題点
1. 遺　　構 …… 343
2. 遺　　物 …… 353
(1) 出土遺物の観察と計測方法 …… 353
(2) 出土遺物の分類 …… 357
ａ．縄文土器 …… 357
ｂ．土師器 …… 360
ｃ．須恵器 …… 365
ｄ．赤焼土器 …… 365
ｅ．石器 …… 366

(3)　遺構出土土器の組み合わせとその年代 …… 368
(4)　出土土器に関する問題点 …… 370
3．遺構の年代 …… 373
4．遺跡の構成 …… 374
Ⅴ．ま　と　め …… 376

挿図目次

第1図　周辺の遺跡…… 260・261
第2図　手取遺跡グリッド配置図…… 267
第3図　西手取遺跡グリッド配置図…… 269
第4図　基本層位…… 270
第5図　遺構分布図…… 271
第6図　第2住居跡…… 273
第7図　第2住居跡出土遺物(1)…… 276
第8図　第2住居跡出土遺物(2)…… 277
第9図　第2住居跡堆積土出土遺物…… 278
第10図　第3住居跡…… 281
第11図　第3住居跡出土遺物(1)…… 284
第12図　第3住居跡出土遺物(2)…… 285
第13図　第3住居跡堆積土出土遺物…… 286
第14図　第1住居跡…… 289
第15図　第1住居跡出土遺物…… 290
第16図　第1住居跡堆積土出土遺物(1)…… 290
第17図　同遺物(2)…… 290
第18図　第4住居跡…… 293
第19図　第4住居跡出土遺物(1)…… 295
第20図　第4住居跡出土遺物(2)…… 296
第21図　第4住居跡堆積土出土遺物…… 297
第22図　第5住居跡…… 299
第23図　第5住居跡堆積土出土遺物…… 301
第24図　土壙…… 302
第25図　遺構以外の出土遺物(1)…… 304
第26図　遺構以外の出土遺物(2)…… 306
第27図　基本層位…… 307
第28図　遺構分布図…… 309・310
第29図　第3住居跡…… 312
第30図　第3住居跡出土遺物(1) …… 314
第31図　第3住居跡出土遺物(2) …… 315
第32図　第4A住居跡…… 317
第33図　第4A住居跡出土遺物…… 319
第34図　第4A住居跡堆積土出土遺物…… 320
第35図　第4B住居跡…… 321
第36図　第4B住居跡出土遺物…… 322
第37図　第4B住居跡貼り床出土遺物…… 323
第38図　第5住居跡 …… 325
第39図　第1住居跡 …… 327
第40図　第1住居跡出土遺物 …… 328
第41図　第1住居跡堆積土出土遺物 …… 329
第42図　第2住居跡 …… 331
第43図　第2住居跡出土遺物 …… 333
第44図　埋甕を伴う土壙 …… 335
第45図　埋甕を伴う土壙出土遺物 …… 337・338
第46図　土壙 …… 339
第47図　遺構以外出土遺物(1) …… 339
第48図　遺構以外出土遺物(2) …… 340
第49図　遺構以外出土遺物(3) …… 341
第50図　住居跡の規模 …… 343
第51図　埋甕断面図 …… 351
第52図　口縁径頻度分布図 …… 354
第53図　底径頻度分布図 …… 354
第54図　器高頻度分布図 …… 355
第55図　立ち上り角度頻度分布図 …… 355
第56図　ふくらみ度頻度分布図 …… 355
第57図　色調分布図 …… 356

表目次

第1表　遺跡地名表Ⅰ…… 262
第2表　遺跡地名表Ⅱ…… 263
第3表　第2住居跡出土土器計測表…… 279
第4表　第2住居跡出土石器計測表…… 279
第5表　第3住居跡出土土器計測表…… 287
第6表　第1住居跡出土土器計測表…… 291
第7表　第1住居跡出土石器計測表…… 291
第8表　第4住居跡出土土器計測表…… 297
第9表　第5住居跡出土土器計測表…… 302
第10表　遺構以外出土石器計測表…… 306
第11表　第3住居跡出土土器計測表…… 315
第12表　第4住居跡出土土器計測表…… 324
第13表　第4住居跡出土石器計測表…… 324
第14表　第1住居跡出土土器計測表…… 330
第15表　第2住居跡出土土器計測表 …… 334
第16表　埋甕を伴う土壙出土遺物計測表 …… 336
第17表　遺構以外出土土器計測表 …… 342
第18表　遺構以外出土石器計測表 …… 342
第19表　住居跡一覧 …… 350
第20表　埋甕計測表 …… 351
第21表　縄文土器の分類と出土地点 …… 359
第22表　遺構に伴う土器分類集計表 …… 367
第23表　出土土器組合せ表 …… 369
第24表　西手取遺跡遺構出土破片集計表…… 379・380
第25表　西手取遺跡遺構外出土破片集計表…381・382
第26表　手取遺跡遺構出土破片集計表 ……383・384
第27表　手取遺跡遺構外出土破片集計表…… 385

写真図版目次

図版1　遺跡遠景 …… 387
図版2　西手取遺跡第1・2住居跡 …… 388
図版3　西手取遺跡第2住居跡 …… 389
図版4　西手取遺跡第3住居跡 …… 390
図版5　西手取遺跡第4・5住居跡 …… 391
図版6　手取遺跡第1・2住居跡 …… 392
図版7　手取遺跡第2・3住居跡 …… 393
図版8　手取遺跡第4A・5住居跡 …… 394
図版9　手取遺跡第5住居跡・埋甕を伴う土壙 …… 395
図版10　土師器坏・高台付坏 …… 396
図版11　土師器坏・高台付坏 …… 397
図版12　土師器坏・手づくね土器・甕 …… 398
図版13　土師器甕 …… 399
図版14　須恵器坏・甕，赤焼土器坏 …… 400
図版15　土師器坏 …… 401
図版16　土師器坏・高台付坏 …… 402
図版17　土師器甕 …… 403
図版18　土師器・須恵器甕 …… 404
図版19　赤焼土器坏・高台付坏・耳皿・砥石 …… 405
図版20　縄文土器 …… 406
図版21　縄文土器・磁器 …… 407
図版22　石器 …… 408

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1. 位置と自然環境

手取・西手取遺跡は栗原郡高清水町小山田字手取・西手取に所在し、国道４号線沿いにある国鉄バス陸前高清水駅から西北約３㎞の地点に位置している。

高清水町は栗原郡の南端、地形的には奥羽山脈から派生する築館丘陵が次第に低平となってきた末端近くに位置している。北西方向から延びてきた丘陵群は高清水町内では、迫川の支流である小山田川とそれに合流する善光寺川・透川などの大小の河川・谷沢などによって開析され複雑な地勢となっている。しかし、総じて起伏量は少なく標高 90～20mのゆるやかな丘陵地帯となっている。このような丘陵は、小山田川、透川を境にして北部・西部・南部の丘陵地帯に大別され、丘陵地帯を画している各河川の流域には扇状地性低地が発達しており、中央耕地として主として水田に利用されている。

両遺跡の所在する小山田字手取、西手取地区は高清水町の西端にあたり、隣接する岩手山町および古川市から続く標高 50m未満のなだらかな丘陵が小山田川の南岸に沿って南東方向に延びている西部丘陵地帯にある。西部丘陵地帯は小山田川に流れ込む小さな谷沢によってさらに開析されており、これらの小支谷奥には宿の沢溜池・上手取・下手取堤・新堤などの溜池が点在している。手取遺跡は、この西部丘陵地帯のほぼ中央に位置し、北を宿の沢溜池のある支谷、南を上手取・下手取堤のある支谷にはさまれ、東に向って突出する標高 50～30m の舌状丘陵の上に立地している。面積は約 300,000 ㎡で、現状は畑・宅地・雑木林などとなっているが、遺跡の中央部北半には旧モトクロス場があり削平により旧地形が改変されている。また、この丘陵の東辺には、西に向って小さな谷が入り込んでいる。

西手取遺跡は、下手取堤をはさんで南に 150m程離れた標高 45m前後の、やはり東に突出する舌状丘陵上に立地している。面積は約 10,000 ㎡で畑地・雑木林となっている。両遺跡とも水田面との比高は約 15mである。

2. 歴史的環境

手取・西手取遺跡周辺には、縄文時代以来中世以降まで多くの遺跡が残こされており、発掘調査によって遺跡の内容が明らかにされているものも多い。これらの遺跡のほとんどが扇状地性低地に臨む標高 25～50mのなだらかな丘陵上や段丘上に立地している。

現在知られているもっとも古い遺跡は縄文時代早期の大寺遺跡である。昭和 30 年東北大学の

第1図 周 辺 の 遺 跡

第1表　遺跡地名表Ⅰ

番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号	番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号
高清水町					26	観音沢遺跡	集落跡	縄文	44019
1	西手取遺跡	集落跡	縄文・平安	44011	27	向野A遺跡	包含地	縄文・平安	44029
2	手取遺跡	集落跡	縄文・平安	44011	28	台町西遺跡	包含地	奈良	44013
3	宮ノ脇遺跡	包含地塚	奈良・平安 中世・近世	44022	29	外沢田遺跡	包含地	奈良・平安	44008
4	陣館館跡	城館	中世	44036	30	御返り地蔵前遺跡	包含地	奈良・平安	44005
5	運難館跡	城館	江戸	44037	31	萩田遺跡	包含地	縄文・弥生	44007
6	下田遺跡	包含地	奈良・平安	44035	32	松ノ木沢田遺跡B	包含地	縄文	44028
7	宿ノ沢遺跡	包含地	縄文 奈良・平安	44025	33	松ノ木沢田遺跡A	包含地	縄文・平安	44027
8	折木山寺跡	寺院跡	鎌倉	44006	34	覚満寺跡	寺院跡	中世・近世	44023
9	袖山遺跡	包含地	奈良・平安	44038	35	中ノ茎遺跡	集落跡	縄文・奈良 平安・中世	44018
10	五輪C遺跡	包含地	奈良・平安	44034	岩出山町				
11	五輪B遺跡	包含地	奈良・平安	44033	36	真山館跡群	城館	室町	35058
12	五輪遺跡(A)	包含地	縄文・古墳	44010	37	宿の沢館跡	城館	中世	35085
13	明宮遺跡	包含地	奈良	44009	古川市				
14	新庄館跡(新庄館)	城館	中世	44002	38	清水側遺跡	塚		27139
15	下折木遺跡	集落跡	平安	44014	39	笹森遺跡	包含地	縄文	27028
16	下佐野遺跡	包含地	奈良・平安	44015	40	明神館跡	城館	中世	27102
17	大寺遺跡	包含地	縄文・古墳 奈良・平安	44001	41	藤屋敷遺跡	集落跡	平安	27066
18	堂の池遺跡(筒の池)	包含地	古墳・奈良	44016	42	外沢窯跡	窯跡	平安	27082
19	東館遺跡	集落跡	奈良	44017	43	生深町遺跡	包含地	縄文	27077
20	高清水城跡(御要害)	城館	中世	44024	44	北山囲遺跡	古墳	古墳	27076
21	経ケ崎遺跡	包含地	縄文・古墳 奈良・平安	44003	45	新寺館跡	城館	近世	27083
22	上経ケ崎遺跡(潰海塔)	五輪塔	平安	44004	46	市ケ坂館跡	城館	中世	27130
23	透川遺跡	包含地	平安	44032	47	梅女遺跡	包含地	縄文	27078
24	向野B遺跡	包含地	奈良・平安	44031	48	堀崎遺跡	包含地	古代	27079
25	松ノ木沢田遺跡C	包含地	平安	44030	49	鴻の巣遺跡	包含地	奈良・平安	27081

第2表　遺跡地名表II

番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号	番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡地名表番号
50	城内窯跡	窯跡	奈良・平安	27088	75	岩欠遺跡	集落跡	縄文・古墳 奈良・平安	46017
51	鴻ノ巣館跡	城館	近世	27101	76	上富丘陵東部遺跡群			46065
52	畑谷地古墳群	古墳	古墳	27075	77	坂ノ下舗遺跡	集落跡	縄文・平安	46034
53	十八引沢遺跡	包含地	縄文・奈良 平安	27063	78	坂ノ下舗II遺跡	散布地	奈良・平安	46042
54	下沢田遺跡	包含地	奈良	27024	79	北ノ沢遺跡		奈良・平安	46063
55	一ノ坪遺跡	包含地	奈良・平安	27080	80	薬沢東II遺跡	散布地	平安	46046
56	長者原遺跡	包含地	縄文	27005 27025	81	薬沢東III遺跡			46047
57	北原遺跡	包含地	奈良	27023	82	薬沢東I遺跡	散布地	平安	46045
58	長清遺跡	包含地	旧石器 縄文	27148	83	町田遺跡	散布地	奈良・平安	46044
59	一本杉遺跡	包含地	縄文・平安	27065	84	杉ノ塘塚	塚	古墳	46026
60	下蝦沢遺跡	包含地	弥生	27010	85	中三代遺跡		奈良・平安	46050
61	大窪遺跡	包含地	縄文	27001	86	三代遺跡	包含地	奈良・平安	46019
62	花島遺跡	包含地	縄文	27002	87	王塘古墳	古墳	古墳	46001
瀬峰町					88	長根遺跡		奈良・平安	46051
63	小深沢II遺跡		奈良・平安	45069	89	長根遺跡	包含地	奈良・平安	46020
64	小深沢遺跡			46058	90	旗塚	塚		46030
65	館山館跡	包含地 城館	奈良・平安 近世	46010	91	伊勢堂館跡	包含地 城館	縄文・奈良 平安・中世	46005
66	古館館跡	城館	中世	46012	92	四ッ塘古墳	包含地 古墳	古墳・奈良 平安	46002
67	大鶴谷北向遺跡	包含地	縄文	46013	93	神田遺跡			46066
68	経塚遺跡	経塚	古代(?)	46008	94	諏訪原経塚遺跡		近世	46053
69	殿上館跡	城館	中世	46007	95	野沢遺跡			46055
70	寺山 (極楽寺跡)	寺院跡	平安	46015	96	桝形館跡	包含地 城館	奈良・平安 中世	46003
71	的場山遺跡	包含地	縄文 奈良・平安	46011	97	四ッ塚遺跡	塚	平安	46004
72	空堤遺跡	包含地	縄文	46014	98	無縁塚	塚		46025
73	古塚	塚		46031	99	諏訪神社遺跡		縄文・奈良 平安	46052
74	砂田遺跡	包含地	奈良・平安	46016	100	袋沢遺跡		奈良・平安	46056

調査によって沈線文・貝殻腹縁文をもつ尖底土器が多く発掘され、これを標式として大寺式が設定されている(伊東：1957、興野：1970)。縄文時代の遺跡にはこの他に前期の笹森遺跡、前・中期の大窪遺跡、晩期の花島遺跡、萩田遺跡などがある。

萩田遺跡からは弥生時代中期の遺物も発見されている(佐藤：1979)。下蝦沢遺跡や大寺遺跡では、弥生時代後期の遺物が見つかっている。

古墳時代になると縄文・弥生時代よりも遺跡数は増加する。東館遺跡では、昭和 51 年県教委の調査によって古墳時代前期の方形周溝墓 1 基と中期の住居跡が 1 軒発見されている。大寺遺跡、堂の池遺跡も古墳時代中期の遺跡である。同じく昭和 51 年に調査された観音沢遺跡では古墳時代後期の住居跡が 15 軒検出されており、経ケ崎遺跡もこの時期の遺跡と考えられる。古墳としては北山囲古墳群・新田古墳群などの群集墳や小野横穴古墳群がある。

奈良・平安時代になると遺跡数の増加は一層きわだってくる。手取・西手取遺跡を初めとして、藤屋敷遺跡・下田遺跡・下折木遺跡では住居跡が検出され集落跡と考えられている。周辺には外沢窯跡や城内窯跡などもある。また、下田遺跡は丘陵上ではなく扇状地性低地と考えられる場所で発見されており、遺跡立地にも変化が見られる。

中世の遺跡には高清水城跡、新庄館跡、陣館などの城館跡がある。観音沢遺跡では掘立柱建物跡・土倉・井戸・土壙などの遺跡や青磁・陶器・木製品などの遺物が多く発見され、県内でも調査例の少ない中世の集落跡と考えられている。また、昭和 48 年に調査された宮ノ脇遺跡では宗教遺構と考えられる塚が 5 基発掘されている。

このように手取・西手取遺跡周辺には縄文時代早期中葉から、中世以降まで各時期の遺跡が残されている。特に東館遺跡・観音沢遺跡の調査は東北新幹線の路線敷部分の限られた面積を対象としており、このような限定された範囲の調査によって方形周溝墓や住居跡群が検出されたことは、古墳時代前期からすでに高清水町付近には、安定した経済基盤を持つ集団が集落を形成していたと考えられる。奈良・平安時代の遺跡数の増加や、遺跡立地の扇状地性低地への進出は、農業生産などを基盤とする集落の形成が一層拡大していく様を表わしており、手取・西手取遺跡の形成もこの一端と思われる。

Ⅱ．調査の方法と経過

1．発掘調査の方法

東北自動車道は手取遺跡と西手取遺跡の立地する東西に細長く延びている丘陵を幅約 60mの路線がゆるく左に弧を描きながら南北に横断する形となっている。このため西手取遺跡では調査対象区内は中央平坦部と南北の両斜面からなっており、その面積は6,300㎡である。手取遺跡は東から入り込む小さな沢によって16,500㎡と広大な調査対象区が大きく2分されており、沢の北側のＡ地区では、北端に僅かな平坦部を持つ他は、南斜面となっており、沢の南側のＢ地区は、中央平坦部と南北の両斜面から成っている。以下この章では、基準線の異なる調査区の設定方法を手取遺跡・西手取遺跡別に述べ、他の項目は両遺跡を一括して述べる。

調査区の設定

〔手取遺跡〕

手取遺跡は昭和48年と49年の2次に分れて調査が行なわれており、グリッドの設定、グリット名の付し方が異なっている。

1次調査一調査区ほぼ中央に位置する自動車道中心杭ＳＴA382＋60とＳＴA382＋80を結ぶ線を南北の軸とし、これに直交する東西軸線と共に基準線とした。そして、ＳＴA382＋60を基点として、3m四方のグリッドを調査区全体に配した。このグリッドには、北からはアラビア数字で、西からはアルファベットで表わすグリッド名を付した。

2次調査－第1次調査の基準杭が亡失していた事と地形的な制約もあったため、町道から南ではＳＴA381＋40とＳＴA381＋60を結ぶ線を、町道の北から第1次調査部分まではＳＴA382＋00とＳＴA382＋20を結ぶ線を南北軸として、それぞれに直交する東西軸を設定した。ＳＴA381＋40、ＳＴA382＋00を基点に、3m四方のグリッドを調査区全体に配したが、東西グリットでは南北軸がグリットの中心を通るようにした。各グリッドには、東西が東から11～30のアラビア数字、南北が南からＢＡ～ＣＦのアルファベットで表わすグリッド名を付した。

〔西手取遺跡〕

丘陵平坦部にある自動車道中心杭ＳＴA379＋80 とＳＴA380＋00 を結ぶ線を南北軸として基準とし、それに直交する東西軸を設け、ＳＴA379＋80を基点として、調査対象地区全体に3mグリッドを設定したが、東西グリットでは、南北軸がグリットの中央にくるようにした。各グリットには、東西が東から10～30のアラビア数字で、南北が南からＢＡ～ＤＬのアルファベットで表わすグリット名をつけた。

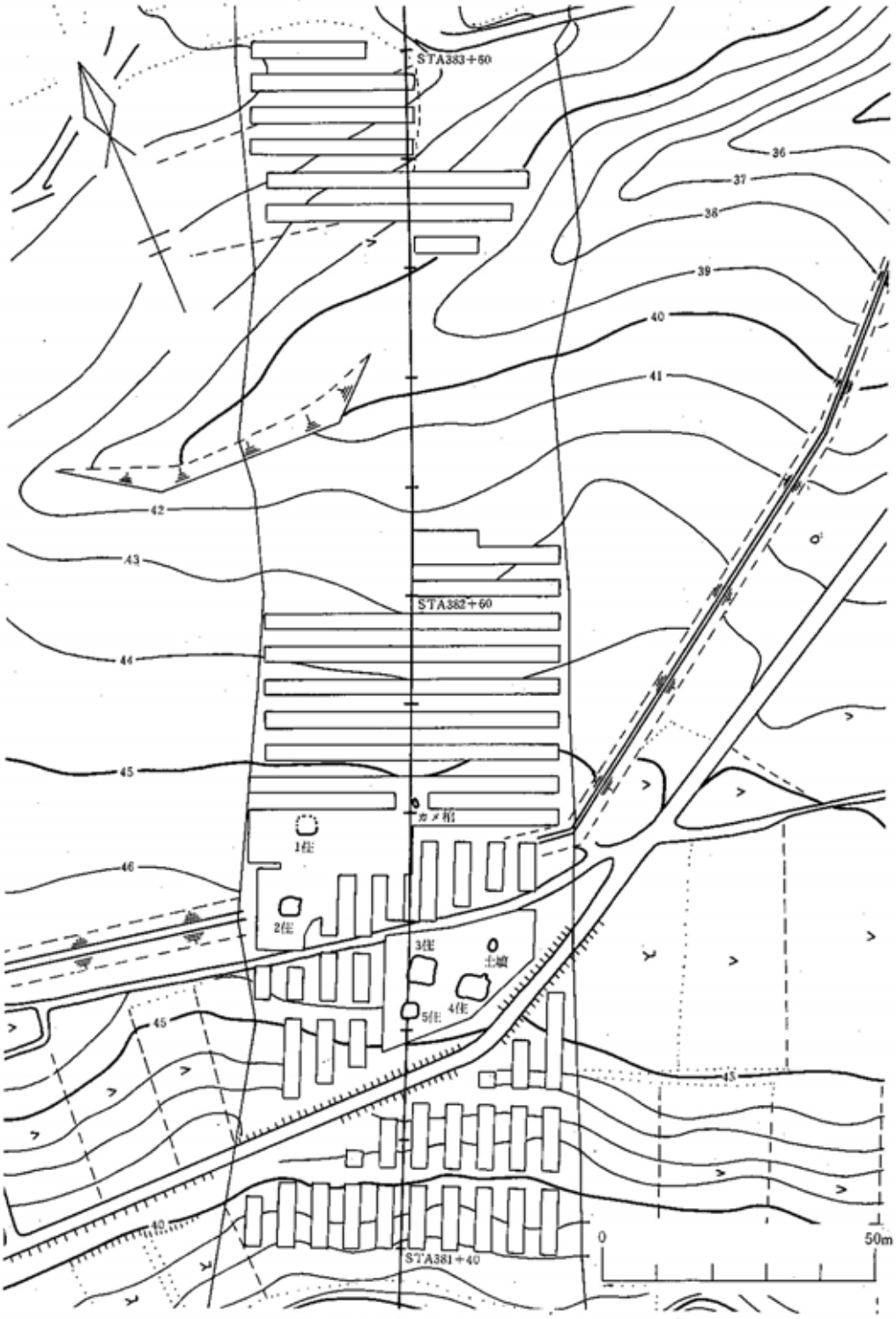
2. 発掘調査の経過

手取・西手取遺跡は東北自動車道の建設に先だって昭和 46 年 4 月に宮城県教育委員会が行なった分布調査によって発見された。当初、手取遺跡は沖Ｂ遺跡、西手取遺跡は沖Ａ遺跡と呼称されていたが、遺跡の所在する場所の小字名によって昭和 50 年に改称した。

手取遺跡は調査対象面積が 16,500 ㎡と広大であり、また、昭和 48 年には調査区内の畑にタバコが作付けされており、その収穫期と調査期間が合致しなかったこともあり、昭和 48 年（第 1 次調査）と昭和 49 年（第 2 次調査）の 2 ケ年に分けて調査を実施した。

第 1 次調査は昭和 48 年 7 月 23 日から遺跡の北半、Ａ地区およびＢ地区の北斜面約 10,000 ㎡を対象に行なった。調査に入る前にすでに基準線の設定は終了しており、それに基づいて路線幅に応じる 4～10 単位の東西に長いトレンチを 3mおきに設け、南側から順次トレンチ調査を進めていった。この結果、調査区南端部のトレンチで竪穴住居跡 1 軒、埋甕を伴う土壙 1 基が確認された。その他の部分では、すでに旧モトクロス場造成の際の削平を受けており、遺物の出土はごく僅かで、しかもまとまりを持たないのでトレンチ調査にとどめ、主要なトレンチでは 1/20 の断面図を作製した。確認された遺構部分は拡張して、精査を行なった。竪穴住居跡は 1/20、埋甕を伴う土壙墓は 1/10 の平面図と写真によって記録化して、調査は 8 月 11 日に終了した。遺構の検出数が少なく、トレンチ調査部分が多いこともあり最終的な発掘面積は 2,274 ㎡である。

第 2 次調査はＢ地区北斜面の一部と平坦部・南斜面の畑・牧草地約 6,000 ㎡を対象として昭和 49 年 7 月 18 日から開始した。下草を刈払った後、7 月 19 日にグリットを設定し、地形や遺跡を縦断する道路などに応じて 4 単位を基本とする 1～6 単位の南北に長いトレンチを調査区全体に 3m置きに配して、その南側から調査を始めた。町道から南の斜面では遺構もなく遺物の出土も少量であった。次いで調査区北端に残っていた旧モトクロス場の土手の排土を行ない、この排土作業の終了した 8 月 3 日より、町道から北の斜面及び平坦部分の粗掘を開始した。8 月 9 日、ＣＡ－27 区で竪穴住居跡の輪郭が見つかったのを初めとして合計 4 軒の住居跡・土壙・溝などがこの平坦部を中心に検出された。これらの遺構はそれぞれ記録を取りながら精査を進め 8 月 23 日に遣り方を設定して、1/20 の平面図を作製し、各遺構をさらに掘り下げ、構築以前の痕跡などの有無を調査した。さらに、レベルの記入や写真撮影などを行ない、調査の全てが終了したのは 9 月 12 日で、発掘面積は 2,108 ㎡である。



第２図　手取遺跡グリッド配置図

西手取遺跡の調査は手取遺跡の第 2 次調査に先だつ昭和 49 年 7 月 3 日から開始した。翌 4 日、下草の刈払いと並行してグリッド設定を行ない、路線幅・地形・農道などを勘案しながら 4 単位（3×12m）を基本とする 1～6 単位（3×3～18m）の南北トレンチを調査区全体に配した。

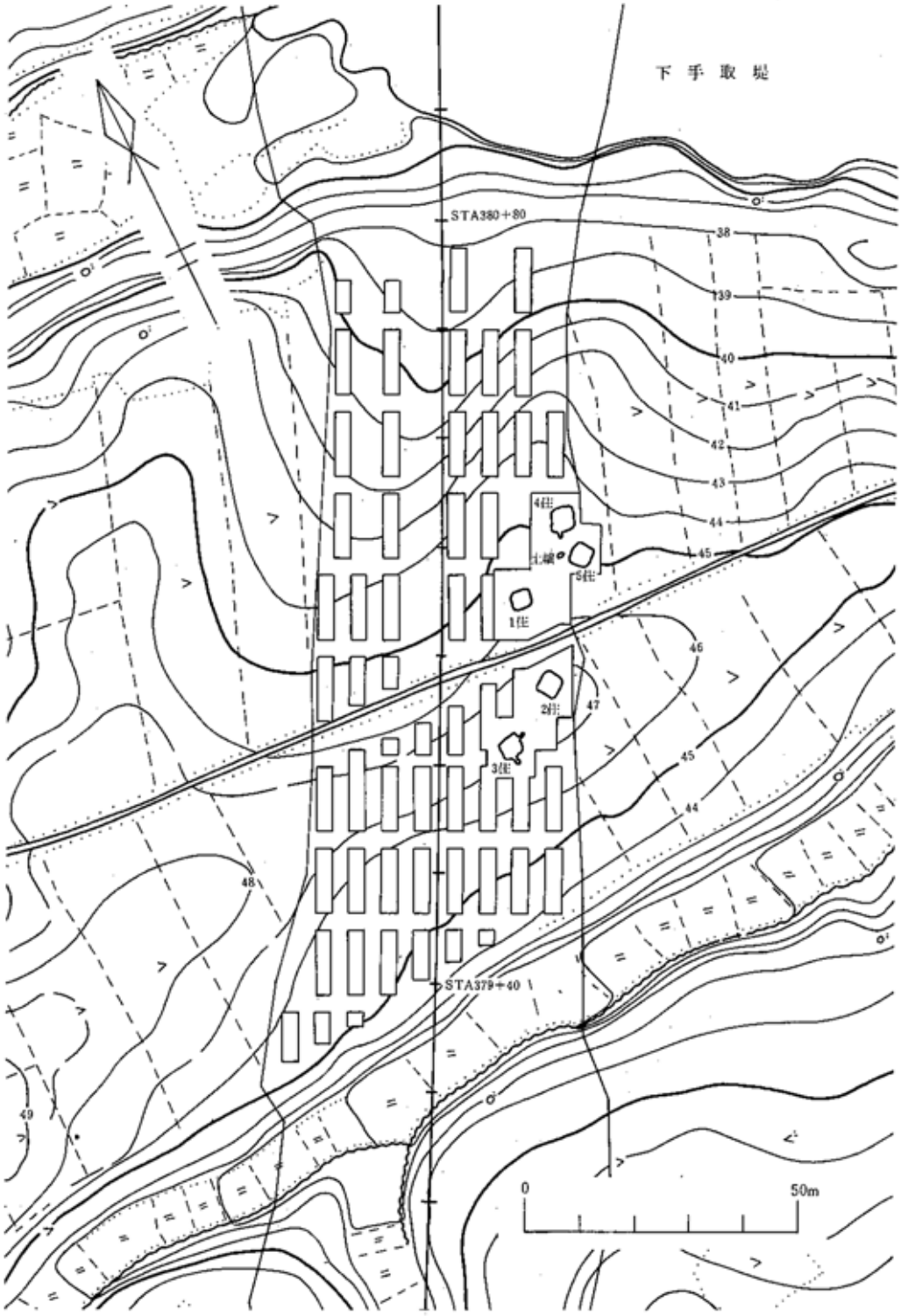
粗掘りは南斜面から平坦部にかけての路線敷中心杭を結ぶ基準線の東側南東隅から始め、次いで基準線の西側の南斜面・平坦部・北斜面を、最後に基準線東側の北斜面へと進めながら行なった。粗掘りを開始してすぐの 7 月 5 日ＣＫ－15 区で土師器などを出土する第 1 住居跡が確認されたのを初めとして、調査区の東半、平坦部とそれに続く南斜面や北斜面に移行する部分で 5 軒の竪穴住居跡・土壙などが確認された。

また、南斜面から平坦部にかけての各トレンチから僅かにではあるが、縄文土器片などが出土したため、出土層位の吟味など慎重に発掘を進めたが、遺物のまとまりや縄文時代の遺構などは発見できなかった。

確認された遺構はその周辺を順次拡張して精査を行ない、7 月 18 日には遣り方を設定し、記録化を行なった。手取遺跡と並行して調査を進めた事もあり、調査の全てが終了したのは 9 月 3 日であった。発掘面積は 2,395 ㎡である。

西手取遺跡調査がほぼ終了し、手取遺跡の遺構精査も終了に近づいた昭和 49 年 8 月 27 日、地元住民を対象として現地説明会を開催して、両遺跡の発掘の成果を一般に公開した。

また、手取遺跡の 1 次調査には金野正・三宅宗議・遠藤智一・佐藤信行・佐藤好一の各氏と築館女子高社会クラブ員の、手取遺跡の 2 次調査及び西手取遺跡の調査には遠藤智一・渋谷勝麿・木村敏郎・佐藤信行の各氏の協力をいただいた。



第３図　西手取遺跡グリッド配置図

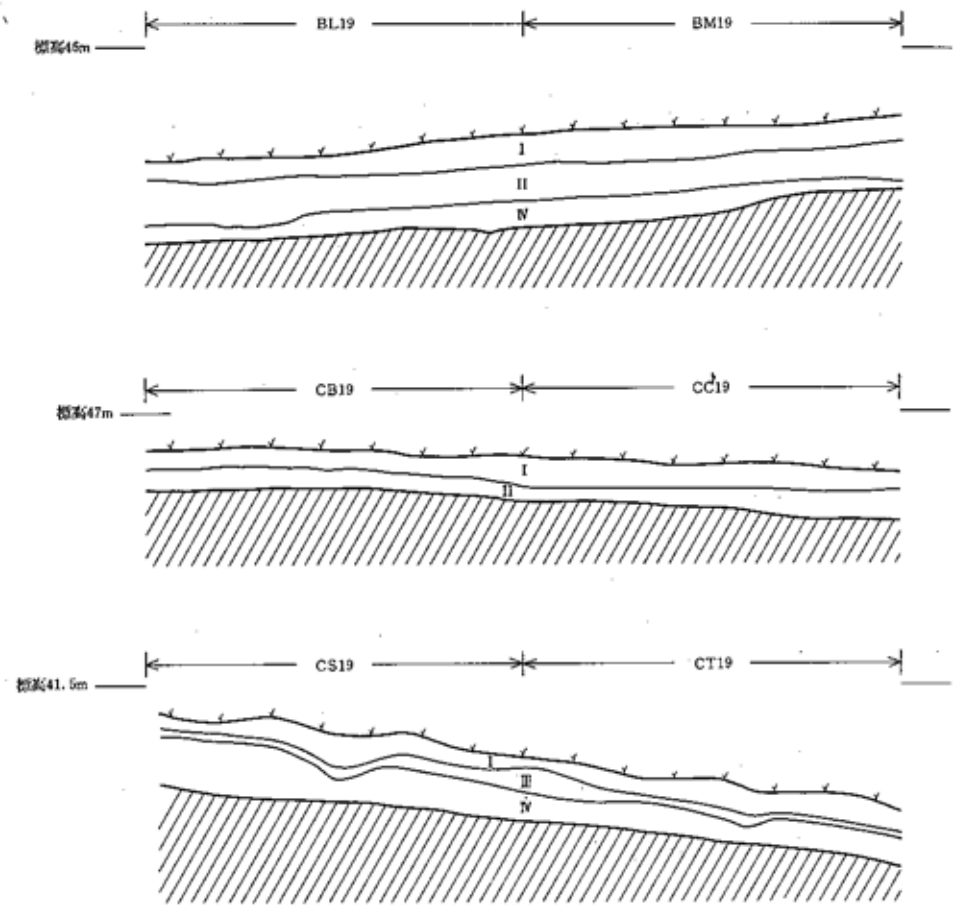
Ⅲ. 発見された遺構と遺物

1. 西手取遺跡

(1) 基本層序

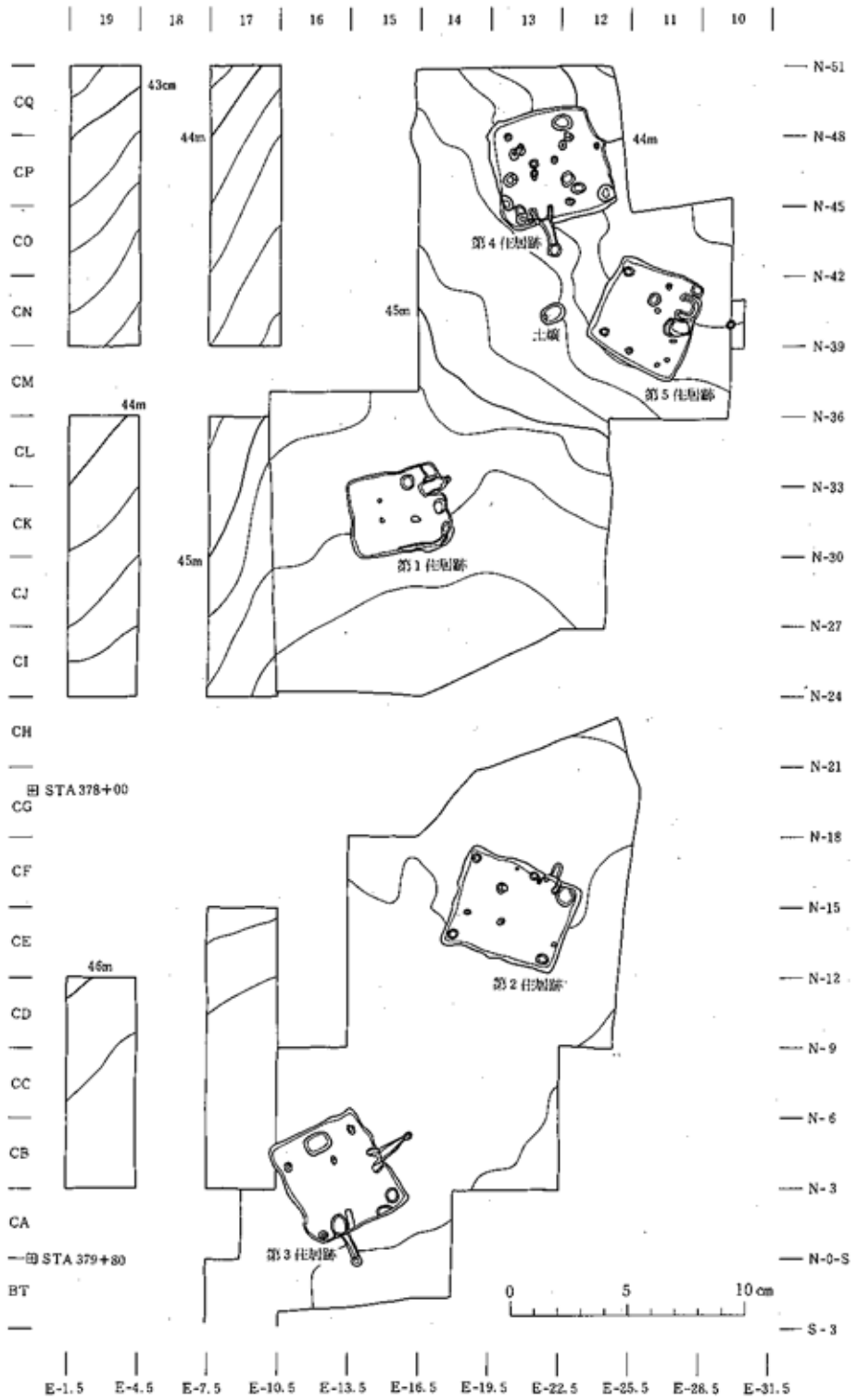
西手取遺跡の調査区は、中央平坦部と南北両斜面から成っているが、各地点ともにほぼ同一の層準を示していた。表土から地山までの堆積層には、基本的に４枚の層が認められた。

第Ⅰ層－黒色土層で表土（耕作土）である。



層No.	土　色	土　性	備　考
Ⅰ	黒　色	シルト	表　土
Ⅱ	暗　褐　色	シルト	
Ⅲ	黒　褐　色	シルト	粘性なし
Ⅳ	にぶい黄褐色	シルト	漸移層

第４図　基　本　層　位


19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
CQ
CP
CO
CN
CM
CL
CK
CJ
CI
CH
CG
CF
CE
CD
CC
CB
CA
BT
N-51
N-48
N-45
N-42
N-39
N-36
N-33
N-30
N-27
N-24
N-21
N-18
N-15
N-12
N-9
N-6
N-3
N-0-S
S-3
43cm
44m
45m
46m
第1住居跡
第2住居跡
第3住居跡
第4住居跡
第5住居跡
土壙
STA 378+00
STA 379+80
0
5
10cm
E-1.5
E-4.5
E-7.5
E-10.5
E-13.5
E-16.5
E-19.5
E-22.5
E-25.5
E-28.5
E-31.5

第5図　遺構分布図

第Ⅱ層－暗褐色もしくは赤褐色土層で、南斜面のほとんど、中央平坦部から北斜面の上部にかけて分布している。

第Ⅲ層－黒褐色もしくは黒色土層で砂質の層である。中央平坦部には認められず、主に北斜面に分布している。南斜面では南端部分にわずかにみられた。

第Ⅳ層－にぶい黄褐色土層で地山への漸移層である。地山との境は不整である。

遺構の大部分は第Ⅳ層上面や地山面で確認されている。しかし、第５住居跡のように第Ⅲ層中で確認されたものもある。また、遺物は、遺構に伴って出土するものが大半で、その他は少量である。遺物の出土する層は、第Ⅰ・Ⅱ層が主で、第Ⅲ層上面からもわずかに出土している。

(2) 遺構の分布

今回の調査によって発見された遺構には、竪穴住居跡５軒・土壙１基がある。これらの遺構は調査区のほぼ中央東半にだけ検出されており、竪穴住居跡の分布は、その位置により次の２地区に分けることができる。

Ⅰ区－第２・３住居跡

Ⅱ区－第１・４・５住居跡、土壙

Ⅰ区には、調査区ＣＡ～ＣＦ－12～16区のあいだに分布する住居跡が含まれる。この部分は標高46.4～46.5m前後のほぼ平坦な場所となっており、第２住居跡の位置するのは、この平坦部のほぼ中央、第３住居跡は南端にあたっている。

Ⅱ区には、調査区ＣＫ～ＣＱ－10～15区で検出された住居跡群が分布している。この部分は東に向って延びる中央平坦部から、北に小さな舌状の張り出しが分岐し延びている所で、全体的には北側に緩く傾斜している。標高は、45.5～44mである。

第１住居跡は、張り出し部の中央に位置するため、周辺は北緩斜面となっているが、第４・５住居跡はこの張り出し部の東側縁部に位置しているため、周辺は北方向にだけでなく東にも緩く傾斜している。

土壙はⅡ区張り出し部の東側縁部上端に位置している。

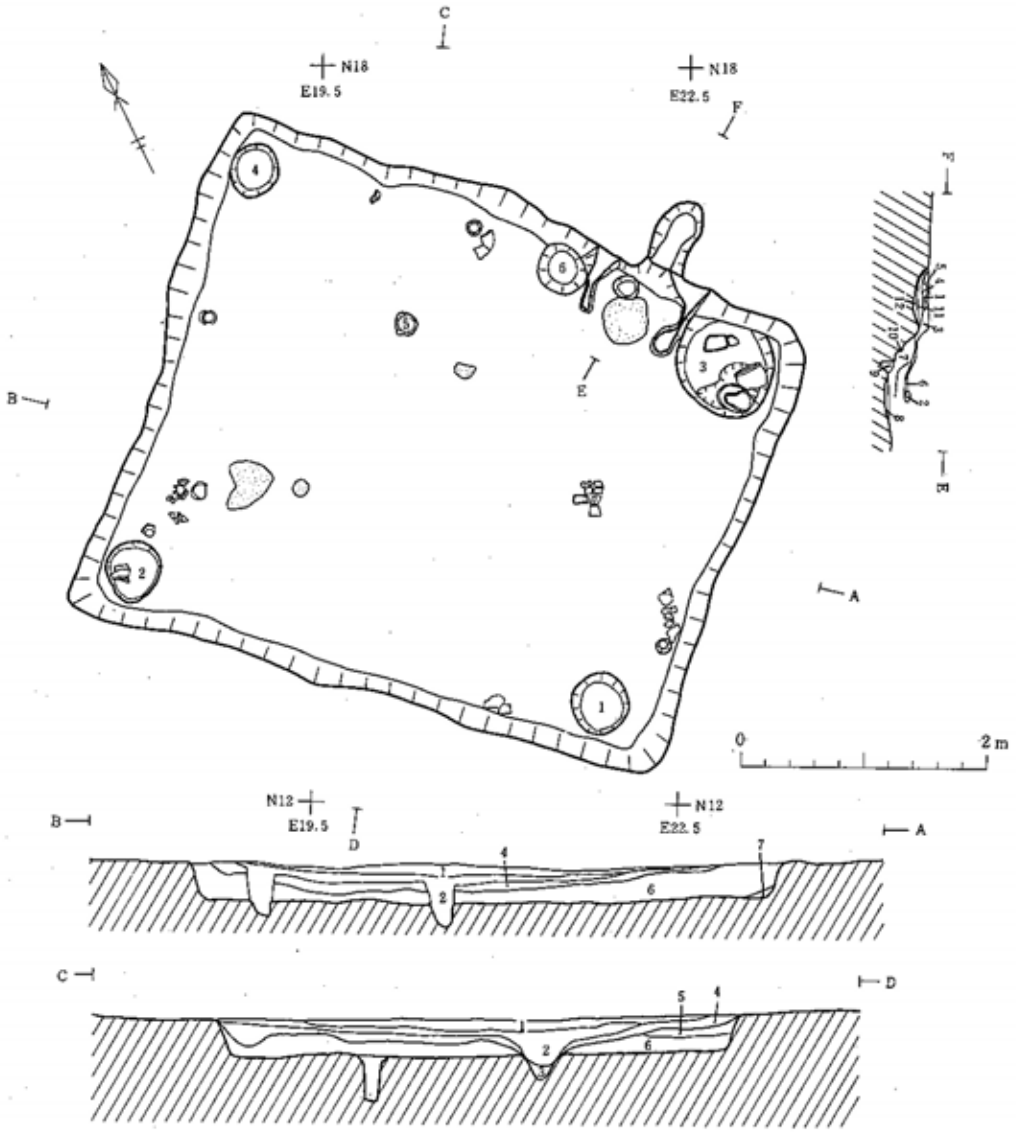
(3) 竪穴住居跡と出土遺物

第２住居跡

〔遺構の確認〕 Ⅰ区のほぼ中央、ＣＥ・ＣＦ－13・14区に位置している。第Ⅰ層下の地山面で確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は東西に若干長い長方形である。西壁 4.2m、東壁 3.7mと、西壁に比して東壁が短いため台形状になっている。長軸4.9m、短軸4.2mで、長軸の方向は、Ｎ－45°－W、住居内の面積は17.7㎡である。

〔堆積土〕 ７層認められたが、次に述べるⅢ層に大別される。



住居内堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考	埋積区切り上げ層位
I	1	黒色	シルト		第1層
	2	黒褐色	シルト		
	3	暗褐色	シルト	地山土を含む	
	4	暗褐色	シルト		第2層
	5	褐色	シルト	炭化物を含む	第3層
II	6	褐色	シルト	炭化物を含む	
III	7	褐色	シルト		

ピットNo	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ(cm)	16	18	25	16	54	18
土色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土性	砂質シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

カマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	焼土ブロックを含む
2			焼土ブロック
3	暗褐色	シルト	
4	暗褐色	シルト	
5	暗褐色	シルト	焼土粒を含む
6	にぶい黄褐色	シルト	焼土ブロック・粒、炭化物を含む
7	暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物を多量に含む
8			焼土
9	黄褐色	シルト	ローム粒を多量に含む
10	黒褐色	シルト	炭化物・焼土を多量に含む
11	暗褐色	シルト	焼土ブロック含む
12	褐色	シルト	焼土ブロック含む

第6図　第２住居跡

第Ⅰ層－黒褐色あるいは暗褐色土層で、住居跡中心部に厚く堆積しているが、床面まで達していない。

第Ⅱ層－褐色の土層で、層下部では炭化物を含む。この層は床面を直接覆い、住居跡全体に分布しているが、堆積状態をみると壁ぎわで厚く、中央部で薄くなっている。

第Ⅲ層－褐色土に地山の崩壊土を多量に含む層で、この層は壁付近にだけ部分的にみられた。

〔壁〕 地山を掘り込んで壁としている。残存壁高 26～30 ㎝で各壁の残りは良い。また、いずれも急角度に立ち上がっている。

〔床〕 掘り方底面である地山面をそのまま床面としている。床面はほぼ平坦で、住居跡中心部はかたくしまっているが、壁近くになるとあまり、しまりは認められない。西南隅近くに 46×30 ㎝程の不整形の焼面がみられる。また、カマド周辺に焼土、木炭が多量に分布している。

〔柱穴〕 住居内から計 8 個のピットが検出されたが、柱痕跡はいずれのピットからも発見されなかった。また、南西隅に位置する P_3は、土師器甕が 2 個体落ち込んでおり、柱穴とは考えにくい。南西隅を除く各隅に位置する P_1・P_2・P_4とカマド左脇の P_6は、規模・深さ・堆積土が共通している。また、P_5は、54 ㎝の深さをもっている。これらのピットが柱穴である可能性も考えられるが、その配置関係に規則性は認められず、主柱穴であるかどうかは不明である。

〔カマド〕 カマドは北壁の東よりに付設されており、軸線の方向はN－55°－Eである。カマド本体は幅 90 ㎝、奥行 75㎝ で、住居内に側壁の基部がわずかに残存していた。側壁は白色粘土で構築され、左側壁は 22～12 ㎝の幅で、長さ 25 ㎝、右側壁は、38～16 ㎝の幅で、長さ 65 ㎝が残存していた。燃焼部の奥行は 75 ㎝、最大幅はほぼ中央にあり 74 ㎝を計るが、前端では 58 ㎝とやや狭くなっている。燃焼部底部のほぼ中央、直径 40 ㎝ほどが円形状に焼けて固くなっている。煙道は幅 32 ㎝で、深さ 14 ㎝、壁に対して直角に 58 ㎝延びており、煙出しピットは検出されなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居跡の北東隅、カマドに接して検出された P_3は直径 90 ㎝、深さ 30 ㎝で、底面がなべ底状のピットである。このピット中から底部を欠損したほぼ完形の土師器甕が 2 個体、1 個は横倒し、1 個は口縁部を底部に接した倒立状態で出土しており、貯蔵穴状ピットである可能性が考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は住居内堆積土第Ⅰ～第Ⅲ層・床面上・カマド内・住居に伴うピット内などから出土している。床面上・カマド内・ピット内出土の遺物は本住居跡の使用時若しくは廃絶時の遺物と考えられ、廃絶後に流入、堆積した堆積土出土遺物と時間的な差を持っているものと思われる。

床面上や、住居跡に伴うカマドなどの細部遺構出土遺物を「**住居跡に伴う遺跡**」として一括し、「**堆積土出土遺物**」と区別して記述する。また、出土遺物には土師器（坏・甕）、須恵器（甕

・壺）、赤焼土器（坏・高台付坏）、縄文土器、砥石などがあるが、実測図を作製できた遺物を中心に説明を加え、図示できない遺物についても特徴のあるものなどは記述した。

このことは以下に述べる各住居跡においても同様である。

住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第7図1）体部はやや丸味をもって外傾し、口縁部で外反する。器高は5.8㎝と高い。底部は回転糸切り技法によって切り離されており、内面には、ヘラミガキ・黒色処理が施されている。

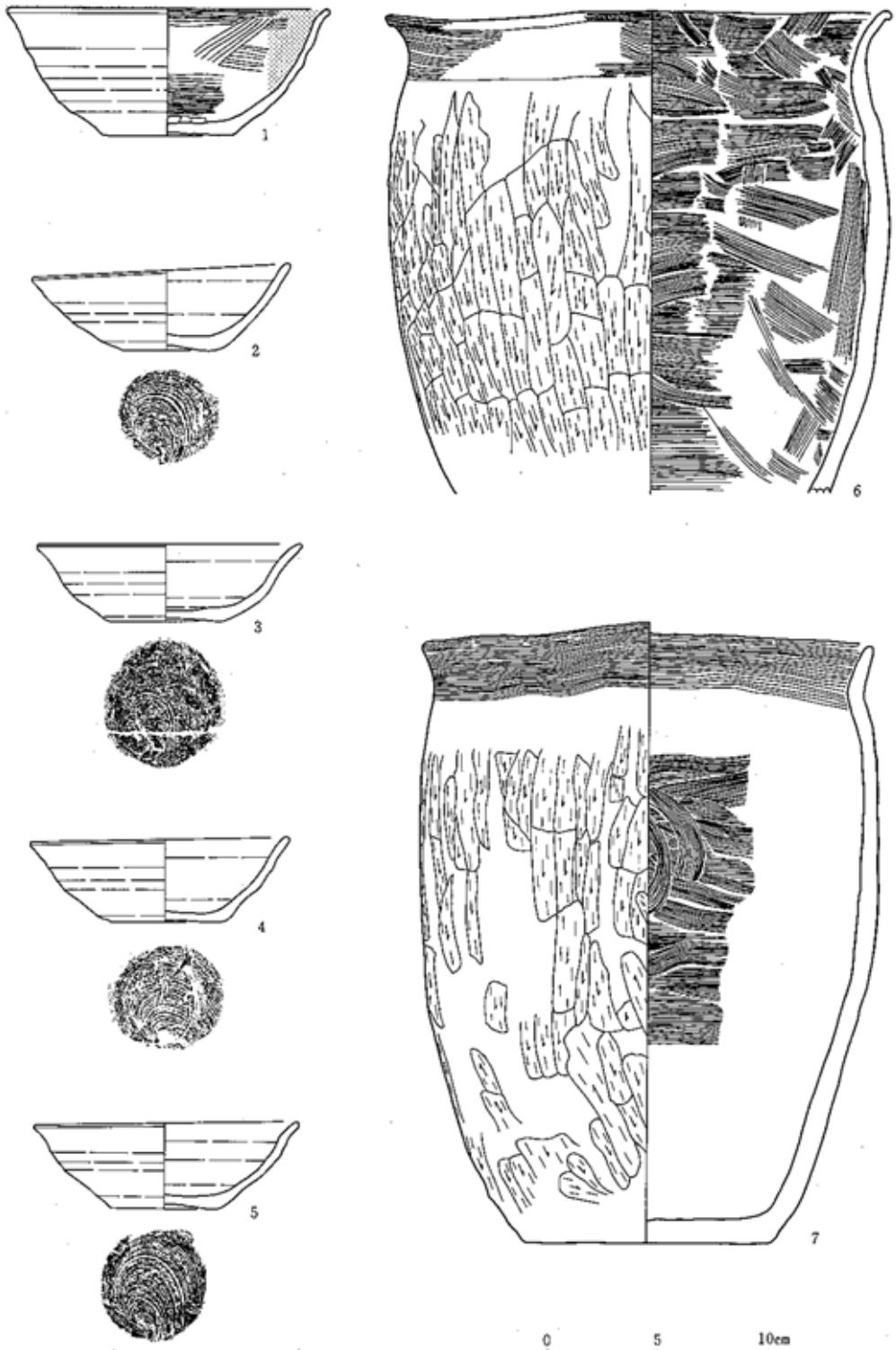
甕（第7図6・7、第8図1・2）製作にロクロを使用するもの（1）と不使用のもの（6・7、2）とがある。6と1はP_3よりほぼ完形の状態で、一括出土した。1は体部下端と底部を欠くが、器高と最大径がほぼ同じか器高が大きいと思われるもので、最大径は体部ほぼ中央に位置している。頸部から口縁部へゆるく屈曲、外反し、口縁端が内傾気味に上方につまみだされている。器面調整は、外面の口縁部から体部上半までは、ロクロ調整、それ以下は2次的と思われる粘土の付着が著しく不明である。内面はロクロ調整である。6は底部を欠くが、7・2と共に器高が最大径よりも大きい甕で、2は口縁部に、7は体部上半に、6は口縁と体部上半に最大径の位置をもっている。2は口径15.0㎝と小形である。これらの甕はいずれも頸部から口縁部にゆるく外反する器形で、外面の器面調整は、口縁部にヨコナデ・体部にヘラケズリが施され、内面にはヨコナデが口縁部から体部まで施されている。7･2の底部外面には、ナデ調整がみられる。また、6・7・2の外面には積み上げの痕跡が残っている。

須恵器

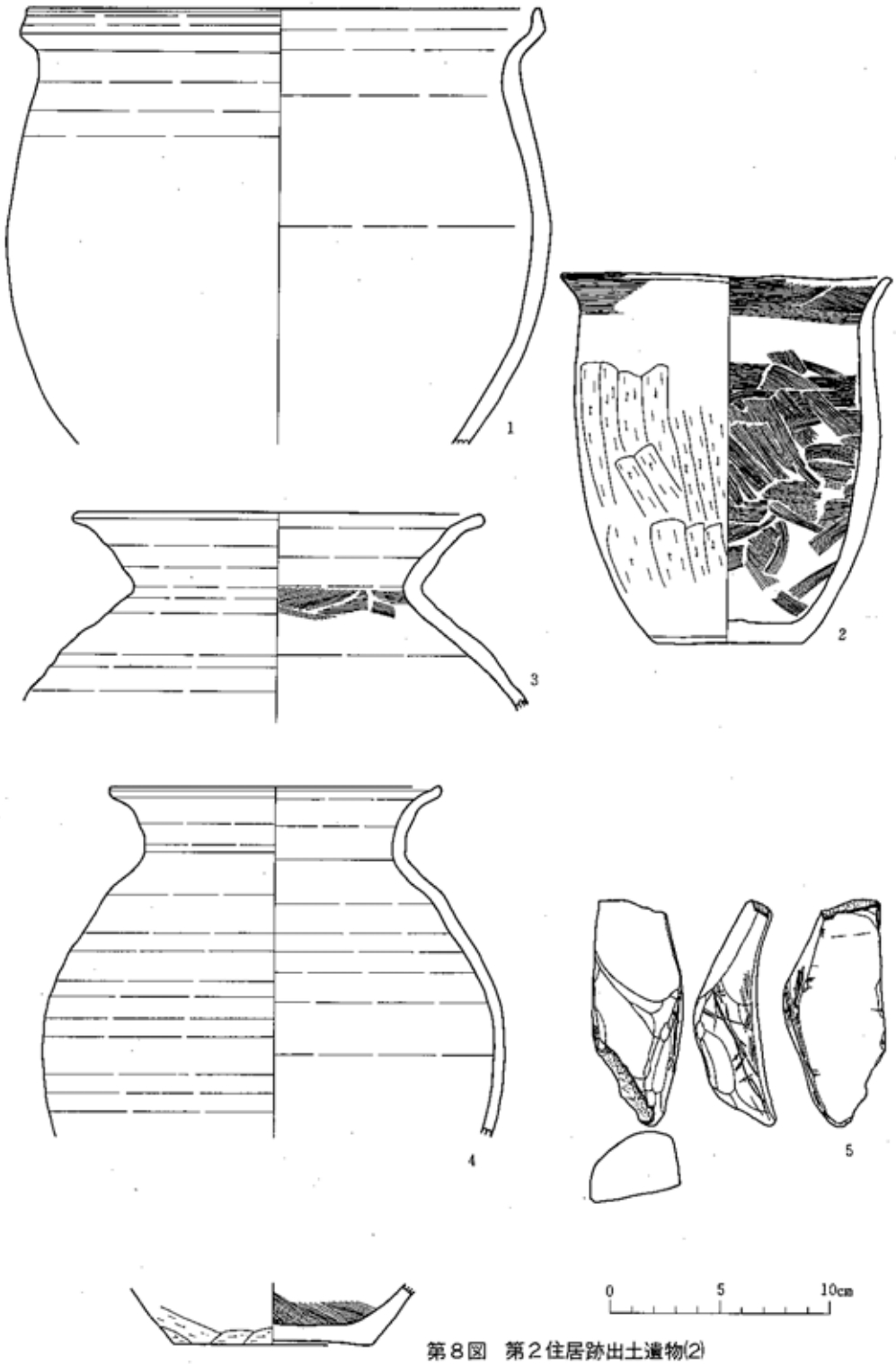
甕（第8図3・4）3は口縁部から体部下半までの破片があるが、接合できたのは体部上半までである。頸部で「く」の字状に屈曲して、口縁部は緩やかに外反しながら端部で丸くおさまる。体部は脹らみ、最大径の位置は体部上半にある。器面調整は、内外面とも口縁部から体部上半までロクロ調整が施される。体部下半は、外面ではヘラケズリ、内面ではナデ調整が施されている。4は口縁部から体部中央までの破片と底部とである。最大径は体部上半にあるが、体部はあまり張らず、直線的な肩部をもつ。頸部は外傾気味で口縁部は外反し、端部はわずかに上方につまみ出されている。内外面ともロクロ調整されているが、体部下半は外面ではヘラケズリ、内面では底部までナデ調整されている。底部外面もナデ調整されている。

赤焼土器

坏（第7図2～5）2と3は西壁ほぼ中央の壁ぎわの床面上に重なり合って、4と5は同じく西壁よりの床面上に接するように出土した。いずれも口径12㎝前後と小形の坏で、器高も4㎝未満と低い。すべて体部は内弯気味に外傾し、口縁部でわずかに外反する器形で、底部は回



第７図　第２住居跡出土遺物(1)



第８図　第２住居跡出土遺物(2)

転糸切り技法によって切り離され、再調整はまったくない。色調は赤味の強い橙色で、胎土に粗砂を含み、それぞれに、製作時の歪みがみられる。

石製品

砥石（第 8 図 5）砂質凝灰岩製で本来は比較的大形の砥石と思われる。表・裏面が著しく磨り減ったため、中央部で破損している。自然面を残す上端を除き全体に 5 つの磨面をもち、鋭い切痕もみられる。

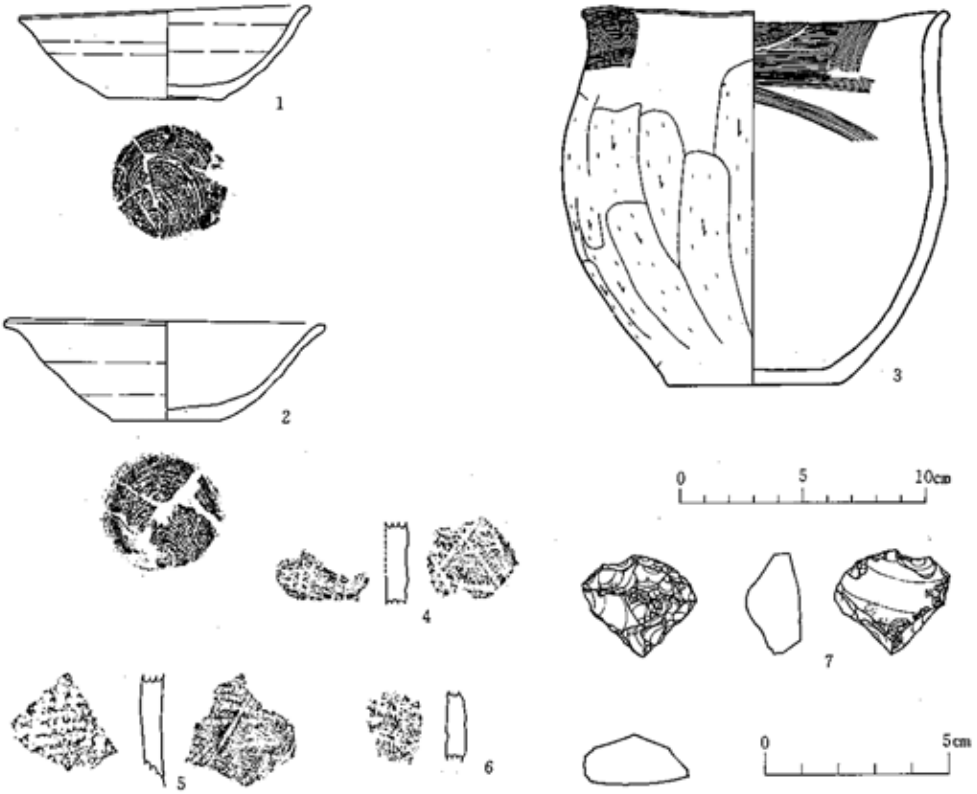
堆積土出土遺物

土師器

甕（第 9 図 3）器高と最大径がほぼ同一の小形の甕で、最大径の位置は体部の中央付近にある。頸部の屈曲は弱く、口縁部はわずかに外反するが短い。口縁部から体部上端にかけての外面に横ナデが、それ以下の体部にはヘラケズリが施され、底部はナデ調整されている。内面にはナデ調整が施されているが、体部下半は磨滅のため不明となっている。体部に積上げの痕跡がみられる。

赤焼土器

坏（第 9 図 1・2）どちらも体部が内弯気味に外傾し、口縁部でわずかに外反する器形をも



第９図　第２住居跡・堆積土出土遺物

つ。底部の切り離しは回転糸切り技法で、再調整はみられない。1 の色調は橙色で赤味が強いが、2 は浅黄橙色で土師器に近い色となっている。どちらにも歪みがみられるが 2 は著しい。

縄文土器（第 9 図 4～6）

3 点出土している。いずれも体部破片で胎土に繊維が含まれている。4 は外面に半載竹管による沈線が、内面には不定方向の条痕が施されている。5 は外面にＲＬとＬＲの原体を交互に使用する羽状縄文が、内面に条痕が施されている。6 は磨滅のため不明である。

石製品

掻器（第 9 図 7）黒曜石製で半欠品である。刃部は腹面からの調整剥離によって弧状に作り出されており、断面は分厚い。折れた部分にも小さな剥離が認められるが、2 次的な剥離で調整剥離ではないと思われる。

第３表　第２住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
7図1	ピット3	土師器	坏	14.8		6.0	5.8	9	BII
7図2	床4b	赤焼土器	坏	12.3		4.0	3.6	1	a
7図3	床4a	〃	〃	11.8		5.3	3.5	2	〃
7図4	床3b	〃	〃	11.6		4.2	4.0	3	〃
7図5	床3a	〃	〃	11.8		5.0	3.9	4	〃
7図6	ピット3	土師器	甕	23.0	22.8			25	BI
7図7	床	〃	〃	20.8	21.1	11.0	28.6	53	〃
8図1	A　床	〃	〃	24.0	24.8			38	DI
8図2	D2層・カマド	〃	〃	15.1	13.9	6.6	16.9	13	A
8図3	A2層	須恵器	〃	18.9					
8図4	D3層　A2・3層	〃	〃	15.3	21.2	9.1		65	
9図1	D3層	赤焼土器	坏	12.1		4.7	3.7	5	a
9図2	A3層	〃	〃	13.2		4.5	4.1	64	a
9図3	ベルト2・3層	土師器	甕	15.0	15.7	6.6	15.3	10・24	BII

第４表　第２住居跡出土石器計測表

図版番号	名称	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	完・不完
8図5	掻石	床	104.9	41.5	29.3	119.7	砂質凝灰岩	不完

第３住居跡

〔遺構の確認〕 Ⅰ区の南端、ＣＡ・ＣＢ－15・16 区に位置し、第Ⅰ層下の地山面で確認した。

〔重複〕 西壁から 30 ㎝ほど離れ、壁に沿う形で、幅 80 ㎝、長さ 300 ㎝、深さ 26～30 ㎝の溝状遺構が検出された。この溝状遺構は、住居貼り床を除去したさい発見された。住居跡構築時か、それより古い遺構と考えられる。

〔平面形〕 平面形は南北に若干長い長方形を呈するが、少し歪んでいる。また、カマドの付設との関係でか、西壁南端部が外側に 40 ㎝ほど張り出している。長軸 4.7m、短軸 4.3m で、長軸の方向は、Ｎ－4°－Ｗ、住居内面積は約 18.3 ㎡である。

〔堆積土〕 10 層認められたが、第Ⅰ～第Ⅲ層に大別される。

第Ⅰ層－黒褐色あるいはにぶい黄褐色の砂質土層で、下部に粘性を持たないにぶい黄橙色土のブロックを含んでいる。住居跡全体に厚く堆積するが、床面に達することはない。

第Ⅱ層－褐色の土層で、木炭・焼土を多く含み、遺物も多い。壁ぎわを除く住居跡全体に分布し、床面を覆う。堆積状態は壁近くで厚く、中央部に向って薄くなっている。

第Ⅲ層－にぶい黄橙色を呈し、崩壊土と思われる地山土のブロックを多量に含んでいる。壁ぎわにだけ分布している。

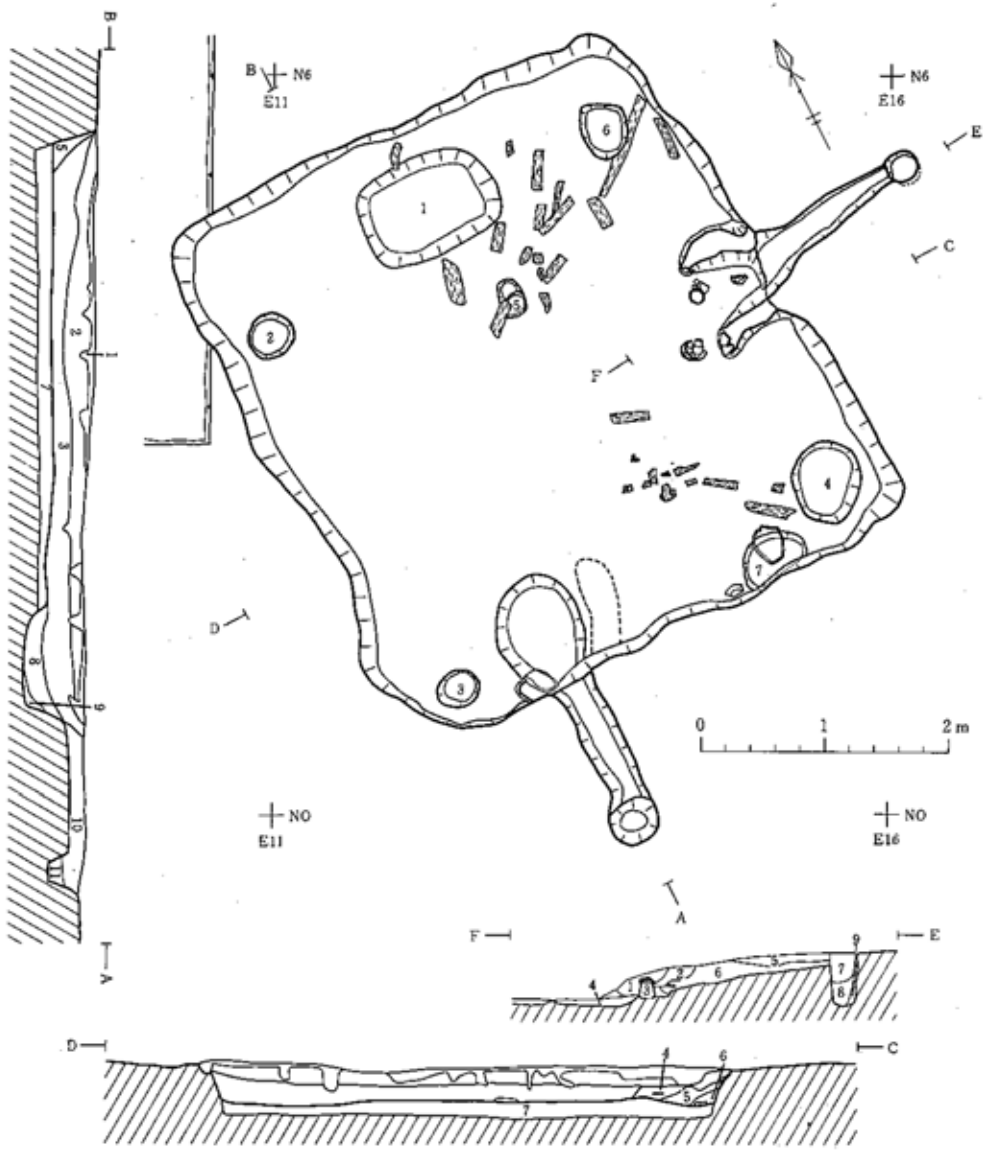
〔壁〕 地山を壁としている。残存状態は良好で、かなりはっきりと検出された。各壁とも残存高は 25～35 ㎝ほどである。壁の立ち上がりは急角度でほぼ垂直に近い。壁面はしっかりしているが、かなりの凹凸がある。

〔床面〕 床面は住居跡掘り方に、木炭を若干含むにぶい黄褐色の地山土を 15 ㎝ほど埋め土し、貼り床としている。この貼り床は住居跡全体に及び、その上面はかたくしまっていた。床面上には全体的にかなりの焼土が散っており、北東、南東隅からそれぞれ住居中心部に向って棒状炭化物が検出された。

〔柱穴〕 住居跡内から合計 10 個のピットが検出された。このうちP_9、P_{10}は、貼り床を除去した後に検出されたものである。いずれのピットでも柱痕跡は検出されなかったが、P_2・P_3・P_4・P_7はP_2が北西隅から南側に寄っている他は、いずれも住居跡の隅に位置している。これらのピットを結ぶとほぼ正方形を呈し、この配列状況から柱穴である可能性が考えられるが、これらのピットはいずれも浅く、また注記もれのためピット内堆積土の検討もできないため、主柱穴であるかどうかは不明である。

〔カマド〕 本住居跡では 2 ケ所にカマドが検出された。南壁に付設されたものをＡカマド、東壁のものをＢカマドとする。

Ａカマド－南壁西よりに付設されており、軸線の方向はＮ－0°－Ｅである。カマド本体では、側壁の痕跡と燃焼部底面だけが検出された。残存部分から推定すると本体は、最大幅が 130 ㎝、奥行 95 ㎝の規模であったと思われる。側壁はにぶい黄橙色の粘土で構築したものと思われ、左側壁では幅 30㎝、長さ 85 ㎝が、右側壁では幅 20 ㎝、長さ 25 ㎝ほどが、痕跡として床面に残っていた。右側壁も本来は、左側壁と同じ長さを持っていたものと思われる。燃焼部は、最大幅 70 ㎝、奥行 95 ㎝、深さ 12 ㎝ほどの長楕円形で、底面は床面から 20 ㎝程掘り窪めてある。この底面は住居掘り方より、さらに下に位置している。この中には、側壁や天井部の崩壊土と思われる焼土塊や木炭などが多量に落ち込んでいた。煙道は壁に対してほぼ直角に取りつけられており、住居外に 140 ㎝ほど延びている。幅 30 ㎝、深さ 10 ㎝で、底面はゆるやかに昇っていく。煙出しピットは径 40 ㎝、深さ 25 ㎝ほどの円形である。



住居内堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色	シルト		第1層
	2	にぶい黄褐色	砂質シルト		第2層
Ⅱ	3	褐色	シルト	木炭・焼土を多く含む	第3層
Ⅲ	4	褐色	シルト		
	5	褐色	シルト	地山ブロックを含む	
	6	暗褐色	シルト	木炭を含む	
	7	にぶい黄褐色	シルト	貼床、木炭を若干含む	
	8	褐色	シルト	Aカマド堆積土、木炭・焼土を多量に含む	
	9	褐色	シルト	Aカマド堆積土、焼土粒を含む	
	10	暗赤褐色	シルト	Aカマド煙道部堆積土、焼土・木炭粒を多量に含む	
	11	黒褐色	シルト	Aカマド煙道部堆積土、地山粒を含む	

Bカマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	焼土粒・炭化物を若干含む
2	褐色	シルト	焼土ブロックを若干含む
3	暗褐色	シルト	焼土粒・ローム粒を若干含む
4	暗赤褐色	シルト	焼土
5	黄褐色	シルト	
6	暗赤褐色	シルト	炭化物・焼土粒を多量に含む
7	褐色	シルト	
8	暗褐色	シルト	
9	褐色	シルト	ローム粒を多量に含む

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
深さ(cm)	80	22	12	21	35	25	19

第10図　第３住居跡

Bカマド－東壁のほぼ中央に付設されている。軸線の方向は、N－77°－Eである。このカマドは天井部は残存しないが、側壁の残りは比較的よかった。本体の規模は幅100㎝、奥行55㎝である。側壁はにぶい黄褐色の地山土を主に用いて、住居内に「ハ」の字形に作り出されている。右側壁は幅30㎝で、長さ55㎝、高さ10～22㎝ほど残存し、端部には、土師器甕の底部近くの大きな破片を倒位に置いて抑えとしている。左側壁は幅30㎝、長さ58㎝で、高さ10～20㎝ほど残存し、やはり端部に小礫と土師器甕の破片が置かれている。燃焼部の奥行は55㎝、幅は奥壁で20㎝、端部で55㎝で台形を呈している。この燃焼部奥壁ぎわに、細長い自然礫を用いた支脚が立った状態で出土している。この支脚から、端部にかけては浅い窪みとなっており、焼土が充満していた。燃焼部、奥壁、支脚上の土師器坏は、焼けて著しく赤化している。煙道はカマド本体の軸線に対し、約15°ほど東に偏しており住居壁に対しても、斜めに取り付いている。幅は約30㎝で、住居外に130㎝ほど延び、先端に行くほど幅は狭くなっている。深さは約20㎝で煙出しピットに向かってゆるやかに昇っている。煙道内には炭化物、焼土を多量に含む暗褐色土と黄褐色の地山土が落ち込んでいる。煙出しのピットは径25㎝、深さ45㎝で、煙道底面よりは、かなり深く掘り込まれている。

この住居跡から検出されたA・B2つのカマドの新旧関係は、いずれも貼り床面に構築されており決め手を欠くが、Bカマドが側壁などの残存状態が良く、特に、石製支脚が原位置を保って出土しているなど、廃絶時の状態を良く示しているのに対して、Aカマドは側壁が痕跡程度しか残っていないなど、廃絶時にかなりの改変が加えられたと考えられるので、居住中に何らかの理由でAカマドを廃棄し、新たにBカマドを構築した可能性がある。

〔貯蔵穴状ピット〕北壁ぎわ、ほぼ中央部で検出されたP_1は、規模80×110㎝、深さ80㎝で、ほぼ垂直な壁を持ち、底面近くは焼けて赤褐色を呈している。ピットには4層の堆積土が認められ、遺物を多く含んでいる。このピットは貼り床の上から掘り込まれており、また、確認したのは床面なので、掘り込まれた時期は住居使用時、または廃絶直後、住居内堆積土の流入する以前と考えられる。貯蔵穴とも考えられるが、その性格は不明である。

〔出土遺物〕堆積土第Ⅰ～第Ⅲ層、カマド内や周辺の床面、ピット内などから出土している。土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器（坏・甕・壺）、赤焼土器坏などがあるが、赤焼土器の出土は微量で、出土は堆積土中に限られた。

住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第11図1～6）すべて製作にロクロを使用しており、底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部まで内弯気味に外傾する器形をもつ。底部の切り離しが再調整のため不明なもの（1～5）と回転糸切り技法によるもの（6）とがある。1～5は外面の体部下端と底部全面に回転ヘラ

ケズリの再調整が施されており、内面にはヘラミガキと黒色処理が施される。ヘラミガキは概してていねいで口縁部から体部までが横・斜方向、体部下端から底部では一定方向や井桁状あるいは放射状に施されている。1 の黒色処理は部分的にしか残っていない。5 は、体部下半から底部にかけて残存する坏で、体部下半と底部に墨書が認められる。墨書文字は「田」である。6 は外面に再調整はなく、底部に右回転の糸切り痕が残る。内面にはヘラミガキと黒色処理が施されているが、カマド支脚上を覆っていた坏のため火熱を受けた痕跡があり、黒色処理は底部にだけ残っていた。

高台付坏（第 11 図 7）坏底部と高台部分しか残っていない。高台は直線的に外傾し、高い。高台付着時の調整が坏底部全面に及んでおり、坏底部の切り離しは不明である。坏部内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。

甕（第 11 図 8・9、第 12 図 1）8 は完形品であるが、他は体部上半以上を欠いている。1 はカマド左側壁の抑えに使われていたものである。8 は製作にロクロを使用し、器高が最大径より大きく、最大径の位置を口縁部にもつ長胴形の甕である。頚部で強く屈曲し、口縁部は外傾するが短い。体部はあまり脹まず、ほぼ中央に体部最大径をもっている。外面はロクロ調整の後ヘラケズリされているが、ヘラケズリが口縁部まで及んでいる所もある。底部は磨滅が著しいが、一部ナデ痕が見られる。内面は、口縁部から体部上半までロクロ調整が、それ以下にはナデ調整が施される。9・1 は、体部外面にヘラケズリ、底部外面にナデが施され、内面は底部までナデ調整されている。

須恵器

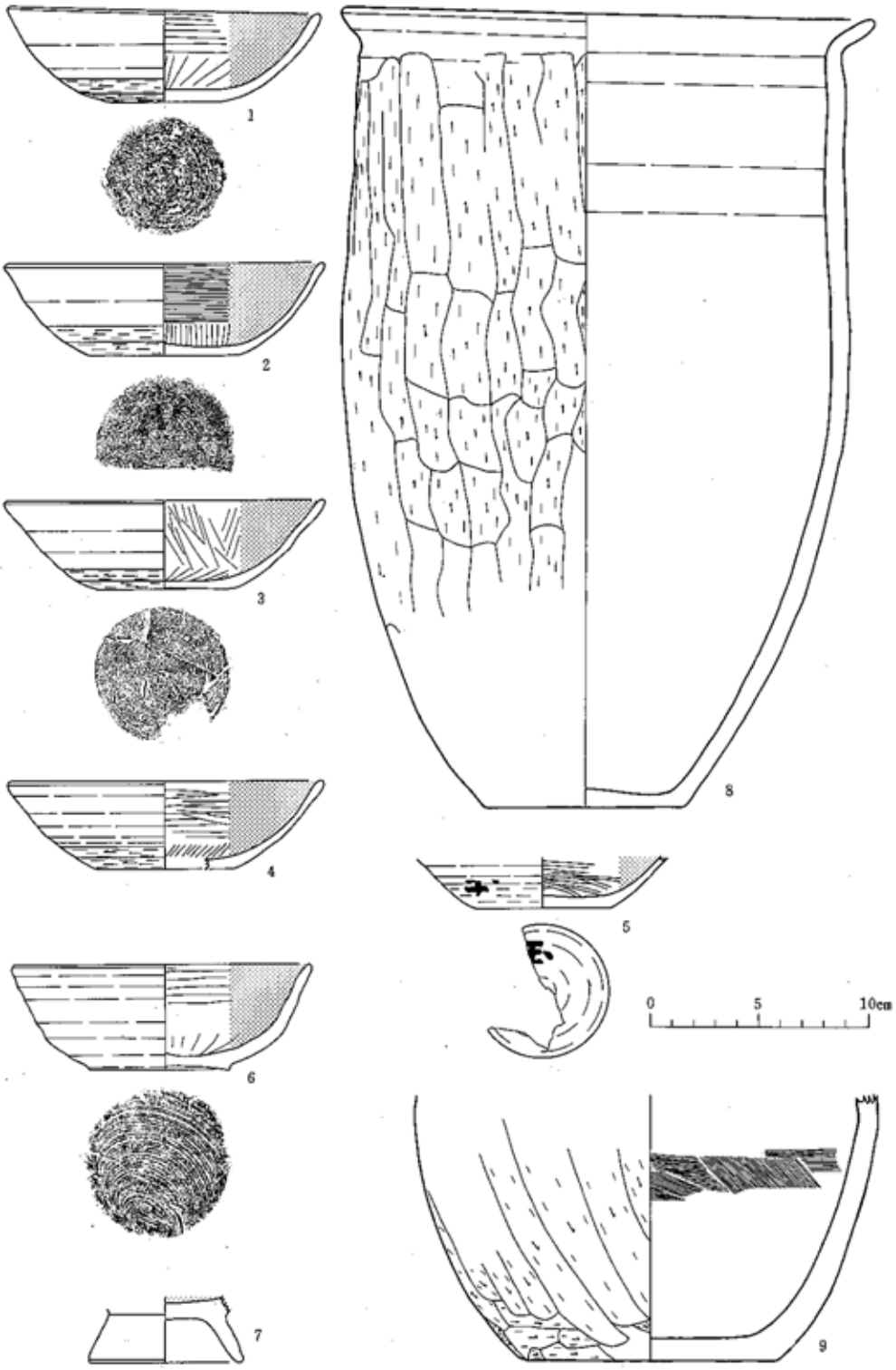
坏（第 12 図 2）体部から口縁部へ直線的に外傾する器形で、底部は回転糸切り技法によって切り離されており、内外面とも再調整はまったくない。

甕（第 12 図 3）大甕の破片で、体部下半から底部にかけて残っている。体部外面は叩きしめられ平行タタキ目と一部格子タタキ目が残る。体部下端はヘラケズリされている。内面はナデ調整されている。

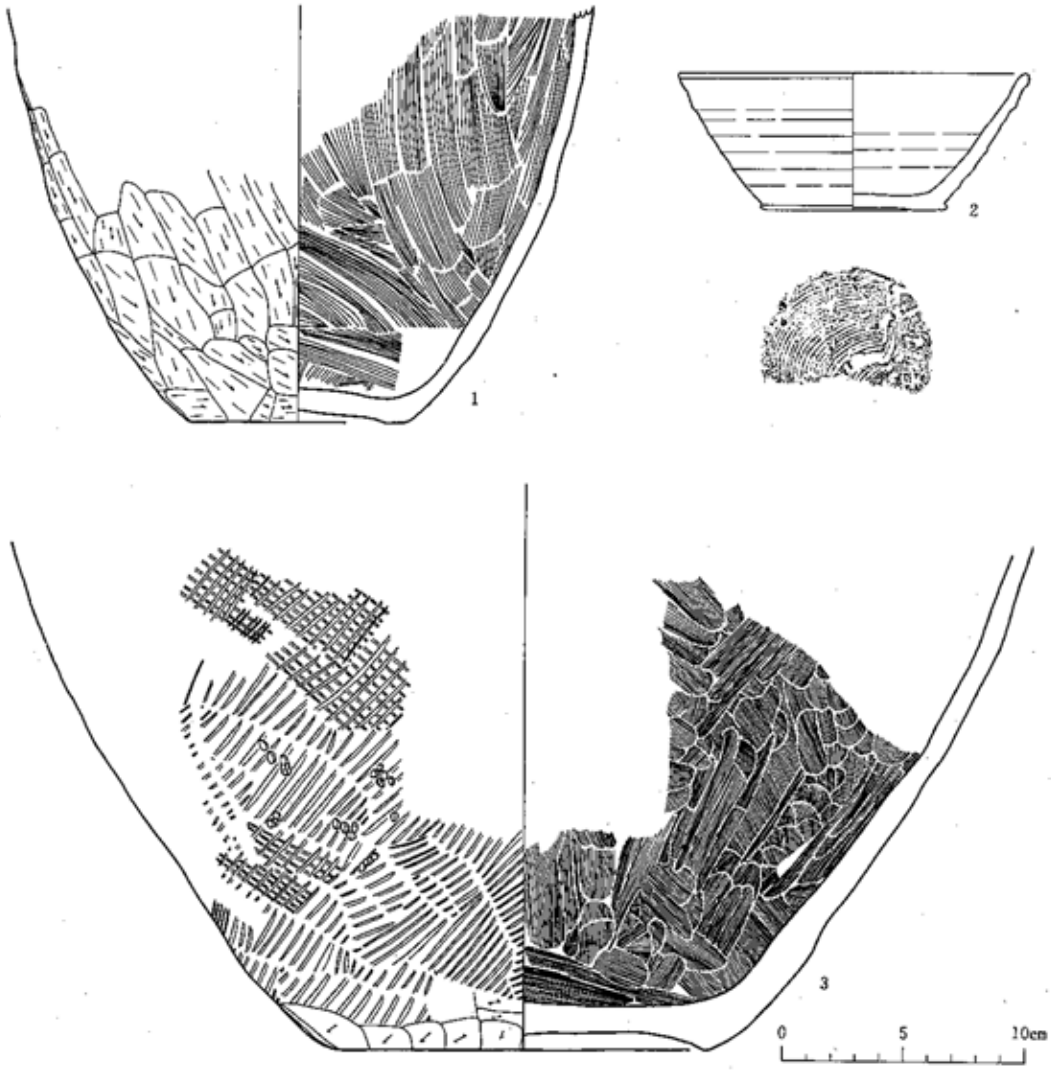
堆積土出土遺物

土師器

坏（第 13 図 1～5）体部から口縁部まで内弯気味に外傾するもの（1～4）と口縁部でわずかに外反するもの（5）とがある。1～3 は体部下半と底部に回転ヘラケズリの調整をうけ、底部の切離し技法が不明なものである。1 の外面体部下半には回転ヘラケズリ後、横・斜方向の丁寧なヘラミガキが加えられ、外面全体に黒色処理が施されている。内面は口縁部から体部に横方向や斜方向の、底部には一定方向のヘラミガキと黒色処理が施されている。底部外面の中心部付近には「×」印のヘラ書きがある。2 と 3 には、ヘラミガキ・黒色処理などの外面調整は認



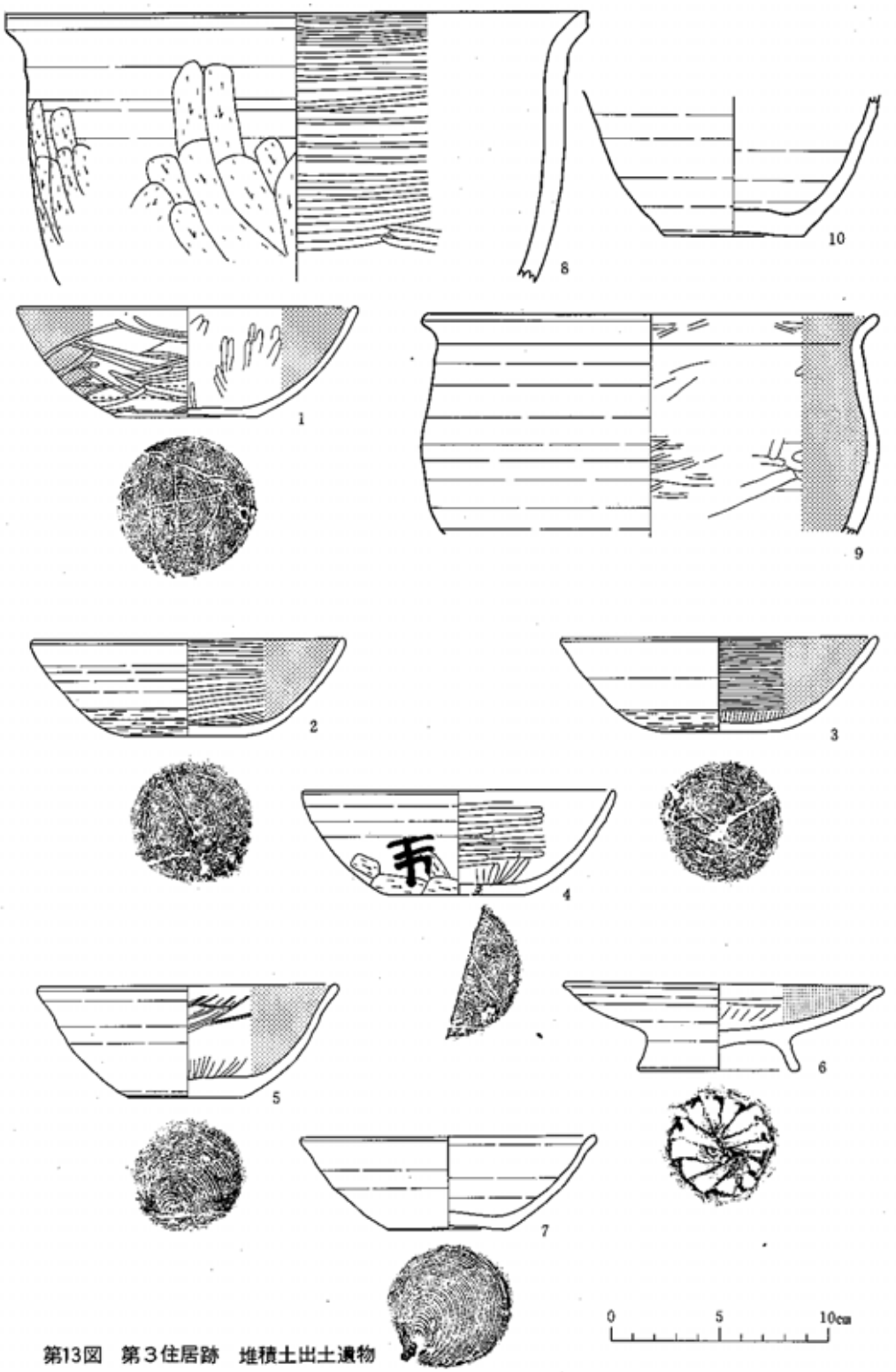
第11図　第３住居跡出土遺物(1)



第12図　第３住居跡出土遺物(2)

められない。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施される。4 は、体部下半と底部に手持ヘラケズリが施され、底部切り離しが不明なもので、体部下半には「生」の字が倒位に墨書されている。5 は底部を回転糸切り技法で切り離しており、内面にヘラミガキ・黒色処理が施される。

高台付坏（第 13 図 6）坏部は体部から口縁部へやや内弯気味に外傾しており、浅い皿状のものである。高台部はやや外反気味に踏ん張り、高い。坏部と高台部の接合の際の調整が底部全面におよんでおり、坏部切り離しは不明である。この調整は、高台付着後、坏底部中央から接合部に向って左回りに胎土をかきよせており、その痕跡が菊花状になっているもので、その後



第13図　第３住居跡　堆積土出土遺物

接合部分をナデ調整している。坏部内面には、ヘラミガキと黒色処理が施されている。

甕（第13図8～10）いずれも製作にロクロを使用しており、体部下半と底部を欠くもの（8・9）と体部下半から底部にかけてのもの（10）とがある。8・9 は最大径が推定器高より大きいもので、最大径の位置は8で口縁部に、9では口縁部と体部上半にある。8は頚部でゆるく屈曲し、口縁部は外反するが短い。口縁端部は上方にわずかにつまみ出されている。外面はロクロ調整された後、体部上半以下がヘラケズリされている。ヘラケズリの方向は斜下方向である。内面は丁寧なヘラミガキが横方向に施される。9 は頚部で「く」の字形に屈曲し、口縁部は外傾するが、短い。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。10 は体部内外面共ロクロ調整されており、底部内面もロクロ調整されている。底部外面は全面にナデ調整が施されている。

須恵器

坏（第13図7）体部はやや丸味をもって外傾し、口縁部で外反する。底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はない。

第5表　第3住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
11図1	床No.5	土師器	坏	14.7		5.1	4.2	14	AIII
11図2	壁6層	〃	〃	13.8		5.8	4.1	20	〃
11図3	ピット2層	〃	〃	14.5		6.4	4.3	42	〃
11図4	カマド北側	〃	〃	16.2		7.6	4.3	44	〃
11図5	カマドA－1	〃	〃			6.2		10	〃
11図6	カマドA－1	〃	〃	14.1		6.5	4.9	17	BII
11図7	ピット7	〃	高台付坏					45	
11図8	床No.1	〃	甕	23.7	23.5	9.7	37.2	36	CI
11図9	床No.2	〃	〃	不明		11.6	不明	47	
12図1	D床カマド	〃	〃	不明		9.0	不明	48	
12図2	ピット5No.9	須恵器	坏	14.7		7.7	5.7	41	
12図3	A3層	〃	甕	不明		15.5	不明	56	
13図1	A－2層	土師器	坏	15.4		6.2	5.2	18	AII
13図2	D3層	〃	〃	14.2		5.1	4.2	19	AIII
13図3	A－2層	〃	〃	14.3		4.9	4.3	15	〃
13図4	D3層	〃	〃	14.4		6.3	4.8		AIV
13図5	ピット2	〃	〃	14.0		5.4	5.2	16	BII
13図6	D2層	〃	高台付坏	15.0			4.0	21	AI
13図7	D2・3層	須恵器	坏	13.6		5.2	4.5	39	
13図8	B2・3層	土師器	甕	27.0	24.9	不明	不明	52	EI
13図9	A2層	〃	〃	21.1	21.2	不明	不明	63	F
13図10	A2・3層	〃	〃	不明	不明	6.4	不明	46	

第１住居跡

〔遺構の確認〕 Ⅱ区の南端、丘陵の平坦部が、遺跡北側の手取沼に向かってゆるやかに傾斜しはじめるＣＪ・ＣＫ－14・15区に位置しており、第Ⅰ層下の地山面で確認された。

〔平面形〕 平面形は東西に長い長方形を呈し、長軸4.1m、短軸3.5mである。長軸の方向は、Ｎ－75°－W、住居内面積は13.2㎡である。

〔堆積土〕 4層認められ、第Ⅰ～第Ⅲ層に大別された。

第Ⅰ層－砂質の黒褐色土で、住居跡全体を覆うが床面までは達していない。

第Ⅱ層－褐色土で、壁ぎわを除く住居跡全体に厚く堆積しており、大部分は床面を覆っている。

第Ⅲ層－やや粘性のある褐色あるいは暗褐色土や粘性のある明褐色土で、壁ぎわだけに分布し、Ⅱ層と共に床面に接している。

〔壁〕 地山を壁としているが、壁の残存状態は全体的にあまり良好ではなく、壁高の最も高い南壁で20㎝、北壁では6～10㎝である。床面からの壁の立ち上がりは、全体的にゆるやかであるが、南壁は急角度に立ち上がっている。

〔床面〕 掘り方底面の地山面をそのまま床面として使用している。床面には小さな凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。

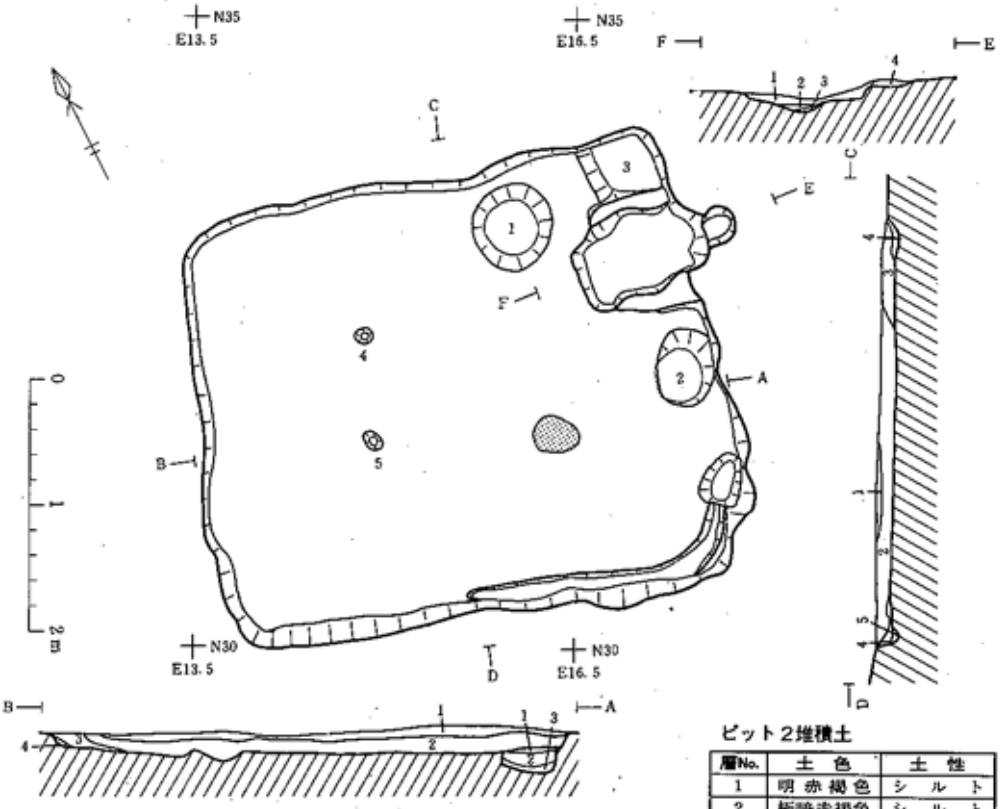
〔柱穴〕 大小5個のピットが検出されている。いずれにも柱痕跡は認められず、配置にも規則性を認めることができなかった。主柱穴は不明である。

〔周溝〕 南東隅から南壁の中途まで、壁に沿って幅約15㎝、深さ3～5㎝程の周溝と思われる浅い溝が約2m検出された。

〔カマド〕 カマドは東壁の北端に付設されている。軸線はＮ－86°－Wで、住居長軸より、やや北に偏している。カマドの残存状態は不良で、わずかに両側壁の基部が検出された。カマド本体の規模は幅95㎝、奥行106㎝である。側壁は灰白色粘土で構築されており、右が幅15～30㎝、長さ62㎝、高さ9㎝、左は幅15～26㎝、長さ63㎝、高さ5㎝程残存している。燃焼部の規模は、幅約50㎝、奥行106㎝で、奥壁は住居跡東壁を若干掘り込んでいる。また、床面より10㎝程掘り下げて、底面としている。燃焼部内には、焼土が約10㎝の厚さで堆積していた。煙道はなく、本体奥壁に接して、径30㎝のピットが検出された。これが煙出しピットと思われる。

〔貯蔵穴状ピット〕 P_1～P_3はいずれもカマド周辺に位置し、直径50～60㎝、深さ20㎝と規模が大きく堆積土中に焼土、木炭を含んでいる。貯蔵穴状ピットとも考えられるが、その性格は不明である。

〔出土遺物〕 床面、カマド内、ピット中、周溝や堆積土から出土している。土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器甕、赤焼土器（坏・高台付坏）、縄文土器、石器などがある。



ピット2堆積土

層No.	土色	土性
1	明赤褐色	シルト
2	極暗赤褐色	シルト
3	褐色	シルト

住居内堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
Ⅰ	1	黒褐色	砂質シルト		第1層
Ⅱ	2	褐色	シルト		
Ⅲ	3	暗褐色	シルト		
	4	明褐色	シルト	粘性あり	
	5	明褐色	シルト	周溝埋土	

カマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	極暗赤褐色	砂質シルト	焼土を多量に含む。
2	褐色	砂質シルト	
3	暗褐色	砂質シルト	
4	褐色	砂質シルト	

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5
深さ(cm)	13	21	22	17	35

第14図　第1住居跡

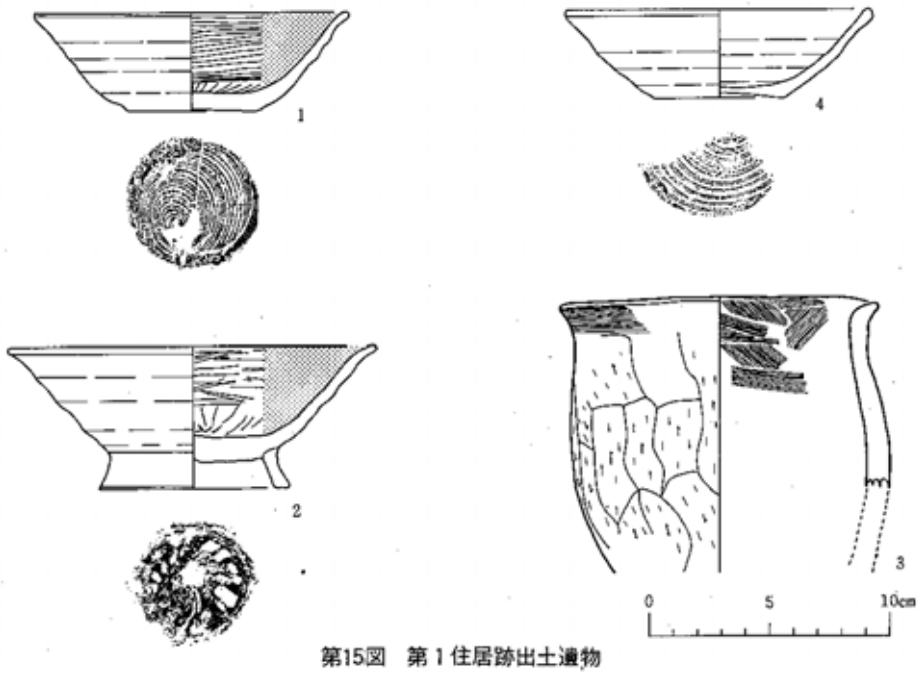
住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第15図1）体部は内弯気味に外傾し、口縁部で外反する。底部は回転糸切り技法で切り離され、内面にはヘラミガキと黒色処理が施される。カマド内から出土したため黒色処理は部分的にしか残っていない。

高台付坏（第15図2）坏部は内弯気味に外傾し、口縁部でわずかに外反する。高台は外反し、比較的高い。高台付着時の調整が坏底部全面に加えられており、坏の切り離し技法は不明である。また、この調整は粘土を坏底部中央から接合部分に菊花文状にかきよせ、その後に接合部をナデ調整したものである。坏部内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。ヘラミガキの

方向は、口縁部から体部までが、横・斜方向、体部下端から底部が放射状で、黒色処理はほと



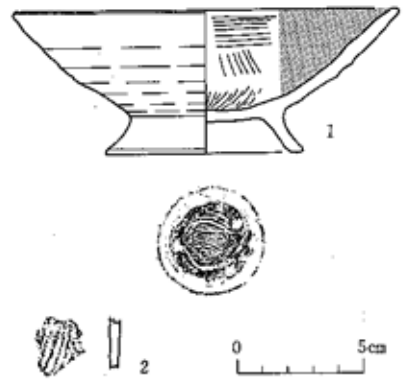
第15図　第１住居跡出土遺物

んど消滅している。

甕（第 15 図 3）製作にロクロを使用しない小形の甕で、底部を欠くが器高が最大径より大きいと思われる。最大径の位置は、口縁部にある。頸部の屈曲は弱く、口縁部は外反するが、全体的に粗雑なつくりで歪みが大きい。外面は口頸部に横ナデ、体部に縦方向のヘラケズリが施され、内面は不規則な方向のナデ調整が施される。

赤焼土器

坏（第 15 図 4）体部から口縁部までほぼ直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反する。底部は回転糸切り技法によって切り離される。内外面とも再調整は認められない。色調は橙色である。



第16図　第１住居跡　堆積土出土遺物(1)

第17図　同遺物(2)

堆積土出土遺物

土師器

高台付坏（第 16 図 1）坏部は体部から口縁部までやや内弯気味に外傾する。高台部は強く外反し比較的高い。高台付着時の調整が接合部分に限られるため、坏底部の中心部に底部を切り離したときの回転糸切り技法の痕跡が認められる。内面はヘラミガキ黒

色処理が施され、ヘラミガキの方向は口縁部から体部までが横・斜方向、体部下半から底部では放射状となっている。

縄文土器（第16図2）

体部破片で胎土に繊維を含まない。内面は剥離して不明であるが、外面には縄文(ＬＲ)が施されている。

石器（第17図1・2）

1 は打面を残す小剥片で、黒曜石製である。背面に剥離調整が認められる。2 は小破片で、部分的ではあるが、両面に剥離がみられる。

第６表　第１住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
15図1	カマド	土師器	坏	13.4		5.6	4.1	6	BII
15図2	床面	〃	高台付坏	15.5			6.0	22	AI
15図3	Ａカマド	〃	甕	13.4	13.3			51	A
15図4	ピット3	赤焼土器	坏	13.9		6.1	4.3	43	a
16図1	Ｄ－1	土師器	高台付坏	15.4			5.8	23	BII

第７表　第１住居跡出土石器計測表

図版番号	名称	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	完・不完
17図1	剥片破片	ピット1	1.66	1.56	0.6	1.1	黒曜石	不完
17図2	〃		1.32	1.50	4.6	0.8	珪質凝灰岩(緑)	〃

第４住居跡

〔遺構の確認〕 II区北端の、ＣＮ～ＣＰ－12・13区に位置しており、第Ｉ層下の地山面で確認した。

〔平面形〕 平面形は、ほぼ正方形であるが、南壁は 4.6mあるのに対し、北壁は 4.2mしかないため、台形に近い形となっている。また、西壁南半は少し外側に張り出している。長軸4.8m、短軸4.7m、長軸の方向はＮ－10°－Ｅ、住居内面積は約19.4㎡である。

〔堆積土〕 8層認められたが、第Ｉ～第IV層に大別することができる。

第Ｉ層－上部は黒褐色あるいは暗褐色土層で、下部は粘性を持たない、にぶい黄橙色土である。住居跡中央に厚く堆積し、壁に近くなるにしたがって薄くなり、壁ぎわにはほとんど分布しない。

第II層－暗褐色のシルトで、木炭粒を少量含んでいる。第Ｉ層と堆積、分布状態はほぼ同じであるが、壁近くにも厚く堆積する。第Ｉ層と共に床面に達することはなく、その堆積は、南壁及び西壁からの強い流れ込みを示している。

第III層－床面をほとんど覆っている層である。褐色土に、焼土、木炭を多量に含んでいて、下部になるほどその量は多い。壁ぎわでは分布しない所もある。

第Ⅳ層－地山の崩れ土をブロック状に含む層で、壁ぎわにだけ分布している。Ⅲ層の堆積前や堆積後に壁などが崩落してできた層と思われる。

〔壁〕 東壁を除き、地山を壁としている。もっとも良好に残存していた西壁で残存壁高 50～70 ㎝、あまり良好でない東壁で 15～20 ㎝で、全体的に壁の残りの良い住居跡である。各壁とも立ち上がりは急角度で、ほぼ垂直に近い。東壁は、基本層序第Ⅳ層（漸移層）から地山にかけてを壁としているので、他に比してやや柔らかである。

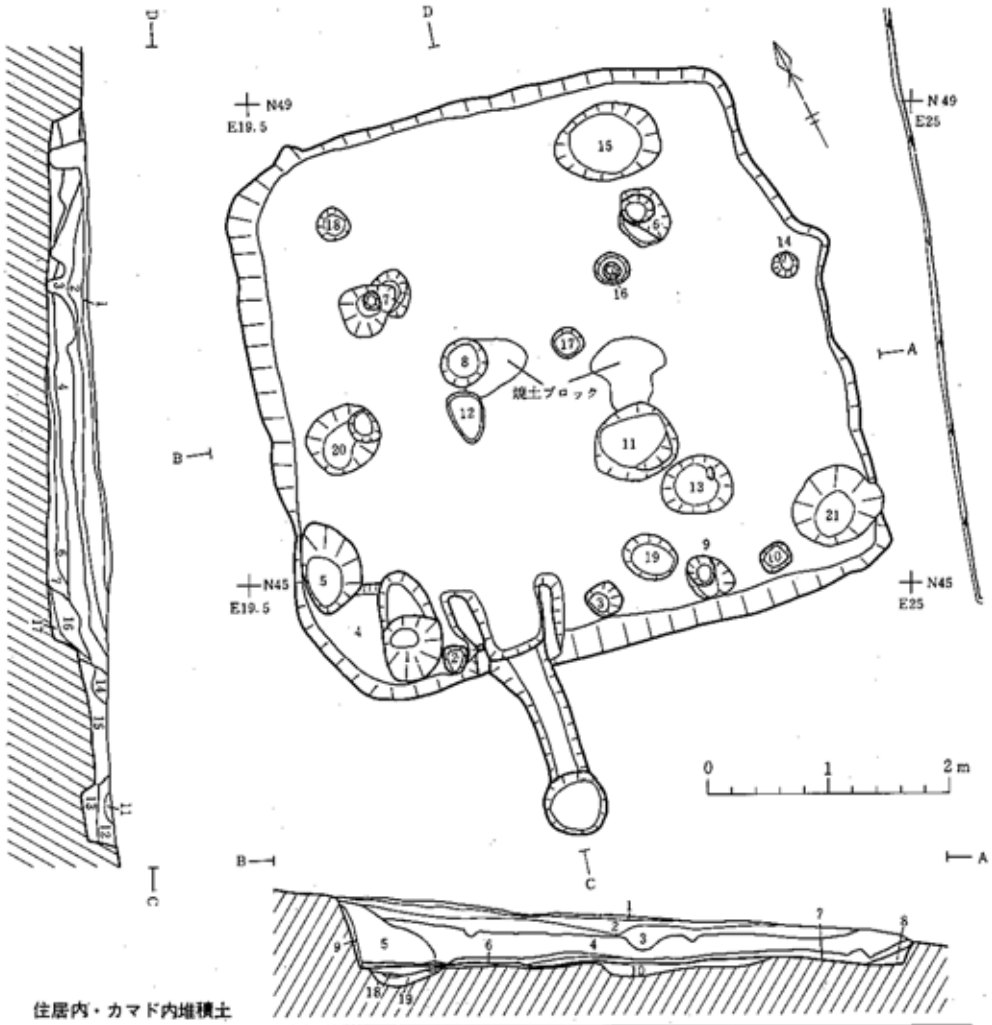
〔床面〕 床面は、地山を掘り込んだ住居跡掘り方に、地山土の小ブロックが混入した暗褐色土や黒褐色土を、2～10 ㎝の厚さで埋め土した貼り床である。黒褐色土の貼り床は、東壁ぎわにだけみられた。この部分を除いた住居跡全体には、暗褐色土の貼り床がなされている。床面は、ほぼ平坦でかたくしまっており、直径 30～60 ㎝で、厚さ 3～5 ㎝位の焼土ブロックが、4 ケ所ほど見られた。また、木炭・焼土粒が床面上に多く散布している。

〔柱穴〕 住居内から合計 22 個のピットが検出されている。北壁よりに位置する P_6 と P_7 からは、柱痕跡が検出された。この 2 個のピットは主柱穴であると思われる。これに対応し、南壁ぎわにならんで検出された P_2・P_3・P_{10} は柱痕跡は検出されなかったが直径 20～25 ㎝、深さ 30 ㎝前後で、規模、深さ、配置などから柱穴の可能性が考えられる。

〔カマド〕 南壁中央より、やや西によったところに付設されており、軸線の方向はN－10°－Eである。カマド本体の規模は幅 100 ㎝、奥行 65 ㎝で、わずかに両側壁が残存していた。側壁は明褐色の地山土で構築されており、「ハ」の字形に端部に向かって広がりながら直線的に住居内に延びている。左側壁の規模は幅 20～25 ㎝、長さ 75 ㎝で、右側壁は幅 20～30 ㎝、長さ 78 ㎝である。高さ 3～25 ㎝程が残存していたが、左側壁の方が残りが良かった。燃焼部は奥行 55 ㎝、幅は奥壁部で 35 ㎝、端部で 55 ㎝で、前端部に向かってやや開く方形を呈している。底面はほぼ平坦で、床面より若干高くなっている。カマド内に落ち込んだ土や、カマド周辺の床面上には多量の焼土、木炭が見られた。カマド内には、落ち込んだと思われるほぼ完形の須恵器坏や、土師器甕の破片が底面より少し浮いて発見されている。煙道は、住居跡南壁に対して、直角より少し東に偏して延びている。幅約 30 ㎝、長さ 110 ㎝で深さ 15 ㎝ほどが残っている。底面は煙出し部に向かって少し昇っている。煙出しピットは直径 50 ㎝、深さ 25 ㎝でほぼ円形のピットとなっている。

〔貯蔵穴状ピット〕 カマド西に接して、住居跡南西隅で切り合った 3 個のピットが検出された。P_1 は 92×47 ㎝、深さ 33 ㎝、P_5 は 77×48 ㎝、深さ 33 ㎝の長楕円形のピットで、この 2 つのピットは深さ 5 ㎝と浅い P_4 を切っている。これらのピットは、堆積土中に木炭、焼土を含み、全体的に土器の出土も多いことから、貯蔵穴状ピットである可能性がある。

〔出土遺物〕 床面上・カマド内・貯蔵穴と考えられるピット、その他のピットや堆積土か



住居内・カマド内堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考	遺構取り上げ層位	大別	層No.	土色	土性	備考
I	1	黒褐色	シルト	粘性あり	第1層		11	黄褐色	シルト	壁出しピット内堆積土
	2	暗褐色	シルト		第2層		12	暗褐色	シルト	壁出しピット内堆積土 粘性あり
	3	にぶい黄橙色	砂質シルト		第3層		13	黒褐色	シルト	壁出しピット内堆積土 粘性あり
II	4	暗褐色	シルト	粘性あり炭少量含む	第4層		14	暗褐色	シルト	煙道部堆積土、焼土あり
III	5	褐色	シルト	粘土状			15	黒褐色	シルト	煙道部堆積土、粘性あり
	6	褐色	シルト	粘性あり,焼土,炭を含む	第5層		16	明褐色	シルト	カマド側壁、焼土・炭、砂粒を含む
	7	黒褐色	シルト	炭を多量に含む			17	赤褐色	シルト	カマド側壁,粘性あり,焼土・炭を含む
IV	8	暗赤褐色	シルト		第6層		18	明褐色	シルト	P_{14}堆積土 粘性あり
	9	暗褐色	シルト				19	赤褐色	シルト	P_{14}堆積土 粘性あり、焼土・炭を含む
	10	暗褐色	シルト	貼床・地山粒混入						

ピットNo.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6（掘り方）	P_6（柱痕跡）	P_7（掘り方）	P_7（柱痕跡）	P_8	P_9
深さ(cm)	33	28	33	5	33	55	55	52	52	38	33
土色	—	—	—	—	褐色	褐色	暗褐色	褐色	暗褐色	灰白色	暗褐色
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考					木炭・焼土混入	地山粒・木炭混入		地山粒混入		木炭・焼土混入	木炭・焼土混入 粘性あり

P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}
25	33	9	19	18	24	12	7	17	16	16	15
暗褐色	黒褐色	明褐色	赤褐色	暗褐色	暗褐色	黒褐色	褐色	にぶい褐色	褐色	明褐色	暗褐色
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
焼土混入	木炭混入	粘性あり	粘性あり								新しいピット

第18図　第４住居跡

ら多くの遺物が出土している。土師器（坏・甕・手づくね土器）、須恵器（坏・埦・甕）などが主なもので、堆積土からは少量の赤焼土器、白磁、縄文土器などの破片も出土している。

住居跡に伴う遺物

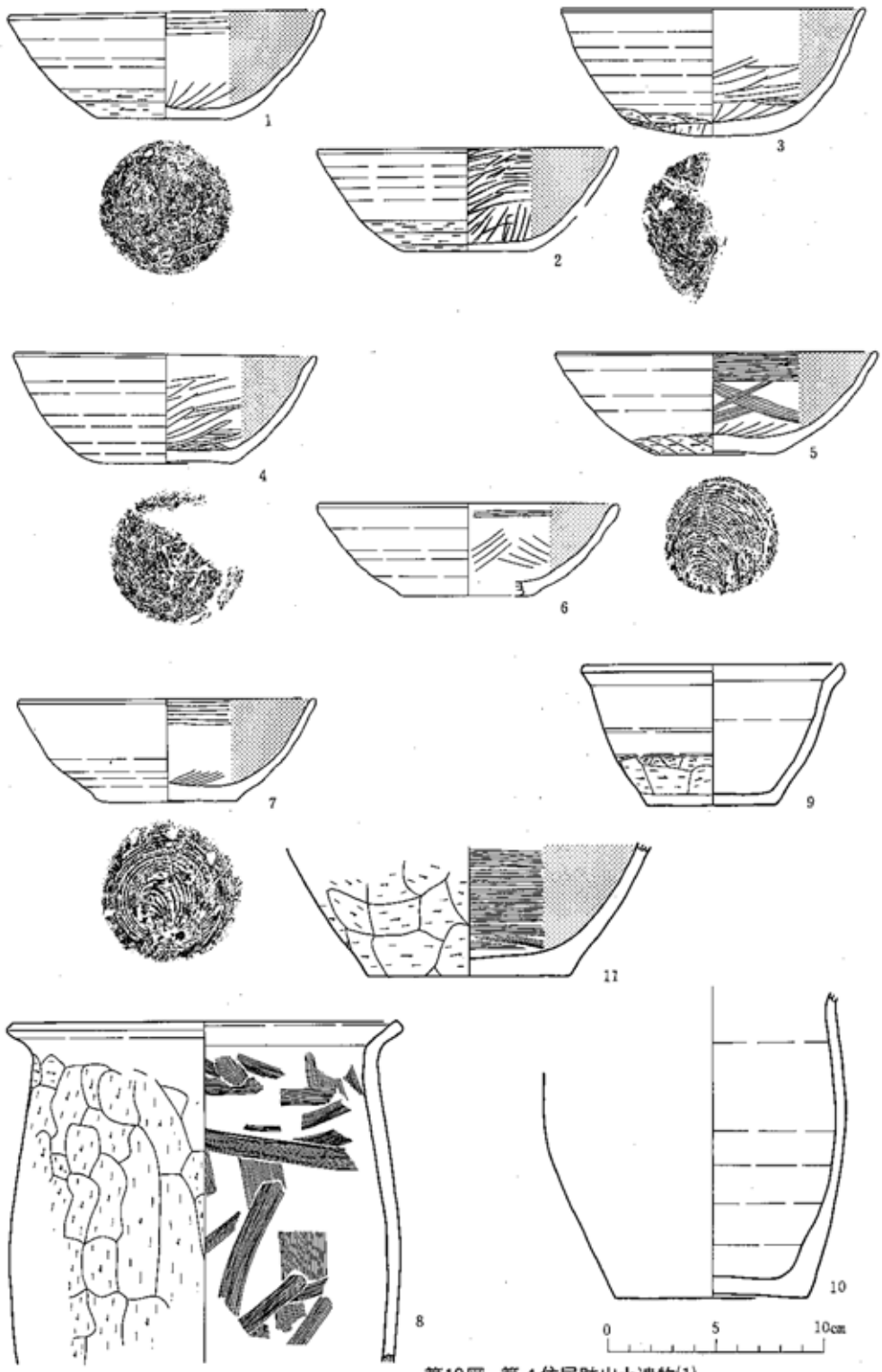
土師器

坏（第 19 図 1～7）体部から口縁部まで内弯気味に外傾する同じような器形をもつ。底部外面に再調整が加えられることによって、切り離し技法の不明なもの（1～4）と回転糸切り技法による切り離し痕を残すもの（5～7）とがある。1・2 は体部下端と底部の外面が回転ヘラケズリされる。内面にはヘラミガキと黒色処理が施される。ヘラミガキの方向は、1・2 とも口縁部から体部下半までは横・斜方向、底部は 2 が一定方向、1 が放射状となっている。3・4 は底部外面が手持ちヘラケズリされ、切り離しの不明なもので、3 では手持ちヘラケズリは体部下端にも加えられる。4 も体部下端に手持ちヘラケズリは及んでいると思われるが、磨滅のため明確ではない。内面にはヘラミガキと黒色処理が施される。ヘラミガキの方向は、どちらも口縁部から体部にかけてが横・斜方向、底部が放射状となっている。4 の底部外面には線刻による、文字様のものがみられるが、意味不明である。底部外面に回転糸切り痕を残すものには、体部外面の下端に手持ちのヘラケズリが施されるもの（5）と外面に再調整のまったく施されないもの（6・7）とがある。いずれも内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されるが、6・7 は黒色処理が部分的にしか残っていない。

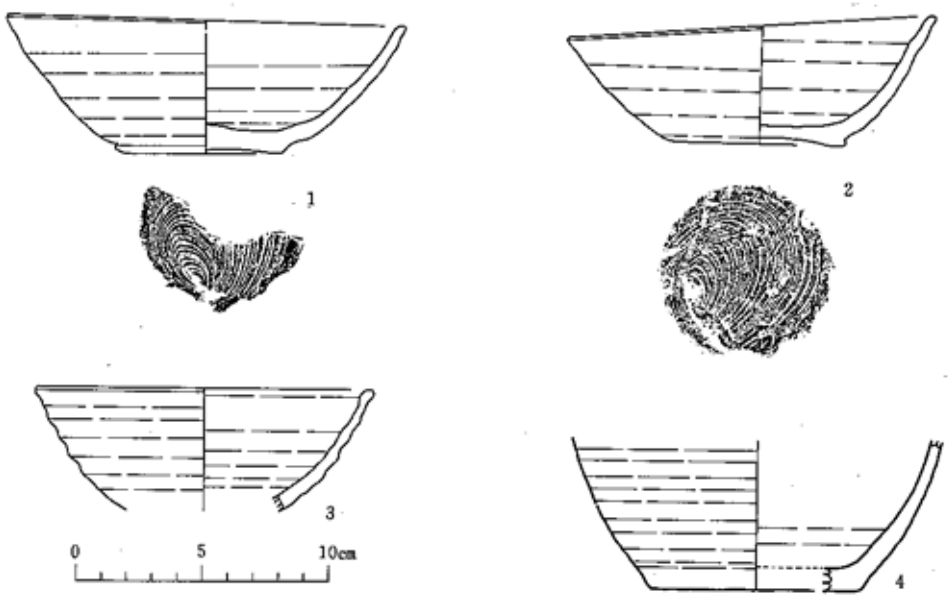
甕（第 19 図 8～11）製作に際してロクロを使用するものと使用しないものとがあるが、ロクロを使用するものが多い。図示した 8～10 はロクロを使用するもので、11 は底部破片でロクロ使用・不使用の不明なものである。8 は体部下半を欠くが器高が最大径より大きく、最大径の位置を口縁にもつ長胴形の甕と思われる。口縁部は強く外反し、口縁端部は角ばる。器面調整は外面では口縁部から体部までロクロ調整後、体部に縦方向のヘラケズリが施される。内面は口縁部がロクロ調整、体部が不定方向のナデ調整となっている。9 は最大径が器高よりも大きく、最大径の位置は口縁部にある。鉢形に近い小形の甕で、底部からやや内弯気味に外傾し、頸部から口縁部へゆるく屈曲・外傾する。口縁端部は内傾気味にわずかにひき出されている。外面は口縁部から体部までがロクロ調整、体部下端に横方向のヘラケズリが施され、底部は磨滅が著しいため不明である。内面は、全面ロクロ調整されている。10 は口縁部を欠く、小形の甕である。外面の器壁は、全体的に強い火熱を受けて剥落している。内面はロクロ調整されている。11 は外面の体部下半に横方向のヘラケズリが、底部にはナデ調整が加えられ、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。

須恵器

坏（第 20 図 1～3）体部は内弯気味に外傾し、そのまま口縁部まで外傾するものと、口縁部



第19図　第４住居跡出土遺物(1)



第20図　第４住居跡出土遺物(2)

でわずかに外反するものとがある。底部を欠く３以外は、回転糸切り技法で底部を切り離しており、再調整はない。

甕（第 20 図 4）小形の甕の底部破片と思われるが壺である可能性もある。内外面ともロクロ調整されており、底部は回転糸切りによって切り離されている。

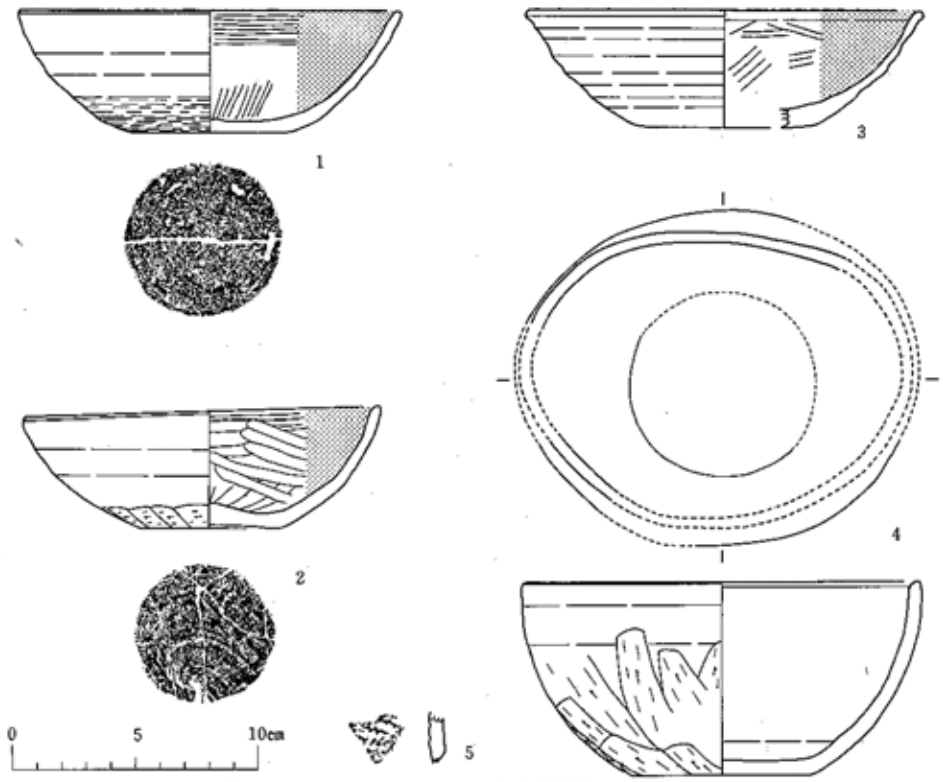
堆積土出土遺物

土師器

坏（第 21 図 1～3）1・2 は、体部から口縁部まで内弯しながら外傾する器形で、底部切り離しが再調整のため不明なもので、1・3 は口縁部でわずかに外反する器形で、底部に回転糸切り技法による切り離し痕が残るものである。体部下端から底部にかけての外面に、1 は回転ヘラケズリ、2 は手持ちのヘラケズリが加えられている。2 の底部にはかすかに回転糸切りの痕跡が残っている。いずれも内面はヘラミガキ・黒色処理されており、ヘラミガキの方向は口縁部から体部までが横・斜方向、底部は 1 が一定方向、2・3 が放射状となっている。

須恵器

埦（第 21 図 4）製作にロクロを使用しているが、器形は大きくゆがんでいる。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は直立あるいは内反する。口縁端部は内側に削がれている。外面は口縁部から体部上半までがロクロ調整、体部下半は斜方向のヘラケズリが施され、底部もヘラケズリされ切り離しは不明となっている。内面の調整は器壁が荒れているため不明である。また、外面全体と内面の上半には自然釉が見られる。



第21図　第４住居跡　堆積土出土遺物

磁器（図版21－30）

白磁椀の体部下半の破片がⅡ層から１点出土している。

縄文土器（第21図5）

１点出土している。体部破片で胎土に繊維を含み、外面には斜行縄文(ＬＲ)、内面には条痕文が施されている。

第８表　第４住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
19図1	Cピット１～２	土師器	坏	14.6		5.9	4.8	29	AIII
19図2	C床５	〃	〃	14.0		5.9	4.8	32	〃
19図3	Cピット１～２	〃	〃	14.8		6.5	5.4	30	AIV
19図4	Cピット１～２	〃	〃	14.4		6.7	4.8	62	〃
19図5	Cカマドピット６	〃	〃	15.0		5.4	4.7	27	BI
19図6	D－１　ピット８	〃	〃	14.7		7.4	4.4	33	BII
19図7	C－４　ピット１	〃	〃	13.8		6.4	4.6	34	〃
19図8	Cカマドピット９	〃	甕	18.9	18.8			57	CIa
19図9	C床直	〃	小形甕	12.2	11.1	5.9	6.5	37	EII
19図10	Cカマド４・５層	〃	甕			8.6		12	
19図11	C２ピット４	〃	〃			8.9		60	
20図1	C２ピット１	須恵器	坏	16.0		5.7	5.3	35	

20図2	Cカマド	須恵器	坏	15.2		6.1	6.0	7	
20図3	C床5層	〃	〃	13.9		6.1	5.0	8	
20図4	ピット1　1～2	土師器	甕			8.8		59	
21図1	C5層	〃	坏	15.8		6.4	5.6	28	AIII
21図2	B5層	〃	〃	13.9		5.5	4.7	26	BI
21図3	B5・B3・A3層	〃	〃	14.0		7.6	3.7	58	BII
21図4	BC3～5層	須恵器	坏	16.2		7.4	7.9	11	

第5住居跡

〔遺構の確認〕 II区の東端、第4号住居の南隣りのCL・CN－11・12区に位置し、基本層位第I層下の第III層から地山面にかけて確認された。

〔平面形〕 平面形は南壁と東壁が4mあるのに対して、西壁3.8m、北壁3.7mで多少ゆがんだ正方形を呈している。長軸4.3m、短軸4.25mで、長軸の方向はN－41°－Eで、住居内面積は15.1㎡である。

〔堆積土〕 10層認められたが、第I～第IV層に大別される。

第I層－暗褐色及び黒褐色土層で、にぶい黄橙色土をブロック状に含み、下部でその傾向が著しい。また、にぶい黄橙色土だけが堆積している部分もある。この層は厚く堆積するが、床面まで達することはない。また、住居外にもその堆積がのびている。

第II層－黒褐色土層で、部分的に黄橙色土の小ブロックを含んでいる。この層は床面のほとんどを覆っている。流入方向の違いや堆積の時間的な差によって、さらに細分される。

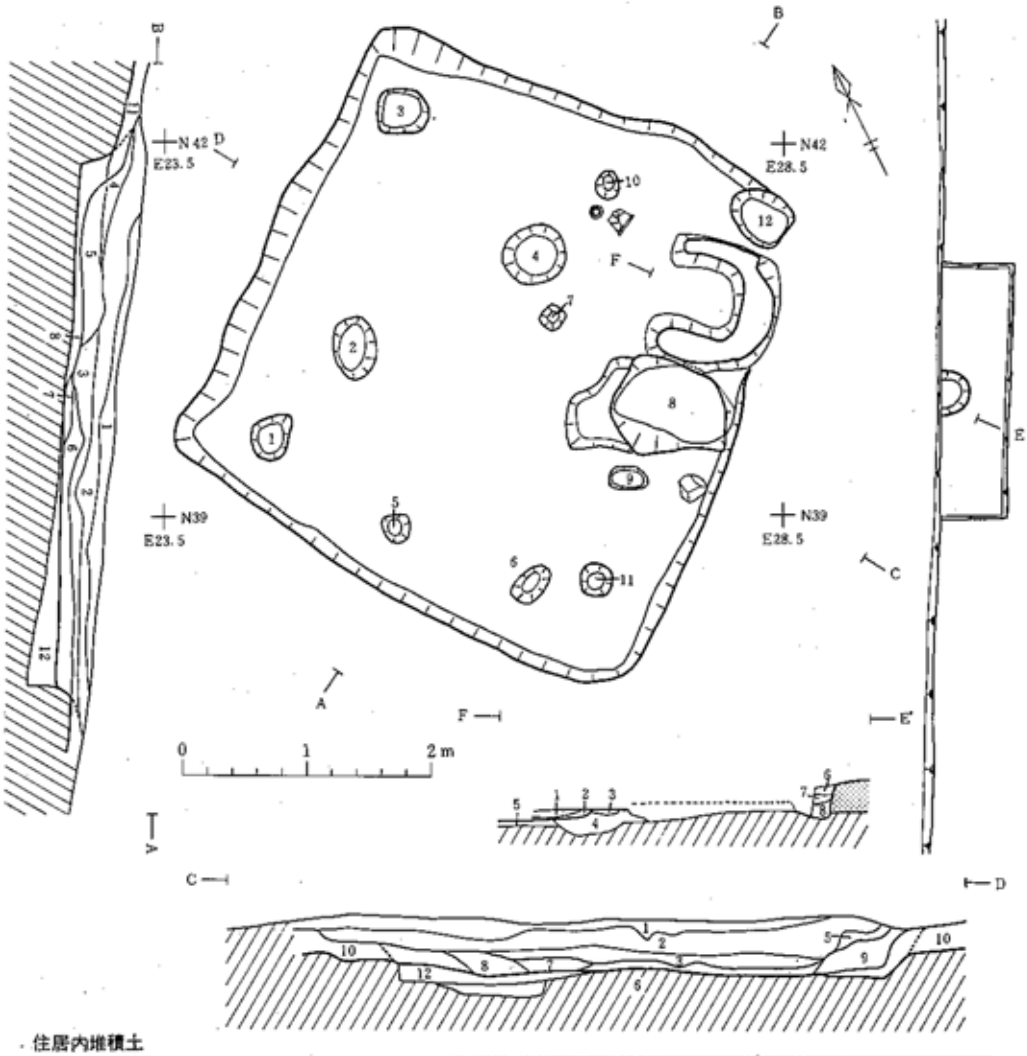
第III層－暗褐色土層で、西壁ぎわにだけ分布している。

第IV層－極暗褐色または黒褐色土層で住居壁ぎわにだけ分布している。基本層位第III層と土色・土性等が非常によく似ている。

〔壁〕 地山を壁としている南壁及び西壁は検出できたが、基本層位第III・IV層を壁としている東壁と北壁の大部分は、ほとんど残っておらず、床面下の掘り方だけが検出された。もっとも残存状態の良い南西隅では、25㎝の壁高がある。残存部分の壁の立ち上がりは鋭角的で、垂直に近い所もある。壁には、多少の凹凸があり、特に南壁は外側に若干ふくらんでいる。

〔床面〕 住居跡の南東隅と北西隅を結ぶ線から西側は、掘り方底面である地山面をそのまま床面としているが、それから東では、貼り床を行い床面としている。貼り床土は、地山土と思われる黄褐色土に、基本層位第III層の黒褐色土を含んだもので、もっとも厚い北壁東よりの部分で20㎝を計る。住居跡掘り方を地山の傾斜に沿って掘り下げているためか、貼り床を行った面は、ゆるやかに北西隅に向かって傾斜しており、南壁ぎわと北壁ぎわでは20㎝程北側が低くなっている。この貼り床面は、あまりしまっておらず、このため調査の過程でその大部分を掘り下げてしまった。

〔柱穴〕 住居内からは、12個のピットが検出された。いずれにも柱痕跡は検出されず、柱穴



住居内堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考	大別	層No.	土色	土性性	備考
I	1	極暗褐色	シルト		II	7	黒褐色	シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む
	2	暗褐色	シルト	にぶい黄橙色土を斑点状に含む		8	黒褐色	シルト	
	3	黒褐色	シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む	III	9	暗褐色	シルト	
	4	暗褐色	シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む	IV	10	極暗褐色	シルト	
II	5	にぶい黄橙色	シルト			11	黒褐色	シルト	
	6	黒褐色	シルト	橙・にぶい黄橙色土を含む		12	黄褐色	シルト	貼床

カマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	極暗褐色	シルト	
2	明赤褐色	シルト	焼土層
3	明褐色	シルト	粘土の焼けた層
4	極暗褐色	シルト	地山ブロックを含む
5	褐色	シルト	地山土に若干の黒色土を含む
6	暗褐色	シルト	灰を多量に含む
7	赤褐色	シルト	焼土を多量に含む
8	褐色	シルト	地山土に黒色土がまじる

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
深さ(cm)	12	10	10	20	5	9
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

P7	P8	P9	P10	P11	P12
15	21	5	20	12	20
黒褐色	極暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト

第22図　第５住居跡

は明確にはできなかった。しかし、住居各隅に位置するP_1・P_3・P_{11}・P_{12}が配列関係などから柱穴である可能性がある。

〔カマド〕東壁東より、北東隅近くに位置している。このカマドは貼り床後、貼り床土と同じ黄褐色土を使って構築している。本体の規模は、幅110㎝、奥行95㎝で、西に向かって開く「コ」の字形を呈し、軸線の方向はN－45°－Wである。カマドの位置が、北東隅近くのため遺存状態は不良で、わずかに側壁基部と燃焼部底面だけが検出できた。側壁と奥壁は、黄褐色の地山土で作られており、左側壁は幅25㎝、長さ75㎝、右側壁は幅30～50㎝、長さ80㎝、奥壁は幅35㎝で、いずれも高さ4㎝ほど残存していた。燃焼部は幅45㎝、奥行55㎝の方形で、底面は貼り床面と一致し、平坦である。燃焼部は壁・底面とも焼けて著しく赤変していた。煙道は住居検出のさい、削りすぎたため検出できなかったが、煙り出しピットのおよそ半分ほどが検出できた。煙り出しピットは直径35㎝、深さ23㎝で、堆積土中に灰、焼土を多量に含んでいる。この煙り出しピットの存在から煙道は長さ125㎝ほどで、壁に直角に取り付いていたと推定できた。また、煙り出しピットは、地山面より25㎝上の黒褐色土層（基本層位第Ⅲ層）から掘り込まれ、わずかにその底面が地山を切り込んでいた。この底面と本体燃焼部の底面は同一レベルである。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの右側壁に接して、140×70㎝で不整の東西に長いピットが検出された。深さは40㎝で、規模・位置などから貯蔵穴状ピットと思われるが、遺物はほとんど出土しなかった。

〔出土遺物〕床面・カマド内・煙道・ピット内や堆積土から土師器（坏・高台付坏・甕・小形手づくね土器）、須恵器（坏・甕・壺）、赤焼土器（坏・高台付坏）や少量の白磁・縄文土器などが出土している。しかし、住居跡に伴う遺物は少なく、その大部分は堆積土から出土している。

住居跡に伴う遺物

図示できる遺物はないが、カマドや煙道中から、底部を回転糸切り技法で切り離し、内面にヘラミガキと黒色処理が施され、底部や体部下端の外面に再調整のない土師器坏の底部破片が数点出土している。また、須恵器坏・赤焼土器坏の破片も少量ではあるが出土している。

堆積土出土遺物

土師器

坏　図示できるものではないが、底部の切り離し技法が回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリの再調整によって不明なものと回転糸切り痕が残るものとがあり、後者がやや多い。また、再調整の加えられるものでは回転ヘラケズリによるものが多くみられ、この調整が体部下端に及ぶものも多くある。

甕（第23図1・2）製作にロクロを使用するもの(1)と使用しないもの(2)がある。どちらも体

部下半から底部まで欠くが、器高が最大径より大きく、最大径の位置を体部上半にもつ。1 の器面調整は外面が口縁部から体部までロクロ調整され、その後体部に縦方向のヘラケズリが施される。内面は体部上半までロクロ調整が観察されるが、それ以下は器壁が荒れていて不明となっている。2 は外面の口縁部に横ナデが、体部に縦方向のヘラケズリが施される。内面は口縁部が横、体部は横・斜方向のナデが施されている。

手づくね土器（第 23 図 3）

口径 6.4 ㎝、器高 6.0 ㎝と小形の手づくね土器で、底部は丸底で逆釣鐘形の器形をもつ。口縁部は直立もしくは内傾気味で、端部は厚く、丸味をおびている。指での成形後、内外面とも横・斜方向の細かいヘラミガキを施しており、特に、外面のヘラミガキはていねいである。しかし、全体的に成形時の凹凸がみられ、口縁部と底部内面には指痕を残している。

須恵器

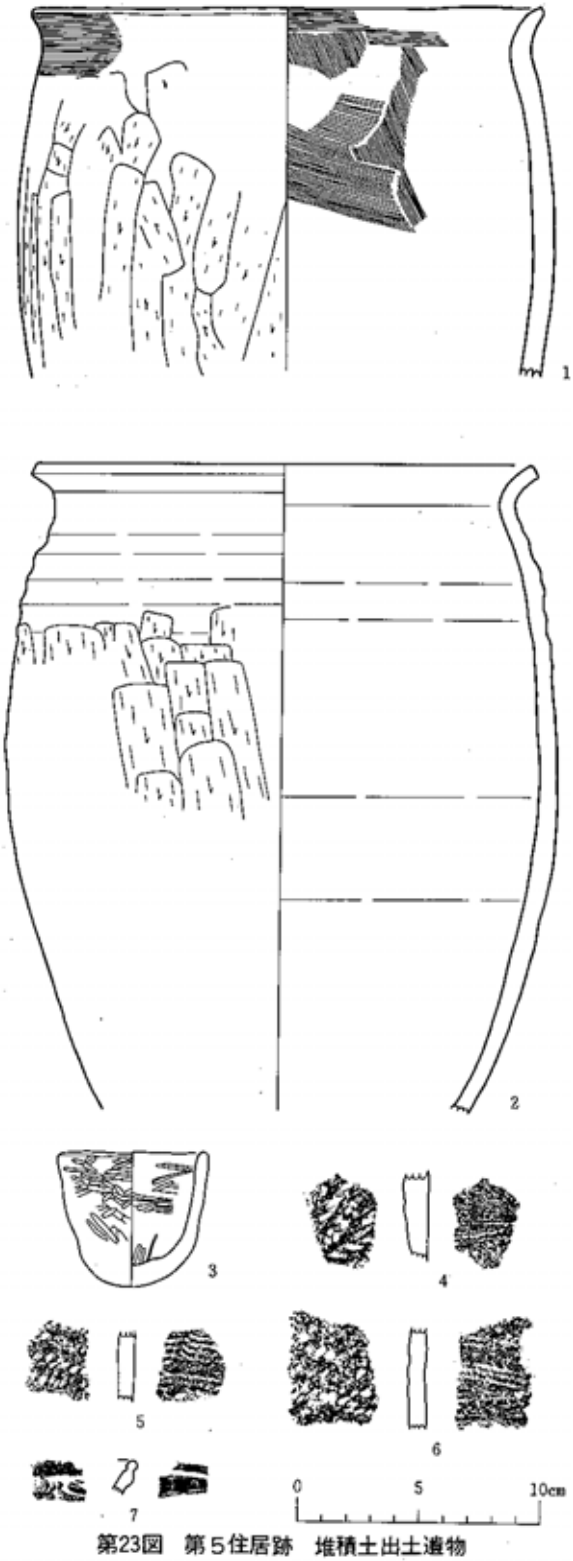
坏・甕・壺などの破片が少量出土している。

赤焼土器

坏の破片が各層から少量ではあるが出土している。

磁器（図版 21－31）

白磁椀の体部の小破片が 1 点出土している。



第23図　第５住居跡　堆積土出土遺物

縄文土器

4点出土している（第23図4～7）。4～6は胎土に繊維を含み、内面に条痕文が施される体部破片で、4は外面にＬ（ＲＬとＬ）の付加縄文が、5はＬＲの単節縄文が施され、6は縄文施文と思われるが、剥落が著しくその原体は不明である。7は鉢形土器の口縁部破片で、胎土に繊維を含まない。外面には浮線状の工字文が施され、口縁部内面に一条の沈線が巡る。

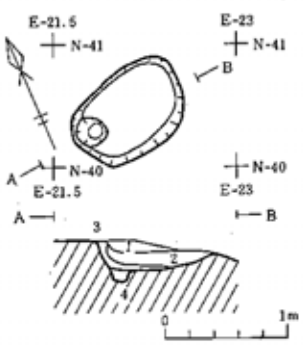
第９表　第５住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
23図1	Ａ２層	土師器	甕	21.4	22.1			61	ＢⅠ
23図2	Ａ３層Ｄ・Ａ堆	〃	〃	21.0	22.8			55	ＤⅠ
23図3	Ｄ－２層	手づくね土器		6.4			6.0	40	

(4)　その他の遺構と出土遺物

土壙

〔遺構の確認〕 Ⅱ区張り出し部の東側縁部上端、第4住居跡と第5住居跡のほぼ中間であるCM－13区に位置し、第Ⅰ層下の地山面で確認された。



第24図　土　壙

〔平面形〕 長軸100㎝、短軸70㎝の長楕円形で、深さは25～8㎝である。土壙底面の西端で直径25㎝、深さ10㎝のピットが検出された。土壙に伴うピットか、土壙より古いピットかは不明である。

〔堆積土〕 4層認められた。

第1層－褐色土層で基本層序第Ⅱ層に土色・土性が類似している。

第2層－黒色の炭化物を多量に含む層である。

第3層－暗赤褐色土層で、焼土・炭化物粒を含む層である。

第4層－ピット中の堆積土である。第3層と同様な暗赤褐色土層であるが、焼土・炭化物粒を含まない。

〔出土遺物〕 土壙内やピット中から遺物の出土はまったく認められなかった。

(5)　遺構以外の出土遺物

調査トレンチの第Ⅰ・Ⅱ層、主として第Ⅰ層から少量の土師器・須恵器・赤焼土器・縄文土器・石器などが出土している。量的にもっとも多いのは土師器で、主として住居跡周辺の平坦部、南北両斜面から出土している。縄文土器・石器はＢＬ～ＢＮ19 区を中心とする南斜面と、ＣＬ12・13 区を中心とする北側張り出し部などで多く出土している。

土師器

坏（第 25 図 29）29 は出土地区不明の坏で、体部へは内弯気味に外傾し、口縁部で外反する器形をもち、底部は回転糸切り技法によって切り離されている。内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。また、単孔式の甑の底部破片と思われるものが１点ある。体部下半にも貫通孔をもち、胎土に雲母・粗砂を含み器厚は厚く、焼成は非常に良い。あるいは土師器ではない可能性もある。この他、遺構以外の出土土器で図示できるものはないが、第 25 表に示したように、坏はすべて製作にロクロを使用しており、底部の切り離しも回転糸切り技法によるものが多く、底部外面に回転ヘラケズリの再調整やヘラミガキ・黒色処理が加えられるものもある。また、この再調整が体部下半に及ぶものもある。

甕　製作にロクロを使用するものと使用しないものとがある。体部外面にヘラケズリが加えられるものが多く、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されるものもある。底部では木葉痕をもつものが一例ある。

須恵器（第 25 表）

坏・甕・壺などがあるが、その量は少ない。坏には底部が回転糸切り技法で切り離され、再調整のないものがある。

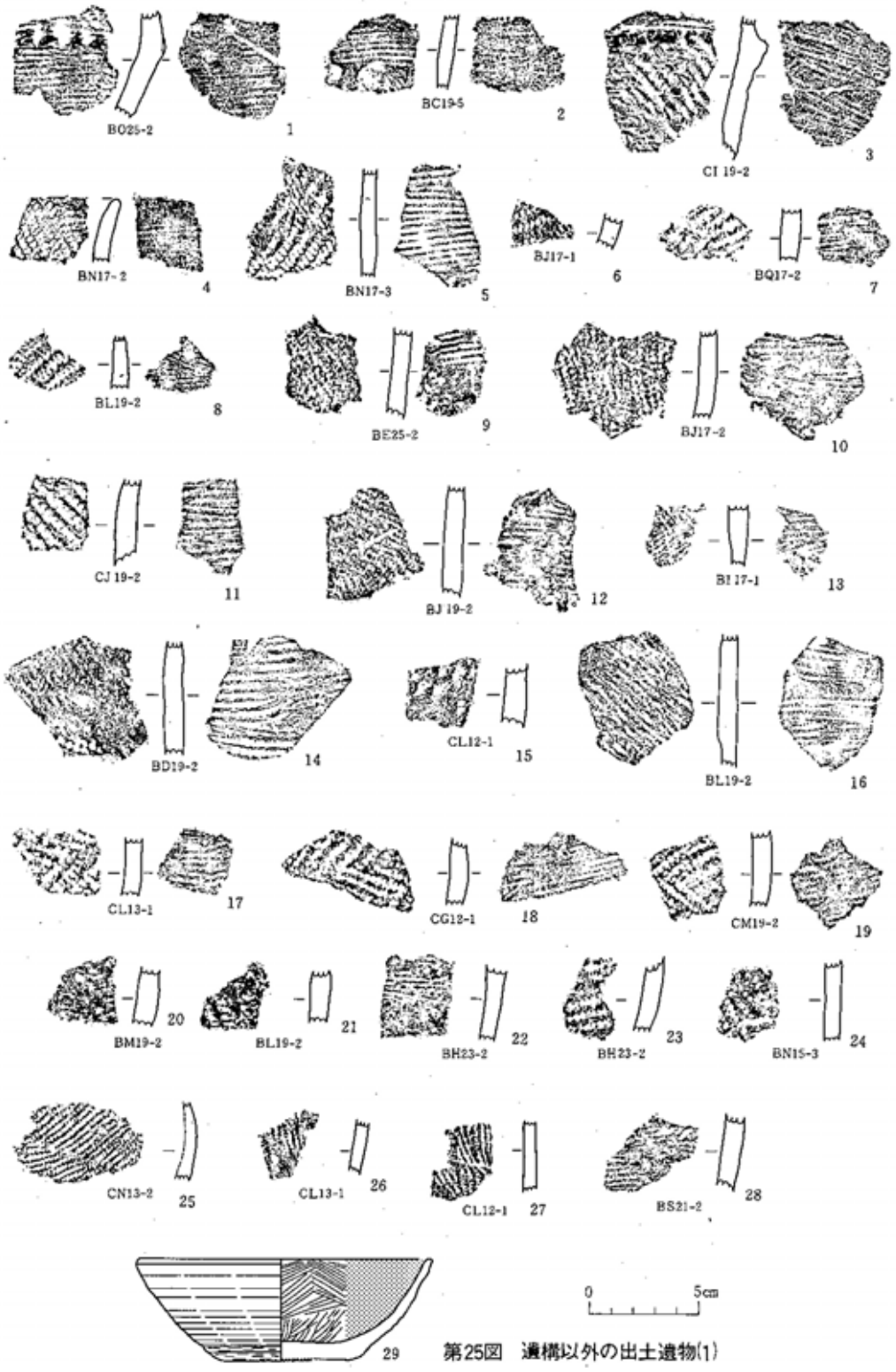
赤焼土器（第 25 表）

坏・高台付坏が第 25 表に示したように各地点から少量づつ出土している。

縄文土器（第 25 図 1～28）

合計 62 点の縄文土器片が出土している。いずれも小破片で磨滅したり、保存状態の良好でないものが多く、図示できたものは、破片総数の約半数の 28 点である。これらには、胎土・調整・地文の違いなどが認められる。

1～3：口縁部から体部にかけての破片で、胎土に繊維が含まれており、内面には条痕文が施される。いずれも外面の口縁部と体部の境に隆帯をもつ。1 は口縁部と体部に横位の条痕文が施され、隆帯上には貝殻腹縁による刺突が縦位に施される。2・3 は口縁部に横位の条痕文が、体部には斜行縄文が施される。2 は隆帯上に指頭による圧痕が施されており、体部の縄文はＬＲである。3 の体部には無節（Ｒ）の縄文が施されており、隆帯上までこの縄文が及んでいる所もある。



第25図　遺構以外の出土遺物(1)

4：口縁部破片で、胎土に繊維が含まれており、内面には条痕文が施される。外面には横位縄文（ＲＬ）を施したのち、一部条痕文が施されている。縄文は口唇部にも施されている。

5～16：いずれも体部破片で、胎土に繊維を含む。内面には条痕文が施され、外面には斜行縄文が施されている。それぞれの原体は5～8がＬＲ、9～14はＲＬ、15は無節（Ｒ）である。16の原体は明らかではないが、Ｒの原体を2断面で撚りもどした$\mathrm{R}<\frac{\mathrm{R}}{\mathrm{R}}$の原体の可能性がある。

17～19：体部破片で、胎土に繊維を含み、内面には条痕文が施されている。外面には羽状縄文が施される。17 はＬＲとＲＬの縄文原体を交互に施文して羽状縄文としているが、18・19はＲＬの縄文原体の施文方向を変えることによって羽状縄文としている。

20・21：体部破片で、胎土に繊維を含んでいる。内面に擦痕をもつもので、同一個体の破片と思われる。外面には斜行縄文（ＬＲ）が施される。

22～24：体部破片で、胎土に繊維を含むが、内面の器壁が荒れていて壁面調整の不明なものである。22の外面には縄文（ＲＬ）施文後、部分的に条痕文が施されている。23・24の外面にはＲＬの縄文が施されている。

25～28：いずれも体部破片である。胎土に繊維をまったく含まず、内面にはミガキが加えられ、平滑になっているものである。26 の外面には節が小さく均整のとれた縄文（ＬＲ）が施されている。27・28にはＲＬ、29には無節（Ｒ）の縄文が施されている。

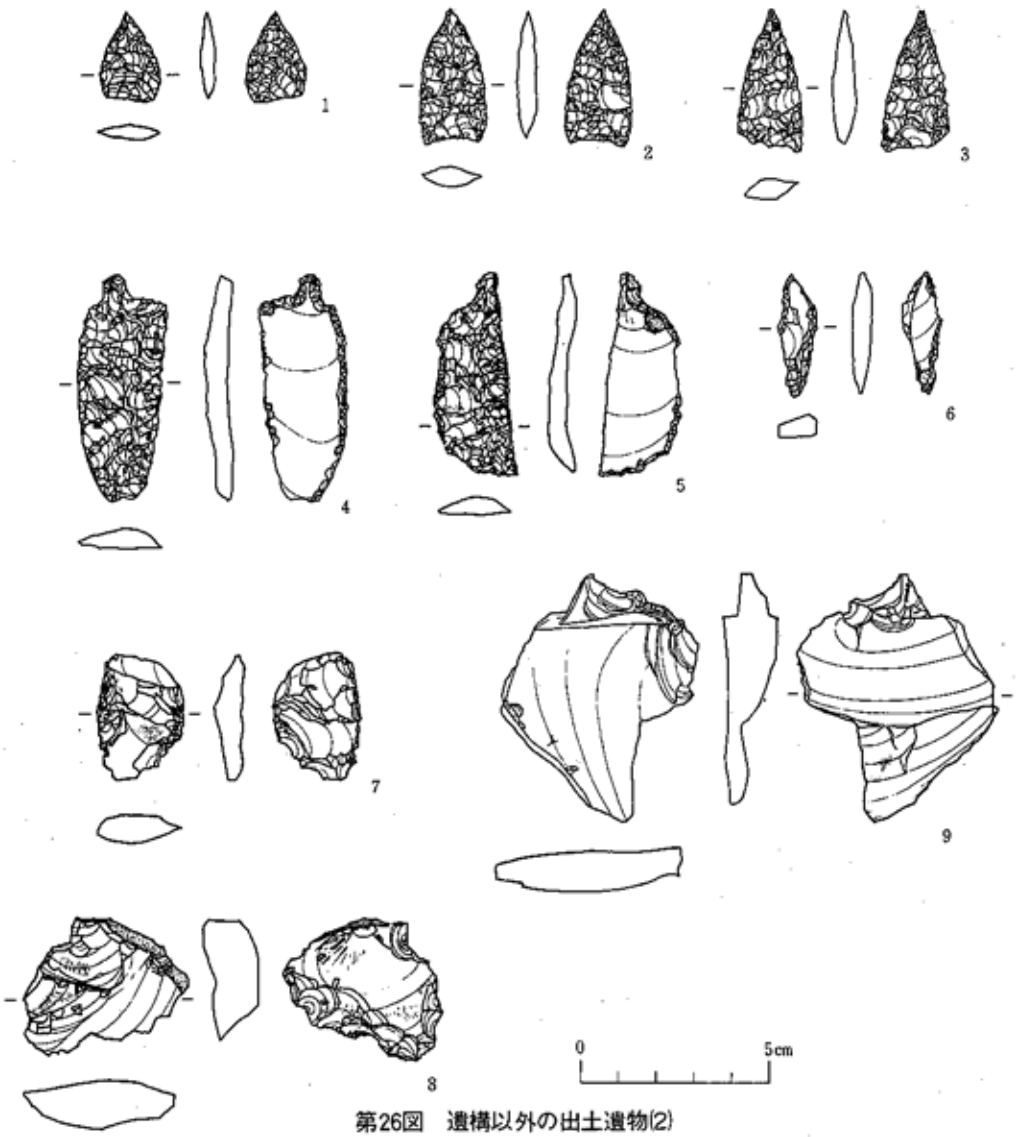
石器（第26図1～9）

石鏃（第26回1～3）3は基部の一部を破損しているが、すべて基部が凹む無茎の石鏃である。両面からていねいな調整剥離を加えられており、いずれも側縁は強くふくらむ。2と3は幅に比して長さをもつ。石材は1～3とも流紋岩である。

石匙（第26図4・5）どちらも流紋岩の縦長の剥片を素材とする縦形の石匙で、加撃側につまみをもつ。4はわずかに打面を残しており、先端を少し欠いている。4は背面全体と腹面の右側縁に調整剥離を加え刃部を作り出しており、5 は背面全体と腹面の右側に調整剥離を加えている。

不定形石器（第26図6～8）6は赤色の珪質凝灰岩、7は細粒凝灰岩、8は流紋岩を石材とする不定形石器である。8 は自然面を打面としている分厚い剥片で、腹面にだけ粗い剥離を加えて刃部としている。7は両面から粗雑な調整剥離が加えられるもので、6は上端部は両面から、下半は背・腹面交互に調整剥離の加えられる尖頭器状の石器で石錐の可能性もある。

剥片（第26図9）調整打面をもつ大形で横長の剥片で凝灰質頁岩製である。腹面の末端は蝶番状となっている。



第26図　遺構以外の出土遺物(2)

第10表　遺構以外出土石器計測表

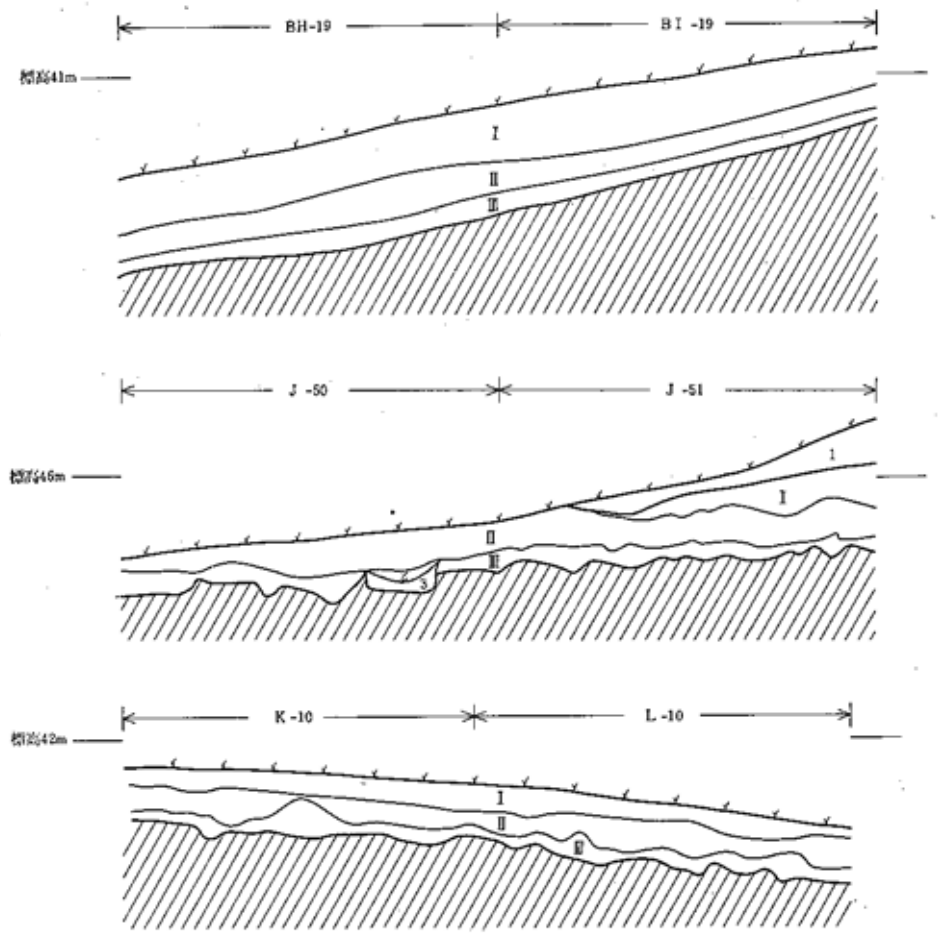
図版番号	名　称	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石　材	完・不完
26図1	石　鏃		23.1	15.1	4.2	1.2	流紋岩	完
26図2	〃		34.3	17.0	5.3	2.8	〃	〃
26図3	〃	DB　12－1	35.5	16.3	5.6	2.7	〃	ほぼ完
26図4	石　匙	CH	59.0	21.7	7.0	9.1	〃	〃
26図5	〃	BM　13－1	53.8	20.0	7.5	5.7	〃	完
26図6	不定形石器	CL　12－1	32.0	10.0	5.2	1.5	珪質凝灰岩(赤)	不　完
26図7	〃	CL　12－1	32.8	22.4	7.4	5.9	細粒凝灰岩	〃
26図8	〃	CK　13－2	40.2	35.5	14.8	19.9	流紋岩	〃
26図9	剥　片	CB　21－2	65.0	52.9	15.8	35.7	凝灰質頁岩	〃

2. 手取遺跡

(1) 基本層序

手取遺跡は、東から入り込む小さな沢によって北側のA地区と南側のB地区とに大きく分けることができる。調査区はA地区南斜面、B地区南北斜面および中央平坦部に設定したが、いずれの調査区においてもほぼ同一の層準を示していた。表土から地山までの堆積層には、基本的には3枚の層が認められた。

第Ⅰ層－暗褐色土層で表土層である。B地区北斜面からA地区南斜面にかけては、モトクロス



層No.	土色	土性	備考
I	茶褐色	シルト	表土
II	黒褐色	シルト	粘性なし
III	暗褐色	シルト	漸移層
1			積み土
2	黒色	シルト	ピット
3	暗褐色	シルト	地山粒を含む

基本層位

第27図 基本層位

ス場造成によってこの層が削平されている部分もある。

第Ⅱ層－砂質の黒褐色土層で、あまり粘性を持たない。この層はB地区平坦部など分布が認められない所もある。

第Ⅲ層－にぶい黄褐色土層で地山への漸移層である。Ⅱ層との境は不整で凹凸が著しい。

遺構が検出されるのは地山上面の場合が多かったが、わずかに第Ⅲ層中で確認されたものもある。また遺物は遺構に伴うもの以外は少量しか出土しないが、その出土も第Ⅰ層に限られた。

(2) 遺構の分布

第1・2次の調査によって発見された遺構には竪穴住居跡5軒・埋甕を伴う土壙1基、その他の土壙1基、溝1本などがある。これらの遺構はいずれもB地区の平坦部と平坦部から南北の斜面に移行する部分で検出されており、竪穴住居跡の分布は、その位置により次の2地区に分けることができる。

Ⅰ区－第3・4・5住居跡

Ⅱ区－第1・2住居跡

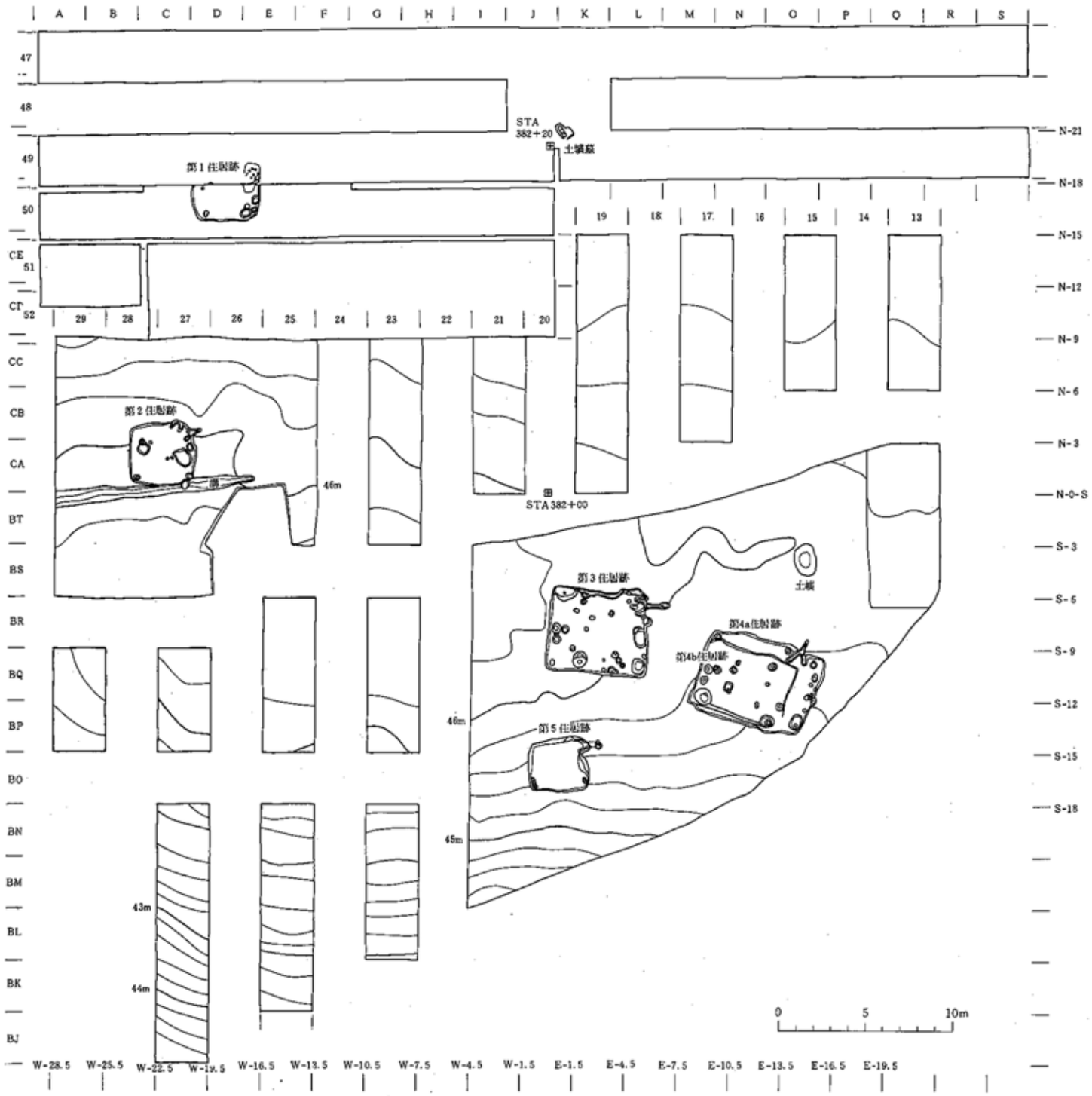
Ⅰ区には第2次調査の調査区ＢＯ～ＢＳ－15～20区のあいだに分布する住居跡群が含まれる。この部分は標高46m前後の平坦な場所とそれに続く南緩斜面からなっている。最も南に位置する第5住居跡の南壁付近での標高は約45.3mである。

Ⅱ区には第1次調査の調査区Ｄ・Ｅ－49・50区で検出された第1住居跡と第2次調査のＣＡ－ＣＢ－27・28区から検出された第2住居跡が分布している。いずれも調査区の西端に近い所に位置しており、この部分は平坦部から北に向って傾斜する緩斜面となっている。標高は45.9～45.3mである。

埋甕を伴う土壙が位置するのは第1次調査のＫ－48・49区で、この部分はⅠ区より北に20m、Ⅱ区より東に20mほど離れている。付近の標高は約44.8mで北斜面となっている。

土壙はⅠ区の東端に位置している。

溝はⅡ区の南側を東西方向に走っている。


A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S
47
48
49
50
CE
51
CT
52
CC
CB
CA
BT
BS
BR
BQ
BP
BO
BN
BM
BL
BK
BJ
N-21
N-18
N-15
N-12
N-9
N-6
N-3
N-0-S
S-3
S-6
S-9
S-12
S-15
S-18
19 18 17 16 15 14 13
29 28 27 26 25 24 23 22 21 20
STA 382+20
土壙墓
第1住居跡
第2住居跡
第3住居跡
第4a住居跡
第4b住居跡
第5住居跡
土壙
STA 382+00
46m
45m
44m
43m
0 5 10m
W-28.5 W-25.5 W-22.5 W-19.5 W-16.5 W-13.5 W-10.5 W-7.5 W-4.5 W-1.5 E-1.5 E-4.5 E-7.5 E-10.5 E-13.5 E-16.5 E-19.5

第28図　遺　構　分　布　図

(3) 竪穴住居跡と出土遺物

第3住居跡

〔遺構の確認〕 Ⅰ区の北端、BQ・BR－18・19区に位置している。第Ⅰ層下の地山面で確認された。

〔増・改築〕 北壁東端部分が長さ170㎝にわたり、北に最大40㎝ほど張り出している。この部分の床面には当初の壁の痕跡と思われる段が、3～5㎝の高さで残っている。また、カマドの南側の東壁も半円形に、長さ55㎝、奥行30㎝ほど張り出している。いずれも、カマドの付設に伴って拡張したものと思われる。

〔平面形〕 平面形は東西に長い長方形である。南壁に比して北壁が約20㎝短いため、若干ゆがんでいる。長軸5.6m、短軸4.7mで、長軸の方向はN－62°－W。住居内面積は26.1㎡である。

〔堆積土〕 3層認められた。

第1層－黒褐色の土層で、住居跡中心部に堆積し、壁ぎわにはほとんど分布しない。

第2層－暗赤褐色の土層で厚く堆積するが、床面まで達することはない。

第3層－褐色土層で、床面を直接覆う層である。北・西壁の壁ぎわに厚く堆積し、徐々に薄くなりながら、南・東壁まで達している。

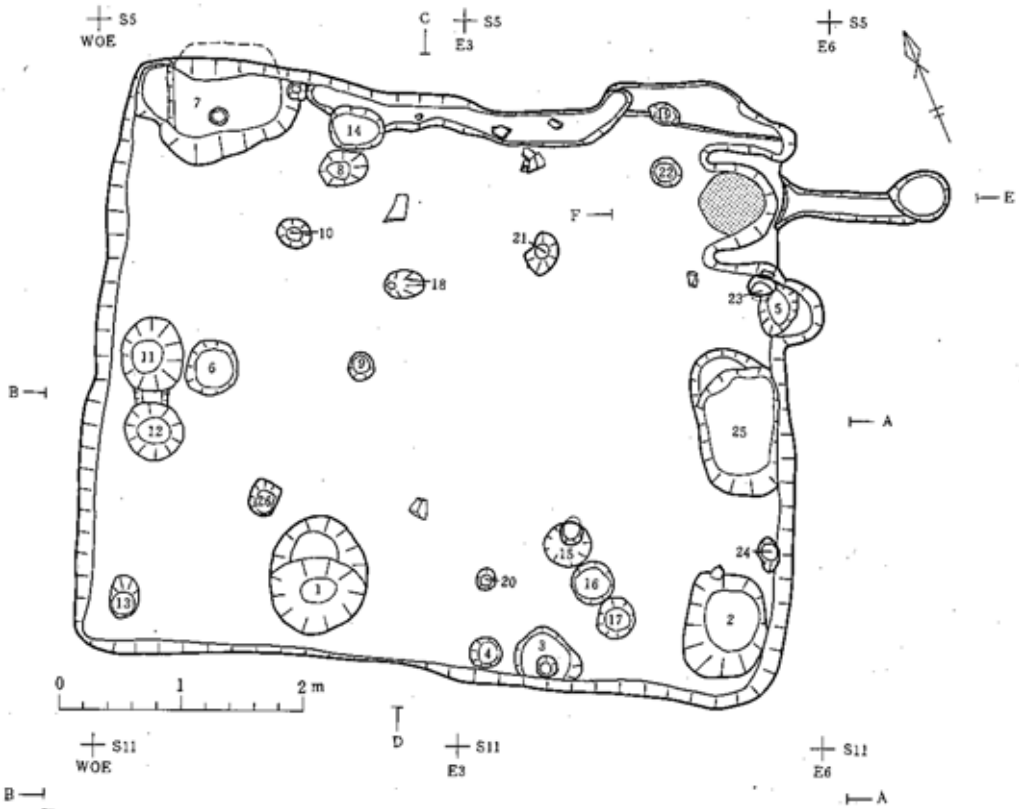
〔壁〕 地山を壁としている。残存壁高は最も残りの良い北壁で30㎝、他の壁でも20㎝以上ある。壁は急角度で立ち上がり、垂直に近い所もある。

〔床面〕 掘り方底面の地山面をそのまま床面としている。北壁張り出し部では床面との間に3～5㎝の段が認められる。中央部が若干低くなっているほかは、ほぼ平坦でかたくしまっている。

〔柱穴〕 住居内から合計28個のピットが検出された。いずれからも柱痕跡はみつかっていないが、P_{10}－P_{21}－P_{23}、P_{26}－P_{15}－P_{24}は、いずれも長径30㎝内外の楕円形のピットで、深さも他のピットに比して38～69㎝と深い。配列も規則的で柱穴の可能性がある。

〔周溝〕 北壁ぎわほぼ中央に幅10～20㎝、深さ5㎝ほどの溝が2.8mにわたって検出された。P_7から張り出し部の一部にかけて続くこの溝は周溝と思われる。

〔カマド〕 東壁北端に付設されている。軸線の方向はN－66°－Wである。本体の規模は幅105㎝、奥行65㎝で、天井部は残っていないが、両側壁の残りは良い。側壁はにぶい黄褐色の地山土で構築され、左側壁は幅20～30㎝で長さ65㎝、右側壁は幅20～40㎝で長さ63㎝ほど住居内に延びている。いずれも20～30㎝の残存高がある。右側壁は床面の上から壁をつくりはじめているが、左側壁は約10㎝床面を掘り下げてから地山土を積み上げている。燃焼部は奥行55㎝、最大幅は約65㎝で前端部にあり、前端部に向かってひらいている。床面を15㎝ほど掘り窪めて



住居内堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺物掘り上げ層位
1	黒褐色	シルト	細粒	第1層
2	暗赤褐色	シルト	粘性あり	第2層
3	褐色	シルト	粘性あり	第3層
4	褐色	シルト	焼土粒混土	
5	褐色	シルト	ピット2 堆積土	
6	褐色	シルト	焼土・木炭・地山ブロックを含むピット堆積	

カマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考	層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色	シルト		7	明褐色	シルト	粘土が多量に混じり焼土を含む
2	褐色	シルト		8	暗赤褐色	シルト	黒色土に焼土を含む
4	明褐色	シルト		9	にぶい赤褐色	シルト	焼土を多量に含む
5	明褐色	シルト		10	黒褐色	シルト	固い
5	明褐色	シルト		11	明赤褐色	シルト	焼土
6	褐色	シルト		12	褐色	シルト	焼土を含む

	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
	10	12	42	11	51	44	30	69
	明褐色	褐色	黒褐色	黒褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
	焼土・木炭混入			焼土・木炭混入			焼土・木炭混入	

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
深さ(cm)	59	33	9	10	10	34	25	38	52	30	14	16	15	29	33	4	6	18
土色	褐色	褐色	明赤褐色	明赤褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	黒褐色	黒褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考		木炭混入												木炭混入				

第29図　第３住居跡

燃焼部としている。底面には厚さ3～10㎝ほどの焼土の堆積がみられ、その上面はカチカチに焼け締まっている。奥壁部も焼けて赤変している。煙道は幅20～25㎝で、住居壁に対してほぼ直角に付設されており、住居外に120㎝ほどのびている。深さは10～5㎝で、その底面は、煙出しピットに向かってのぼっている。煙出しピットは長径50㎝、短径40㎝、深さ25㎝の楕円形のピットで、このピットは、煙道先端から若干北にずれている。

〔貯蔵穴状ピット〕住居外から長軸100㎝前後で、他のピットに比して規模の大きなピットが4個検出されている。いずれも壁ぎわに位置し、P_1を除き、P_2、P_{25}、P_7は隅丸方形を呈している。カマドの南に位置し、堆積土に焼土・木炭を含むP_{25}。ピット中から遺物を多く出土したP_2は、貯蔵穴状ピットと思われる。P_1・P_7も貯蔵穴状ピットの可能性がある。

〔出土遺物〕遺物は堆積土1～3層、床面、カマド内、ピットから出土し、土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器（坏・甕・壺）、赤焼土器（坏・高台付坏）などがある。

住居に伴う遺物

土師器

坏（第30図1～10）いずれも製作に際しロクロを使用したもので、底部は回転糸切り技法で切り離されている。内面にはヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。体部はやや丸味をもって立ち上がり、口縁部が外反する器形のものが多いが、1・2は底部から体部へ内弯気味に立ち上がり、口縁部までそのまま外傾する。また、他に比して1は口縁径などが大きく、2は器高が高くなっている。1と6の外面には、火熱により剥離が認められる。

高台付坏　図示しなかったが体部から底部の破片が1点ある。高台付着後の調整によって底部切り離しの不明なものである。

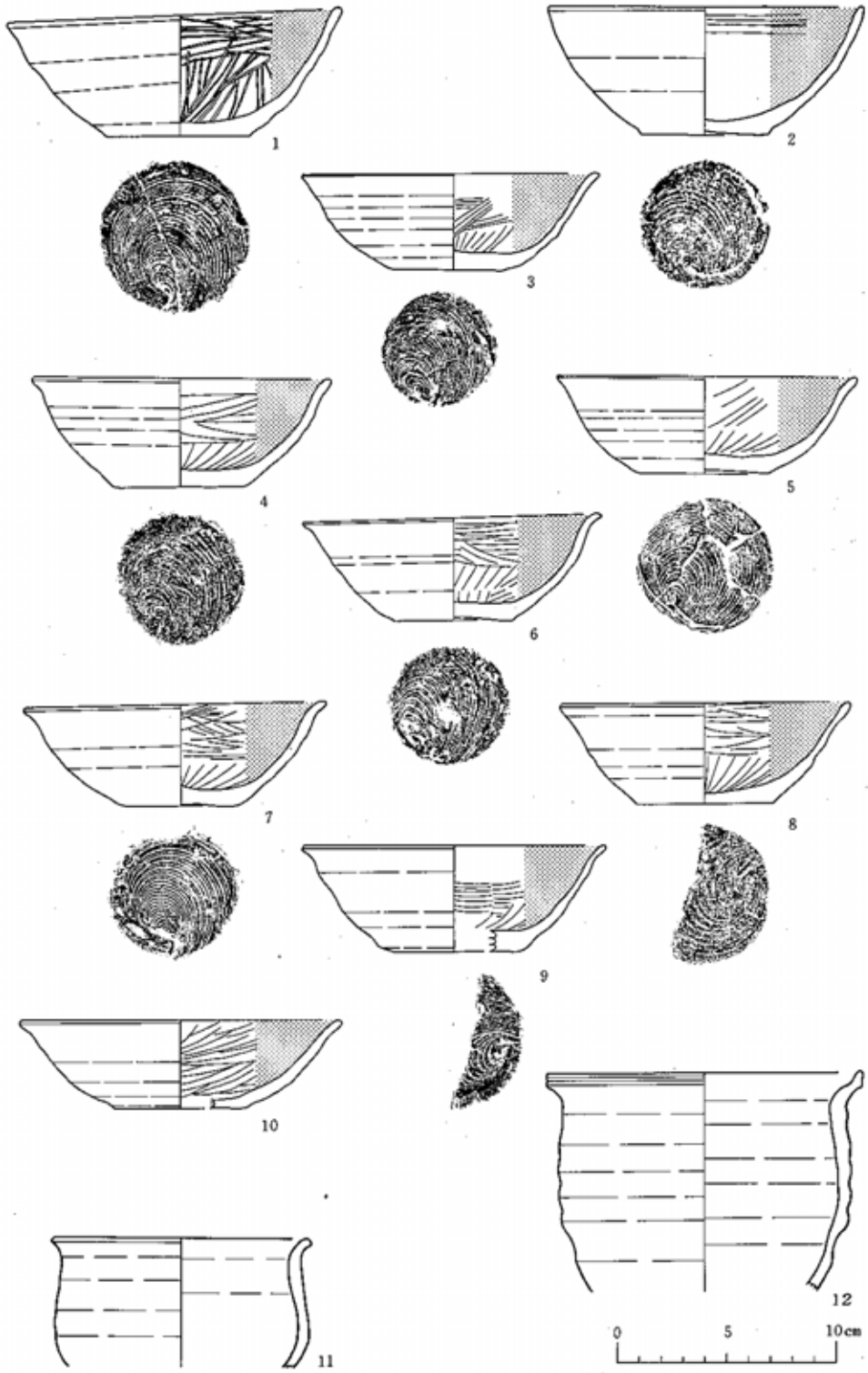
甕（第30図11・12、第31図1）図示できたものは、すべて製作に際してロクロを使用している。いずれも体部下半以下を欠いているが、最大径の位置は口縁部にあり、大形の1は器高が最大径より大きく、小形の11と12は最大径が器高より大きいと思われる。11と12の器面調整は内外面ともにロクロ調整しか認められないが、1は内外面共に口縁から体部上半にロクロ調整、それ以下には外面ではロクロ調整後ヘラケズリが、内面では斜方向のナデが施されている。

須恵器

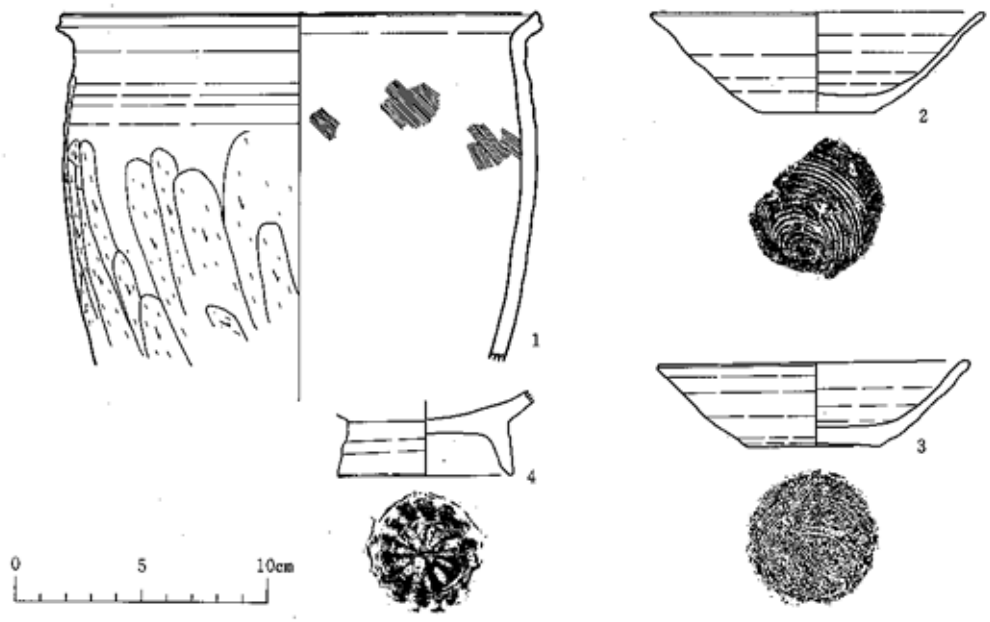
甕・壺の破片が、床面、ピットから少量出土している。

赤焼土器

坏（第31図2・3）いづれも体部が内弯気味に外傾し、口縁部でやや外反する。底部は回転糸切り技法によって切り離され、再調整はまったくない。2の色調は淡橙色で土師器と同じような色調を呈している。内面のロクロ調整痕も平滑であり、胎土に微細な砂粒を僅かに含んでいる。外面には黒色の墨状付着物が見られる。3は小形の坏で器高も低い。色調は内外面共橙



第30図　第３住居跡　出土遺物(1)



第31図　第３住居跡　出土遺物(2)

色で胎土に微細な砂粒を多く含んでいる。

高台付坏（第31図4）は坏部の上半を欠くもので、坏部、高台内外面にはロクロ調整痕だけが観察される。高台はあまり開かず高い。高台接合時の調整によって坏部の切り離しは不明である。坏底部外面には菊花状文の調整痕が残っている。

堆積土出土遺物

土師器

坏・甕の破片が多く出土しているが、図示できるものはない。

須恵器

坏・壺の破片が１点ずつと甕破片が出土している。

赤焼土器

坏破片が各層から少量ずつ出土している。

第11表　第３住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
30図1	ピット6	土師器	坏	15.5		6.6	5.6	2	BII
30図2	ピット5	〃	〃	14.6		5.8	5.9	3	〃
30図3	D床面	〃	〃	13.7		5.2	4.4	4	〃
30図4	ピット2	〃	〃	13.6		6.0	5.1	5	〃
30図5	C　床	〃	〃	13.8		6.1	4.3	6	〃
30図6	ピット2	〃	〃	13.9		4.9	4.6	7	〃
30図7	床	〃	〃	13.8		5.6	4.7	9	〃
30図8	ピット6	〃	〃	14.0		7.0	4.6	15	〃

30図9	C　床	土師器	坏	14.5		5.9	4.3	16	B II
30図10	B　床	〃	〃	15.2		6.0	3.9	17	〃
30図11	A　床	〃	小形甕	11.9		不　明	不　明	26	E III a
30図12	カマド	〃	甕	15.5		不　明	不　明	52	E III b
31図1	A　床	〃	〃	19.0	18.9	不　明	不　明	44	
31図2	A　床	赤焼土器	坏	13.4		5.0	4.1	25	
31図3	ピット6	〃	〃	12.5		5.4	3.4	1	
31図4	床	〃	高台付坏	不　明			不　明	57	

第4住居跡

〔遺跡の確認〕 Ⅰ区の東端、第3住居跡の南東に位置している。調査区ではＢＰ～ＢＲ－15～17区である。第Ⅰ層下の地山面で確認された。

〔増・改築〕 確認された住居跡（第4A住居跡）の堆積土を除去し、床面を精査したところ西壁を共有するひとまわり小さな輪郭が検出された（第4B住居跡）。この第4B住居跡の確認の状況や、住居跡内には堆積土が認められず貼床土が充填されていたことなどから、第4A住居跡は第4B住居跡廃絶直後に構築されたものと思われ、増築の可能性が強い。

〔第4A住居跡〕

〔平面形〕 平面形は東西に長い長方形を呈し、少しゆがんでいる。長軸6.9m、短軸5.1mで長軸の方向はN－48°－Wである。住居内面積は31.5㎡である。

〔堆積土〕 3層認められた。

第1層－黒褐色土層で、住居中心部にだけ分布している。

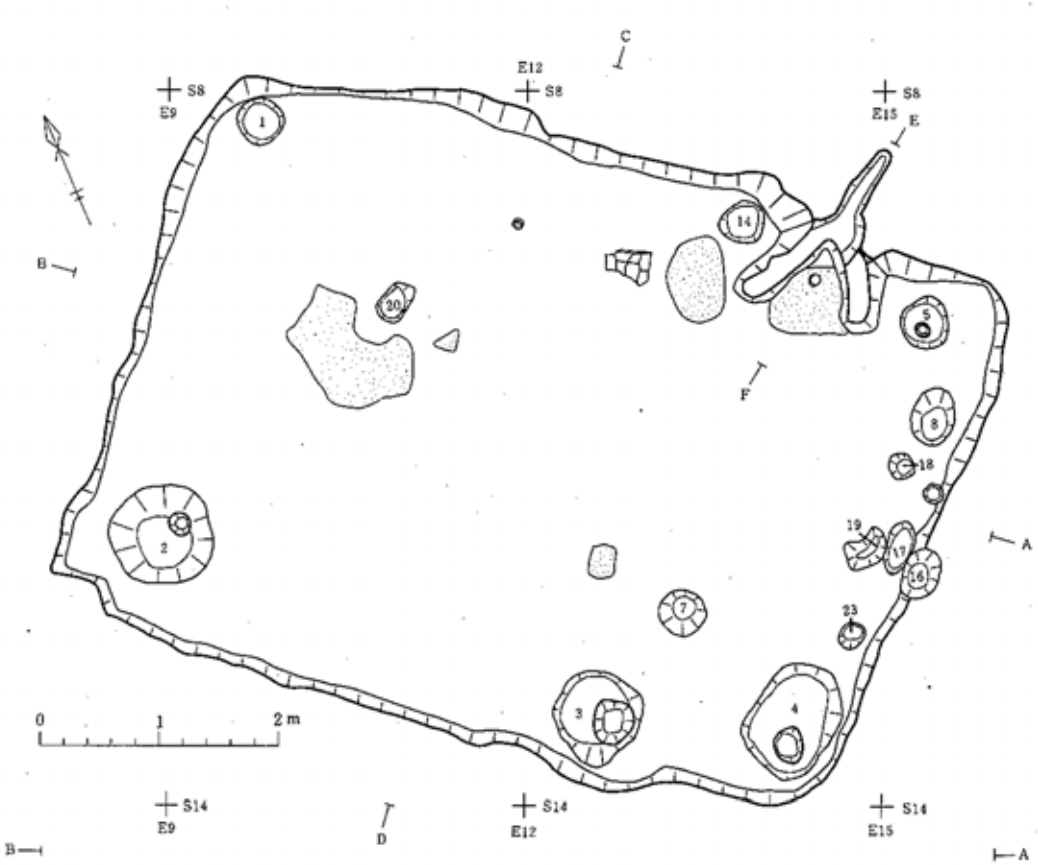
第2層－暗褐色土層で、1層と同様に住居中心部に堆積し、壁ぎわには分布しないが、壁の低い東側では住居外にも延びている。1層と共に床面に達することはない。

第3層－褐色の土層で、住居跡全体の床面を覆っている。壁ぎわで特に厚く堆積している。

〔壁〕 地山を壁としている。各壁とも凹凸がみられる。残存壁高は最も良く残っている西壁で約30㎝で、東・南壁では10㎝前後である。壁の立ち上がりは、東壁だけがゆるやかで、他の壁は急角度で立ち上がっている。

〔床面〕 拡張部分では掘り方底面の地山面を、そのまま床としているが、第4B住居跡と重複する部分では拡張部の床面に対応するように、木炭と焼土を多量に含む褐色土を5～10㎝の厚さで埋め土して貼り床としている。この貼り床は拡張部分の一部にまで及ぶ所もある。貼り床上面はかなりしまっており、焼土面がカマドの西や住居中央などにみられた。

〔柱穴〕 拡張部や貼り床の上から検出されたピットは合計14個ある。このうちP_2・P_3・P_4・P_5からは直径12～30㎝の柱痕跡がみつかっており、主柱穴と推定できる。これらの柱穴に対応する位置にある。P_1・P_{14}は柱痕跡は見つかっていないが、柱穴の可能性があり、P_1－P_{14}－P_5、P_2－P_3－P_4の6本柱が考えられる。しかし、P_3は検出された位置の貼り床の厚さが1㎝しかな



住居内堆積土

層No.	土色	土性	備考	遺構掘り込み面
1	黒褐色	シルト		第1層
2	暗褐色	シルト		第2層
3	褐色	シルト	木炭・焼土を含む	第3層
4	暗褐色	シルト	固くしまっている	新しいピットの堆積土
5	褐色	シルト	黒色土と地山土の混合土	
6	褐色	シルト	固くしまっている。木炭焼土を含む貼り床	

カマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	赤褐色	シルト	焼土を含む
2	褐色	シルト	
3	暗褐色	シルト	焼土・木炭を若干含む
4	明褐色	シルト	焼土を含む
5	暗褐色	シルト	木炭・焼土を多量に含む
6	明赤褐色	シルト	焼土

ピットNo.	P1	P2 (掘り方)	P2 (柱痕跡)	P3 (掘り方)	P3 (柱痕跡)	P4 (掘り方)	P4 (柱痕跡)	P5 (掘り方)	P5 (柱痕跡)
深さ(cm)	5	23	23	20	20	30	30	6	5
土色	褐色	褐色	黒褐色	褐色	黒褐色	褐色	黒褐色	褐色	黒褐色
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考									

P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
10	15	—	23	11	37	13	60	36
褐色	—	暗褐色	—	—	—	—	—	—
シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
		焼土・木炭混入						

第32図　第４Ａ住居跡

く、増築前の住居に伴う柱穴の可能性もあり、その場合は対角線上に位置している、P_2－P_5、P_4－P_1の４本柱が考えられる。

〔カマド〕北壁中央から東よりに位置している。軸線の方向はN－54°－Eである。本体の規模は最大幅120㎝、奥行90㎝で、天井部は残っていないが、側壁は比較的良く残っている。側壁はにぶい黄褐色の地山土で構築されている。幅35㎝で、左側壁は長さ85㎝、右側壁は長さ60㎝ほどが住居内に延びている。残存高は約10㎝である。燃焼部は奥行80㎝、最大幅は約70㎝で前端部にあり、奥壁はほとんどないため三角形に近い形をしている。床面を12㎝ほど掘り窪めて、底面としているがその上に厚さ10㎝ほどの焼土が堆積している。この焼土の上面はかたくしまっており、奥壁から30㎝ほどの所に円柱状の土製支脚が据えられた状態で出土した。煙道は幅20㎝で、北壁に対してほぼ直角に約80㎝住居外に延びている。深さは約5㎝と浅く、煙出しピットは検出できなかった。

〔出土遺物〕遺物は堆積土第1～第3層、床面、カマド内、ピットなどから出土している。土師器（坏・高台付坏・甕）、須恵器（甕・壺）、赤焼土器（坏・高台坏・耳皿）や砥石、カマド内に据えてあった土製支脚などがある。

住居跡に伴う遺物

土師器

甕（第33図1）体部下半を欠くが、器高が最大径よりも大きく、最大径の位置を体部中央にもつ長胴形の甕である。口縁部から体部上半までの内外面にロクロ調整が施され、外面で著しい。それ以下の調整は、外面では2次的と考えられる粘土が付着しているため不明であり、内面には斜方向のナデ調整がみられる。

須恵器

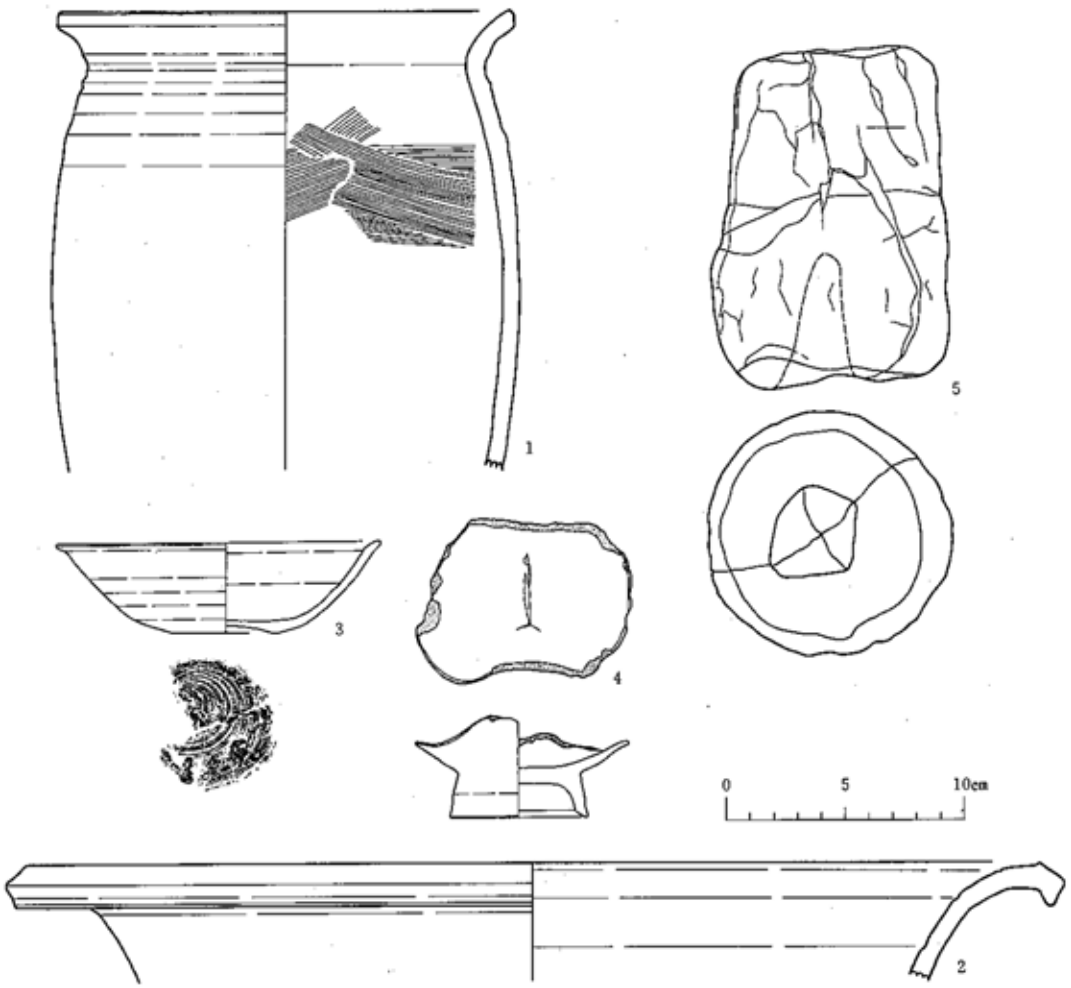
甕（第33図2）口径44.5㎝と大形の甕の口縁部破片である。強く外反する頸部をもち、口縁端部は上下にひきだされている。口縁端部の断面は三角形となっている。他にタタキ目を外面にもつ体部破片が一点ある。

赤焼土器

坏（第33図3）体部が丸味をもって外傾し、口縁部が外反する器形をもち、口径に比して底径の小さな坏で、色調は浅黄橙色である。底部は回転糸切り技法によって切り離しており、再調整は認められないが、胎土が軟調なためか、底部内面はミガキを施したように平滑である。

高台付坏　カマド、ピット中から数点出土しているが、図示できるものはない。

耳皿（第33図4）口径9.2㎝の坏部の対応する2辺を上方に折り曲げて耳皿としている。高台部は約2㎝の高さをもち外側に張り出している。坏部・高台部内外面にロクロ調整だけが認められる。坏底部には焼きひずみによる亀裂がみられる。



第33図　第４Ａ住居跡出土遺物

土製品

土製支脚（第 33 図 5）直径 10.4 ㎝、高さ 14.7 ㎝で凸凹があるがほぼ円筒形である。粘土塊を焼成したものと思われるが、底部には四角錐状の盲孔が認められる。

堆積土出土遺物

土師器

高台付坏（第 34 図 1）体部から口縁部まで強い丸味をおびて外傾し、口縁部で外反する。高台部は強く外傾するが低い。坏体部の内外面にはヘラミガキが施され、黒色処理されている。ヘラミガキは外面では、横・斜方向、内面では底部が放射状、体部が横・斜方向に施されている。高台付着後の調整が接合部に限られているため坏底部に回転糸切り痕が残っている。

甕（第34図2）体部下半を欠くが、最大径を口縁部にもち、この最大径が器高より大きいと思われる小形の甕である。頸部の屈曲は弱く、外傾する口縁部は短い。内面の口縁部と体部の境には稜がある。器面調整は外面では口縁部に横ナデ、それ以下は縦方向のヘラケズリが施され、内面では口縁部に横ナデ、体部には斜方向にナデが施されている。

須恵器

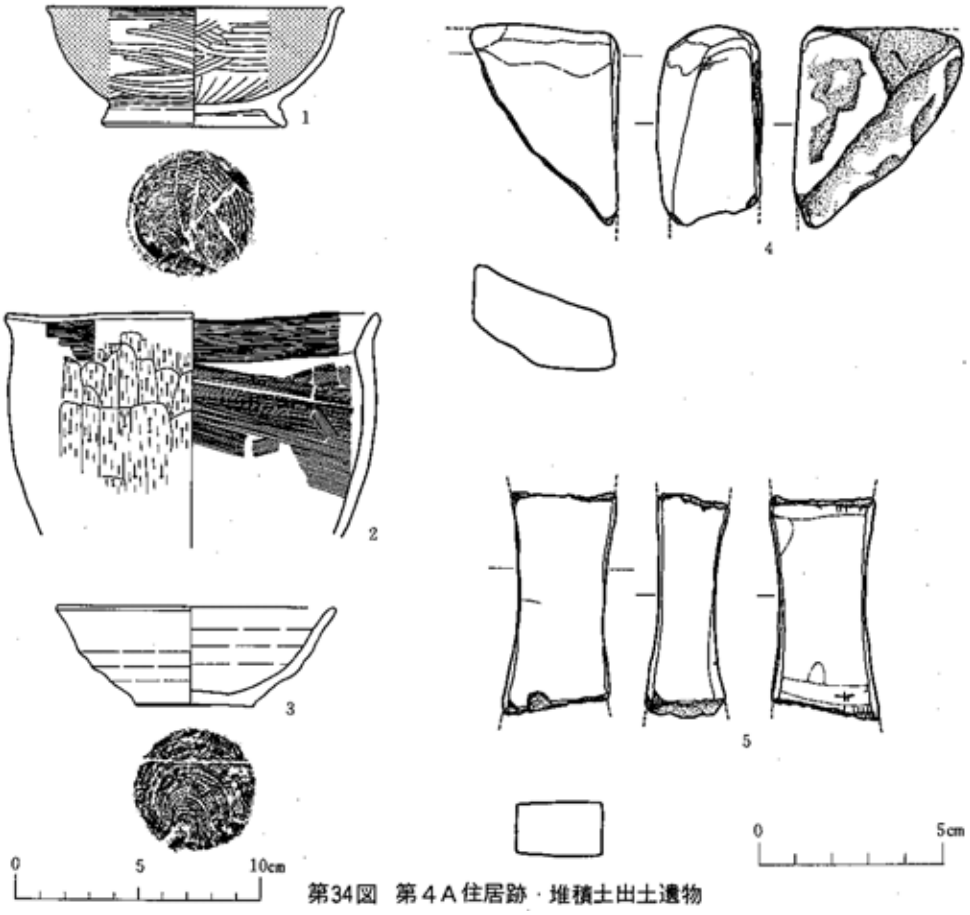
甕・壺の破片が少量出土している。

赤焼土器

坏（第34図3）体部は丸味をもって外傾し、口縁部で外反する。口径11.5㎝と小形の坏で、底部は回転糸切りによって切り離されている。色調は浅黄橙色であるが焼成は良い。

石器

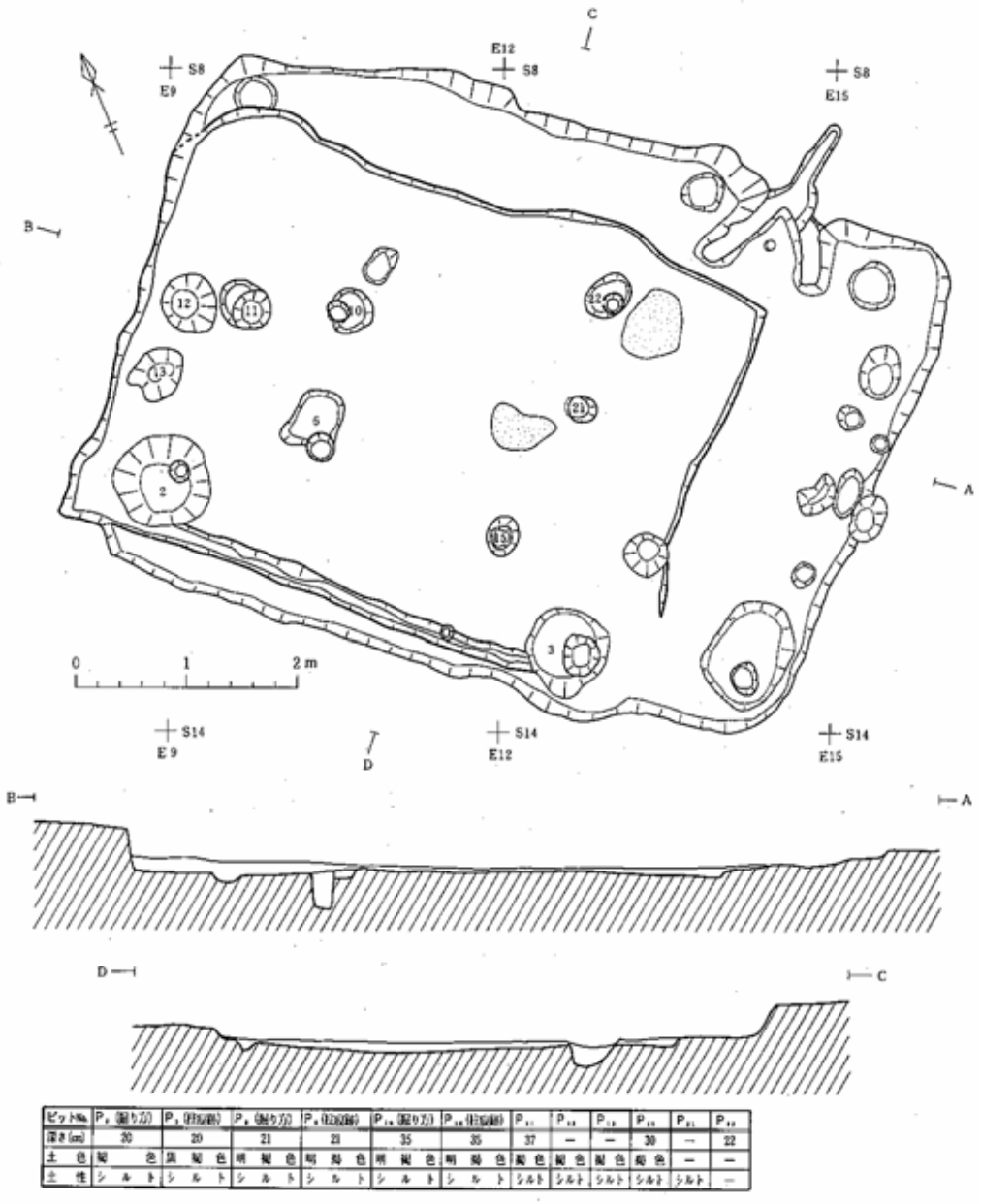
砥石（第34図4・5）いずれも小形の砥石で、直方体のもの(5)と不定形のもの(4)とがある。5は両端が欠損しており、欠損部は火熱を受け赤変している。4面ある磨面は、使用によって著しく凹んでいる。4は、4面の磨面をもつが、使用痕は上面と右側で著しい。



第34図　第４Ａ住居跡・堆積土出土遺物

〔第４B住居跡〕

〔平面形〕 平面形は東西に長い長方形を呈し、北西隅と南東隅はやや丸味をおびている。長軸 5.3m、短軸 3.9mで、長軸の方向はN－51°－Wである。増築後の長軸よりやや北に偏している。住居内面積は 21.2 ㎡である。



ピットNo.	P1（掘り方）	P1（住居跡）	P2（掘り方）	P2（住居跡）	P3（掘り方）	P3（住居跡）	P11	P12	P13	P14	P15	P16
深さ(cm)	20	20	21	21	35	35	37	－	－	30	－	22
土色	褐色	黒褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	－	－
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	－

第35図　第４B住居跡

〔堆積土〕 堆積土はまったく検出されなかった。

〔壁〕 増築のさい共有した西壁を除いて、北壁、東壁は 10～3 ㎝位の段として残っているが、東壁南部は検出できなかった。周溝が巡る南壁でも、わずかながら壁の痕跡が残っている。

〔床面〕 掘り方底面の地山面を床としている。増築後の床面に比して 10～1 ㎝ほど低くなっている。床面は中央部で若干窪むがほぼ平坦でかたい。東半部に、焼土面が 2 ケ所検出されている。

〔柱穴〕 増築後の床面である貼り床を剥離した所、合計 9 個のピットが検出された。P_9、P_{10}、P_{22}には直径 20～25 ㎝ほどの柱痕跡がみつかっており、主柱穴と推定されるが配列関係に規則性はなく、他のピットとの組み合わせも不明であった。

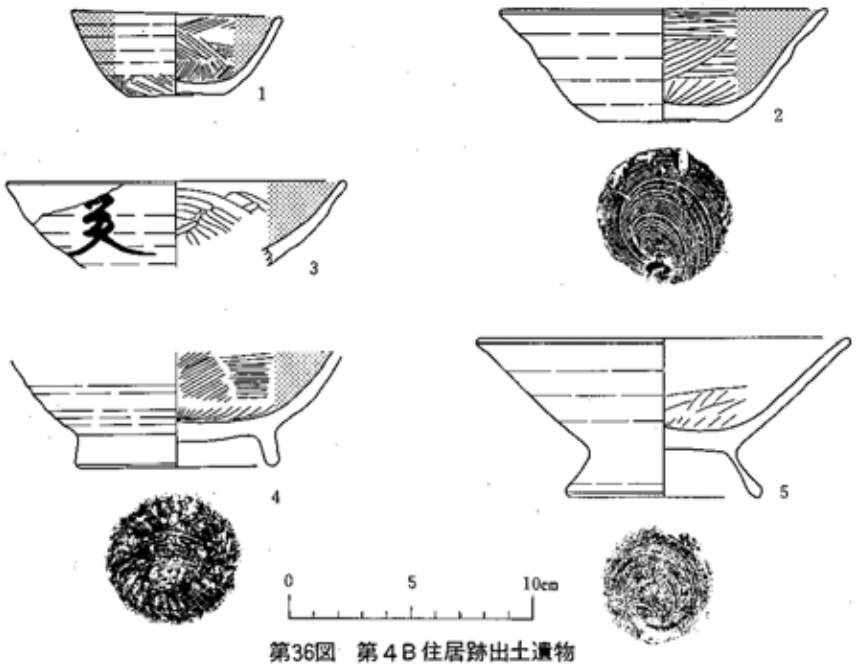
〔カマド〕 増築のさい、取り壊されたものと思われる。北壁東よりの所に 65×50 ㎝の範囲で北に長い焼面が検出されている。この焼面は北壁から 20 ㎝離れており、その位置からカマド燃焼部の底面である可能性がある。

〔周溝〕 南壁沿いに幅 20 ㎝前後、床面からの深さ 10 ㎝ほどの周溝が検出された。現存長は 3.6mで、西端を貼り床土から掘り込まれたP_2によって、東端をP_3によって切られている。

〔出土遺物〕 貼り床や床面・ピットから土師器(坏・高台付坏・甕)、須恵器甕などが出土している。

住居跡に伴う遺物

土師器



第36図　第４Ｂ住居跡出土遺物

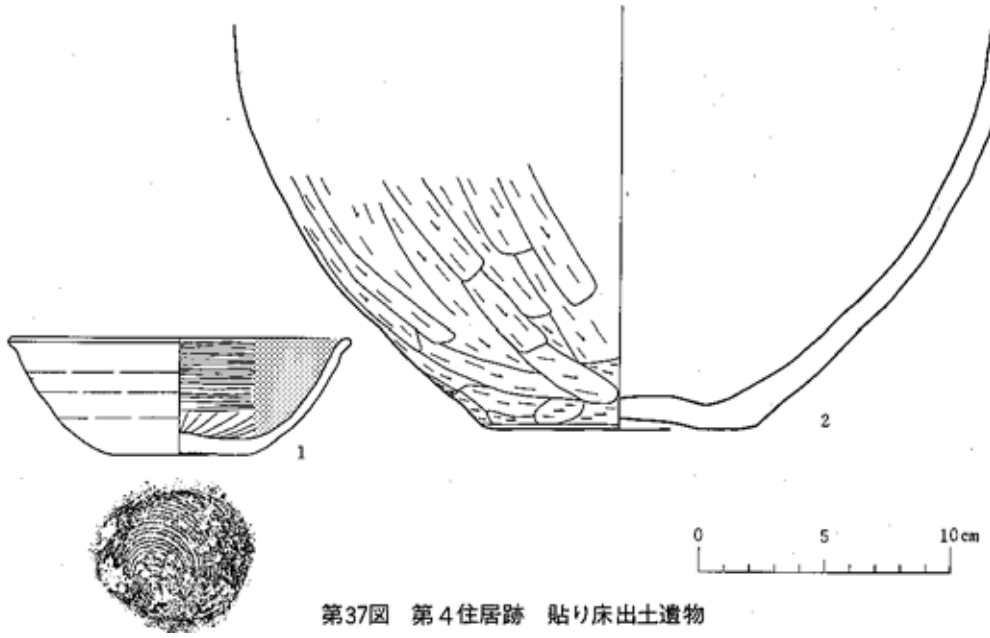
坏（第 36 図 1～3）1 は体部から口縁部まで内弯しながら外傾する口径 8.7 ㎝、高さ 3.4 ㎝と小さな坏である。体部外面の下半と底部外面に回転ヘラケズリが加えられ、その後、底部には放射状の、体部下半には斜方向の丁寧で細かなヘラミガキが施される。内面は口縁部から体部には横・斜方向の、底部には放射状の細かなヘラミガキが施され、内外面共黒色処理されている。底部外面はヘラミガキされているが、かすかに回転ヘラ切り痕様の痕跡が観察される。2 は体部がやや丸味をもって外傾し、口縁部で外反する。底部の切り離しは回転糸切り技法で、内面にヘラミガキと黒色処理が施される。3 は底部を欠くが 2 と同様の器形をもつと思われる。内面には、ヘラミガキと黒色処理が施され、外面には判読不明の墨書がみられる。

高台付坏（第 36 図 4・5）5 は坏部の体部がほぼ直線的に外傾して口縁部でわずかに外反する。高台は外反気味で、強くひらく。坏部の体部下半から底部にかけて、内面にはヘラミガキが施されるが、黒色処理はない。坏底部外面全体に高台付着後の調整が行なわれているが、かすかに回転糸切り痕跡が認められる。4 は口縁部から体部上半を欠くが、坏部は 5 より丸味をもって底部から立ち上がっている。高台は直線的に外傾するがあまりひらかず、高さもない。坏部内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。高台付着後の調整が高台接合部分に限られているため、坏底部外面には、回転糸切り技法の痕跡が残っている。

貼り床出土遺物

土師器

坏（第 37 図 1）体部は丸味をもって外傾し、口縁部が外反する。回転糸切り技法によって底部を切り離しており、外面に再調整はない。内面はヘラミガキが施され、黒色処理されている。



第37図　第４住居跡　貼り床出土遺物

高台付坏　高台部破片が１点出土している。

甕（第37図2）口縁部から体部上半を欠く大形の甕である。体部外面には縦方向の、底部付近では横方向のケズリが施されている。内面は剥落が著しく調整は不明である。

須恵器

甕　体部破片が１点出土している。

第12表　第４住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
33図1	床No.3	土師器	甕	19.8		不明	不明	18	DI
33図2	床　8	須恵器	〃	43.0		不明	不明	55	
33図3	床　4	赤焼土器	坏	12.7		4.8	3.7	20	a
33図4	D貼床	〃	耳皿	9.3		5.8	4.5	19	
34図1	A1・A2・B2	土師器	高台付坏	12.3			5.0	30	BI
34図2	C－2	〃	甕	15.4		不明	不明	53	A
34図3	B－2下	赤焼土器	坏	11.6		4.9	4.0	21	a
36図1	ピット12貼床下	黒色土器	〃	8.7		3.8	3.4	29	AI
36図2	貼床下No.13	土師器	〃	13.5		5.0	4.1	24	BII
36図3	ピット10－1	〃	〃	14.0		不明	不明	31	
36図4	貼床下15	〃	高台付坏	不明			不明	22	AI
36図5	貼床下	〃	〃	15.3			6.5	45	BII
37図1	C貼床中	〃	坏	14.0		4.7	4.2	23	BII
37図2	ピット6	〃	甕	不明		10.8	不明	51	

第13表　第４住居跡出土石器計測表

図版番号	名称	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	完・不完
34図4	砥石	壁　1層	(54.8)	43.6	26.5	58.2	砂質凝灰岩	不完
34図5	〃	壁	(59.8)	28.5	19.4	45.7	〃	〃

第５住居跡

〔遺構の確認〕 Ⅰ区のほぼ南端、BO・BP－19・20区に位置している。今回調査の住居跡のなかで最も南よりにある。第Ⅰ層下の地山面で確認された。

〔平面形〕 平面形は東西に長い長方形を呈し、長軸3.5m、短軸3.0mと他の住居跡に比して小さい。長軸の方向はN－70°－Wで、住居内面積は8.2㎡である。

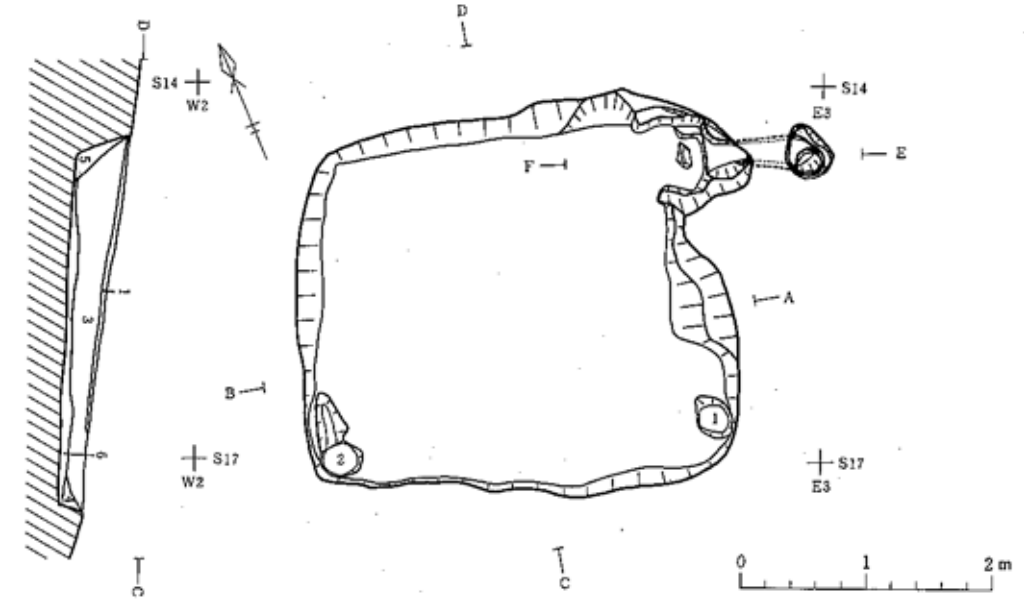
〔堆積土〕 6層確認されたが、第Ⅰ～第Ⅲ層に大別できる。

第Ⅰ層－黒褐色や暗褐色土層で、住居全体に皿状に厚く堆積しているが、床面を覆うことはない。

第Ⅱ層－黄褐色の地山を多量に含む層で壁ぎわに部分的に分布している。

第Ⅲ層－暗褐色土層で、地山土の小ブロックを多く含み、床面全体を覆う層である。

〔壁〕 地山を壁としている。住居跡周辺の地山面が南に傾斜しているため、南壁の高さは約10㎝で残存状態も悪いが、他の壁の残りは良く、特に北壁は約50㎝ほど残っている。各壁の立ち上がりはゆるやかで、特に東壁カマド付近で著しい。



住居内堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
I	1	暗赤褐色	シルト		第1層
	2	黒褐色	シルト		
	3	暗褐色	シルト	地山粒を含む	第2層
II	4	暗褐色	シルト	地山粒を含む	第3層
	5	暗褐色	シルト	地山粒を多く含む	
III	6	黄褐色	シルト	地山ブロックを多く含む	

ピットNo.	P_1	P_2
深さ(cm)	6	7
土色	褐色	明褐色
土性	シルト	シルト

カマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	明赤褐色	シルト	
2	暗赤褐色	シルト	
3	暗赤褐色	シルト	
4	褐色	シルト	
5	赤褐色	シルト	かまど崩落土？
6	暗褐色	シルト	焼土・木炭粒を多量に含む
7	赤褐色	シルト	焼土
8	明赤褐色	シルト	若干の木炭を含む
9	褐色	シルト	木炭を含む地山と土色・土性が似ている
10	黄褐色	シルト	木炭を含む地山と土色、土性が似ている
11	暗褐色	シルト	粘性が少い

第38図　第５住居跡

〔床面〕 掘り方底面の地山面を床としている。床面は南に若干傾斜しているが、ほぼ平坦でかたくしまっている。

〔柱穴〕 検出されたピットは、南東隅と南西隅に位置するP_1・P_2の２個で、いずれも６cm前後の深さしかなく、柱痕跡も認められなかった。この２つのピットが柱穴であるかどうかは不明である。

〔周溝〕 P_2から壁に沿って50cmほど北に延びる幅20cm、深さ3～4cmの浅い溝が検出された

が、周溝であるかどうかは不明である。

〔カマド〕東壁の北端に位置しており軸線の方向はN－80°－Wである。本体は幅80㎝、奥行55㎝で、東壁を30㎝程掘り込んで作られている。側壁はカマド掘り方に白色の砂質粘土を4～10㎝位の幅で貼り付けて構築している。左側壁は住居北壁に沿って、長さ58㎝、高さ30㎝ほどが残っている。右側壁は掘り方の部分から白色粘土がさらに住居内に10㎝ほど、20㎝位の高さで延びている。この右側壁は左側壁に比して、10㎝ほど短くなっている。燃焼部は幅50㎝、奥行55㎝のほぼ方形で、床面を若干掘りくぼめて底面としている。奥壁より10㎝の所には高さ20㎝ほどの円礫をすえ支脚としている。燃焼部底面、及び両側壁には火熱を受けた跡痕が顕著で、底面はかたく焼けしまり、側壁の白色粘土は明赤褐色に変色していた。煙道は、本体に対してほぼ直角に延びている。この煙道の東半分、長さ35㎝ほどの天井部が崩落せずに残っていた。断面はカマボコ形である。煙道底面は、カマド底面より15㎝ほど高く、煙り出しピットに向かって少し下がりながら延びている。煙り出しピットは、直径40㎝の不整の掘り方に土師器甕を、口縁を下にして据えている。甕は北に傾いて埋設されており、口縁は煙道天井部とほぼ一致している。

〔出土遺物〕遺物の出土は少なかったが、床面・カマド内・煙道や堆積土中から出土した土師器・須恵器・赤焼土器や煙り出しピット内に埋設されていた土師器甕などがある。しかし、調査終了直前に盗難にあい、現在この住居跡出土の遺物は堆積土III層から出土した一部のものしか残っていない。土師器（坏・甕）、赤焼土器坏・須恵器甕などがあるが、図示できるものはない。

土師器

坏　体部下半から底部にかけての破片が2点ある。どちらも底部は回転糸切り技法によって切り離されており、内面にはヘラミガキと黒色処理が施される。

甕　いずれも体部下半の破片で、外面にヘラケズリが施され、内面は調整不明なものである。

須恵器

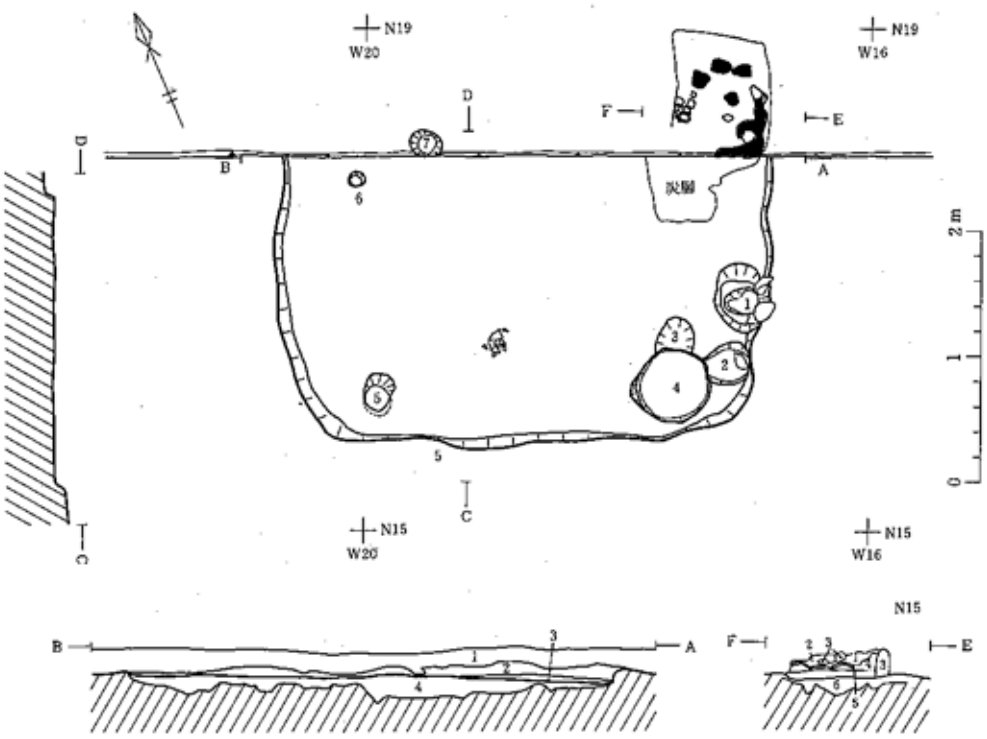
甕　大形の甕の体部破片で、外面に平行のタタキ目、内面はナデ調整されている。

赤焼土器

坏　体部下半から底部にかけての破片が2点ある。どちらも回転糸切り技法によって切り離され、内外面に再調整は認められない。

第1住居跡

〔遺構の確認〕II区北端、第2住居跡の北東14mの所に位置している。調査当初のトレンチ掘りのさい、地山直上の第III層に床面のあった本住居跡に気づかずに掘り下げてしまったが、トレンチ拡張精査の結果、確認面は第III層上部であることが判明した。



カマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	黒褐色	シルト	
2	暗赤褐色	シルト	焼土を多量に含む
3	明褐色	シルト	焼けて赤変している
4	黒褐色	シルト	焼土・木炭を多量に含む
5			灰層
6	黒褐色	シルト	地山土をブロック状に含む

住居内堆積土

層No.	土色	土性性	備考	遺物取り上げ層位
1	黒褐色	砂質シルト		第1層
2	黒褐色	シルト	地山粒を少量含む	
3			灰層	
4	黒褐色	シルト	地山土をブロック状に含む、貼り床	

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
深さ(cm)	10	8	9	37	20	23	12

第39図 第1住居跡

〔平面形〕 住居全体に残りがよくなく、また北側約1/3を掘りすぎて失っしているが、検出できた壁や、北東隅に位置するカマドなどから推定すると、長軸3.9m、短軸3.6mのほぼ正方形の住居跡と思われる。長軸の方向はN－61°－Wで、住居内の面積は約11.2㎡である。

〔堆積土〕 2層だけ認められた。

第1層－黒褐色土層で住居全体に薄く堆積している。層中には明黄褐色の地山粒を少量含み、最も厚い所で約8㎝しか残っていない。

第2層－薄い灰層で、カマド周辺の床面上にだけ分布している。

〔壁〕 第Ⅲ層を壁面としているために、各壁とも軟弱で、残存状態は非常に悪かった。最も残りの良い南壁で8㎝の高さしかなく、東西両壁の北側では痕跡程度の残存しか認められなかった。また、壁の立ち上がりもゆるやかである。

〔床面〕 床面はやや不整で凹凸の著しい住居跡掘り方に、地山土の小ブロックの混じった砂

質の黒褐色土を埋め土して貼り床としている。床面はほぼ平坦で、かたくしまっている。

〔柱穴〕 住居内から大小7個のピットが検出されている。これらのピットにはいずれも柱痕跡はなく、また、位置関係に規則性はみられなかった。

〔カマド〕 北東隅に位置している。この部分は、発掘初期の段階に掘り過ぎてしまったため、カマドは痕跡程度しか残っていない。残存部分から本体は幅80㎝、奥行60㎝の規模で、住居跡長軸と一致した主軸方向を持つと推定される。残存している両側壁と奥壁は、白色粘土で構築されており、火熱を受けてよく焼けしまっていた。

〔貯蔵穴状ピット〕 住居南東隅で検出された4個のピットは、他に比して規模も大きい。特にP_4は直径60㎝、深さ40㎝あり、遺物は出土していないが、貯蔵穴状ピットの可能性がある。

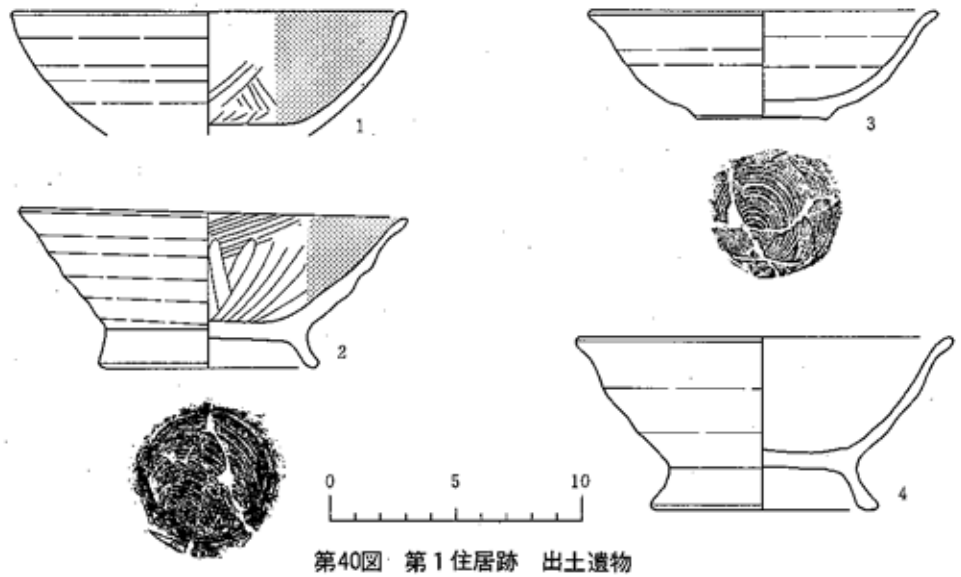
〔出土遺物〕 堆積土・床面・カマドから出土している。土師器(坏・高台付坏・甕)、赤焼土器(坏・高台付坏)やカマド内出土の高台坏で剥落が内外面共に著しいため土師器か赤焼土器か不明なものなどがある。

住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第40図1）底部全面が剥落しているため、切り離し技法が不明なもので、あるいは高台付坏かも知れない。体部から口縁部まで内弯気味に外傾する器形で、内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。カマド内出土のため黒色処理は明瞭でない。

高台付坏（第40図2）高台付着後の調整が顕著でなく坏底部外面に回転糸切り痕が認められる、坏体部はやや丸味を持って外傾し、口縁部で外反する。高台部はあまり高くなく、直線的に強く外傾し、端部は角ばる。坏部内面には、ヘラミガキと黒色処理が施されている。



第40図　第1住居跡　出土遺物

甕　ロクロを使用するものと不使用のものが出土しているが図示できるものはない。

赤焼土器

坏（第 40 図 3）体部は内弯気味に外傾し、口縁部でわずかに外反する。底部切り離しは回転糸切り技法で、内・外面とも再調整は認められない。

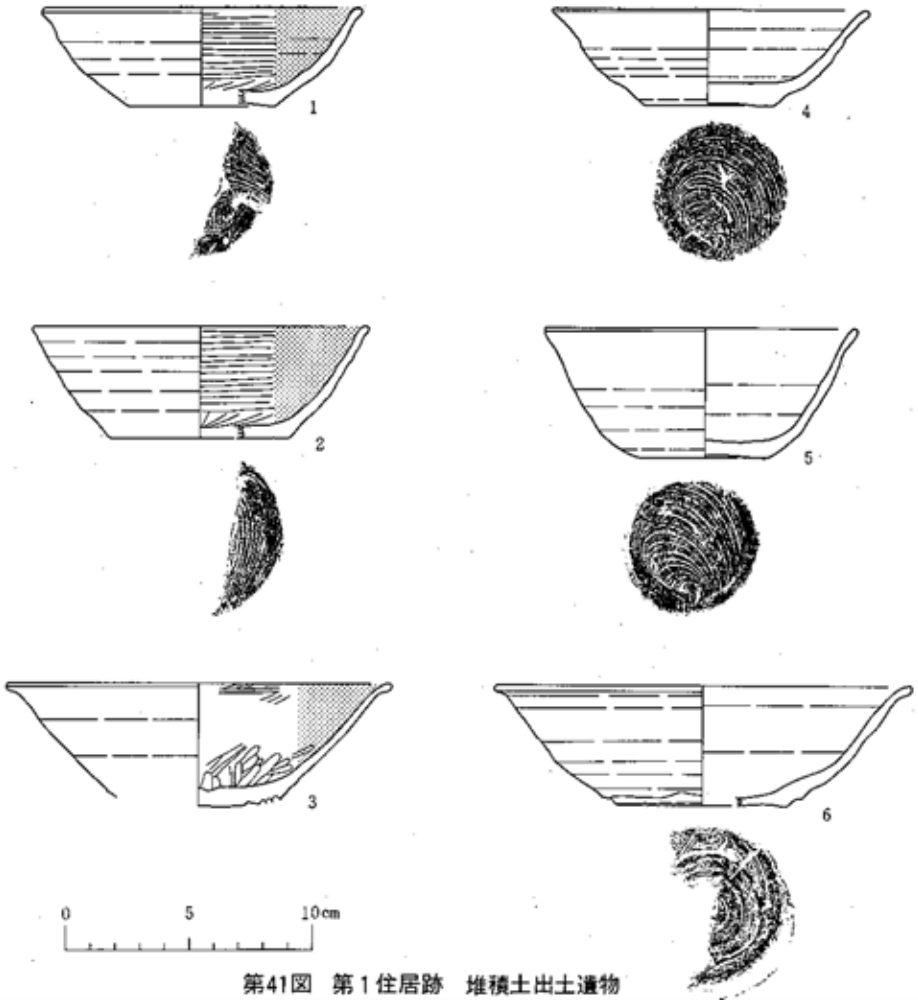
土師器か赤焼土器か不明なもの

高台付坏（第 40 図 4）坏体部はやや内弯気味に外傾し、口縁部で外反する。高台部は外反気味で比較的高い。カマド底面から出土したもので、全体に火熱を受け器壁の剥落が著しく、調整などは不明であるが、製作に際してロクロを使用していると思われる。

堆積土出土遺物

土師器

坏（第 41 図 1・2）どちらも体部がほぼ直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反する器形で



第41図　第１住居跡　堆積土出土遺物

底部は一部しか残っていないが、回転糸切り技法で切り離されている。内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。

高台付坏（第40図3）高台部が剥落したもので、坏部は丸味をもって外傾し、口縁部で強く外反する。高台付着時の調整が坏底部外面全体に施されるため切り離し不明のものであるが、わずかに高台剥落部分に回転糸切り痕がみられる。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕　製作にロクロを使用したものと不使用のものがあるが、図示できるものはない。

赤焼土器

坏（第41図4・5）いずれも口径13㎝前後の坏で、器形は体部がやや内弯気味に外傾し、口縁部で外反する。底部は回転糸切り技法によって切り離されている。色調は 4 が明赤褐色、5は赤褐色で、どちらも胎土に微細な砂粒を比較的多く含んでいる。

高台付坏（第41図6）坏部は、やや丸味をもって外傾し、口縁部が強く外反する器形で、口径17.1㎝と他の赤焼土器に比して大きい。高台部は剥落しており、その形状は不明である。高台部と坏部の接合時の調整は、接合部周縁にだけ施されており、坏底部外面には高台の剥離痕と共に回転糸切り痕が残っている。

第14表　第1住居跡出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
40図1	カマド内2層	土師器	坏	15.8				40	
40図2	床	〃	高台付坏	15.8			6.3	34	B II
40図3	床	赤焼土器	坏	13.9		5.4	3.9	35	a
40図4	カマド西側床	土師器	高台付坏	15.1			6.9	33	
41図1	1層	〃	坏	13.0		6.0	4.0	32	B II
41図2	1層	〃	〃	13.3		6.9	4.4	50	〃
41図3	1層	〃	高台付坏	15.5			5.1	54	B II
41図4	1層	赤焼土器	坏	13.6		5.7	3.5	36	a
41図5	1層	〃	〃	12.6		5.6	4.2	46	b
41図6	1層	〃	〃	17.1		7.1	4.9	37	

第2住居跡

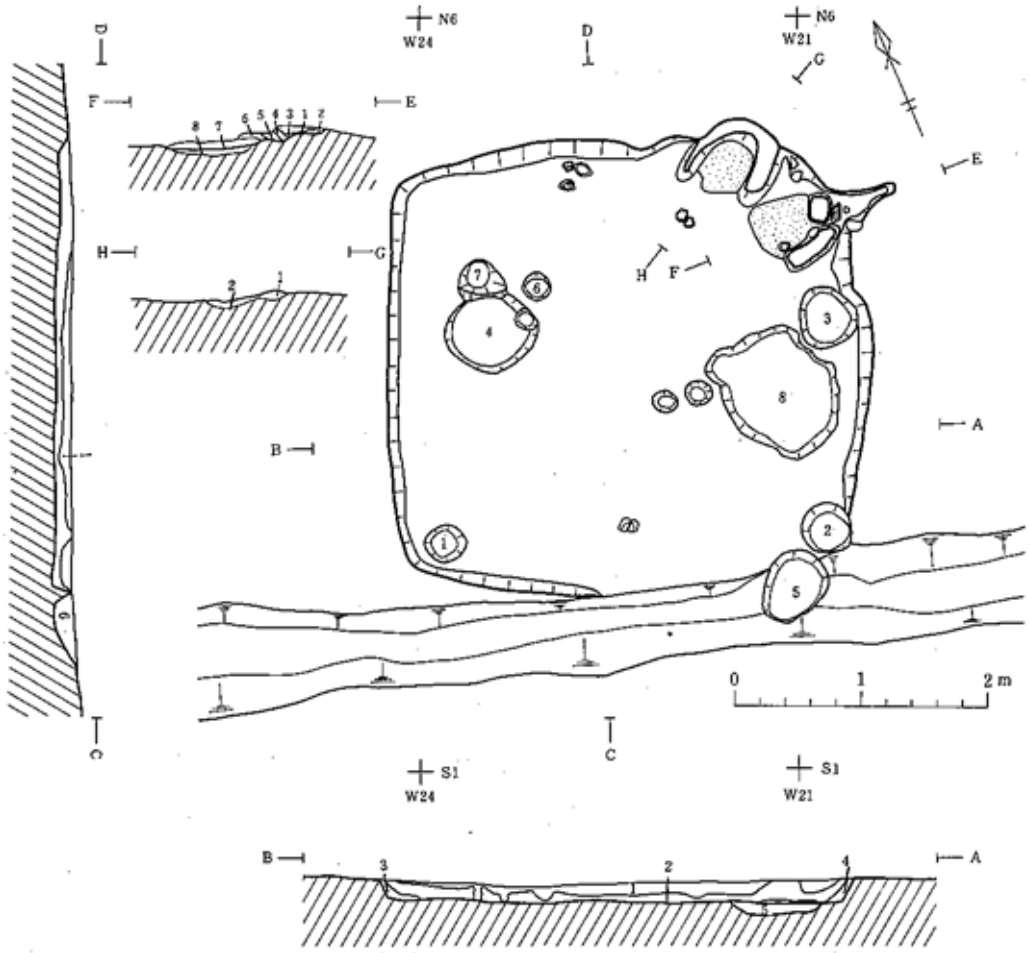
〔遺構の確認〕 II区の南端のCA・CB－27・28区に位置している。第Ⅰ層下の地山面で、確認された。

〔重複〕 南壁のほぼ東半分は、幅80㎝、深さ15～20㎝の新しい溝によって切られている。

〔増・改築〕 カマドは作り変えられているが、住居跡の作り変えは認められない。

〔平面形〕 南壁東半分は不明であるが、平面形はほぼ正方形で長軸 3.8m、短軸 3.7mで、長軸の方向はN－67°－Wで、住居内面積は11.9㎡である。

〔堆積土〕 4層認められたが、第Ⅰ～第Ⅲ層に大別できる。



住居内堆積土

大別	層No.	土色	土性	備考	遺物取り上げ層位
I	1	黒褐色	シルト	粘性あり、木炭を少量含む	第1層
II	2	褐色	シルト		
III	3	にぶい褐色	シルト	粘性あり、地山粒を含む	第2層
	4	褐色	砂質シルト		
	5	明褐色	シルト	明黄褐色土を少量含む、ピット8堆積土	
	6	暗褐色	シルト	新しい溝の堆積土	

Bカマド内堆積土

層No.	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	微量の焼土を含む
2	褐色	シルト	
3	暗赤褐色	シルト	焼土を含む
4	褐色	シルト	微量の焼土を含む
5	褐色	シルト	微量の焼土を含む
6	極暗褐色	シルト	岩石状に固く、焼けている
7	褐色	シルト	明赤褐色土との混合層で木炭を含む
8	浅黄橙色	シルト	

ピットNo.	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8
深さ(cm)	6	29	27	23	14	15	11	13
土色	黒褐色	暗褐色	暗褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	明褐色
土性	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	シルト
備考	地山粒混入 粘性あり	焼土・木炭多量混入	焼土・木炭多量混入	地山粒混入				

第42図 第２住居跡

第Ⅰ層－黒褐色土で、木炭を少量含む。住居中央で厚く、壁周辺に向かって薄くなる堆積状態を示しているが、床面を覆うことはない。

第Ⅱ層－褐色土層で、壁ぎわを除いて床面上を覆っている層である。

第Ⅲ層－にぶい褐色あるいは褐色土層で、地山粒が少量混入している。壁ぎわにだけ分布し

ている。

〔壁〕 地山を壁としているが、南壁の東半分は溝に切られているため検出できなかった。また、住居跡周辺は、北側にゆるく傾斜しており、北壁など北よりの壁の残存状態はあまり良くなかった。もっともよく残っている南壁で 18 ㎝、その他の壁で 10 ㎝ほどの残存壁高がある。各壁の立ち上がりはゆるやかである。

〔床面〕 掘り方底面の地山面を床としている。ほぼ平坦であるがあまりしまっておらず、床面全体に小さな凹凸がみられる。

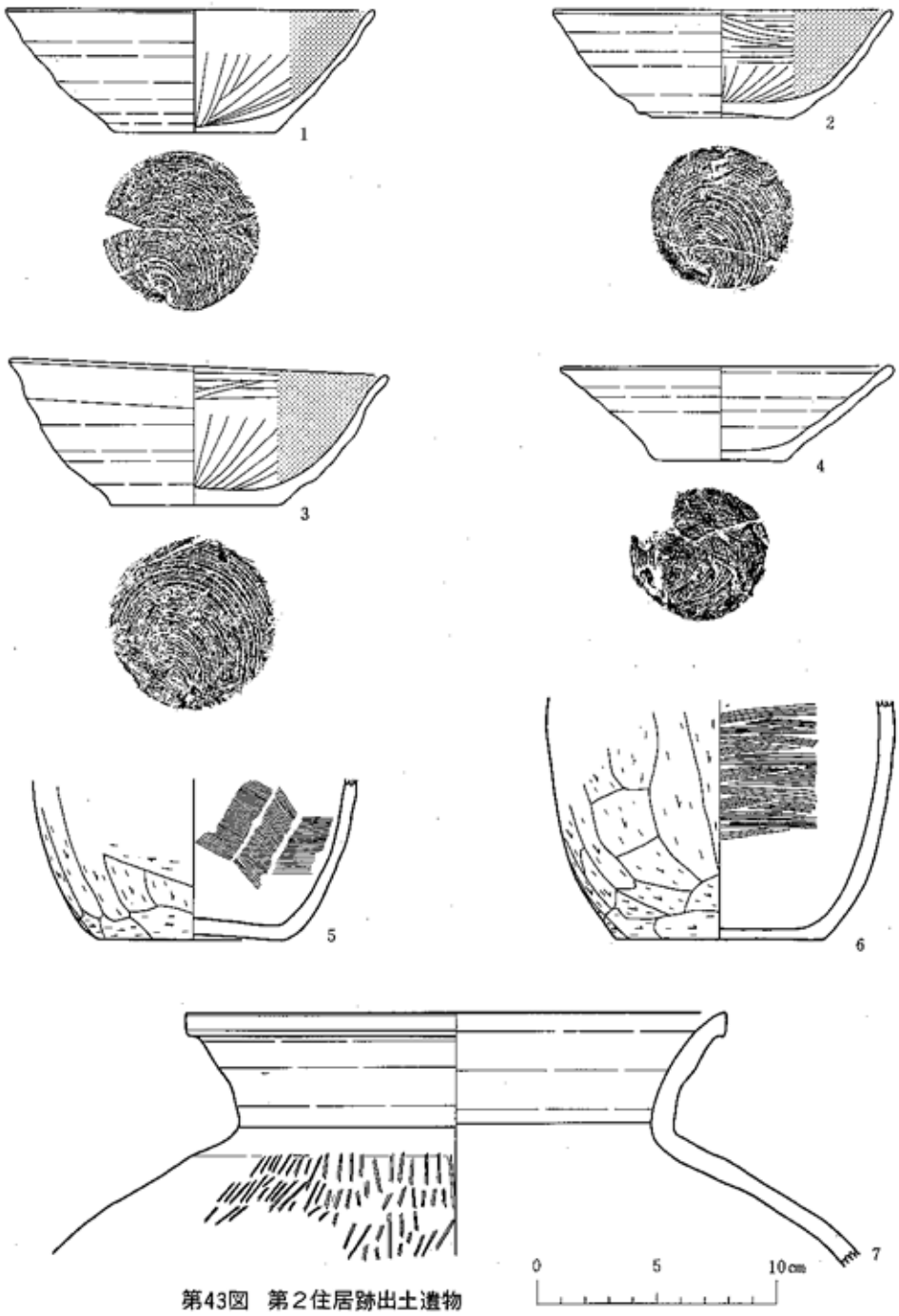
〔柱穴〕 住居内からは合計 8 個のピットが検出されている。いずれのピットからも柱痕跡はみつからなかった。配列や堆積土から主柱穴を検討したが不明であった。

〔カマド〕 北東隅に、2 個のカマドが検出されている。北壁東端に位置するものをＡカマド、これに隣接し、東壁よりのものをＢカマドとする。

Ａカマド－軸線の方向はＮ－40°－Ｅで北壁に直角にではなく、40°程東に偏して取り付けられている。本体の規模は幅 70 ㎝、奥行 70 ㎝で、明褐色の地山土を用いて構築した両側壁・奥壁がそれぞれ高さ 5 ㎝ほど残存しているだけである。この残存部分から考えると、カマド本体は住居壁を幅 65 ㎝、奥行 20 ㎝ほど弧状に掘り込み、これに 15～20 ㎝の幅で「コ」の字形に壁が取り付けてある。左側壁は約 35㎝、右側壁は約 55 ㎝、住居内にのびている。燃焼部は幅 35 ㎝、奥行 50 ㎝の「U」字形を呈している。底面を床面から約 5 ㎝ほど掘り窪め、その上に黄褐色の地山土を埋め土しているが、この埋め土部分は火熱のため赤褐色を呈し、かたく焼けてしまっていた検出されたのは本体だけで、煙道・煙出しピットは検出されなかった。

Ｂカマド－軸線の方向はＮ－82°－Ｅで、東壁北端に付設されている。残存状態は悪く、本体では右側壁の基部と、燃焼部底面が残っているだけである。この残存部からカマド本体は、本来幅 75 ㎝、奥行 60 ㎝ほどの規模を持っていたと考えられる。側壁は褐色土によって構築されていて、検出できた右側壁は幅 20 ㎝、長さ 55 ㎝ほどが住居内にのびており、残存高は約 5 ㎝である。左側壁はまったく検出できなかった。燃焼部は奥行 60 ㎝、幅は奥壁ぎわで 30 ㎝、端部で 45 ㎝と、細長い台形状を呈している。燃焼部底面は、床面を約 6 ㎝掘り窪めた掘り方に、厚さ 5 ㎝ほどの埋め土をしており、床面より少し窪む程度である。埋め土は火熱によって赤褐色を呈し、焼けしまっている。この上に木炭、焼土を含む褐色土層がのっている。煙道は住居外にのびる 50 ㎝ほどが検出された。幅は 35 ㎝、深さ 5～10 ㎝ほどで、先端にいくにしたがって幅は狭くなり 10 ㎝ほどになってしまう。煙出しピットは検出されなかった。

接して検出されたＡ・Ｂ両カマドの新旧関係は、Ａカマドが基部だけではあるが、両側壁が検出されているのに対して、Ｂカマドは、Ａカマドに接する左側壁がまったく検出できなかったことなどから、Ｂカマドの一部と重複しながら残りの良いＡカマドがＢカマドより新しく作



第43図　第２住居跡出土遺物

られた可能性がある。

〔出土遺物〕 堆積土・床面・カマド・ピットなどから土師器（坏・甕）須恵器甕、赤焼土器坏などが出土している。

住居跡に伴う遺物

土師器

坏（第43図1～3）1と2はやや内弯気味に体部から口縁部まで外傾する器形で、3は体部がやや丸味をもって外傾し、口縁部でわずかに外反する。底部は回転糸切り技法により切り離されており、外面に再調整は施されない。内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。3は口径・器高共に他の坏に比して大きい。

甕（第43図5・6）口縁部破片には、製作ロクロを使用するものと不使用のものとがある。図示できたものは、体部下半から底部にかけての小形甕の資料だけである。いずれも体部から底部の外面はヘラケズリされ、内面にはナデ調整が施されている。

須恵器

甕（第43図7）口縁部から体部にかけての破片である。頸部で大きく屈曲し、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は上方と下方にわずかにつまみ出されており、その中央には浅い凹線が巡る。口頸部から体部上端までロクロ調整が施される。体部外面には、上下方向の平行タタキ目が、内面にはオサエ痕や軽いナデ調整がみられる。

赤焼土器

坏（第43図4）体部から口縁部までほぼ直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反する。底部は回転糸切り技法によって切り離され、内外面共、再調整は加えられていない。色調は浅黄橙色で胎土に細砂を含み、体部に成形後の歪みがみられる。

第15表　第2住居跡出土土器計測表

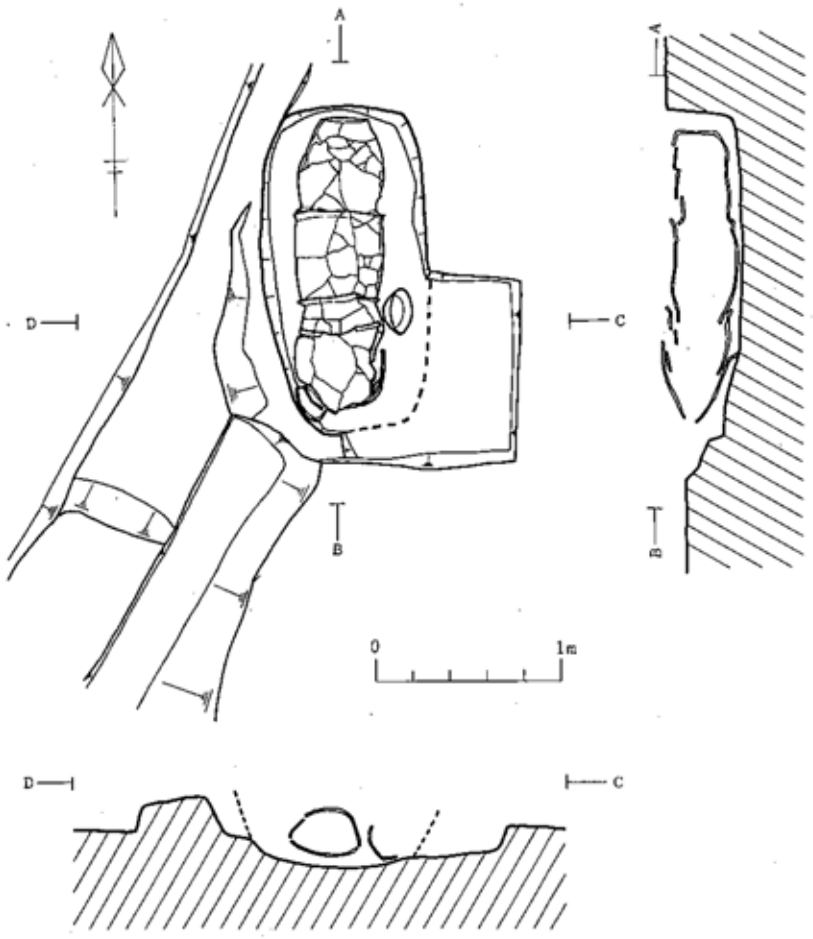
図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
43図1	Aピット3－3	土師器	坏	14.9		6.8	5.1	10	BII
43図2	B床面	〃	〃	14.0		5.9	4.6	48	〃
43図3	ピット3	〃	〃	15.5		6.9	6.2	11	〃
43図4	Aカマド2	赤焼土器	〃	13.8		5.3	4.0	12	b
43図5	Bピット2	土師器	甕	不明		7.7	不明	13	
43図6	Aピット3	〃	〃	不明		8.2	不明	14	
43図7	Bピット2	須恵器	〃	21.0		不明	不明	58	

(4)　その他の遺構と出土遺物

理甕を伴う土壙

〔遺構の確認〕Ⅰ区より北に20m、Ⅱ区より東に20mほど離れた北斜面、K－49・48区に位置しており、K49区の第Ⅲ層から地山面にかけて、甕の上面と土壙の輪郭の一部を確認した。K－48区に拡張後、精査した結果、土壙の確認面は第Ⅲ層上面であることが判明した。

〔平面形〕確認当初の掘り過ぎによって南東隅は不明であるが、長径90㎝、短径45㎝の楕円形の土壙と思われる。土壙の長軸方向は磁北に対して、1度西に偏するだけである。



第44図　埋甕を伴う土壙

〔堆積土〕 土壙内の堆積土は暗褐色土の単層で埋め土と思われる。

〔壁・床面〕 壁の一部（南東隅）は不明であるが、壁の残存状態は良好で、立ち上がりはほぼ直角である。底面はほぼ平坦であるが、壁付近ではやや弯曲している。遺構検出後、周囲を拡張、精査を行ったが、この遺構に伴うと思われる施設はなにも検出できなかった。

〔埋甕〕 4 個の土師器甕と完形の土師器坏 1 点が土壙内から出土している。甕はいずれも土圧によって、ひび割れていたり、押し潰されたりしていたが、攪乱などを受けた痕跡がなく、現位置を保っていると思われた。出土状態から 4 個の土師器甕は土壙の長軸に沿って横位に埋設されたもので、2 個の土師器甕の口縁を合わせ、その一方の甕にさらに 2 個の甕をつぎ足しており、その全長は 80 ㎝である。一番北側に位置し、蓋の役割を有すると思われる甕は左側縁にあたる体部下半に 9×12 ㎝ほどの破損部をもつがほぼ完形で底部を有している。他の 3 個体はいずれも底部を欠いており、南端に位置する甕も埋設当初から底部を持っていなかったと思

われる。甕の取り上げに際しては細心の注意を払ったが埋甕中から遺物の出土はまったくなかった。また、土壙内からはこの他に完形の土師器坏が１点出土している。この坏は土壙の東側、中央部からやや南寄りの位置にあり、底部外面を北から３番目の甕に接し、たてかけたような状態で出土した。

〔出土遺物〕 合口埋甕を構成する土師器甕４点と伴出した土師器坏１点がある。土師器甕は北からNo.1～No.4の番号を付した。

土師器

甕　甕No.1（第45図1）とNo.4（第45図4）は、製作にロクロを使用するもので、甕No.2（第45図2）とNo.3（第45図3）はロクロを使用していない。

1 は器高が最大径より大きく、口縁径と体部最大径がほぼ等しい完形の甕である。4 は底部を欠いているが、最大径より器高が大きく、最大径の位置が口縁部にある甕で１よりも長胴形である。いずれも、頚部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は鋭く外傾し、端部は上方につまみ出され、直立している。口縁部から体部の外面はロクロ調整され、その後、体部上半以下に縦・斜方向のヘラケズリが施される。1 の底部外面はナデ調整されている。

2・3 は体部下半と底部を欠くが、どちらも最大径より器高が高いと思われる。最大径の位置は 2 では体部上半に、3 では口縁と体部上半にある。いずれも頚部の屈曲が弱く、外傾する口縁部は短い。体部の脹みは 2 の方がやや強い。外面の器面調整は両方共体部上半まで横ナデを施した後、ヘラケズリを加えている。2 ではヘラケズリが口縁部まで及んでいる。内面は、口縁部や体部上半まで横ナデ、それ以下にはナデ調整が行なわれている。これらの甕のすべてに火熱を受けた痕跡があり、特に 3 は器壁の剥落が著しい。

坏　回転糸切り技法によって底部を切り離し、外面に再調整はない。内面にはヘラミガキと黒色処理を施している。やや大形の坏であったが、現在、所在不明となっている。

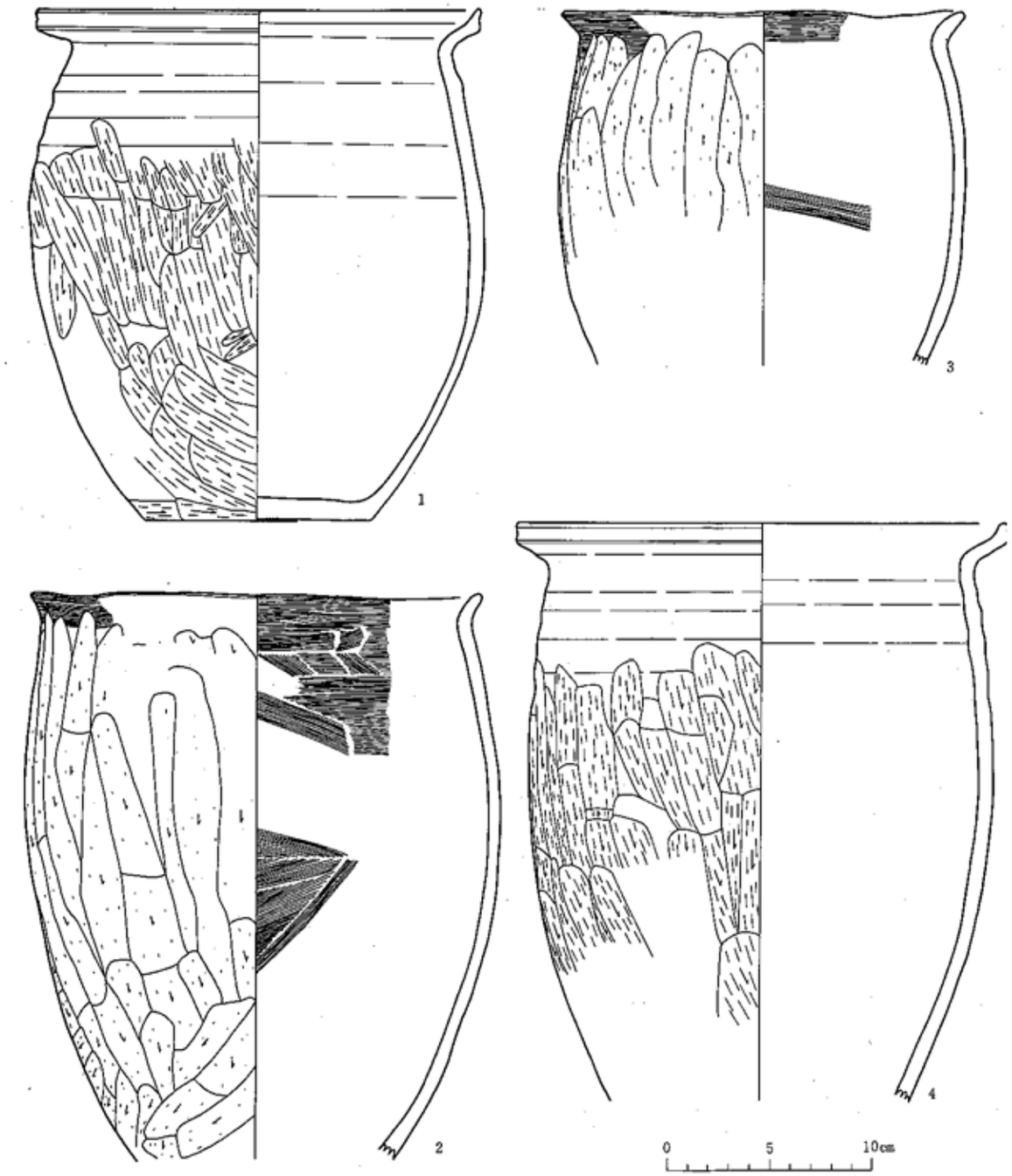
第16表　埋甕を伴う土壙出土遺物計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
45図1	第1カメ棺No.1	土師器	甕	21.6	22.0	10.9	25.0	41	DI
45図2	〃 No.2	〃	〃	22.1	23.0	不明	不明	28	BI
45図3	〃 No.3	〃	〃	19.4	19.7	不明	不明	27	〃
45図4	〃 No.4	〃	〃	23.7	22.5	不明	不明	39	CI

土壙

〔遺構の確認〕 Ⅱ区の東端4号住居跡の北東、約5mのＢＳ－15区に位置し、第Ⅰ層下の地山面で確認された。

〔平面形〕 長軸 180 ㎝、短軸 130 ㎝の長楕円形である。深さ約 15 ㎝で、断面形は浅い皿状である。



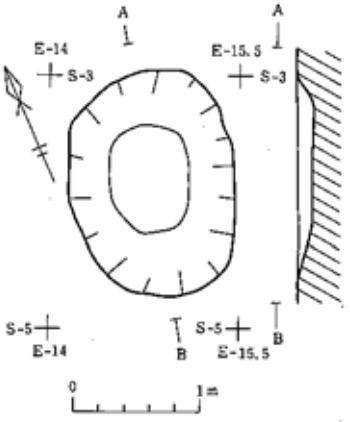
第45図　埋甕を伴う土壙出土遺物

〔堆積土〕焼土粒を含む暗褐色土の単層である。

〔出土遺物〕土師器坏・甕、須恵器甕、赤焼土器坏等の破片が多く出土しているが、出土状況にまとまりは見られず、また、接合資料もほとんどなかった。

溝

Ⅰ区の南側を2号住居跡の南西隅を切って、東西に走っている。第Ⅰ層下のⅢ層上面で確認された。幅約80㎝、深さ20㎝で断面「U」字形をしている。堆積土はボサボサの黒褐色土の単層である。遺物の出土はない。



第46図　土　　壙

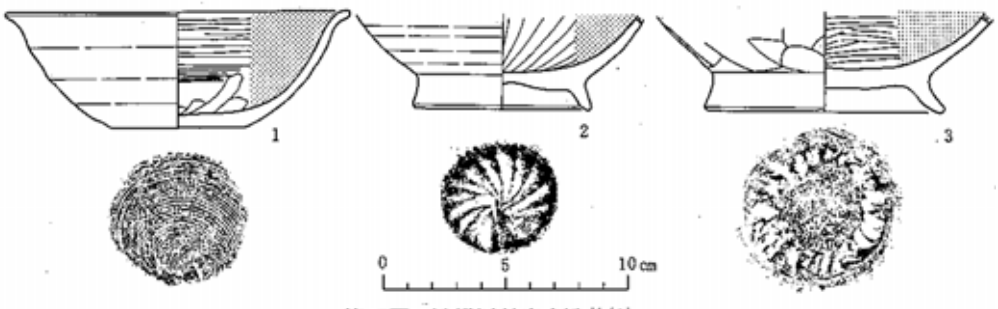
(5)　遺構以外の出土遺物

1次・2次の調査トレンチ第Ⅰ層から少量ずつではあるが、土師器・須恵器・赤焼土器・縄文土器・石器などが出土している。量的にもっとも多いのは土師器で、ほとんどの調査区から出土しているが、特に住居跡周辺の平坦部、南斜面、北斜面からの出土が多く見られた。また、A地区E－46区を中心に黒曜石の石器や剥片・破片などがまとまって出土している。

土師器（第47図1～3・第27表）

坏　1は第2住居跡周辺から出土した坏で、体部は内弯気味に外傾し、口縁部が外反する器形をもち、底部は回転糸切り技法によって切り離されている。内面はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。2はB地区北斜面から出土し、3は出土地区不明の高台付坏で、いずれも坏部の口縁部から体部上半を欠いている。高台はやや外傾しているがあまり高くはない。坏底部外面には高台付着後、中心部から接合部分に粘土をかき寄せた菊花文状の調整痕が残っており、坏の底部切り離しは不明である。坏部内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。3の体部下半外面には手持ヘラケズリが部分的に施されている。

この3点の他に遺構以外から出土した土師器で図示できるものはないが、第27表に示したように坏はすべて製作にロクロを使用しており、底部の切り離しも回転糸切り技法によるものが多くを占めている。内面にはヘラミガキ・黒色処理もしくはヘラミガキが施される。外面に再



第47図　遺構以外出土遺物(1)

調整が加えられる例としては、わずかに体部下端と底部の外面が回転ヘラケズリされるもの 1 点がある。高台付坏も数点あり、高台付着後の調整によって坏底部の切り離し痕が残るものと不明のもの両方がある。甕は製作にロクロを使用するものと不使用のものとがある。体部外面にヘラケズリの加えられるものが多く、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されるものがわずかにある。底部に木葉痕をもつものが一例ある。

須恵器（第 27 表）

甕・壺などが少量あるが、坏は 1 点もない。

赤焼土器（第 27 表）

第 27 表に示したように、坏の破片が少量出土している。

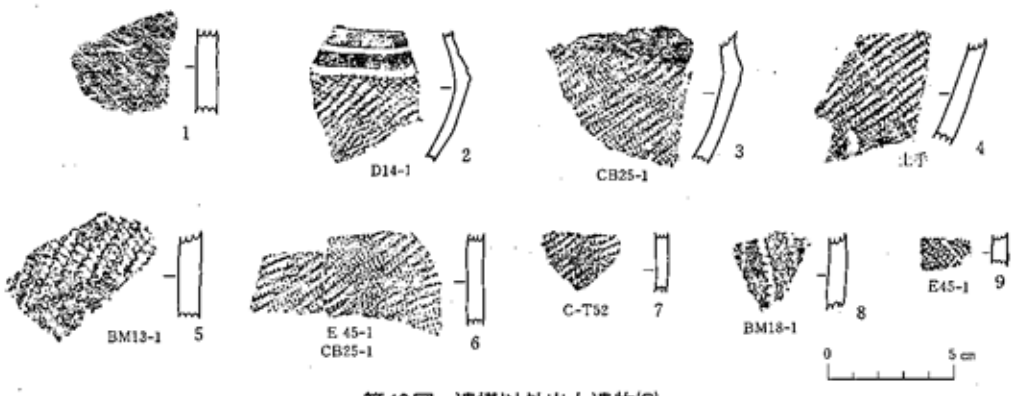
縄文土器（第 48 図）

合計 11 点の縄文土器が調査区全体から出土している。いずれも小破片で器形の明らかなものは少ない。

1 は体部破片で、胎土に繊維を含んでいる。内面には擦痕が認められる。手取遺跡では、胎土に繊維を含んでいる縄文土器はこの 1 片だけである。

2～4 は深鉢形土器の破片で、2・3 は頚部から体部にかけての、4 は底部近くの破片である。2 は口頚部が無文帯となっており、その下端に 2 条の沈線が巡っている。体部には斜行縄文（ＬＲ）が施される。3 はゆるやかに外反する口頚部をもち、口頚部は無文帯となる。体部にはいずれもＬＲの縄文が施される。5～9 は体部破片で、5～7 にはＬＲの縄文が施される。5 の下端は縄文施文後、ケズリが加えられ無文となっており、底部近くの破片と思われる。6 も同様に底部近くの破片である。8 にはＲの撚糸文が、9 はＲＬの縄文が施されている。

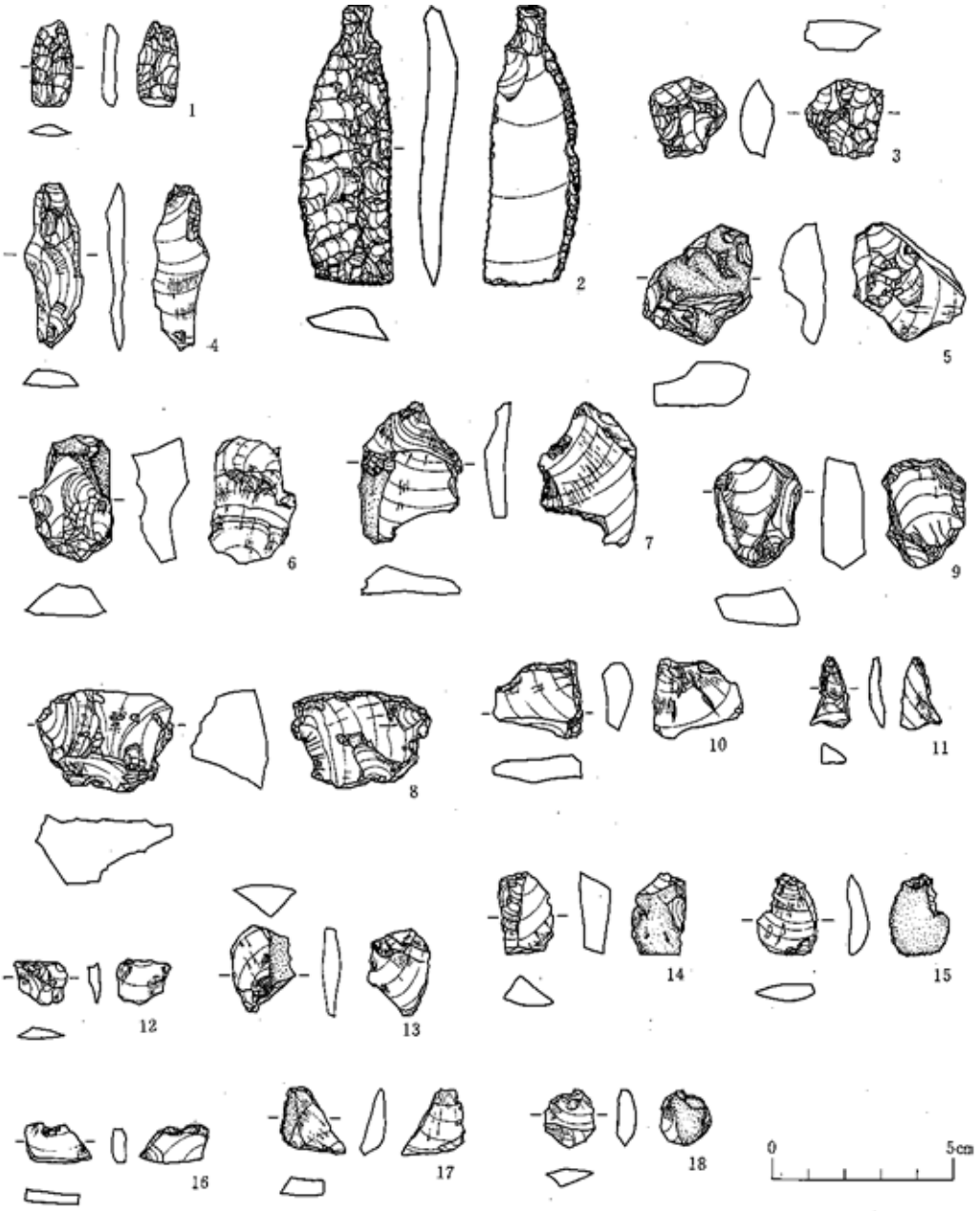
石器（第 49 図 1～18）剥片破片を含めて、全部で 20 点の石器が出土している。Ｂ地区南斜面から出土した石鏃・石匙と出土地点不明の石錐以外のものすべてが、Ａ地区南斜面のＥ－4 区を中心にまとまって出土したものと周辺で表採された黒曜石製のものである。



第48図　遺構以外出土遺物(2)

石鏃（第 49 図 1）赤色硬質頁岩製で上下両端を欠く。有茎か無茎かは不明であるが、両面から、ていねいな調整剥離が加えられている。

石匙（第 49 図 2）縦形のもので、硬質頁岩製である。打面周辺に両面から調整剥離を加えつまみを作りだしており、わずかに打面が残る。腹面の右側縁にだけ調整剥離を加えてから、背面の両側縁と下端にていねいな調整剥離を加えて、刃部を作り出している。背面の右側縁には



第49図　遺構以外出土遺物(3)

2次的に加えられたと思われる細かい剥離が認められる。

石錐（第49図3）めのう製で、石錐のつまみ部と思われる。両面から調整剥離が加えられており、折損部のすぐ上が鋭く抉られている。

削器（第49図4）黒曜石の縦長の剥片を素材としている。上・下両端が破損しており、打面は残っていない。腹面の右側縁上半にだけ調整剥離が加えられる。背面には上・下・右横方向からの剥離痕が残っている。

掻器（第49図5～10）黒曜石製で、すべて刃部の断面が部厚い。5～9はどの面かに自然面を残している。5は調整打面をもつ部厚い剥片で、右側縁に腹面からの調整剥離によって刃部が作り出されている。左下は折れている。6は打面側の腹面から調整剥離を加え、半円状の刃部を作り出している。7は本来縦長の剥片と思われるが、上半が折られている。背面の右側縁と腹面の下端に刃部がある。8と9は残核に調整剥離を加え、刃部を作り出しており、8は半円状の、9はほぼ全周する刃部をもつ。10は折れた剥片の上端に背面から調整剥離を加え外弯状の刃部を作り出したものである。

剥片・破片（第48図11～18）器面調整の際の剥片や、折れた剥片で、自然面をもつものが多い。

第17表　遺構以外出土土器計測表

図版番号	出土地点	種別	器形	口径	最大径	底径	器高	登録番号	分類
47図1	BT27-1層	土師器	坏	14.1		5.5	4.8	47	BII
47図2	S－45－1	〃	高台付坏	不明		7.7	不明	49	AI
47図3	×－×	〃	〃					58	〃

第18表　遺構以外出土石器計測表

図版番号	名称	出土地点	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石材	完・不完
49図1	石鏃	BK 15－1	(23.6)	11.5	3.6	0.85	珪質頁岩(赤)	不完
49図2	石匙	BI 17－1	77.5	25.1	8.3	15.3	〃	完
49図3	石錐？		(20.5)	19.8	8.7	3.2	めのう	不完
49図4	削器		45.4	15.0	5.4	2.7	黒曜石	〃
49図5	掻器	46 E－1	35.6	23.8	12.4	12.5	〃	〃
49図6	〃	46 E－1	33.9	22.2	17.0	9.6	〃	〃
49図7	〃	45 F－1	40.0	27.3	8.4	6.1	〃	〃
49図8	〃		27.5	37.9	19.6	18.9	〃	〃
49図9	〃	46 E－1	30.1	23.1	13.2	11.5	〃	〃
49図10	〃		21.5	23.5	8.5	4.1	〃	〃
49図11	剥片・破片	46 E－1	18.8	10.7	5.0	0.5	〃	〃
49図12	〃	〃	10.8	14.5	3.5	0.4	〃	〃
49図13	〃	45 F－1	23.1	16.0	8.1	2.5	〃	〃
49図14	〃	46 E－1	23.0	13.8	8.5	2.4	〃	〃
49図15	〃	〃	22.0	16.4	5.4	1.6	〃	〃
49図16	〃	〃	10.0	19.3	3.7	7.5	〃	〃
49図17	〃		15.7	17.6	5.2	1.2	〃	〃
49図18	〃	46 E－1	15.0	13.4	5.3	0.9	〃	〃

Ⅳ. 遺構と遺物に関する問題点

1. 遺　構

調査によって西手取遺跡から竪穴住居跡５軒と土壙１基が、手取遺跡からは竪穴住居跡５軒と埋甕を伴う土壙１基、土壙１基、溝１本などの遺構が検出された。ここではこれらの遺構の特徴や問題点を検討する。

竪穴住居跡

西手取遺跡（遺跡記号ＢＤ）、手取遺跡（遺跡記号ＢＥ）の両遺跡から検出された住居跡の平面形や住居跡を構成する各要素などを項目別に検討を加える。

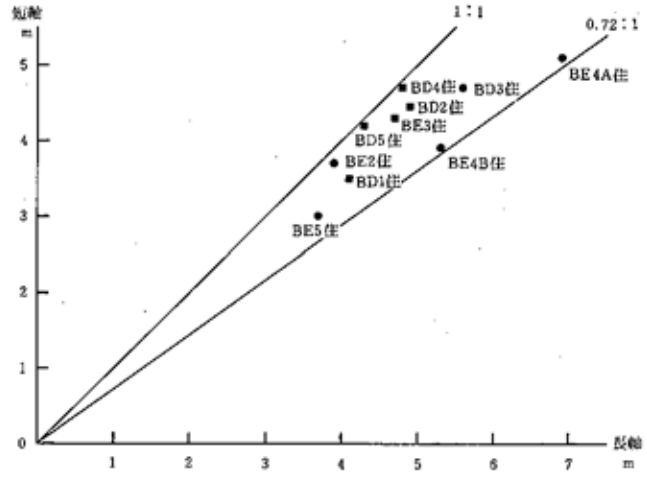
〔平面図〕 ＢＥ－第１住居跡の平面形が明確ではないが、その他の住居跡はほぼ完全な平面形をもつ。各住居跡とも、歪みや、凹凸、各辺の長短などはあるが、すべて方形を基調としており、(1)正方形に近いものと、(2)長方形を呈するものとがある。

正方形……ＢＤ－第４・５住居跡、ＢＥ－第２住居跡

長方形……ＢＤ－第１・２・３住居跡、ＢＥ－第３・4Ａ・4Ｂ・５住居跡、ＢＥ－第１住居跡(?)

しかし、各住居跡とも四隅は角ばることなくやや丸味をもっており、厳密には隅丸正方形・隅丸長方形の平面形である。

〔規模〕 各住居跡の長軸・短軸長と住居内面積を第 19 表に示した。平面形が正方形を呈する住居跡でも、軸長にわずかの長短がみられ、それをそれぞれ長・短軸長として表らわしてある。また、長軸と短軸の関係を第 50 図に示した。西手取遺跡では各住居跡の長軸が 4.1～4.8mとすべて 4m台で、短軸 3.5～4.7 m、住居内面積が 13.2 ㎡～19.4 ㎡とその規模にあまり差をもたないのに対して、手取遺跡では長軸 3.5～6.9m、短軸 3.0～5.1m、住居内面積が最小で 8.2 ㎡、最大で 36.5 ㎡と住居跡によって規模が大きく異っている。住居内面積を推定した第１住居跡を含めると 10 ㎡内外の面積しかない小規模な住



第50図　住居跡の規模

居跡と 20 ㎡以上の面積をもつ規模の大きな住居跡とに二分することができる。

〔方向〕 各住居跡の長軸の方向を第 19 表に示した。西手取遺跡では長軸の方向は一定せず、N－75°－WからN－41°－Wまでの 116°の間に分布がみられる。手取遺跡では、N－70°－WからN－48°－Wの間の 21°と限定された狭い範囲に長軸方向は分布しており、まとまりをもっていると言える。このように各住居跡の長軸方向には西手取遺跡では一定性を持たず、手取遺跡ではあるまとまりをもつという傾向がうかがえた。しかし、一定性をもたない西手取遺跡での住居跡の長軸方向のあり方も、住居跡の位置する部分の微地形の傾斜方向(第 5 図)との関係でみてみると多くは傾斜に直交する方向や、まれには傾斜方向に住居跡の長軸方向が一致しており、手取遺跡でも微地形との関係は同様である（第 28 図）。

〔堆積土〕 住居跡の残存状態にもよるが、すべての住居跡内に 2～8 層の堆積土が認められた。細分された堆積層はⅠ－住居中央に厚く堆積するが床面を覆うことのない層、Ⅱ－大部分の床面を覆う層、Ⅲ－床面を覆うが壁ぎわだけに分布する層の 3 層に大別することができた。また、各住居跡によって、その堆積状態は少しずつ異なっているが、基本的には住居廃絶後、壁ぎわから埋まり始め（Ⅲ層）、Ⅱ層・Ⅰ層が順次流入堆積したものと思われる。堆積土の状態を観察すると中央平坦部に位置する住居跡では均一な流入が、斜面に位置する住居跡では斜面上方からの強い流れ込みを示す傾向がみられた。ＢＤ第 5 住居跡で住居内堆積土の大部分が住居外にも伸びて堆積している。これはこの住居跡が本来は基本層位第Ⅲ層から地山にかけてを壁としていたのに住居が廃絶されてまもなく、ほとんど粘性をもたない第Ⅲ層部分の壁が崩れてしまい住居跡平面形より大きな輪郭をもつ窪みができ、それにその後の堆積土が流入したためと思われる。

〔壁〕 ＢＤ－第 5 住居跡の東半とＢＥ－第 1 住居跡の北半を除いて壁は検出されている。最も残存壁高のあるＢＥ－第 5 住居跡北壁で約 50 ㎝の高さをもつ。大部分は地山を壁としているが、ＢＤ－第 4 住居跡東壁では基本層位第Ⅳ層～地山を、ＢＤ－第 5 住居跡東半部は第Ⅲ層～地山を壁としており、ＢＥ－第 1 住居跡の検出できた部分では基本層位第Ⅲ層を壁としている。検出された各壁の立ち上がりには、ゆるやかなものと直角に近いものとがあり、直角に近い急角度で立ち上がる住居跡が多い。また、各住居跡の壁はいずれも直線的ではなく多少の凹凸をもっている。壁が構築された後（使用時や廃絶後）の崩落によって凹凸が生じたとも考えられるが、検出されたすべての住居跡でこの傾向がみられ、構築当初から凹凸をもつ壁であった可能性がある。さらに、カマド付設に伴う壁の部分的な改変がＢＤ－第 3 住居跡とＢＥ－第 3 住居跡に認められる。

〔床〕 掘り方底面の地山面をそのまま床面としている住居跡と貼り床をもつ住居跡とがある。後者には住居跡内全体に貼り床されるものと部分的に貼り床されるものとがある。

地山床　ＢＤ－第１・２住居跡、ＢＥ－第２・３・４Ａ・５住居跡

全面貼り床　ＢＤ－第３住居跡、ＢＥ－第１住居跡

部分貼り床　ＢＤ－第４・５住居跡、ＢＥ－第４Ｂ住居跡

部分的に貼り床されているものにはＢＤ－第５住居跡のように斜面に住居跡を構築しているため掘り方底面の一部が地山面まで及ばず、この部分が地山面に比して軟弱であるため貼り床するものと、ＢＥ－４Ｂ住居跡のように拡張に伴い重複した古い住居跡部分に貼り床を行なって新らたな床面を構築するものとがある。

〔柱穴〕各住居跡内の床面から2～28個のピットが検出された。このうち柱痕跡を残していることから柱穴と考えられたピットは、ＢＤ－第４住居跡の２個、ＢＥ－第４Ｂ住居跡の４個とＢＥ－第４Ａ住居跡の３個があるだけである。これらの住居跡では柱痕跡をもつピットとの対応関係で、その他の住居跡ではピットの規模・深さ・ピット内の土色や土性の共通性、住居内での位置や配列などから柱穴を考えてみた。その結果は次のようになる。

Ａ．住居跡対角線上、四隅近くに柱穴をもつ住居跡－ＢＤ－第３・５住居跡、ＢＥ－第４Ｂ住居跡、ＢＥ－第４Ｂ住居跡は６本柱の可能性もある。

Ｂ．４本柱とカマド脇の柱穴５本柱の住居跡－ＢＤ－第２・４住居跡

Ｃ．６本柱の住居跡－ＢＥ－第３・４Ｂ住居跡

Ｄ．配置が不規則な住居跡－ＢＥ－第４Ｂ住居跡

Ｅ．柱穴が不明な住居跡－ＢＤ－第１住居跡、ＢＥ－第１・２・５住居跡

しかし、前述したような柱痕跡を残こしているなどの明らかな柱穴をもつ住居跡は少なく、また、柱穴をもつ住居跡であっても組み合せを考えたピットすべてに柱痕跡が存在する例はない。

〔周溝〕周溝は検出された住居跡と検出されない住居跡とがあり、周溝をもたない住居跡が多い。検出された住居跡であっても全周する住居跡はなく、部分的にしか見られなかった。周溝の検出された住居跡とその位置・長さなどを記すと次のようになる。

ＢＤ－第３住居跡－南東隅から南壁沿い。長さ2m。

ＢＥ－第３住居跡－北壁沿い。中央部。長さ2.8m。

ＢＥ－第４Ｂ住居跡－南壁沿い。中央部。長さ3.6m。

ＢＥ－第５住居跡－西壁南隅から、長さ0.5m。

これらの周溝は幅10～20㎝で、深さも5～10㎝で断面が「Ｕ」字形を呈している。周溝と住居跡周辺の微地形との関係をみると(1)地山面が高い方に周溝をもつ住居跡……ＢＤ－第１住居跡、ＢＥ－第３住居跡。(2)地山面が低い方に周溝をもつ住居跡……ＢＥ－第４Ｂ住居跡、第５住居跡とがある。

〔カマド〕検出されたカマドはすべて竪穴住居跡の壁ぎわにつくりつけられたもので、西手取・手取遺跡の全部の住居跡で発見されている。大部分の住居跡がカマドを１基もつが新旧関係の認められる２基のカマドが検出された住居跡（ＢＤ－第３住居跡・ＢＥ－第２住居跡）もある。また、カマド燃焼部の底面と思われる焼面だけが検出されたＢＥ－第４Ｂ住居跡もある。

(1) 位置　両遺跡の住居跡から合計13基のカマドが検出されている。その住居内での位置をまとめてみると次のようになる。

1）北壁東寄り……ＢＤ－第２住居跡、ＢＥ－第４Ａ住居跡、ＢＥ－第４Ｂ住居跡(?)

2）北壁東端……ＢＥ－第２住Ａカマド

3）東壁北端……ＢＤ－第１住居跡、ＢＥ－第２住Ｂカマド・ＢＥ－第１・３・５住居跡

4）東壁北寄り……ＢＤ－第５住居跡

5）東壁中央……ＢＤ－第３住Ｂカマド

6）南壁西寄り……ＢＤ－第３住Ａカマド、ＢＤ－第４住居跡

以上のような、カマドの位置から次のような傾向を知ることができた。

1. 西手取・手取遺跡ではカマドが住居跡壁の中央に位置する例は一例しかなく、他はすべて中央から片寄った位置に付設されており、特に壁端に位置している例が多い。2. 北壁東寄りから東壁北寄りまでの住居跡北東部にカマドが位置する住居跡が多く、東壁中央や南壁西寄りにカマドをもつＢＤ－第３・４住居跡は、他の住居跡とカマド付設位置が大きく異なっている。

(2) 方向　カマド燃焼部の前端と奥壁の中央を通る線をカマド軸線としてその方向を測りａ．住居跡壁との関係、ｂ．煙道部との関係、Ｃ．住居跡長軸方向との関係などを検討してみる。

ａ－カマド軸線と住居壁との関係：大部分の住居跡ではカマドは壁にほぼ直角に付設されているが、ＢＥ－第２住Ａカマドは北壁東端に位置し、壁に直角ではなく30°ほど傾いて付設されている。

ｂ－カマド軸線と煙道部との関係：煙道部を有するカマドの大部分はカマド軸線と煙道の方向は一致している。しかし、ＢＤ－第３住Ｂカマドではカマド軸線に対して煙道が５°ほど北偏して延びている。

ｃ－カマド軸方向と住居跡長軸方向との関係:第19表にカマド軸方向と住居跡長軸方向を示したが、その関係は次のようになる。

1）長軸方向とカマド軸方向がほぼ一致する住居跡……ＢＤ－第１住居跡、ＢＤ－第３住Ａカ
ＢＤ－第４住居跡、ＢＥ－第１住居跡(?)、ＢＥ－第２住Ｂカマド、ＢＥ－第３・５住居跡

2）長軸方向とカマド軸方向がほぼ直交する住居跡……ＢＤ－第２住居跡・ＢＤ－第３住Ｂカマド、ＢＤ－第５住居跡、ＢＥ－第４Ａ住居跡

3）1）と2）の中間の住居跡……ＢＥ－第２住Ａカマド

aでも述べたが、ＢＥ－2住Ａカマドは住居北東隅に位置し、住居跡長軸方向に近くなるように壁に対して約30°傾いて付設されている。

(3) カマドの構造　カマドは基本的には燃焼部と煙道部から構成される。削平、崩落などによってその構造の判明するものはほとんどないが、各カマドの煙道部などに若干の構造の違いが認められた。

1）煙道と煙出しピットから煙道部が構成されるもの……ＢＤ－第3住Ａ・Ｂカマド・第4・5住居跡、ＢＥ－第3・5住居跡

2）煙道部に煙出しピットをもたないもの……ＢＤ－第1・2住居跡、ＢＥ－第2住Ｂカマド・第4Ａ住居跡

3）燃焼部だけもしくはその痕跡だけ検出されたもの……ＢＥ第1・第4Ｂ住居跡・第2住Ａカマド

このように煙道部の違いによって 3 つに大別できたが、3）の燃焼部だけもしくはその痕跡だけが検出されたカマドは本来、煙道部をもっていたが、調査時までにすでに削平されてしまっていたか、あるいは調査時の不備のため煙道部が検出できなかった可能性がある。

(4) 構築の方法

燃焼部－側壁と天井部からなり、焚き口や天井部に甕を受ける穴などをもっていたと考えられるが天井部の残存しているカマドはなく、その構造の明らかなものはない。わずかに残る側壁などからその構築方法を検討する。

1）すべて地山土や粘土を積み上げて構築するもの。

ａ－奥壁にも地山土や粘土を積み上げているもの……ＢＤ－第 5 住居跡、ＢＥ－第 1 住居跡・第2住Ａカマド

ｂ－住居壁を奥壁としているもの……ＢＤ－第2住居跡・第3住Ａ・Ｂカマド、第4住居跡、ＢＥ－第2住Ｂカマド・第3・4Ａ住居跡

2）住居外の地山を掘り込み、さらに住居内に地山土や粘土を積み上げて構築するもの……ＢＤ－第1住居跡、ＢＥ－第2住Ａカマド、第5住居跡

煙道部－煙道と煙出しピットからなる。煙道は本来天井をもっていたと考えられるが、天井部の残存しているのはＢＥ－第5住居跡の煙道東半分だけである。また、煙出しピットの構造が明らかなのも同住居跡だけである。

1）ＢＥ－第5住居跡カマド煙道部の構築方法を検討すると、煙道は燃焼部から地山をトンネル状に掘り込んで構築している。煙出しピットは煙道の幅より径の大きさピットを煙道底面より浅く掘り込み、土師器甕をやや倒位斜めに据えて、その周囲に暗褐色土を埋め土している。甕は口縁が煙道天井と一致するように据えてある。煙道と煙出しピットの構築順序は不明である。

2）その他のカマドでの煙道部の構築上の特徴として次の点をあげることができる。

ａ．燃焼部から煙道部へはすべて段差をもって移行している。

ｂ．煙出しピットを有するものはＢＥ－第 5 住居跡を除いて、ピットが煙道底面より深く掘り込まれている。

ｃ．煙道底面の傾斜はＢＥ－第 5 住居跡の煙道が先端に向って下っているのを除いて、すべて先端に向って昇っていく。

⑸ その他　3 基のカマドの燃焼部内から原位置を保って据えられた状態で支脚が検出されている。いずれも奥壁から 20～30 ㎝離れた燃焼部の¼～⅓の所に位置しており支脚の材質に違いが認められた。また、燃焼部内から支脚として使用されたと思われる高台付坏が出土したカマドもある。

1）一端が平らで偏平な円礫を据え支脚としているもの……ＢＤ－第 3 住Ｂカマド、ＢＥ－第 5 住居跡ＢＤ－第 3 住居跡Ｂカマドでは支脚上に土師器坏が倒位の状態に置かれていた。この土師器坏は火熱を受けた痕跡があり、支脚上の器台として使用されたものと思われる。

2）円柱状の土製品を支脚としているもの……ＢＥ－第 4Ａ住居跡

3）土器を支脚に転用しているもの……ＢＥ－第 1 住居跡

燃焼部内から火熱を受け器壁の剥離が著しい高台付坏が 1 点出土している。支脚として使用されたものが原位置を移動したものと考えられる。

〔貯蔵穴状ピット〕住居跡床面から検出されたピットのうちで、規模や深さが他のピットに比較して大きいものを貯蔵穴状ピットとした。その数と検出位置、平面形、規模などを第 19 表に示した。表でも明らかなように貯蔵穴状ピットには 1）カマドに近接して検出されるもの、2）住居跡隅や壁ぎわに位置しているものとがある。1）には 1 個のピットがカマド右脇に位置するＢＤ－第 3・5 住居跡、ＢＥ－第 2・3 住居跡、カマド右脇で 3 個のピットが切り合っているＢＤ－第 4 住居跡、カマド両脇と周辺に計 3 個のピットがあるＢＤ－第 1 住居跡などがある。これらのピットの堆積土中に焼土・木炭・灰などが含まれている例が多く、このピットの性格の一端を示すと思われる。また、遺物が多量に含まれる例もある。2）にはＢＤ－第 3 住居跡、ＢＥ－第 1・3 住居跡があり、ＢＤ－第 3 住居跡 P_1、ＢＥ－第 3 住居跡 P_7 には多量の遺物が含まれていた。しかし、ＢＤ－第 3 住居跡 P_1 は底面近くの壁が焼けており、性格を異にするピットの可能性がある。

〔まとめ〕　西手取遺跡と手取遺跡から検出された 10 軒の竪穴住居跡について各項目別に様々な観点からその特徴などを検討した。ここでは西手取・手取遺跡の竪穴住居跡の特徴を概括する。

すでに述べたように各住居跡には平面形、規模の大小、周溝、柱穴、貯蔵穴状ピットの有無

や位置、カマドの形態などの違いなどが認められた。また、住居跡の長軸方向が住居跡の位置する部分の微地形と強い関係をもつことや、すべての住居跡の堆積土が流土堆積層であること、すべての住居跡にカマドが認められ、そのカマドの位置が微地形に左右されることなく斉一性をもつことなどが知られた。さらに、各住居跡に共通する特徴を抽出すると次のようになる。

1. 長方形や正方形を呈する平面形ではあるが、すべて各隅は丸味を帯びた隅丸であり、隅丸に近い形でまた歪んだ形のものが多い。
2. 壁はいずれも凹凸をもち、直線的でない。
3. 掘り方底面の地山面を床面としている住居跡が多い。
4. 柱痕跡をもつ柱穴が少なく、主柱穴の明らかな例が少ない。
5. 周溝をもつものは少なく、あっても部分的にしか認められない。

このような特徴は亘理町宮前遺跡、小牛田町山前遺跡、田尻町天狗堂遺跡などで知られた古墳時代～奈良時代の住居跡が、整った平面形で直線的な壁をもち、柱穴の配置に規則性をもつこと、周溝はほとんど全周することが多く、また床面下に住居跡掘り方をもつものが多いこと、カマドをもつ住居跡では壁中央に位置することが多いことなどの特徴をもっているのと比較すると西手取・手取遺跡の住居跡では住居跡構築に際しての規格性が崩れてきたことを示しているものと思われる。

また、各項目間にみられた特徴には、住居跡を類別するような共通性はあまり認められないが、規模の小さい住居跡では住居外の地山を掘り込み、さらに住居跡内に粘土や地山土を積み上げてカマドを構築する例の多いことや、ＢＤ第３･４住居跡のカマドの位置が他の住居跡のカマドの位置と大きく異っていることなどが指適できる。

第19表 住 居 跡 一 覧

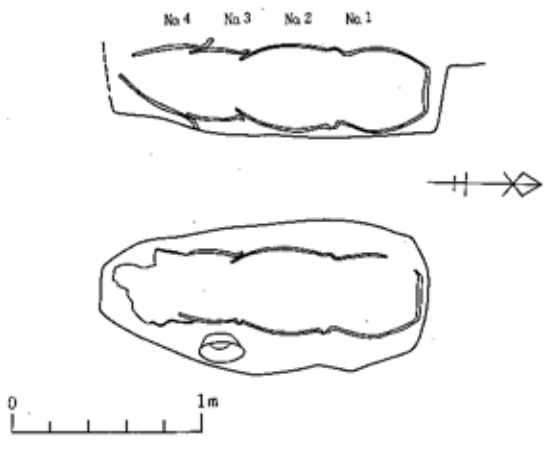
		B			D		B			E		
		第1住居跡	第2住居跡	第3住居跡	第4住居跡	第5住居跡	第1住居跡	第2住居跡	第3住居跡	第4A住居跡	第4B住居跡	第5住居跡
平面形		長方形	長方形	長方形	正方形	正方形	長方形(?)	正方形	長方形	長方形	長方形	長方形
規模	長軸(m)	4.1	4.9	4.7	4.8	4.3	3.9	3.9	5.6	6.9	5.3	3.5
	短軸(m)	3.5	4.2	4.3	4.7	4.2	—	3.7	4.7	5.1	3.9	3.0
	面積(㎡)	13.2	17.7	18.3	19.4	15.1	11.2(?)	11.9	26.1	31.5	21.2	8.2
長軸方向		N—75°—W	N—45°—W	N—4°—W	N—10°—E	N—41°—E	N—69°—W	N—67°—W	N—62°—W	N—48°—W	N—51°—W	N—70°—W
壁		地山	地山	地山	地山 (東壁Ⅳ層～地山)	地山 (東北壁Ⅲ～Ⅳ層)	Ⅲ層	地山	地山	地山	地山	地山
床面		地山	地山	全面貼床	全面貼床	部分貼床	全面貼床	地山	地山	部分貼床	地山	地山
周溝		有(南壁ぎわ)	なし	なし	なし	なし	なし	なし	有(北壁)	なし	有(南壁)	有(西壁)
柱穴		4 (?)	5 (?)	4(?)	5	4	—	—	6	4 or 6	不規則	—
カマド	位置	東壁北端	北壁東寄	A. 南壁西寄 B. 東壁中央	南壁西寄	東壁北寄	東壁北寄	A. 北壁東端 B. 東壁北端	東壁北端	北壁東寄	北壁東寄	東壁北端
	方向	N—86°—W	N—55°—E	A. N-0°-E B. N-77°-E	N—10°—E	N—45°—W	N—65°—W	A. N-40°-E B. N-82°-E	N—66°—W	N—54°—E	—	N—80°—W
	燃焼部	掘り込み+積み上げ	積み上げ	A. 積み上げ B. 積み上げ	積み上げ	積み上げ	積み上げ	A. 掘込み+積み上げ B. 掘り込み	積み上げ	積み上げ	痕跡	掘り込み+積み上げ
	煙道	短↗	短↗	A. 長↗ B. 長↗	長↗	長?	?	A. ? B. 短↗	長↗	短↗	—	長→
	燃出しピット	無	無	A. 有 B. 有	有	有	?	A. ? B. 無	有	無	?	有(土師甕)
貯蔵穴状ピット		カマド両脇 周辺3	カマド右 1	北壁ぎわ 1	カマド左 3	カマド右 1	南東隅 1	カマド周辺1	カマド右1 北隅1 南東隅 1 南壁ぎわ1	—	—	—
支脚				B—有						有		有

埋甕を伴う土壙

手取遺跡のB地区北斜面、住居跡群から離れた位置で埋甕を伴う土壙が1基だけ単独で検出された。第III章で詳しく述べたが、その特徴をまとめると

1. 土壙は長軸90㎝、短軸45㎝で楕円形の平面形をもち、深さは確認面から約20㎝である。土壙の長軸方向は磁北から1°西偏している。
2. 土壙内から長軸に沿う形で横位に埋設された4個体の土師器甕からなる合口埋甕と完形の土師器坏が出土した。合口埋甕の総長は約80㎝である。
3. 土壙内からは上記の遺物以外の出土はなく、埋甕内からも同様である。また、土壙内や周辺からこの遺構に伴うと思われる施設は検出されなかった。

手取遺跡から出土した合口埋甕をさらに詳しくみるため、埋甕を構成する4個の土師器甕の計測値を第20表に示し、接合図化した甕を、土壙の平面実測図や写真に基づいてならべたのが第51図で、土壙長軸方向の縦断・横断図で表わしている。第51図でも明らかなように、甕No.2に甕No.3と甕No.4がさしつながれており、甕No.2～甕No.4の長さは約60㎝である。しかし、甕No.4は底部を欠くだけでなく、口縁部から体部下半まで、全体の約¼を欠いている。出土状況などから、この甕No.4は完形品でなく、2つの大形破片で、その一方を土壙底に敷き、他の破片はその上を覆っていたものと思われる。また、甕No.1は底部を有するほぼ完形の甕であるが、埋設状態での左横にあたる体部下半を12×8㎝の範囲で欠いている。土壙内からこの部分の破片は出土せず、攪乱を受けた痕跡もないことから、埋設当初から甕No.1には穴があいていたのは確実である。この穴が甕埋設時にあけられたのか、壊れて穴のあいた甕を埋甕に使用したのかは明らかではない。第10表に甕No.1・2の頚部内径と甕No.2・3の破損部での最大・最



第51図　埋甕断面図

第20表　埋甕計測表

		土師器甕			
		No.1	No.2	No.3	No.4
口径		21.6	22.1	19.4	23.7
頚部内径		18.1	19.9	16.4	19.5
最大径		22.0	23.0	19.7	22.5
底径		10.9	不明	不明	不明
破損部	最大内径	—	15.1	17.0	—
	最小内径	—	12.5	15.3	—
器高		25.0	不明	不明	不明

小内径を示してある。第51図に示したように埋甕中に何かを収納する場合、いずれも狭隘となる部分で、最も狭い甕No.2の底部付近では、最大でも15.1㎝の幅しかもたない。つまり、この埋甕は収納空間として約85㎝の長さをもつが、最も狭隘な部分では長径15.1㎝、短径12.5㎝しかないのである。

このように土師器甕が口縁を合わせた状態で横位に埋設された例は岩手県江釣子村本宿羽場遺跡、水沢市上野遺跡、胆沢町松原遺跡、秋田県秋田市秋田城跡から発見されており、手取遺跡例を含めて岩手・秋田・宮城県から発見された5例が斉藤尚巳・沼山源喜治両氏によって紹介されている（斉藤・沼山：1974）。宮城県内ではその後、仙台市安久東遺跡で2例（仙台市教委：1976）、築館町佐内屋敷遺跡で1例（宮城県教委：1978）が検出されている。

以上、7遺跡から8例の合口埋甕が出土しているが、手取遺跡のように4個体の甕を使用する例はなく、すべて2個の甕によって構成されており、土壙内に土師器坏が伴出する例もない。

また、秋田城例のように土壙底に木炭が敷かれる例もあり、若干の相違が認められる。しかし、埋甕にはすべて土師器甕が使用され、横位に埋設されること、本宿羽場遺跡・秋田城跡・安久東遺跡・佐内屋敷遺跡では土壙を伴っており、土壙を伴う例の多いこと、土壙や合口埋甕の長軸方向が南北方向を示す傾向をもつこと、また、埋甕内からはなにも出土しないことなど共通する点が多い。

この合口埋甕の性格について、斉藤・沼山両氏はこの遺構のもつ共通の特徴や本宿羽場遺跡・上野遺跡の合口埋甕遺構の燐分折の結果などから埋葬施設であるとし、乳幼児甕棺である可能性を指摘している。手取遺跡においても出土位置が集落北端であること、土壙の長軸方向が磁北にほぼ一致すること、土壙内から伴出した完形の土師器坏の存在、埋甕内からなにも出土せず、また、その収納空間の大きさなどから乳幼児甕棺墓である可能性を認めることができる。

土壙

西手取遺跡のⅡ区から1基、手取遺跡のⅠ区から1基、計2基の土壙が検出された。西手取遺跡の土壙は壙底に小ピットをもち、土壙内堆積土は自然流入堆積の様相を示していたが、出土遺物はなく時期・性格は不明である。手取遺跡の土壙は堆積土が1層で、土壙より多量の遺物が出土した。出土遺物より住居跡群と同一時期の土壙と考えられるが性格は不明である。

溝

手取遺跡のⅡ区南端で一条検出された。この溝は第2住居跡を切って掘り込まれており住居跡よりも新しい時期のものである。また、堆積土も単層であまりしまりをもたず、近世の溝の可能性もある。

2. 遺　物

(1)　出土遺物の観察と計測

前記第Ⅲ章でみられるように、本遺跡から出土した遺物には、土器・土製品・石製品などがある。

土器類は縄文土器・土師器・須恵器・赤焼土器などであるが、土師器がその大半を占め、赤焼土器・須恵器と続く。縄文土器はすべて小破片で量も少ない。

その他の遺物としては、土製品では支脚、石製品では石鏃・石匙・石錐・剥片石器・剥片や砥石などがある。

ａ．出土遺物の観察

出土遺物の観察は、遺物の大半を占める土器類を中心におこなった。これらの土器類は、各地区から出土したもの、各遺構から出土したものとに振り分け、種別ごとにそれぞれ観察着眼点を設定した。

(1)縄文土器の観察

縄文土器はすべて小破片でまとまった器形をもつものは全くないため、次のような点に留意し、観察をおこなった。

①胎土（素地土・混入物・色調）

②器面調整・文様表現技法（器面調整技法・縄文原体の組成・文様表現技法）

(2)土師器・須恵器・赤焼土器の観察

これらの出土土器は出土遺物の大半を占めるものである。これらは、破片・完形を問わず以下の観察をおこなった。

①色　　調

②焼成の度合（還元焔焼成、酸化焔焼成）

③器　　形（丸底・平底・口縁部形態・体部形態・器高・口縁径・底径）

④成形技法（ロクロ不使用・ロクロ使用）

⑤調整技法（回転ヘラケズリ・手持ちのヘラケズリ・ヘラミガキ・ナデ・ヘラナデ・タタキ目・オサエ圧痕・黒色処理・その他）

これら(1)・(2)の土器類は、それぞれ破片、実測可能な破片(¼以上)と完形品に分け、実測可能なものはすべて実測図を作成し、分類をおこない、実測不可能な破片については観察、集計をおこない一覧表で提示することにした。なお、縄文土器については、すべて破片のため、拓本の作成と断面実測に留め、註記を加え分類をおこなった。

ｂ．遺物の計測

遺物のなかでも縄文土器を除く、土師器・須恵器・赤焼土器については、それぞれの特性を導くために、いろいろな計測を試みた。今回はそれぞれの器種の中から坏だけを抽出しておこなった。なお、計測項目は次のとおりである。

①口径　②底径　③器高　④立ち上がり角度　⑤ふくらみ度　⑥色調

①口径

各器種ごとの口径値の頻度状況は（第 52 図）のとおりである。

土師器についてみると 13～16 ㎝に分布し、14 ㎝内外に全体の 81%が集中している。須恵器は個体数が少ないため分布上の特性を知ることは不可能である。赤焼土器の場合は 13.8 ㎝～14 ㎝に全体の 38%、13 ㎝以下に 62%と分布が分かれるが、全体的には土師器・須恵器に比して小さい位置に分布している。

②底径

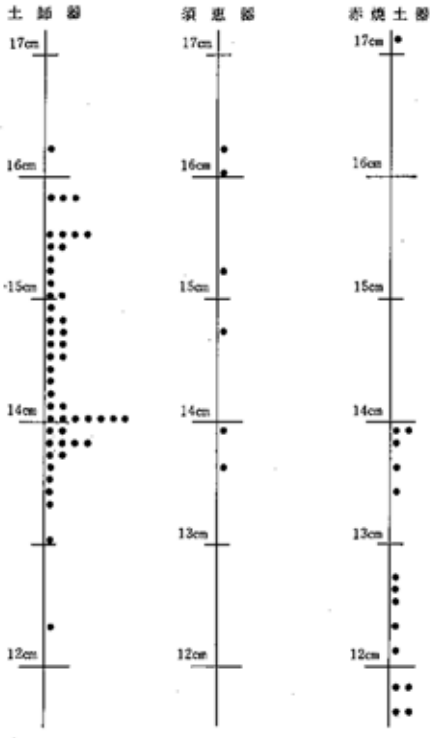
器種ごとの底径値の頻度状況は（第 53 図）のとおりである。

土師器については 5 ㎝内外～7 ㎝前後に分布し、6 ㎝前後に頻度が高く、全体の 58%が集中している。須恵器の分布もその範囲に分布している。赤焼土器の場合は、5～6 ㎝に頻度が高く、全体の 62%が分布している。前 2 者に比して底径も小さい位置に分布している。

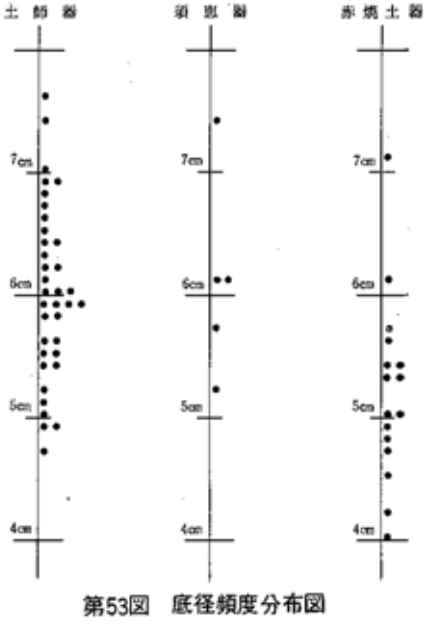
③器高

器種ごとの器高値の頻度状況は（第 54 図）のとおりである。

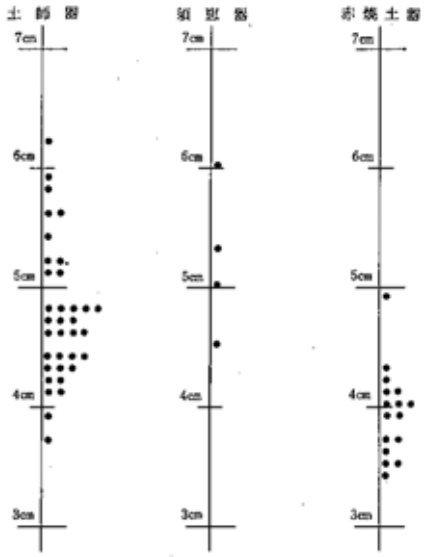
土師器・須恵器は 4～6 ㎝内に分布し、4～5



第52図　口縁径頻度分布図



第53図　底径頻度分布図



第54図　器高頻度分布図

cm内に頻度が高い。赤焼土器は3.5～4.5 cm内に分布し、4 cm前後にその頻度が高いことを示している。

④立ち上り角度

器種ごとの立ち上り角度の頻度状況は（第55図）に示したとおりである。

これら各器種ごとの立ち上り角度の計測方法は、底面を延長した線を底辺とし、底面端と口唇端を結んだ線を設け、その線と底辺との交点の角度を計測値とした。

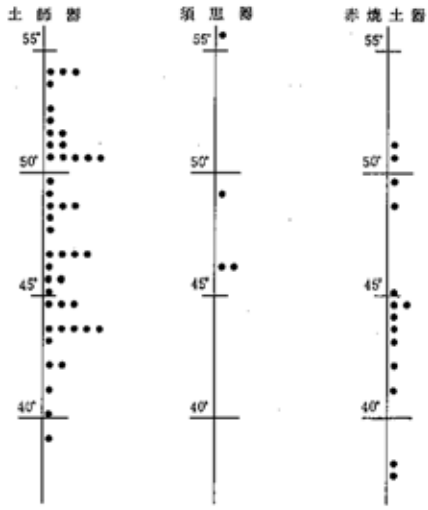
これをみると土師器は、40°～55°の範囲に一様に分布、須恵器は 45°～50°の中に分布、赤焼土器は45°未満に大半が分布し全体の 77%におよぶ。土師器・須恵器に比較すると低角度に位置する特徴をもっている。

⑤ふくらみ度

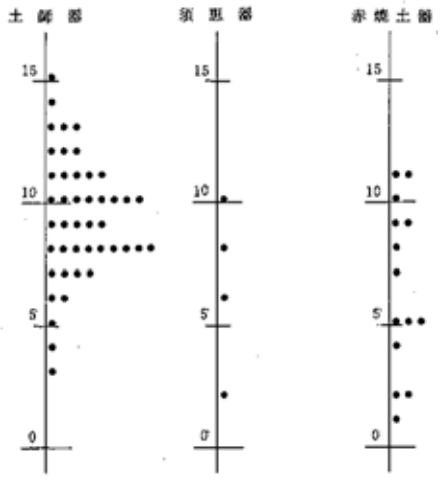
器種ごとのふくらみ度の頻度状況は（第56図）に示したとおりである。

計測方法は、底部端と口唇端を結んだ線上で体部の外面が描きだす曲線が、その結線上から最大にはみ出した長さを、その結線の長さで割り、その数値に100を乗じた割合をふくらみ度とした。

$$\frac{\text{底部端と口唇端を結んだ線から体部曲線が最大にはみ出した長さの値}}{\text{底部端と口唇端を結んだ線の長さの値}} \times 100$$



第55図　立ち上り角度頻度分布図



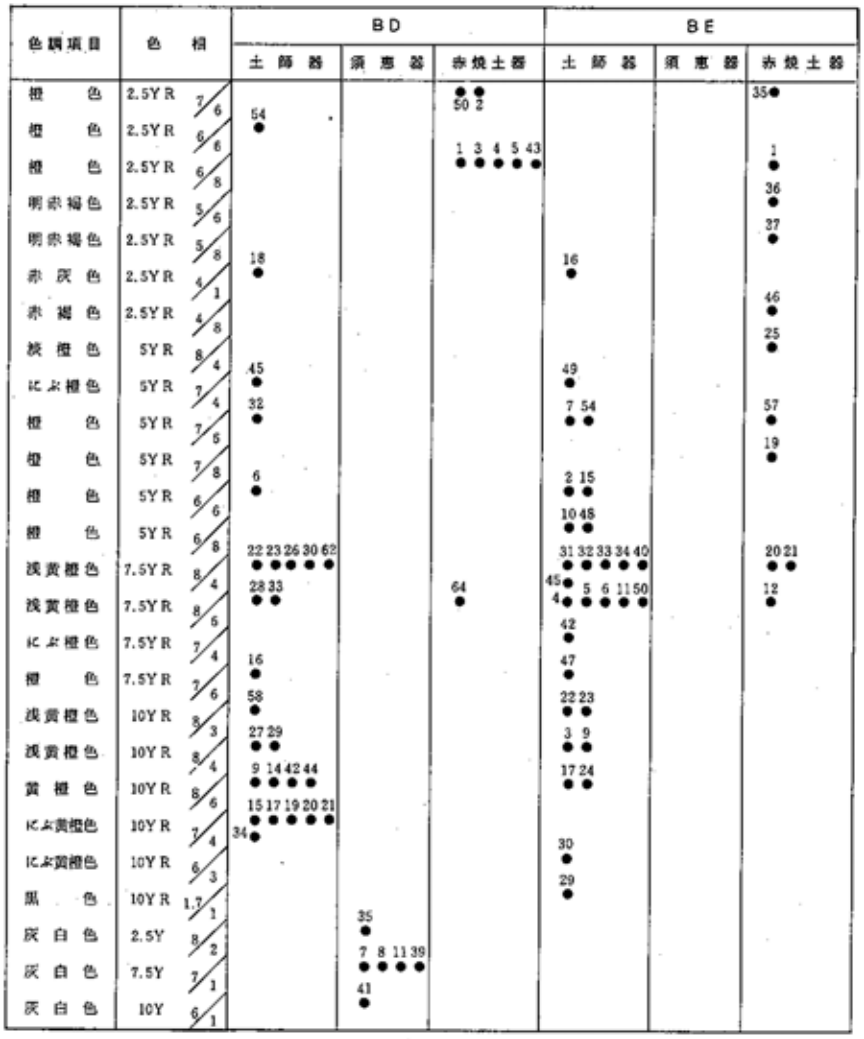
第56図　ふくらみ度頻度分布図

これらの頻度状況をみると、土師器に於いて5～15の値の範囲に分布し、10前後にその頻度が高いことを示す。全体的に8未満についてみると須恵器・赤焼土器は50%以上になり、土師器に比してふくらみ度は低いことが示されている。

⑥色調

器種ごとの色調の状況については（第57図）に示してある。

ここに提示した図表の組み立ては新版標準土色帖（小山・竹原：1967）を使用した。そのなかで使用されている色相は次のとおりである。色相をR（赤）からRP（赤紫）までの間を100分割し、その中で調査対象物に該当したものを色相順に配列したものである。また、理想的な黒を0とし、理想的な白を10として、その明るさを10/、9/、8/……順に記号化し、これも対象物に該当したものを明度として、順々に配列、次に、無彩色を0とし、色味の冴えかた、あ



第57図　色調分布図

ざやかさの度合を/1、/2、/3、/4…順に記号化し、対象物に該当したものを彩度として、順々に配列したものである。例えば 2.5ＹＲといった場合赤味の強い赤橙色で、¼となった場合明るく冴えた赤橙色という意味になる。

土師器の色調は、2.5ＹＲ～10ＹＲの範囲に分布しているが、おもに7.5ＹＲ～10ＹＲ内に頻度の高い特徴をみることができる。つまり、概して淡黄橙色糸の色相と比較的明度も高く、彩度も高い特徴をそなえている。

須恵器の場合は 2.5Ｙ～10Ｙに分布し、灰白色系の色相を呈する。彩度は全体的に低い傾向をみる。須恵器の特性をそなえている。

赤焼土器は2.5ＹＲ～5ＹＲに分布し、この範囲に頻度が高く、土師器に比較して赤味が強く、色相は赤・橙褐色系に属し、明度・彩度ともに高い。土師器が黄橙色系に属しているのに対し、赤焼土器は赤橙褐色系に属している。

以上①～⑤については頻度状況を各器種ごとにみてきたが、ある定った機能を目的として製作された器形については、若干の相違はあるものの、これといった器種ごとの特性は認められなかった。⑥については、色相の配列からみて、土師器・赤焼土器は 2.5ＹＲ～10ＹＲへ漸移的に分布し、その中で土師器は 7.5ＹＲ～10ＹＲの淡黄橙色系に頻度が高く、赤焼土器は 2.5ＹＲ～5ＹＲの赤橙褐色系に頻度の中心がある。これからみて、赤焼土器は色相では土師器の色調をそなえているといえる。しかし、須恵器は 2.5Ｙ～10Ｙに頻度が高く、灰白色系の色相をもっていることから、前者からははずれてくる。これらのちがいは、酸化焔焼成と還元焔焼成の相違からくる焼成技法のちがいによる特性と考えられる。しかし、これら①～⑥の計測方法は、一遺跡の数少ない資料内では、これといった結論は出し得ない。今後、累積的な計測資料をまって検討すべき問題であると考えられる。

(2)　出土遺物の分類

ａ．縄文土器

西手取遺跡の中央平坦部や北緩斜面に位置する住居跡の堆積土中や中央平坦部・北斜面の第Ⅰ・Ⅱ層から合計 70 数点の縄文土器が出土している。また、手取遺跡でもＢ地区平坦部から北斜面にかけて 11 点の縄文土器が主として第Ⅰ層から出土している。これらの土器は層位的にまとまって出土したものではなく、量的にも少ないため両遺跡出土の土器を合せて分類し、編年的な位置などを検討する。

１．分類

両遺跡出土の縄文土器はいずれも小破片で保存の良好なものは少ない。また、器形や文様の明らかなものも少ないため、主として破片の部位・胎土・調整・地文の違いなどによって分類を進めた。まず、縄文土器は胎土中に繊維を含むもの（Ａ類）と含まないもの（Ｂ類）とに大

別される。A類はさらに口縁部破片であるか、体部破片であるかの部位の違いや、内面の調整などの違いによって細分される。B類も同じく部位の違いや器種の違いなどによって細分される。

A類

Ⅰ－口縁端を欠くが口縁部から体部にかけての破片で、内面には条痕文が施され、外面の口縁部と体部の境に隆帯をもつ。外面施文の違いによって3つに細分できる。ａ－口縁部と体部に条痕文が施され、隆帯上に貝殻腹縁による刺突文が施されるもの。ｂ－口縁部には条痕文、体部に縄文が施され、隆帯上に指頭状圧痕文が施されるもの。ｃ－同じく口縁部には条痕文、体部には縄文が施され縄文末端が隆帯まで及んでいるもの。

Ⅱ－口縁部破片で、外面には縄文が、内面には条痕文が施され、口唇部にも縄文が回転施文されるもの。

Ⅲ－体部破片で、内面に条痕文が施され、外面には斜行縄文が施されるもの（ａ）や羽状縄文（ｂ）、沈線文（ｃ）などが施されるもの。

Ⅳ－体部破片で、内面に擦痕文が認められ、外面には縄文が施されているもの。

Ⅴ－体部破片で、外面に縄文や条痕文が施されるが、内面の器面調整が磨滅や剥落で不明なもの。

Ⅵ－体部破片で、外面に縄文が施され内面に条痕文や擦痕文がまったく観察されないもの。

B類

胎土に繊維を含まず、内面にはミガキが加えられ、平滑になっているものである。

Ⅰ－鉢形土器の口縁部破片で、外面には浮線的な工字文が施され、口縁部内面には一条の沈線が巡るものである。

Ⅱ－口縁部を欠くが、口頸部が屈曲する鉢形土器の口頸部から体部上半にかけての破片である。頸部が無文帯となるもので、体部には縄文（ＬＲ）が施されている。頸部下端に沈線の巡るものもある。

Ⅲ－体部破片で、外面には地文だけが施されているものである。施文原体はＬＲが多いが、ＲＬや無節もある。

２．年代

縄文土器は胎土中への繊維の混入の有無によってＡ・Ｂ両群に大別できた。繊維を含むA群のうちＡⅠ～AⅢ類は内面および外面にも条痕文が施されており、いわゆる条痕・条痕文系の土器群と考えられる。このうちＡⅠ類は口縁部と体部の境に隆帯をもち、隆帯上に貝殻腹縁文や指頭状圧痕文を有しており、ＡⅠｂ・ＡⅠｃ類は隆帯をはさみ口縁部に条痕文、体部に縄文が施文され、ＡⅠａ類では口縁・体部共条痕文が施されている。このように口縁部と体部の境

に隆帯をもつ条痕文土器は小牛田町素山貝塚(伊東：1940)、山前貝塚(小牛田町教委：1976)などで出土しており、このような土器群は素山２式とされ、早期末に位置付けられている。ＡⅡ類、AIII類の縄文・条痕文土器なども同様に素山２式に属すると考えられる。AIV類は内面に擦痕文が施される土器で、このような土器は、石巻市南境貝塚妙見地区(後藤他：1969)から羽状縄文土器に伴って出土しており、前期初頭に位置付けられている。ＡⅤ類は内面の調整が不明であるが、本来は内面に条痕文が施されていたものと考えられる。AVI類は内面に条痕文や擦痕文が施されない繊維土器で、このような土器は早期末～前期初頭の幅広い時期の特徴である。

Ｂ類は胎土に繊維を含まず、内面にはミガキが加えられている。ＢⅠ類の外面には浮線的な工字文が施され、口縁内面には沈線が巡っている。このような工字文をもつ土器は一迫町巻堀遺跡(一迫町教委：1977)などから出土し、晩期大洞A式に位置付けられている。ＢⅡ類は口縁部を欠くため詳細は不明であるが、屈曲する頸部が無文帯となり、頸部から体部上半にかけて沈線が巡るものもあることから、晩期中葉大洞Ｃ式期の深鉢形土器と考えられる。BIII類は地文だけが施されるもので、所属時期を明らかにすることはできないが、ＢⅠ・ＢⅡ類と近接して出土しており、晩期に属する土器と思われる。

第21表　縄文土器の分類と出土地点

分類	西手取 出土地点(図)	手取 出土地点(図)
ＡⅠa	ＢＯ25－２(第25図１)	
b	ＢＣ19－５(第25図２)	
c	ＣⅠ19－２(第25図３)	
ＡⅡ	ＢＮ17－２(第25図４)	
ＡIII a	第２住居跡(第９図６)　第４住居跡(第21図５) 第５住居跡(第23図４～６)　ＢＮ17－３(第25図５) ＢＪ17－１(第25図６)　ＢＱ17－２(第25図７) ＢＬ19－２(第25図８)　ＢＥ25－２(第25図９) ＢＪ17－２(第25図10)　ＣＪ19－２(第25図11) ＢＪ19－２(第25図12)　ＢⅠ17－１(第25図13) ＢＤ19－２(第25図14)　ＣＬ12－１(第25図15) ＢＬ19－２(第25図16)	
b	第２住居跡(第９図５)　ＣＬ13－１(第25図17) ＣＧ12－１(第25図18)　ＣＭ19－２(第25図19)	
c	第２住居跡(第９図４)	
ＡⅣ	ＢＭ19－２(第25図20)　ＢＬ19－２(第25図21)	
ＡⅤ	ＢＨ23－２(第25図22)　ＢＨ23－２(第25図21) ＢＮ15－３(第25図24)	
ＡⅥ		(第48図１)
ＢⅠ	第５住居跡(第23図７)	
ＢⅡ		Ｄ14－１　(第48図２)　ＣＢ25－１(第48図３)
ＢIII	第１住居跡(第16図２)　ＣＮ13－２(第25図25) ＣＬ13－１(第25図26)　ＣＬ12－１(第25図27) ＢＳ21－２(第25図28)	土　　手(第48図４)　ＢＭ13－１(第48図５) ＣＢ25－１(第48図６)　ＣＴ52　(第48図７) ＢＭ13－１(第48図８)　Ｅ45－１　(第48図９)

b．土師器

出土遺物の大半を占める土師器には、坏・高台付坏・甕・手づくね土器などがある。手づくね土器を除いては、各器種の形態的特徴や製作に際してのさまざまな技法を観察・検討を加えることによって、それぞれ器種はひとつのまとまりをもった類型化ができる。なお、これらの分類は、器種毎の器形が比較的良好な保存状態で、図示可能なものを対象におこなうこととした。

坏

坏は製作に際し、すべてロクロを使用しているものである。これらは底部外面に再調整のあるものを（A類）とし、ないものを（B類）とする。

なお、各類の器形の形態的特徴から次のような分類が可能である。

（a） 体部から口縁部へ直線的に外傾するもの。

（b） 体部から口縁部まで内弯気味に外傾するもの。

（c） 体部はやや丸味をもって外傾し、口縁部でわずかにあるいは強く外反するもの。

坏A類 底部切り離し後再調整が加えられているため、切り離し技法が不明なものである。これらは底部や体部外面の再調整の相違によって、ＡⅠ類～AIV類に細分される。

ＡⅠ類 口径8.6㎝、器高3.4㎝と小形の坏で、底部から体部下半までの外面に回転ヘラケズリ後、丁寧なヘラミガキが施され、底部の切り離しが不明なものである。しかし、底部外面には回転ヘラ切り技法によって生じる痕跡様のものが、わずかに観察される。外面のヘラミガキの方向は底部が放射状、体部下半が斜方向である。内面は底部に放射状、口縁部から体部に斜・横方向の丁寧なヘラミガキが施され、内外面とも黒色処理されている。なお、器形上の特徴としては（b）に該当する。

ＡⅡ類 回転ヘラケズリの再調整をうけ、底部の切り離し技法が不明のものである。外面は体部下半にロクロ回転によるヘラケズリの調整後、口縁部から体部の全面に横・斜方向の丁寧なヘラミガキが加えられ、黒色処理が施されているものであるが底部にはヘラミガキが加えられていない。内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、体部下端から底部が一定方向、他は横・斜方向に施されている。底部外面の中心部付近には「×」印のヘラ書きがあるもので、形態的特徴としては（b）に該当する。

AIII類 回転ヘラケズリの再調整をうけ、底部の切り離し技法が不明なものである。体部下半にもロクロ回転によるヘラケズリの調整が加えられている。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は、体部下端から底部では放射状・一定方向、他の部分では横方向・斜方向と規則性はない。なお、底部外面の中心付近に「×」印がヘラ書きされているものもある。器形の特徴としては（a）が1点、他はすべて（b）である。

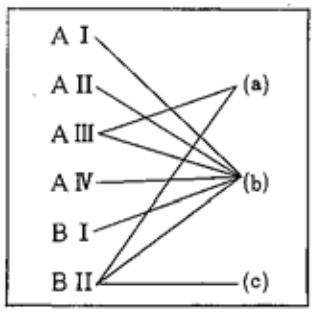
AIV類　再調整のため、底部の切り離し技法が不明である。底部から体部外面下端まで手持ちのヘラケズリの再調整が加えられているものである。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、体部下端から底部へ放射状、体部で斜方向、口縁部付近で横方向である。器形的には（b）に該当するものである。

坏B類　底部に再調整を加えないもので、ロクロを回転させながら糸で切り離す、回転糸切りの痕跡を残すものである。ロクロの回転方向は右回転のものが殆んどである。これらは、体部の外面に施された調整技法の違いによって以下のように細分される。

ＢⅠ類　底部の切り離し技法は回転糸切りで、再調整をもたないものである。体部外面下端部には手持ちのヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は体部下端から底部が放射状、他の部分はほぼ横方向のヘラミガキである。器形的には（b）に該当するものである。

ＢⅡ類　底部の切り離し技法が回転糸切りのもので、再調整がないものである。器面調整は体部外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は体部下端から底部で放射状、他の部分では横方向、あるいは斜方向である。器形の形態的特徴はａ～ｃまでそれぞれあるが（ｃ）は（ａ）の５倍、（ｂ）の２倍で、（ｃ）が最も多い。

以上のように分類されるが、これらは前記の器形的特徴との組み合わせをみると次のようになる。



種別		分類基準			
		底部切り離し技法	外面再調整		内面
			種類	部位	
				体部下端	底部	
A	Ⅰ	不明	回転ヘラズリ後ヘラミガキ・黒色処理	有 有	有 有	ヘラミガキ＋黒色処理
A	Ⅱ	不明	回転ヘラケズリ後ヘラミガキ・黒色処理	有 有	有 —	ヘラミガキ＋黒色処理
A	Ⅲ	不明	回転ヘラケズリ	有	有	ヘラミガキ＋黒色処理
A	Ⅳ	不明	手持ヘラケズリ	有	有	ヘラミガキ＋黒色処理
B	Ⅰ	回転糸切り	手持ヘラケズリ	有	—	ヘラミガキ＋黒色処理
B	Ⅱ	回転糸切り	—	—	—	ヘラミガキ＋黒色処理

高台付坏

坏同様、製作に際してはロクロを使用しているものである。高台はすべて付高台である。これらは、坏部製作後の高台付着時の調整が坏底部全面に加えられ、底部切り離し技法が不明のもの（A類）と、高台の接合部分にだけ調整が施され坏底部の切り離しが明らかなもの（B類）に大別される。なお、高台部・坏部の形態的特徴から次のような細分も可能である。

(a) 高台部は比較的高く外反し、または直線的に外傾する。坏部は底部から体部へ直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに緩く外反するもの。

(b) 高台部は比較的高く、強く外反する。坏部は浅い皿状で、底部から口縁部へほぼ直線的に外傾するもの。

(c) 高台部は(a)・(b)に比して低く、強く外傾している。坏部は底部から体部方向にかけて強い丸味をもって立ち上がり、口縁部で緩く外反するもの。

高台付坏A類　坏部と高台部の接合の際に、坏底部の切り離し技法が不明になるほど底部全面に再調整が加えられているものである。さらに器面調整や器形の特徴によって細分される。

ＡⅠ類　坏部と高台部の接合の際の再調整が底部全面におよんでいるものである。高台付着後、底部中央から周縁に向って左回りに胎土をかきよせた痕跡がみられるもので、その痕跡が菊花状になっているものである。さらに、ナデ調整が施される場合もある。坏部の内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されるが、再酸化をうけているため、黒色処理がとんでいるものもある。ヘラミガキの方向は体部下端から底部へ放射状、その他は横方向、あるいは斜横方向である。器形的には（ａ）と（ｂ）の２種がある。

ＡⅡ類　坏部と高台部の接合の際の再調整が底部全面におよんでいるもので、その調整は高台接合部ではナデ調整、底部外面全面にも軽いナデ調整が施されている。坏部の内面にはヘラミガキを施している。ヘラミガキの方向は底部・体部ともに斜・横方向である。器形的には（ａ）に該当するものである。

高台付坏B類　坏部と高台部の接合の際に接合部分だけが調整されていて、坏底部の中心まではおよばず、坏底部の切り離し技法が判明できるものである。さらに、坏体部内外面の調整技法に相違によって細分される。

ＢⅠ類　坏部と高台の接合部にナデ調整が施されてはいるが、その調整が坏底部の中心まではおよばず、坏底部に回転糸切り技法の痕跡が認められるものである。坏部の内外両面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、坏体部外面がほぼ横方向であるのに対し、内面が坏体部下端から底部方向へ放射状、その他は斜横および横方向へ施されている。器形的には（Ｃ）に該当する。

ＢⅡ類　坏部と高台部の接合部分にナデ調整が施されているものである。その調整は坏底部

の中心部付近まではおよばず、底部を切り離したときの回転糸切り離し技法の痕跡が判明できるものである。坏部内面はヘラミガキ・黒色処理されている。ヘラミガキの方向は坏下端から底部が放射状、または斜横方向、他の部分では横方向・斜横方向となっている。器形的特徴は（ａ）である。

甕

甕には、製作に際してロクロを使用しないものとロクロ使用のものとがある。これらは口径と器高の比や最大径の位置によって細分される。

A類　ロクロを使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。

B類　ロクロを使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が体部にあるもの。

C類　ロクロを使用し、口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。

D類　ロクロを使用し、口径より器高が大きく最大径の位置が体部にあるもの。

E類　ロクロを使用し、口径より器高が小さく最大径の位置が口縁部にあるもの。

F類　ロクロを使用し、口径より器高が小さく最大径の位置が体部にあるもの。

〈甕A類〉器高が口径より大きく、最大径の位置が口縁にあるものである。いずれも頸部から口縁部へなだらかに屈曲して、口縁端が丸くおさまり、体部最大径との差はあまりない。口径15㎝前後とすべて小形の甕である。

器面調整は、外面の口縁部には横ナデが、頸部付近から体部全面には縦方向のヘラケズリが施されている。内面は口縁部に横ナデやナデ調整、体部には不定方向のナデ調整が施されている。

〈甕B類〉器高が口径より大きく、体部に最大径があるものである。口径20㎝以上の大形のもの（ＢⅠ類）が多いが、口径15㎝ほどの小形のもの（ＢⅡ類）も１例ある。ＢⅠ類・ＢⅡ類とも最大径の位置は体部上半にもち、口径との差がわずかなものが多い。頸部から口縁部へ緩く外反、あるいはやや強く外傾するが、口縁部は短く、口縁端部は丸くおさまる。外面の器面調整は口縁部には横ナデ、体部には縦方向のヘラケズリが施される。ヘラケズリが頸部にまで及んでいるものもある。内面は口縁部に横ナデ、体部にナデ調整が施されるものと全体的に不定方向のナデ調整が施されるものとがある。

〈甕C類〉製作にロクロを使用したもので、器高が口径より大きく、口縁部に最大径をもつものである。いずれも体部はあまり脹らまず、長胴形を呈しており、口径が20㎝以上と比較的大きく、大形のもの（ＣⅠ類）とやや小形のもの（ＣⅡ類）とがある。

ＣⅠ類・ＣⅡ類にかぎらず、ロクロ使用の甕の口縁部形態には、大きく２つの形態が認められる。頸部で屈曲し、強くあるいは緩やかに外傾、外反する口縁部の端部が、そのまま丸く、あるいは角ばっておさまるもの（口縁部形態ａ）と、口縁端部が上方や内傾気味にわずかにあ

るいは大きくつまみ出されるもの（口縁部形態ｂ）とがある。ＣⅠ類・ＣⅡ類の口縁部形態にはａ・ｂ両方があり、ｃⅠａでは口縁端部は丸くおさまり、ＣⅡａ類では角ばっている。

ＣⅠ類・ＣⅡ類ともに器面調整は外面が口縁部から体部上半までロクロ調整、体部はロクロ調整後、縦方向のヘラケズリが施される。頚部近くまでヘラケズリされているものもある。内面は口縁部がロクロ調整され、ロクロ調整が体部まで及ぶものと、体部にはナデ調整が施されるものとがある。

〈壺D類〉製作にロクロを使用したもので、器高が口径より大きく、体部に最大径をもつものである。口径の違いと体部形態により細分することができる。

ＤⅠ類　口径 20 ㎝以上で体部最大径の位置が中央付近にあり体部は脹む。頚部から強く外傾した口縁部は、端部が上方にあるいは内傾気味につまみ出されている（口縁部形態ｂ）。

ＤⅡ類　口径 20 ㎝前後で、体部最大径の位置を体部中央付近にもつが、あまり脹まず長胴形となる。口縁部形態にはａ・ｂの両方がある。

器面調整は外面が口縁部から体部上半までロクロ調整、それ以下にはロクロ調整後、縦・斜方向のヘラケズリが施されるものと二次的と思われる粘土の付着で不明なものとがある。内面は全面にロクロ調整が施されるが、体部にナデ調整が施されるものもある。

〈壺E類〉製作にロクロを使用したもので、器高が口径より小さく、口縁部に最大径をもつものである。口径の違いや体部最大径の位置、器面調整の違いなどによって細分できる。

ＥⅠ類　口径 20 ㎝以上の大形の甕で、体部最大径を上半にもつ。口縁部形態はｂで、わずかに上方につまみ出されている。

器面調整は外面では口縁部から体部上半がロクロ調整、体部には縦・斜方向のヘラケズリが施される。内面は横方向のヘラミガキが施される。

ＥⅡ類　口径 15 ㎝以下の小形の甕で、体部最大径を上端にもつ。器形的にはいわゆる鉢形のものである。口縁部形態はｂである。

器面調整は内外面共にロクロ調整で、体部下半に横方向のヘラケズリが施されている。底部外面は磨滅のため不明である。

ＥⅢ類　口径 15 ㎝以下の小形の甕で、体部最大径の位置を体部中央にもつ。口縁部形態にはａとｂとがある。

器面調整は内外ともロクロ調整である。

〈壺F類〉製作にロクロを使用したもので、器高が口径より小さく、体部に最大径をもつものである。頚部でゆるやかに屈曲し、口縁部は外反するが短い。口縁部形態はａで端部は丸味をもっている。最大径と口径との差はあまりない。

器面調整は外面がロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施される。

	口径と器高	最大径の位置	法　量	口縁端部	内面調整
ロクロ未使用	口径＜器高	A．口縁部	小　形		横ナデ・ナデ
		B．体　部	I．大　形		〃
			II．小　形		〃
ロクロ使用	口径＜器高	C．口縁部	I．大　形	a．外傾、外反	〃
				b．直立、内傾	〃
			II．小　形	a．	〃
				b．	〃
		D．体部	I．大　形	b．	〃
			II．小　形	a．	〃
				b．	
	口径＞器高	E．口縁部	I．大　形	b．	ヘラミガキ
			II．小　形	b．	（鉢　形）
			III．小　形	a．	
				b．	
		F．体　部		a．	ヘラミガキ・黒色処理

c．須恵器

器種には坏・埦・甕・壺などがあるが、出土量は赤焼土器よりも少ない。図示できたのは坏5点、埦1点、甕5点で、甕はすべて破片である。

坏　回転糸切り技法によって切り離されたもので、切り離し後の再調整はまったく加えられていない。底部を欠く1点を除いては、すべて器形は口縁部まで直線的あるいは内弯気味に外傾するものと内弯気傾に立ち上がり、口縁部で外反するものとがある。

埦　製作にロクロを使用しているが、器形は大きくゆがんでいるものである。外面体部下半には斜方向のヘラケズリが、底部にも同じくヘラケズリの再調整が施され、切り離し技法は不明となっている。

甕　図示可能のものは5例である。口縁部だけのもの、口縁部から体部上半にかけてのもの体部下半から底部にかけてのものといずれも破片である。全体的な形態や特徴を知ることはできないが、大きさに違いが認められ、いわゆる大甕と比較的小形のものとがある。

d．赤焼土器

製作に際してロクロを使用し、底部は回転糸切り技法によって切り離されるもので、内外面ともに再調整が認められないものである。色調は第Ⅳ章-2-(1)-⑥項で検討したように土師器より赤味が強い橙色などの明赤褐色系に中心をもつ。量的には須恵器より多く、器種には坏・高台付坏・耳皿などがある。

坏　底部の切り離しはロクロ回転による糸切り離しの技法を用い、内外面とも再調整が施さ

れないものである。土師器に比して、全体的に器高は低く、小づくりで器壁は薄く製作されている。これらは若干の器形的特徴から次のように大別される。

坏a類　体部から口縁部まで直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反するもの。

坏b類　体部はやや内弯しながら外傾し、口縁部で外反するもの。

高台付坏　高台部が剥落しているものと坏体部下半から高台部にかけてのものとがある。土師器高台付坏同様に高台接合時の調整に違いが認められる。

高台付坏A類　坏部と高台部の接合の際に、坏底部の切り離し技法が不明になるほど底部全面に調整が加えられているものである。高台付着後、底部中央から周縁に向って粘土をかきよせた痕跡がみられるもので、その痕跡が菊花状をなすものである。

高台付坏B類　高台部が剥落しているが、坏部と高台部の接合の際に接合部分にだけナデ調整が施されているため、坏底部に回転糸切り技法の痕跡が残っているものである。坏部はやや丸味をもって外傾し、口縁部は強く外反する器形で、口径17.1㎝と赤焼土器坏に比して大形である。

耳皿　1 点出土している。坏部と高台部からなり、坏部は軸線に対する口縁を上方に折り曲げて、平面形がほぼ楕円状を呈するように製作されている。高台部は坏部器高に比して高く、直線的に外傾する。

ｅ．石器

西手取遺跡からは石鏃・石匙・不定形石器などの剥片石器や砥石などが、手取遺跡からは石鏃・石匙・石錐・削器・掻器・剥片や砥石などの石器が出土している。住居跡の床面や堆積土から出土し、住居跡との関連が強いと思われる砥石を除いて、出土層位・地区などからその所属時期を明らかにできるものはなく、形態的特徴などからも石器の時期を特定することは困難である。しかし、西手取遺跡では縄文時代早期末～前期初頭と晩期末葉と考えられる土器が出土し、手取遺跡では前期初頭と晩期後半と考えられる縄文土器が出土しており、両遺跡の石器は、これらの縄文土器に伴う縄文時代の石器である可能性が考えられる。特に西手取遺跡出土の石鏃・石匙などは石巻市南境貝塚妙見地区（後藤他：1969）など縄文早期末～前期初頭の遺跡から出土している石器と類似点が多く、この時期の石器である可能性が強い。

一方、手取遺跡A地区南斜面のＥ－4 区を中心にまとまって出土、あるいは採集された黒曜石製の削器・掻器・剥片等の石器群は、その組成や形態、製作技法等が仙台市岩切鴻ノ巣遺跡出土の石器群と類似している。岩切鴻ノ巣遺跡ではこのような石器群は、古墳時代の南小泉式と関連してその編年的な位置づけが考えられている（白鳥・加藤：1974）。また、このような石器群は興野義一・佐藤信行氏などによって北海道の続縄文後期に位置づけられる北大式に伴う石器に類似することが指摘されている(興野：1970,佐藤：1976)。しかし、北大式の年代的位置

第22表　遺構に伴う土器分類集計表

		土師器																				須恵器				赤焼土器					
		坏						高台付坏				甕										坏	埦	甕		坏		高台付坏		耳皿
		A				B		A		B		A	B			C		D		E	F					a	b	A	B	
		I	II	III	IV	I	II	I	II	I	II		I	II	I	II	I	II												
BD	1住						1	1				1														1				
	2						1					1	2				1							2	1		4			
	3			4			1								1							1		1						
	4			2	2	1	2									1			1			3								
	5																													
BE	1										2																1			
	2						3																	1			1			
	3						10									1			2								2	1		
	4A																	1						1			1			1
	4B	1					2		1		1																			
	5																													
	竪穴						1						2		1		1													

は十分定まっているとは言えず、また、岩切鴻ノ巣遺跡では土師器との共伴関係が確実に把握されているとは言えない。手取遺跡でも、これらの石器群に伴出する土器の出土はなく、このような石器群が、縄文時代以降に属する可能性は十分考えられるが、その位置付けについては、今後の類例・研究を待ちたい。

(3) 遺構出土土器の組み合わせとその年代

出土遺物については前項で述べたように分類された。土師器・須恵器・赤焼土器などの各遺構出土土器のうち、「住居跡に伴う遺物」や土壙に埋設された土師器甕などは、各遺構の使用時やその下限を示すものと考えられ、またそれは「堆積土出土遺物」より、比較的限定された時間幅内に含まれる土器とも考えられることができる。それらは各遺構単位において第22表のような共伴関係を示した。ここでは、各遺構で共伴する土器の組み合わせ関係や、遺構間での組み合わせ関係の傾向性などについて検討を加え、その年代について考察する。

西手取・手取両遺跡出土の土師器坏は、すべて製作にロクロを使用しており、再調整によって底部外面に切り離し痕を残さないもの（A類）と、再調整が施されず切り離し痕を残すもの（B類）に大別された。

A・B類の遺構での共伴関係をみると、共伴する例としない例とがあり、後者はBⅡ類だけが単独で出土している場合である。共伴する例をみると、BD－第3住居跡ではAⅢ類とBⅡ類が、BD－第4住居跡ではAⅢ・AⅣ類とBⅠ・BⅡ類が、BE－第4B住居跡ではAⅠ類とBⅡ類が共伴している。このように土師器坏の組み合わせには、BⅡ類を軸とした次のような関係が認められる。

第1群…A類とB類に共伴関係があるもので、AⅠ～BⅠ類の組み合わせによって細分される。

ａ－AⅠ類とBⅡ類…BE－第4B住居跡

ｂ－AⅢ類とBⅡ類…BD－第3住居跡

ｃ－AⅡ・AⅣ・BⅡ類…BD－第4住居跡

第2群…BⅡ類だけで他に共伴関係をもたないもの。

BD－第1・2住居跡、BE－第2・3住居跡・合口甕棺墓

土師器高台坏も坏同様、坏部底面の切り離し痕の有無によって2類に大別され、調整などによってさらに細分された。しかし、出土量は少なく、組み合わせが認められたのはBE－第4B住居跡においてA・B両類が坏第1群と、BD－第1住居跡においてA類が坏第2群に伴ったものだけである。

土師器甕はロクロ不使用のA・B類とロクロ使用のC～F類に大別された。出土量が少ないため、十分な共伴関係を知ることができないが、BD－第2住居跡ではA、BⅠ類とDⅠ類が伴

い、甕棺墓ではＢⅡ類とＣⅠ・ＤⅠ類が伴っており、ロクロ不使用とロクロ使用の甕とに共伴関係が認められた。次いで、土師器坏との組み合わせ関係を見ると、坏第１群にはＢＤ－第３・４住居跡においてＣⅠ・ＣⅡ・ＥⅡ類のロクロ使用の甕が組み合っている。坏第２群にはＢＤ－第１住居跡においてロクロ使用のＡ類が、ＢＥ－第３住居跡では、ロクロ使用のＣⅡ・ＥⅢ類が伴っている他、ロクロ不使用とロクロ使用の甕はＢＤ－第２住居跡・合口甕棺墓などでも坏第２群に伴っている。このように、坏第２群にはロクロ使用、不使用の大部分の類別との組み合わせ関係が認められた。

須恵器は、全体的な出土量が少なく不明の点が多い。土師器坏との関係をみると、須恵器坏はＢＤ－第３・４住居跡において土師器坏第１群と伴っており、土師器坏第２群との伴出例はまったくなかった。甕はＢＤ－第３住居跡において土師器坏第１群と、ＢＤ－第２住居跡、ＢＥ－第２住居跡において土師器坏第２群と伴っている。

赤焼土器は、須恵器より出土量が多く、ＢＤ－第１・２住居跡、ＢＥ－第１・２・３・４Ａ住居跡から出土している。ＢＤ－第１・２住居跡、ＢＥ－第２・３住居跡では土師器坏第２群と伴っており、土師器坏第１群の出土する住居跡では赤焼土器はまったく伴出しない。

以上のように、共伴・組み合わせ関係を検討すると大別の基準は土師器坏に認められ、それと土師器高台付坏、甕、須恵器、赤焼土器との関係をみると次表のような組み合わせが考えられる。

第23表　出土土器組み合せ表

	土師器			須恵器		赤焼土器		
	坏	高台付坏	甕	坏	甕	坏	高台付坏	耳皿
第Ⅰ群	ＡⅠ・ＡⅢ・ＡⅣ・ＢⅠ・ＢⅡ	ＡⅡ・ＢⅡ	ＣⅠ・ＣⅡ・ＥⅡ	○	○			
第２群	ＢⅡ	ＡⅠ・ＢⅡ	Ａ・ＢⅠ・ＣⅠ・ＤⅠ・ＥⅢ		○	○	○	○
第３群	ＢⅡ		ＢⅠ・ＣⅠ・ＤⅠ					

なお、第３群としたものは、土師器坏・甕の共伴しか明らかでない合口甕棺墓での組み合わせで、第１群、第２群のどちらにも共通する類別を含んでいる。

西手取・手取遺跡の遺構に伴って出土した土器は、以上のように土師器坏の特徴によって大別され、それぞれの組み合わせ関係を知ることができた。しかし、各群に含まれる土師器はロクロ不使用の甕Ａ・Ｂ類を除いて、すべて製作にロクロを使用しており、底部切り離し技法の判明する坏Ｂ類、高台付坏Ｂ類では底部切り離しは回転糸切り技法によって行なわれている。このような特徴をもつ土師器は東北地方南部における編年において、塩釜市表杉ノ入貝塚出土資料（加藤：1954）を標式として設定された表杉ノ入式一第７型式（氏家：1957）として理解される。須恵器には回転糸切り技法で底部を切り離し、再調整をもたない坏がある。器形的に

は岡田・桑原両氏が示した 9b類（岡田・桑原：1974）に該当し、表杉ノ入式期(平安時代)に相当する年代観が想定されている。赤焼土器も住居跡内で表杉ノ入式期の土師器と伴なって出土する例が近年多く報告されており、名取市西野田遺跡第 14 住居跡（丹羽・柳田・阿部：1974）、村田町北沢遺跡第 1 住居跡（斉藤・真山：1978）、志波姫町糠塚遺跡第 1 住居跡（小井川・手塚：1978）、西手取・手取遺跡での共伴関係においても同時期のものであることが明らかになった。

(4) 出土土器に関する問題点

西手取・手取遺跡の遺構に伴って出土した土器は、いずれも表杉ノ入式期に比定することができる。しかし、前項でも述べたように各遺構から出土した土器には土師器坏の特徴や須恵器坏・赤焼土器との組み合せ関係などに違いが認められ、3 群に大別することができた。

表杉ノ入式は 1957 年に氏家和典氏によって型式が設定されてから、氏家(氏家：1967)、阿部義平（阿部：1968）、桑原滋郎（桑原：1969）の各氏によって、主として土師器坏を中心として細分が試みられている。阿部・桑原両氏は土師器坏の成形・調整技法の観察によって類型化を行ない、各類型には製作技法の手数の省略化の方向で変遷が認められるとしている。

その後、多賀城跡調査の成果を中心として、従来、土師器として理解されてきた回転糸切り技法によって底部が切り離され、内外両面にまったく再調整をもたない一群の坏を、器面のヘラミガキや黒色処理などの土師器としての技法をもたないことなどから、これらの坏が須恵器の系譜をひく須恵系土器であるとする見解が示された(多賀城研究所：1971、工藤・桑原：1972)。岡田・桑原両氏はこの見地から須恵系土器坏を須恵器坏の分類のなかに組み入れ、奈良・平安時代の須恵器坏形土器の編年を行なっている(岡田・桑原：1974)。さらに、岡田・桑原両氏は須恵器・須恵系土器の坏と土師器坏との共伴関係にも触れ、表杉ノ入式期の土師器坏の細分の可能性も指摘している。

また、小笠原好彦氏は土師器坏の調整技法の変化や須恵器坏、あかやき土器との共伴関係によって表杉ノ入式期の土師器坏を 3 類に分類し、これが編年的段階を示すものであるとしている（小笠原：1976）。

以上、表杉ノ入式が設定されて以来、その細分などがどのように考えられてきたか概略を述べた。このような各氏の考え方や、近年、県内でも報告例の増えてきた表杉ノ入式期の集落での土器のあり方と西手取・手取両遺跡の第 1・2 群土器とを比較・検討し問題点を述べる。

〔第 1 群土器と第 2 群土器〕

第 1 群土器と第 2 群土器の組み合せ関係についてはすでに述べたが、両群には底部を回転糸切り技法で切り離し、外面に再調整をもたない土師器坏ＢⅡ類や、ロクロ使用、不使用両方の土

師器甕，須恵器甕などが共通して組み合っている。しかし、両群は次の 2 点で大きく組み合せ関係が異なっている。

1－第 1 群土器には土師坏ＢⅡ類の他に、外面に再調整をもつＡⅠ～AIV・ＢⅠ類の坏や、内面にヘラミガキや黒色処理の施される土師器甕ＥⅠ・Ｆ類などが組み合うが、第 2 群土器にはまったくそのような坏・甕はみられないこと。

2－第 1 群土器には須恵器坏が第 2 群土器には赤焼土器がそれぞれ、伴出すること。

このような相違点はすでに述べた各氏の表杉ノ入式の細分のなかに指摘されており、第 1 点は阿部義平氏や桑原滋郎氏が製作技法の手数の省略化の方向で土師器坏の変遷を考えているのと大筋では合致している。第 2 点については、岡田・桑原両氏が「岡田・桑原：1974」で須恵器坏などと土師器坏との共伴関係から表杉ノ入式をＡ～Ｃの 3 つに細分できる可能性を述べているが、そのＡ・Ｂに第 1 群土器が、Ｃに第 2 群土器が該当している。同じく表杉ノ入式の 3 分を考えた小笠原氏の第 2 類と第 1 群土器が、第 3 類と 2 群土器が、内容を異にする点はあるがほぼ相当していると考えられる。

このように、西手取・手取遺跡の第 1 群・第 2 群土器と従来試みられてきた表杉ノ入式の細分とはほぼ合致することや、手取・西手取遺跡の第 1 群土器は第 2 群土器に先行する土器群と考えられてきたことが明らかになった。

また、第 1 群・第 2 群土器は、重複関係などから増・改築された住居跡と考えられた手取遺跡第 4 住居跡において、第 1 群土器が増・改築前の 4Ｂ住居跡に、第 2 群土器が増・改築後の 4Ａ住居跡に伴って出土しており、出土状況からも第 1 群土器が第 2 群土器に先行することを示している。

さらに、県内の表杉ノ入式期の集落の報告例を調べると第 1 群土器は土師器坏の外面再調整の部位に違いの認められるものも含まれているが、白石市御所内遺跡第 1・2 住居跡、松田遺跡第 1 焼土遺構、家老内遺跡第 1・8 住居跡、蔵王町下原田遺跡第 4 住居跡、村田町北沢遺跡第 2 住居跡、名取市西野田遺跡第 12・13 住居跡、瀬峰町がんげつ遺跡住居跡などで遺構に伴って出土している。第 2 群土器は御所内遺跡第 3 住居跡、下原田遺跡第 3 住居跡貯蔵穴、北沢遺跡第 1 住居跡、西野田遺跡第 14 住居跡などで同じく遺構に伴って出土している。このうち御所内遺跡、下原田遺跡、北沢遺跡、西野田遺跡では、同一の遺跡内の異なった住居跡・遺構にそれぞれ第 1 群土器や第 2 群土器が伴って出土している。このような第 1 群土器と第 2 群土器の表杉ノ入式期の集落でのあり方からも手取・西手取遺跡での両群土器の関係が妥当であることが知られる。

このように、西手取・手取遺跡で住居跡などの遺構に伴って出土し、共伴関係などから大別された第 1 群・第 2 群土器は検討の結果、第 1 群土器が第 2 群土器に先行する土器群であるこ

とが明らかとなった。そして、第1群・第2群土器はいずれも表杉ノ入式に比定できることから、手取遺跡では表杉ノ式はこの第1群・第2群土器によって二分されることが知られた。

しかし、志波姫町糠塚遺跡の第1住居跡では、底部回転糸切り後外面体部下端に回転ヘラケズリを施す土師器坏や、同様の調整をもつものや無調整の土師器高台付坏と回転糸切り技法や回転ヘラ切り技法で底部を切り離し、外面再調整をもたない須恵器坏、回転ヘラ切り後、外面体部下端に回転ヘラケズリが施される須恵器高台付坏、須恵器蓋や赤焼土器坏・甕が組み合っている。つまり、糠塚遺跡第1住居跡では底部切り離し技法や再調整の部位などに違いは認められるが、外面再調整をもつ土師器坏と須恵器坏が組み合うという点で、手取・西手取遺跡の第1群土器に近似する土器組成に手取・西手取遺跡では第2群土器にだけ伴う赤焼土器が伴出しているのである。糠塚遺跡では第6住居跡でも底部回転糸切り後体部下端にだけ手持ヘラケズリを施す土師器坏や外面再調整をもたない土師器坏と、破片ではあるが赤焼土器坏が床面で伴って出土している。また、小笠原氏は「小笠原：1976」のなかで手取・西手取遺跡第1群土器にほぼ相当する第2類に多賀城の出土例から少量のあかやき土器が伴出するとしている。

糠塚遺跡や多賀城跡でのあり方は、今回、手取・西手取遺跡で認められた第1群土器・第2群土器の組成の他に、その中間的な組成が存在することを示しており、今後、このような類例が増加し、普遍化し得れば、表杉ノ入式は二分されるだけでなく、さらに細分される可能性があると思われる。

また、西手取・手取遺跡の第1群土器についても第1群土器の出土した3つの住居跡で、それぞれ異なった土師器坏の共伴関係が認められること、蔵王町東山遺跡（白鳥・高野：1971）や糠塚遺跡などで表杉ノ入式の土師器・須恵器坏や高台付坏にみられた回転ヘラ切りによる底部切り離し技法が第1群土器には、ＡⅠ類を除いてまったく含まれていないこと、東山遺跡で外面調整の技法や調整の施される部位の違いなどによって詳細に分類された外面再調整をもつ土師器坏のうち回転ヘラケズリが体部下端にだけ施されるⅠ－5 類、手持ヘラケズリが底部にだけ施されるⅠ－3 類や小笠原氏の言う底部にだけ回転ヘラケズリを施すW_2手法（小笠原：1976）が、第1群土器には含まれていないことなど多くの問題点を含んでいる。これらの問題点のなかにも細分の要素はあると思われるが、複雑な様相を示す表杉ノ入式期の集落での土器のあり方は、単純に時間的な差を意味するだけではなく、地域差や集落に起因するものや、遺構などの様々な要素によるものも考えられ、今後、十分な検討と普遍化が必要と思われる。

３．遺構の年代

遺構に伴って出土した土器と遺構の重複関係などから、それぞれの遺構の年代を検討すると次のようになる。

表杉ノ入式第１群土器期……ＢＤ－第３・４住居跡、ＢＥ－第４Ｂ住居跡

表杉ノ入式第２群土器期……ＢＤ－第１・２住居跡、ＢＥ－第１・２・３・４Ａ・５住居跡・土壙

表杉ノ入式期……ＢＤ－第５住居跡、ＢＥ－埋甕を伴う土壙

時期不明……ＢＤ－土壙、ＢＥ－溝

ＢＥ－第５住居跡は遺物の出土が少量で、床面など住居跡に伴う遺物の出土もない。また、小破片であるため図示できた遺物もないが、堆積土から土師器・須恵器に伴って赤焼土器坏破片が伴出しているため、第２群土器期とした。同じくＢＥ－土壙も土師器・須恵器・赤焼土器が混在しており、第２群土器期と考えた。

ＢＤ－第５住居跡は、堆積土から外面再調整をもつ土師器坏など、床面・細部遺構から破片ではあるが、ＢⅡ類の土師器坏と少量の須恵器坏・赤焼土器坏が伴出している。住居跡に伴う遺物が少ないため、第１群・第２群土器のどちらの組成に属するか不明であるので、表杉ノ入式期とした。

ＢＥ－埋甕を伴う土壙では、第３群土器とした土師器坏ＢⅡ類とロクロ不使用の土師器甕ＢⅠ類，ロクロ使用の土師器甕ＣⅠ・ＤⅠ類が共伴している。土師器坏ＢⅡ類とロクロ不使用・使用の甕はいずれも第１群土器・第２群土器と共通して組み合っており、第３群土器の組み合せ関係が第１群土器・第２群土器の組成の一部である可能性や、独立した組成である可能性も考えられる。このため、埋甕を伴う土壙の年代は広く表杉ノ式期と考えたい。

ＢＤ－土壙からは遺物の出土がなく、その年代は不明である。ＢＤ－溝は、表杉ノ入式第２群土器期のＢＤ－第２住居跡を切っているため、それ以降の年代が考えられるが、遺物がまったく出土していないためその年代は不明である。

４．遺跡の構成

西手取・手取遺跡は、高清水町小山田字手取・西手取に所在している。地形的には両遺跡とも山脈から派生する築館丘陵の末端が、東に突出するなだらかな舌状丘陵状上に立地しており、両遺跡は沢を挟んで隣り合っている。遺跡の立地する丘陵の北側には、小山田川によって形成された扇状地性低地がひろがっている。

縄文時代

縄文時代の遺物としては西手取遺跡で早期末葉素山２式～前頭初頭の土器と少量ではあるが、晩期末大洞A式の土器が出土している。手取遺跡では、１点ではあるが前期初頭と、同じく少量の晩期末葉と考えられる土器が出土している。また、これらの土器に伴うと思われる石鏃・石匙などの剥片石器なども出土している。遺物の出土は散漫で、縄文時代の遺構や明確な包含層は確認できなかったが、縄文時代早期末葉には西手取遺跡で、前期初頭には手取遺跡で人類の何んらかの活動が開始され、その後、晩期末にも両遺跡にその足跡が残されたものと思われる。

古墳時代

手取遺跡A地区南斜面で黒曜石製の石器・剥片などがまとまって出土、あるいは採集されている。土器の伴出はまったく認められないが、石器の形態・石質等は宮城県北部を中心に古墳時代の土器に伴って分布する石器群と類似している。現在、この石器群の編年的な位置については十分に明らかになっているとは言い難く、また、出土したのはこの石器だけで遺構等は不明であるが、古墳時代の人々の生活の痕跡も手取遺跡には残されている。

平安時代

平安時代の遺構としては、西手取遺跡で竪穴住居跡が５軒、手取遺跡で竪穴住居跡が５軒、合口甕棺墓と考えられた埋甕を伴う土壙が１基、土壙１基が検出された。これらの遺構に伴って、あるいはその周辺から土師器・須恵器・赤焼土器・白磁・土製支脚などの土製品、砥石などの石製品が出土し、平安時代＝表杉ノ入式期に西手取・手取の両遺跡には集落が形成されたことが知られた。

発見された各遺構から遺構に伴って出土した土器の組み合せ関係などから、西手取・手取遺跡の表杉ノ入式期の遺構は一部を除いて第１群土器期、第２群土器期に大別された。そして、第１群土器期が第２群土器期に先行することが知られたが、これらの土器群が平安時代のどのような時期に位置するかは十分に明らかにできなかった。

第１群土器期

西手取遺跡で２軒、手取遺跡で１軒の合計３軒の竪穴住居跡が確認された。竪穴住居跡は、手取遺跡では丘陵平坦部の南端に１軒、住居跡群北東端の北斜面に１軒が位置しており、西手

取遺跡では丘陵平坦部の南東端に位置している。軒数が少なく、重複関係もないため配置関係や同時存在かどうかなどには言及できない。

竪穴住居跡は、平面形や住居跡を構成する各要素などを詳細に検討したが、各要素間には住居跡を類別するような共通する傾向性などは認められなかった。これは、第１群土器期、第２群土器期という時期の異なる住居跡でも同様で、大きな違いは認められなかったが、わずかに手取遺跡の第１群土器期の住居跡はカマドの付設位置を第２群土器期の住居跡と異にしていることが知られた。

第２群土器期

西手取遺跡で２軒、手取遺跡で５軒の竪穴住居跡と土壙が確認された。西手取遺跡では中央平坦部と北斜面上端、手取遺跡では中央平坦部と南・北両斜面の上端に位置している。両遺跡とも傾斜のあまり急でない部分に遺構の分布は限られているが、分布密度はあまり稠密ではなく重複関係はない。これらの竪穴住居跡が同時存在していたかどうかは明確ではないが、第１群土器期の住居跡を含めても、重複する住居跡は拡張された住居跡と考えられたＢＥ－第４住居跡だけである。分布が密でなく、重複することがないのは、西手取・手取遺跡の竪穴住居跡のあり方の１つの特徴と言えよう。

竪穴住居跡の構造等に時期差によるまとまりが見られないことはすでに述べたが、第２群土器期の竪穴住居跡では特にこの点が顕著で、平面形・規模など多様性に富んでおり、規則性はあまりうかがえない。

なお､西手取遺跡から第１群土器期･第２群土器期のどちらに属するか不明の住居跡が１軒、手取遺跡から第３群土器期とした土師組成をもつ、合口甕棺墓と考えられる埋甕を伴う土壙が確認されている。埋甕を伴う土壙は、竪穴住居跡の分布する丘陵平坦部から斜面上端の部分より、約20離れた北斜面に位置しており、その周辺には遺構はまったく検出できなかった。埋甕を伴う土壙が１基だけであること、その所属時期が第１群土器期、第２群土器期のどちらか特定できないことなど問題は多いが、このような出土状態から集落における居住区域と墓域の使いわけがなされていた可能性が考えられる。

今回の調査によって西手取遺跡では、縄文時代と平安時代の、手取遺跡では、縄文時代・古墳時代・平安時代の遺物や遺構が検出された。特に平安時代には大規模な集落が営まれていた可能性があり、西手取・手取遺跡の範囲は今回の調査地区にとどまらず、東西両方向にのびているものと考えられる。

Ⅴ．ま　と　め

1．西手取・手取遺跡は奥羽山脈から派生する築館丘陵の末端が、小山田川によって形成された扇状地性低地に向って東に突出する舌状丘陵上に立地している。

2．西手取遺跡では縄文時代早期～前期・晩期、平安時代の遺物や遺構が、手取遺跡では縄文時代前期・晩期、古墳時代、平安時代の遺物や遺構が出土している。

3．遺構としては西手取遺跡での竪穴住居跡5軒と土壙1基が、手取遺跡で竪穴住居跡5軒と埋甕を伴う土壙1基や、土壙・溝が発見され、出土遺物から大部分が平安時代に属するものと考えられた。

4．遺構に伴って出土した土師器・須恵器・赤焼土器は、共伴関係から第1群土器～第3群土器の3群に大別することができた。このうち第1群土器と第2群土器は新旧関係が認められ第1群土器が第2群土器に先行する土器群であることが知られた。そして、この第1群・第2群土器によって表杉ノ入式が二分される可能性が考えられる。

5．竪穴住居跡も第1群土器期と第2群土器期に二分されたが、カマドの付設位置が異なる他は大きな違いは認められなかった。

6．手取遺跡で発見された埋甕を伴う土壙は、検討の結果、合口甕棺墓である可能性が強くなった。甕棺は、従来知られていた2個体の土師器甕からなるものではなく、合計4個の土師器甕によって構成されている。また、土壙中からは副葬されたと思われる土師器坏が出土している。

7．合口甕棺墓は竪穴住居跡群から離れた地点で発見されており、平安時代の集落において居住区・墓域という使いわけがなされていたことが推定された。また、土壙の長軸線が南北方向を示しているのも偶然の一致とは思えない。

参 考 文 献

阿部　義平：1968「東国の土師器と須恵器－多賀城外の出土土器をめぐって－」『帝塚山考古学№.1』

伊東　信雄：1940「宮地県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告」『東北帝国大学法文学部奥羽資料調査研究報告第二』

伊東　信雄：1957「古代史」『宮城県史Ⅰ』

一迫町教委：1977「巻堀遺跡」一迫町文化財報告書1

氏家　和典：1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』東北史学会

氏家　和典：1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」山形県の考古と歴史　柏倉亮吉教授還暦記念論文集刊行会

小笠原好彦：1976「東北地方における平安時代の土器についての二・三の問題」『東北考古学の諸問題』

岡田　茂弘・桑原　滋郎：1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究紀要Ⅰ』

小山　正忠・竹原　秀雄：1967「新版標準土色帖」

加藤　　孝：1951「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学論文集Ⅰ』

加藤　　孝：1954「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ』宮城学院女子大学

興野　義一：1970「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」『古代文化22の11』

興野　義一：1976「考古学からみた高清水」『高清水町史』

興野　義一・遠藤　智一：1970「宮城県玉造郡岩出山町の考古学遺跡」『岩出山町史下』

桑原　滋郎：1969「ロクロ土師器坏について」『歴史第39輯』東北史学会

桑原　滋郎：1976「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』

工藤　雅樹・桑原　滋郎：1972「東北地方における古式土器生産の展開」『考古学雑誌第57巻第3号』日本考古学会

小井川和夫：1971「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）－御所内遺跡『宮城県文化財調査報告書第24集』宮城県教育委員会

小井川和夫・手塚　　均：1978「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年分）・宮城県文化財調査報告第53集』宮城県教育委員会

小牛田町教委：1976「山前遺跡」

後藤　勝彦他：1969「埋蔵文化財第4次緊急発掘調査概報－（南境貝塚）」『宮城県文化財調査報告第20集』宮城県教育委員会

斉藤　吉弘・真山　悟：1978「北沢遺跡」『宮城県文化財調査報告書第56集』宮城県教育委員会

斉藤　尚巳・沼山源喜治：1974「東北地方の合口埋甕遺構について」『北奥古代文化第6号』

佐藤　庄一：1971「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）－家老内遺跡」『宮城県文化財調査報告書第24集』宮城県教育委員会

佐藤　信行：1976「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』

佐藤　信行：1979「宮城県高清水町萩田遺跡出土の初期弥生土器」『籾創刊号』

佐藤　好一・手塚　　均：1978「天狗堂遺跡」田尻町文化財調査報告書第1集

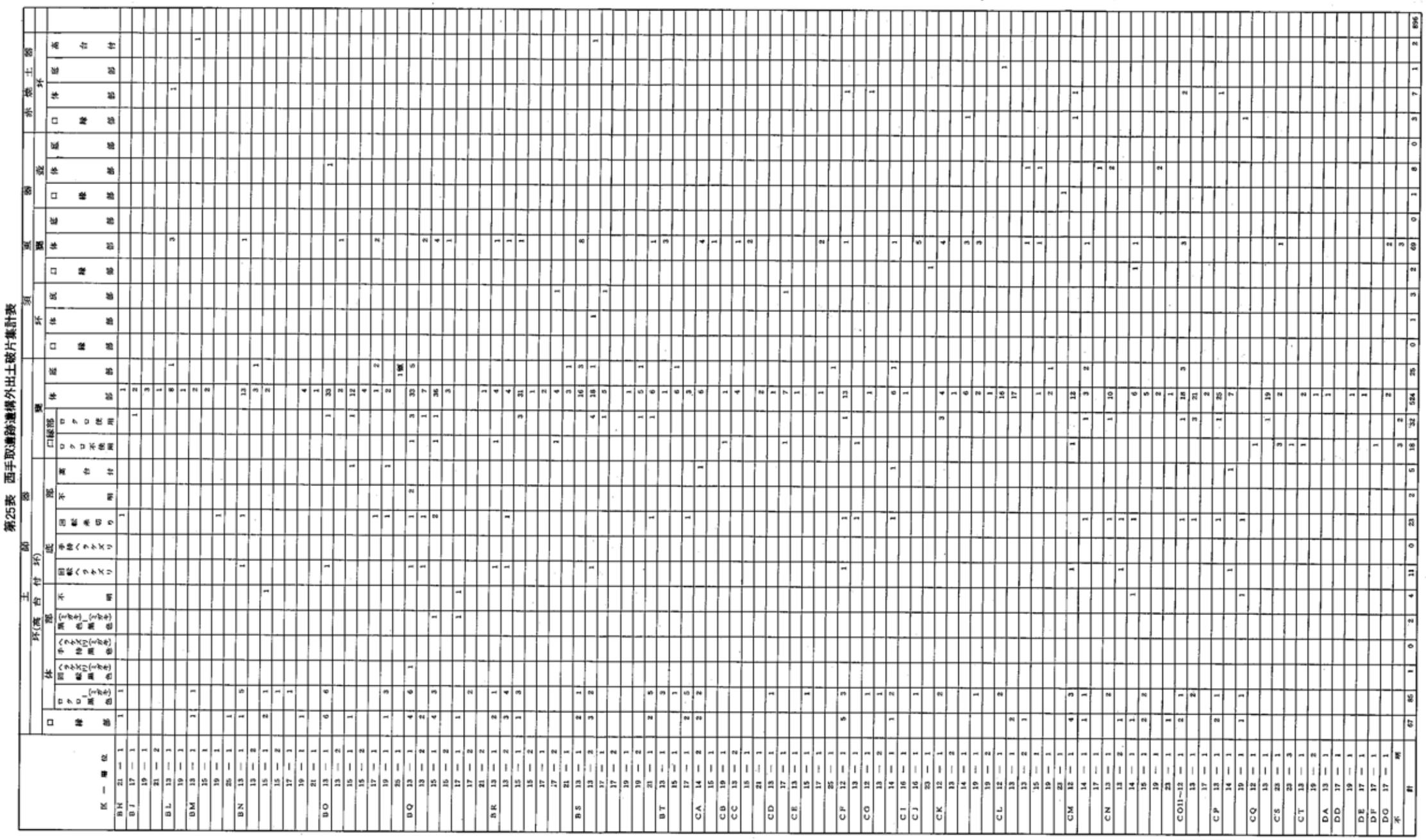
志間　泰治・藤沼　邦彦：1972「東北自動車道関係遺跡発跡調査概報（白石市：柴田郡村田地区）－下原田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第25集』宮城県教育委員会

白鳥　良一・加藤　道男：1974「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ－岩切鴻ノ巣遺跡－」『宮城県文化財調査報告書第35集』宮城県教育委員会
仙台市教委：1976「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書第10集』
高清水町教委：1974『下田遺跡発掘調査概報』
多賀城跡研究所：1971「多賀城跡－昭和46年度発掘調査概報」『宮城県多賀城跡研究所年報1970』宮城県教育委員会・多賀城跡研究所
鳴瀬町教委：1977「亀岡遺跡　金山貝塚」『鳴瀬町文化財調査報告第1集』
丹羽　　茂：1971「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）－松田遺跡－」『宮城県文化財調査報告書第24集』宮城県教育委員会
丹羽　　茂・柳田　俊雄・阿部　　恵：1974「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ－西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第35集』宮城県教育委員会
沼山源喜治他：1972「岩手県和賀郡江釣子村本宿羽場遺跡緊急調査報告」江釣子村教育委員会
藤沼・白鳥・高野：1972「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市：柴田郡村田地区）－東山遺跡」『宮城県文化財調査報告書第25集』宮城県教育委員会
宮城県教委：1975「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第38集』宮城県教育委員会
宮城県教委：1975「宮城県文化財発掘調査略報（昭和46・49年度）・藤屋敷遺跡、宮ノ脇遺跡、西手取遺跡、手取遺跡、下折木遺跡」『宮城県文化財調査報告書第40集』宮城県教育委員会
宮城県教委：1976「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書第46集』宮城県教育委員会
宮城県教委：1976「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書第47集』宮城県教育委員会
宮城県教委：1977「宮城県文化財発掘調査略報（昭和51年度分）・観音沢遺跡、東館遺跡」『宮城県文化財調査報告書第48集』宮城県教育委員会
宮城県教委：1978「宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）・佐内屋敷、観音沢遺跡（第22次）」『宮城県文化財調査報告書第53集』宮城県教育委員会
三宅　宗議・佐藤　信行：1977「がんげつ遺跡」『宮城県瀬峰町文化財調査報告書第1集』瀬峰町教育委員会

第24表　西手取遺跡遺構出土破片集計表

種別	器形	部位	器面調整	第1住居跡									第2住居跡									第3住居跡												第4住居跡																									第5住居跡								計
			外面—内面	堆積土	床	カマド	周溝	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	不明	第1層	第2層	第3層	床直	床	カマド	ピット1	ピット6	不明	第1層	第2層	第3層	床面	Aカマド	Bカマド	ピット1	ピット2	ピット4	ピット8	床下	不明	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層	床直	床面	煙道	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	ピット8	ピット9	ピット10	ピット11	ピット13	ピット19	ピット20	ピット21	ピット21	不明	第1層	第2層	第3層	第4層	カマド	煙道	ピット10	不明	
土師器	坏	口縁	ロクロ—黒色(ミガキ)	10	2	1(1)		2	1	1			6(4)	5(6)	7(5)	(1)	2(1)			(2)	10(1)	3	12(1)	21	3(1)	4	1(1)	7		2	1(1)		8(1)	6(1)	1(1)	12(1)	16(7)	13(1)	1(7)	(3)	(3)	4(5)	2(1)	8(2)	1	1	3	(1)	1	(1)		1	(1)					10(3)	20(9)	8(2)	2(1)	8(1)	4			(1)	230 (79)
	坏	体部	ロクロ—黒色(ミガキ)	13(1)		(1)	1	1					4(5)	6(1)	13(9)	1					6	6	2(1)	3(1)	4(1)					1			5	6(2)	1(3)	23(1)	12(5)	13(1)		1	1(1)	5	(1)	4	1	1	1	1	1	1								4(1)	23(6)	16(6)	6(7)	4	3			3	192 (64)
	坏	体部	回転ヘラケズリ—黒色(ミガキ)																			2	2(1)	7				1		2			1				2	(1)	1			2	1		1													1	3	1(1)							27 (3)
	坏	体部	手持ヘラケズリ—黒色(ミガキ)																				1	1		2		1		2			1																										2			1					7
	坏	体部	黒色ミガキ—黒色(ミガキ)	3				1																1	1																																										6
	坏	体部	不明—黒色(ミガキ)																																			4			(1)																										4 (1)
	坏	体部	ロクロ(不明)—不明	(2)								(1)	11	3									1							1					1	(1)		(2)																				(1)	1	1							19 (7)
	坏	底部	回転ヘラケズリ		1																	1	2	6	1			3					1(1)	1		2	7(1)	1(1)	1					1															1(3)	2							31 (6)
	坏	底部	手持ヘラケズリ									2											1	1		1															1																			1							7
	坏	底部	回転糸切り	1										2(1)	4(1)						1	1	2	3										1(1)		1	1	(1)			1																		5(3)	5(1)	1	2	2	1		1	35 (8)
	坏	底部	不明												2								1													4	1	2																				1									11
	高台付坏	底部	全面調整　菊花状																					1																																			1								2
	高台付坏	底部	部分調整　回転糸切り																																																								1			1					2
	高台付坏	底部	不明																																																									1							1
	高台付坏	底部	高台部	1																																																							2	1	1						5
	甕	口縁部	ヨコナデ(不明)—ヨコナデ					(1)					1	6	4			6						2														1																					2	1							23 (1)
	甕	口縁部	ナデ(不明)—ナデ																		1	1	3	6					1	1		1																											3(1)	5	1						23 (1)
	甕	口縁部	ロクロ—黒色(ミガキ)																			1		(1)												1		2			1													1		1			1								8 (1)
	甕	口縁部	ロクロ(不明)—ロクロ	1		2		3						(2)	3							1		4	1					1				3	1	6	9	6			1	1	2					2								1		1	5	14	1	1					70 (2)
	甕	口縁部	ロクロ—ナ・デ(不明)																			1											1					(1)																													2 (1)
	甕	口縁部	ミガキ—黒色ミガキ																																																									1							1
	甕	口縁部	不明—不明																																			3																													3
	甕	体部	ロクロ—黒色(ミガキ)					1					(3)			(1)							1	1(1)												3(1)	5				1															2(1)	4	1	3(1)	(2)	2(1)						24 (1)
	甕	体部	ロクロ(ケズリ)—ロクロ	1		1								1	1								2	1	1									1		5(1)	6	11	1	1		1(1)	1	3				1		2						1	1	1	12(1)	10		2	1				69 (3)
	甕	体部	ロクロ—ナデ(不明)	2																			1	8		1		1						(1)	1	(1)														(2)									1(5)	7	1					1	24 (9)
	甕	体部	ナデ—ナデ(不明)	1				1			1		1(1)	1		1							2	5		1		1						6	2	4	9(1)		(1)		1							2								1			10	2	2					1	55 (3)
	甕	体部	ナデ(ミガキ)—ミガキ																																																								(1)	1							1 (1)
	甕	体部	ミガキ—ナデ											(1)	(2)			(3)						(1)										(5)			4(7)						(2)																								4 (36)
	甕	体部	ケズリ—黒色(ミガキ)	1				1															2(1)	2												2	8	2(1)				(3)	1								1					1		1	6(7)	(1)							28 (13)
	甕	体部	ケズリ—ナデ(不明)	6(1)	1	1		4	1				8(8)	11(1)	27(7)		1(1)	1	1	2(1)	1(2)	5	24	19	7	3	1	4	5	5	2		2	17(3)	7(1)	20(1)	58(3)	37(3)	5	1	8(1)	4(5)	9	9(1)	1	1	1	7(1)	(1)	8(1)	1	1			1	4	(1)	5	40(8)	40(2)	5(2)					11	463 (65)
	甕	体部	タタキ目(刷毛目)—ナデ										(1)		(1)			(1)																												1										1											2 (3)
	甕	体部	不明—ロクロ(不明)										(6)	[illegible]	(9)					(3)														(14)	(2)	(18)	[illegible]	[illegible]	(1)	1	(3)	2		(2)							1						(1)	(16)	[illegible]	(36)	(5)					(1)	4(234)
	甕	底部	木葉痕																																	1																															1
	甕	底部	糸切り																															1														1											2	2							6
	甕	底部	ケズリ	1											1								1	1		2		2	1								3					2				1															2	1	1				19
	甕	底部	ナデ	1																															1						1							1											1	1							6
	甕	底部	不明			1							1		4		1								1									4	1	1		1				1		1					2										2	1							22
	甕	底部	手づくね土器																																		1																														1
須恵器	坏	口縁																																																									1	1							2
	坏	体部																																																									3				1				4
	坏	底部	回転糸切り																																		1																						1	1							3
	甕	口縁													3																							1																					1								5
	甕	体部	タタキ目—ロクロ(ナデ)	(1)																		(5)	(2)	(3)										(1)		1						(2)																	(3)	(2)	(1)						1 (20)
	甕	体部	タタキ目—タタキ目(不明)																					1						(1)																																					1 (1)
	甕	体部	ロクロ—ロクロ(ナデ)												8							1	3		(1)											1	1	1		1																			(5)	1(2)							17 (8)
	甕	体部	ケズリ—ロクロ(ナデ)	(1)											4(1)							(1)	(2)			(1)																											1						(5)	(3)		(2)				(1)	6 (17)
	甕	底部	ケズリ																																																																
	甕	底部	台付																																																																
	甕	底部	不明												3																																																				3
	壺	口縁																																																									2		1		1			1	5
	壺	体部											1	1			1							2																																			4						1		10
	壺	底部																																																																	
赤焼土器	坏	口縁		27			1			1		3	4	6	2	1						3	1																																				4	6	3		1			1	64
	坏	体部		14			1	1				2	1	2	2								3												1		1																						4	3	3	2				5	45
	坏	底部																				1																																					1	1		1					4
	高台付坏	底部	全面調整　菊花状	1																																																															1
	高台付坏	底部	部分調整　糸切り													1																																																			1
	高台付坏	底部	高台部	3																																																															3
																																																																			1593(588)

第25表　西手取遺跡遺構外出土破片集計表



第26表　手取遺跡遺構出土破片集計表

種別	器形	部位	器面調整 外面	器面調整 内面	第1住居跡 第1層	第1住居跡 床面	第1住居跡 カマド	第1住居跡 不明	第2住居跡 第1層	第2住居跡 第2層	第2住居跡 床直	第2住居跡 床面	第2住居跡 Aカマド	第2住居跡 Bカマド	第2住居跡 ピット2	第2住居跡 ピット3	第2住居跡 不明	第3住居跡 第1層	第3住居跡 第2層	第3住居跡 第3層	第3住居跡 床面	第3住居跡 カマド	第3住居跡 ピット1	第3住居跡 ピット2	第3住居跡 ピット5	第3住居跡 ピット6	第3住居跡 ピット7	第3住居跡 ピット15	第3住居跡 不明	第4住居跡 第1層	第4住居跡 第2層	第4住居跡 第3層	第4住居跡 床面	第4住居跡 カマド	第4住居跡 ピット1	第4住居跡 ピット2	第4住居跡 ピット3	第4住居跡 ピット4	第4住居跡 ピット5	第4住居跡 ピット7	第4住居跡 ピット17	第4住居跡 貼床	第4住居跡 ピット9	第4住居跡 ピット12	第4住居跡 ピット13	第4住居跡 不明	5住居跡 第3層	土壙	計
土師器	坏	口縁	ロクロ一黒　色(ミガキ)		8(3)	(1)	(1)	1	3	4(8)		1	1	1(1)			(1)	1	1(6)	16(9)	17(6)	13(6)	2(1)		7(2)		2(1)	3(3)	(1)		11(9)	44(8)	1(5)	8(2)	1(3)				3(1)	2(1)	1	1	12(4)		2	1		3(6)	8(8)	179 (147)
		体部	ロクロ一黒　色(ミガキ)		7(4)					11(8)	(2)	2				1(1)		6(5)	12(7)	20(2)	18(7)	2(4)	(1)	5(2)		2(4)	4(9)			20(2)	72(2)		3(1)	6(2)				2(1)	1(1)			13(5)	3(3)				3(4)	6(6)	219 (175)
			手持ヘラケズリ一黒色(ミガキ)																	1							1																				2
			黒色ミガキ一黒　色(ミガキ)									1						1	5	4(1)	5(1)									(1)	4(7)		1	(1)								13						34 (11
			不　明一黒　色(ミガキ)				(1)																				1																				(2)
			ロクロ(不明)一不　明						(1)	1 02		8						2(4)	2(8)	1(3)				2(1)							3(2)	4(6)		1	1									(2)					25 (39)
		底部	回転ヘラケズリ																													(1)															(1)
			手持ヘラケズリ																1																														1
			回転糸切り							1	1	2						3	12		1	1		1		1				9	14		2	2				2				4		1		2	2	63
			不　明												1			2	2	2							1			1						1											10
	高台付坏	底部	全面調整　菊花状		1													1			1																											3
			全面調整　ナ　デ																									1			2						1				1		1				6
			部分調整　回転糸切り		1													2												1	1				1												1	7
			不　明									1								1										2																	1	5
	壺	口縁部	ナ　デ(不明)一ナ　デ		3				1		1		1	1				4	6	2	1(1)	1				1				3	7		1	2					6							1	42 (1)
			ロクロ(不明)一ロクロ		6				1							1			1			1							4	3	2		2				2				1					1	25
			不　明一不　明		1																																										1
		体部	ロクロ一黒　色(ミガキ)		1(1)														(1)										1		2																4 (2)
			ロクロ(ケズリ)一ロクロ		12					2(1)		3							3	1	4					1				4	10	2		1(1)	1			2	1			1			1		2	51 (2)
			ロクローナ　デ(不明)		(2)					(1)																				(2)	(2)	1	(1)	(1)								1(1)						2 (10)
			ナ　デーナ　デ(不明)															1	1			1								7(3)	4	1	1															16 (3)
			ナ　デ(ミガキ)一ミガキ																											1	3																	4
			ミガキ(不明)一ナ　デ							(3)								(2)	(5)		(1)						(1)			1(3)	1(1)	(2)	(1)	1														3 (19)
			ケズリ一黒　色(ミガキ)							(2)										2(1)										(1)	2(4)	3(1)							(1)							(1)		7 (11)
			ケズリーナ　デ(不明)		13(1)			(2)	1	6(1)	3	4	1	1		4		7	18(3)	16	7(3)	7(1)			1	1			5(1)	34(3)	43(5)	19	8	9(3)	1			1	6			3				2(3)	04	2	223 (68)
			不　明一ロクロ(不明)		30				(4)	03	(2)	(6)	(3)			(2)		(2)	08	(1)	(2)	1(6)				(3)				02	1 89	(2)	(2)	(4)				(3)									2 (231)
		底部	木葉痕															1																														1
			糸切り									1							2	1	1										1																	6
			ケズリ																											1	2		1															4
			ナ　デ							1									1																													2
			不　明		3					2									1	1								1		4	2		1	6			1		1									24
須恵器	坏	口縁																																															
		体部																	1																														1
		底部	回転糸切り					1																																									1
	壺	口縁																	1													1	1															4
		体部	タタキ目一ロクロ(ナデ)																											1																	(2)		1 (2)
			タタキ目一タタキ目(不明)																1	(2)	3(3)			(6)						(3)	(1)																(1)		(1)	4 (17)
			ロクローロクロ(ナデ)																2					2						1	3												1			1		2	12
			ケズリーロクロ(ナデ)																									(1)			1(1)																	4	5 (2)
		底部																																															
	甕	口縁																																															
		体部																		2																														2
		底部																												1																			1
赤焼土器	坏	口縁			16							3		1		1		1	1	1							1			1	7			3				1								3			40
		体部			4									1					4									1			2															2			14
		底部			2								1						1																											2		3	9
	高台付坏	底部	全面調整　菊花状																		1																												1
			部分調整　糸切り																																		1											1
			不　明																					1																								1
			高台部																																2												2
					16							3		1		1		1	1	1							1			1	7			3				1								3			40
					4									1					4									1			2															2			14
					2								1						1																											2		3	9
																					1																											1
																																			1												1
																								1																								1
																																			2												2
																																															1070 (743)

第27表　手取遺跡遺構外出土破片集計表

区	層位	土師器																須恵器										弥生土器			
		坏(高台付坏)												甕				坏			甕			壺			坏			
		口縁部	体部					底部						口縁部		体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	高台付
			ロクロ→黒(ミガキ色)	回転ヘラケズリ→黒(ミガキ色)	手持ヘラケズリ→黒(ミガキ色)	ミガキ色→黒(ミガキ色)	不明	回転ヘラケズリ	手持ヘラケズリ	回転糸切り	不明	高台付	ロクロ不使用	ロクロ使用																
BB	13−1									1												1								
BD	13−1																					1								
BG	11−1	2	1				1					1		1	11	2						1					1			
	13−1	2	1																			1								
	15−1														3	1														
	17−1														1							3								
BH	15−1		1				1			1					5															
BI	13−1		2												5							1								
	15−1		2							1			1																	
BK	11−1		1												4															
	13−1	2	7							1					12															
BL	13−1	2	2							1		1	1		3												1			
BM	11−1	11	15			1	3			6		1	2		47	1						2					1			
	13−1	3	6							1		1	3		11															
BN	19−1																										2			
BO	16−1														1															
	17−1									2					1															
BP	19−1		1								1				6															
BQ~BT	14−1	3	10							1		1	1		9							1								1
BQ	15−1	1											1		18							2								
	16−1														2															
	18−1		1																											
	21−1	2	1																											
BR	15−1														1															
	16−1														1															
	17−1		1				1			2					2							2								
	19−1														3							1								
BS	13−1																					1								
	15−1	1	2							2																			1	
	28−1														1															
BT	15−1	2													1							2					1	1		
	17−1		1																											
	26−1	3																												
土手										3				1	3	1						3								
A	49−1														1															
C	49−1														2															
K	49−1														1															
B	47−1														1															
E	47−1																										1			
J	47−1									1																				
K	47−1													1																
P	45−1															1						1								
S	45−1									1																				
E	44−1														4															
S	43−1						1								1															
M	37−1												2		2															
L	35−1														1															
S	33−1													1																
E	12−1															1														
K	10−1												1																	
E	8−1														2															
D	6−1														1															
G	6−1														1															
不明	不明	5	6	1						2	2		1	4	8	1											1	1		
計		39	61	1	0	1	7	0	0	26	3	5	13	8	176	8	0	0	0	0	23	0	0	0	0	8	2	1	1

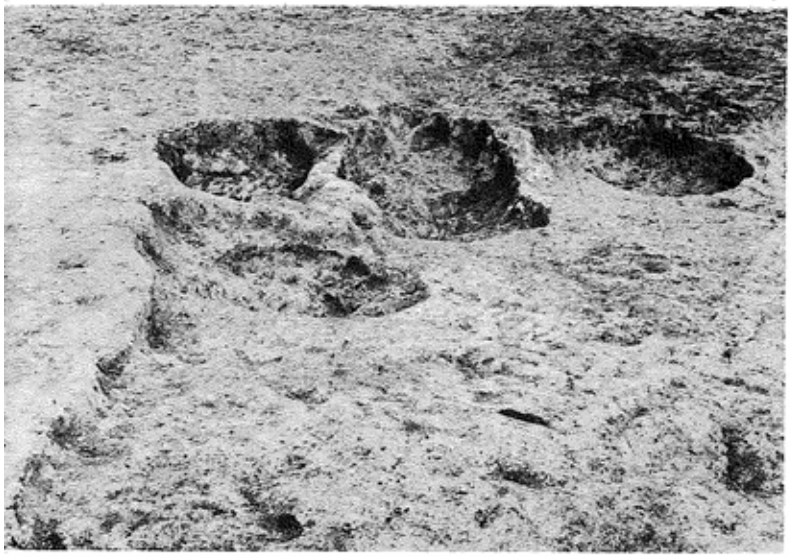
写　真　図　版

1：西手取遺跡遠景（北・手取遺跡より）

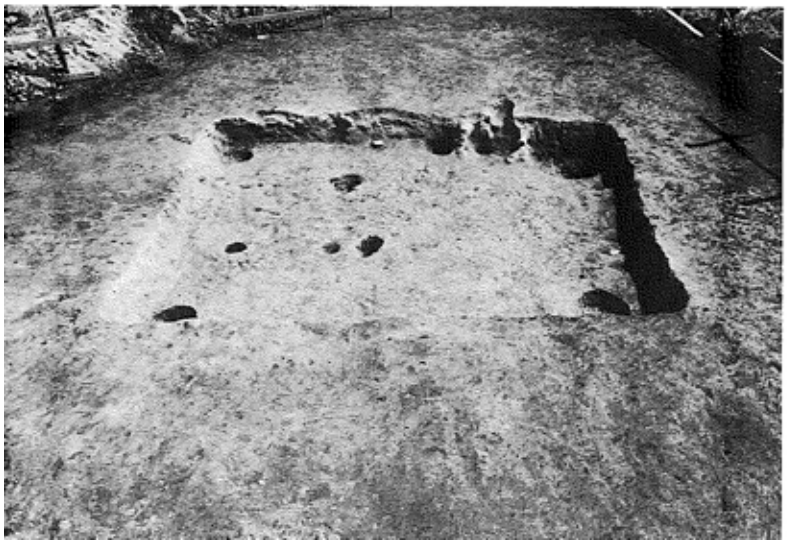
2：手取遺跡遠景（南・西手取遺跡より）

図版1　遺　跡　遠　景

1：第1住居跡



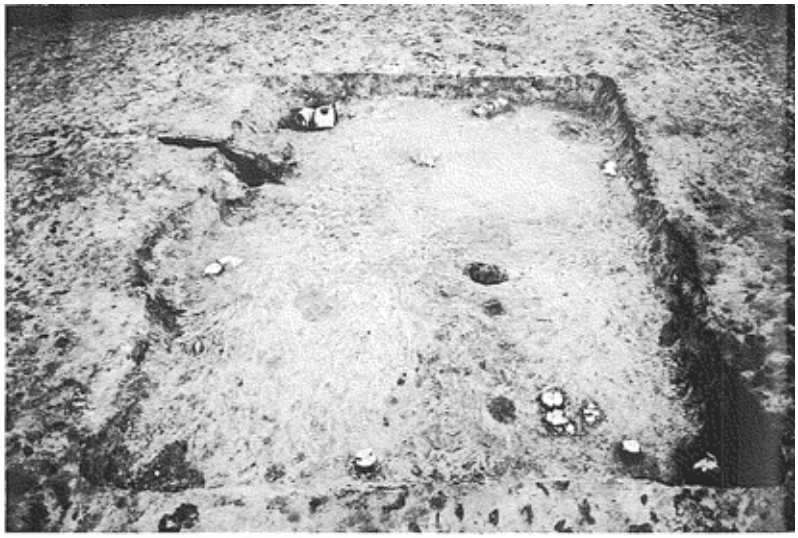
2：同カマド周辺



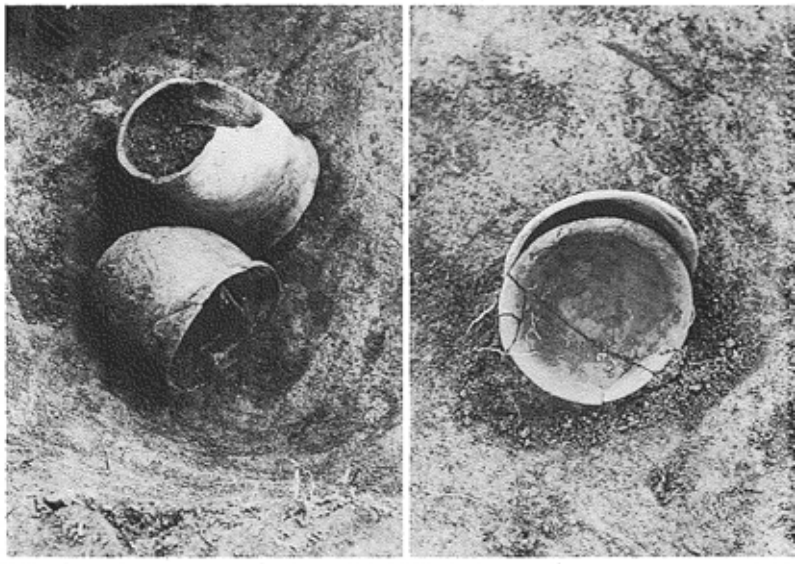
3：第2住居跡

図版2　西手取遺跡
第1・2住居跡

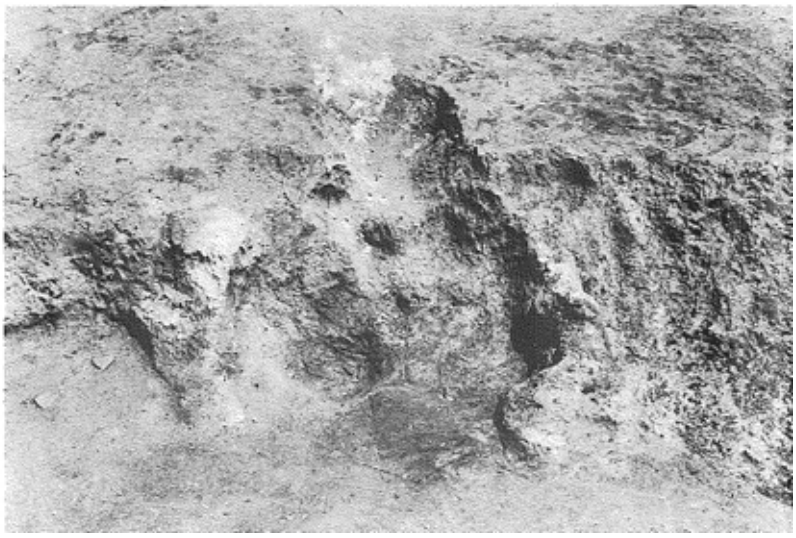
1：第２住居跡遺物出土状況



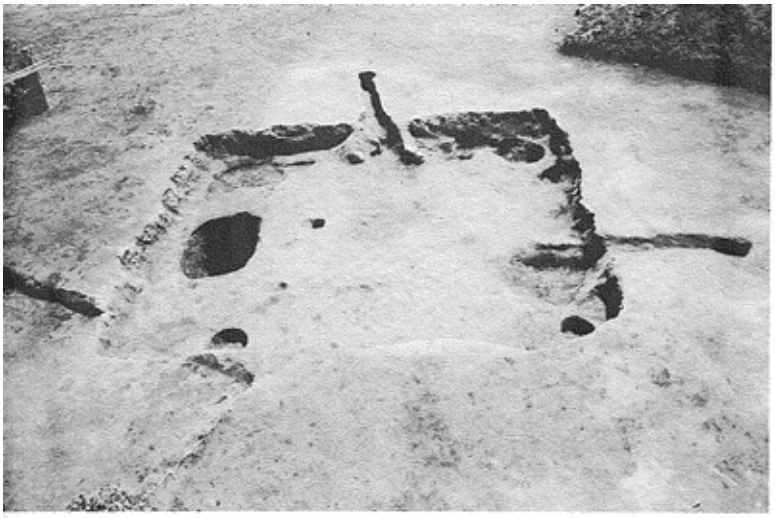
2：第２住居跡遺物出土状況
左、ピット３
右、床　面



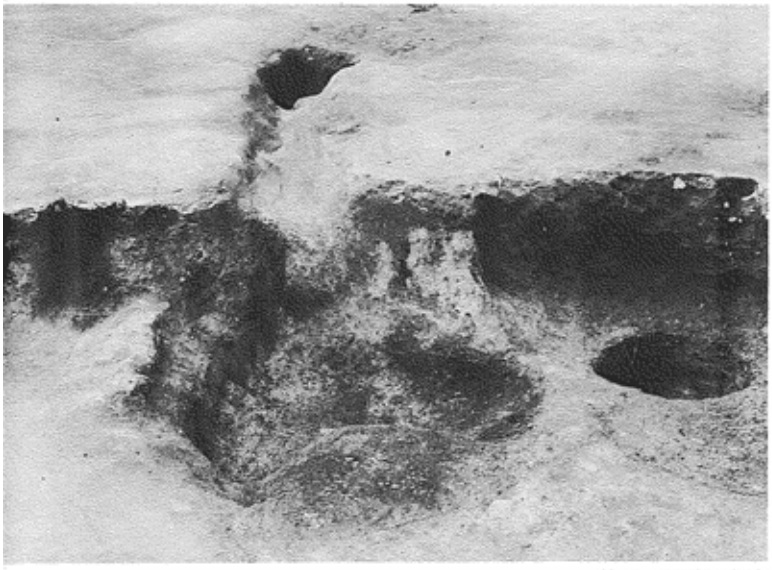
3：第２住居跡　カマド



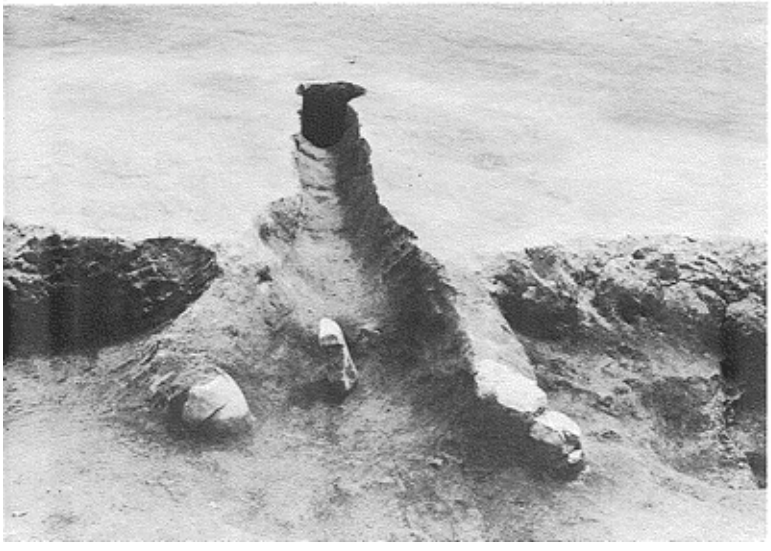
図版３　西手取遺跡
第２住居跡



1：第3住居跡



2：同、Aカマド

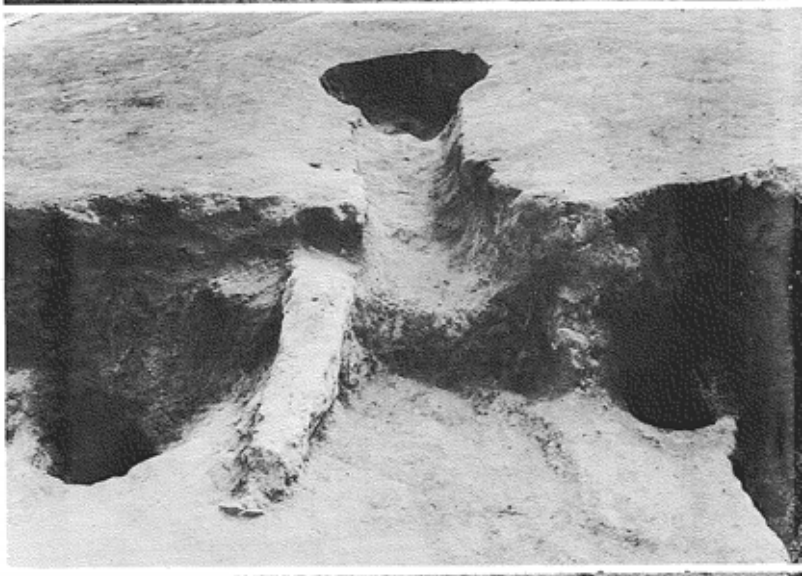


3：同、Bカマド

図版4　西手取遺跡
第3住居跡

1：第4住居跡

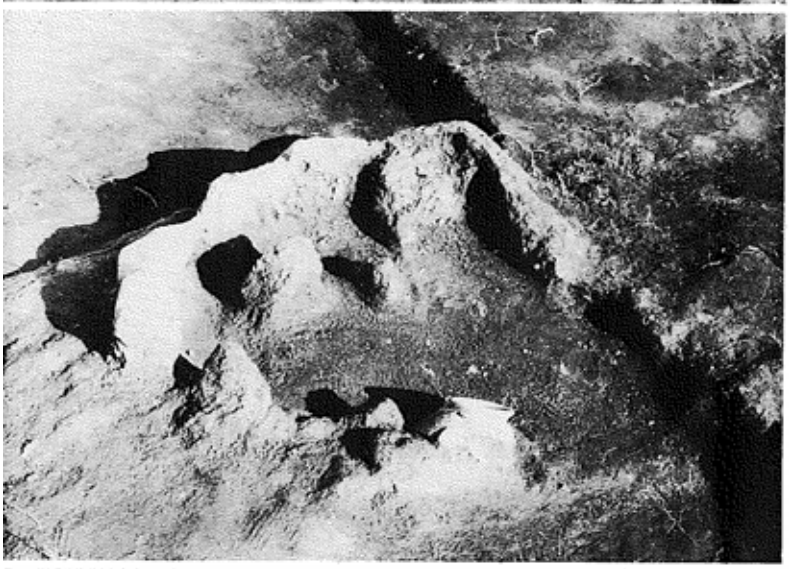
2：同カマド



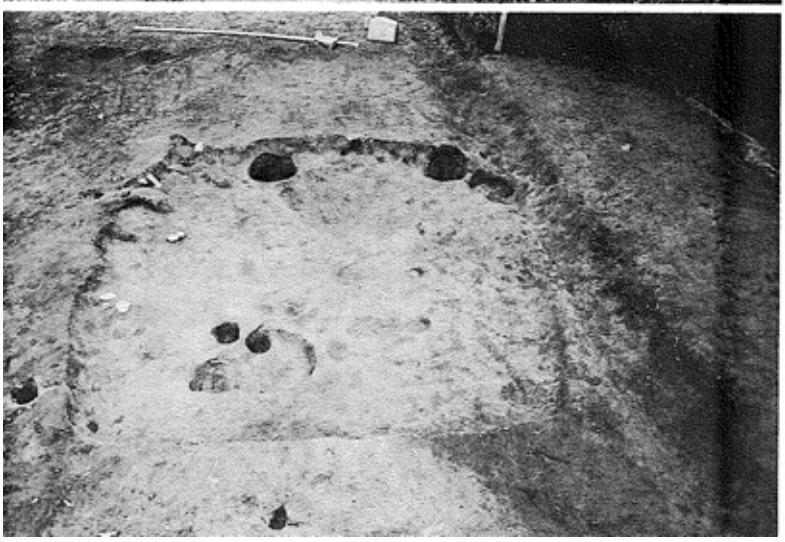
3：第5住居跡

図版5　西手取遺跡
第4・5住居跡

1：第1住居跡



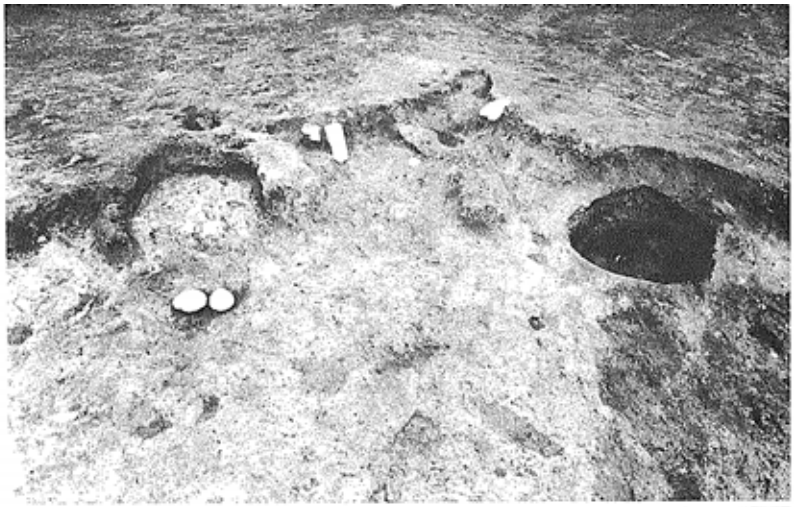
2：同カマド



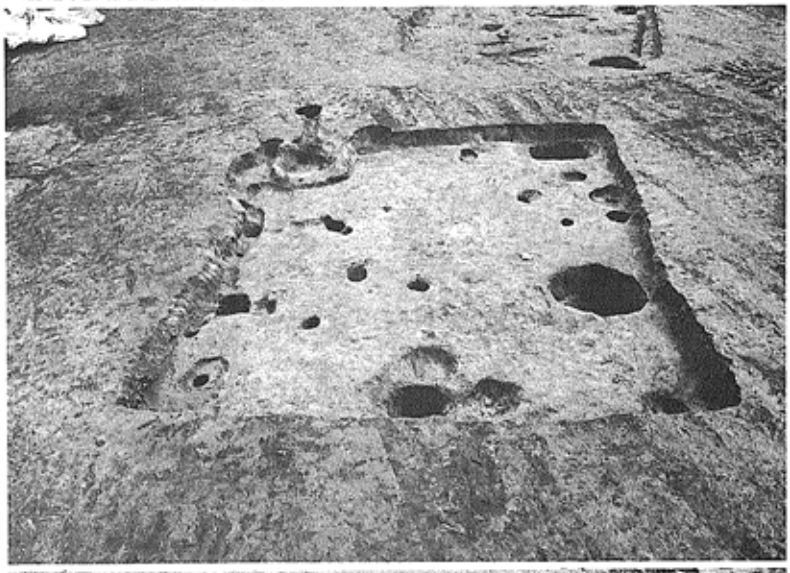
3：第2住居跡

図版6　手取遺跡
第1・2住居跡

1：第２住居跡Ａ・Ｂカマド

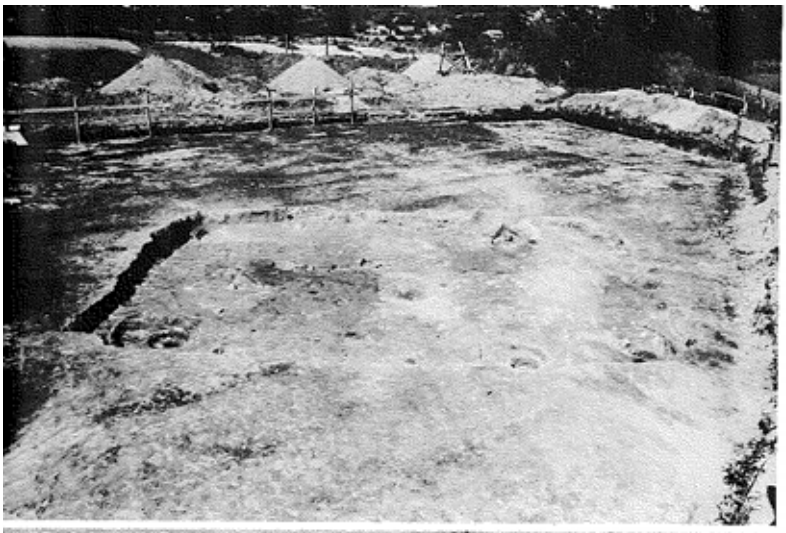


2：第３住居跡



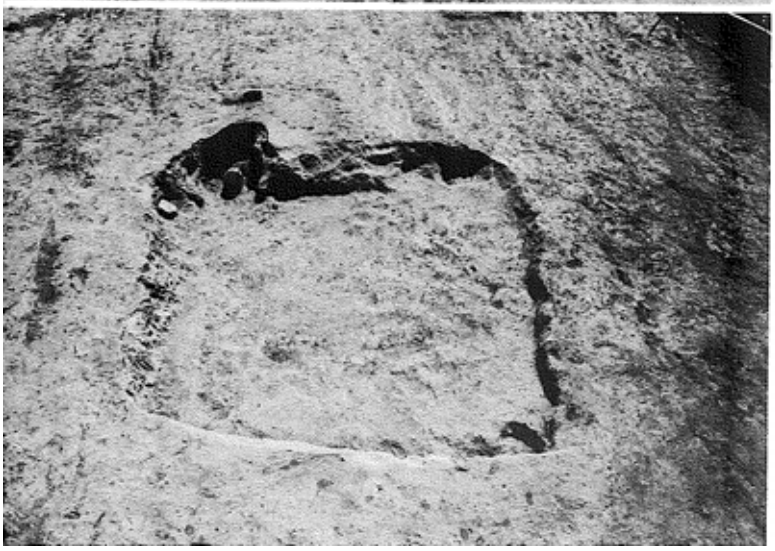
3：同カマド

図版７　手取遺跡
第２・３住居跡



1：第４Ａ住居跡

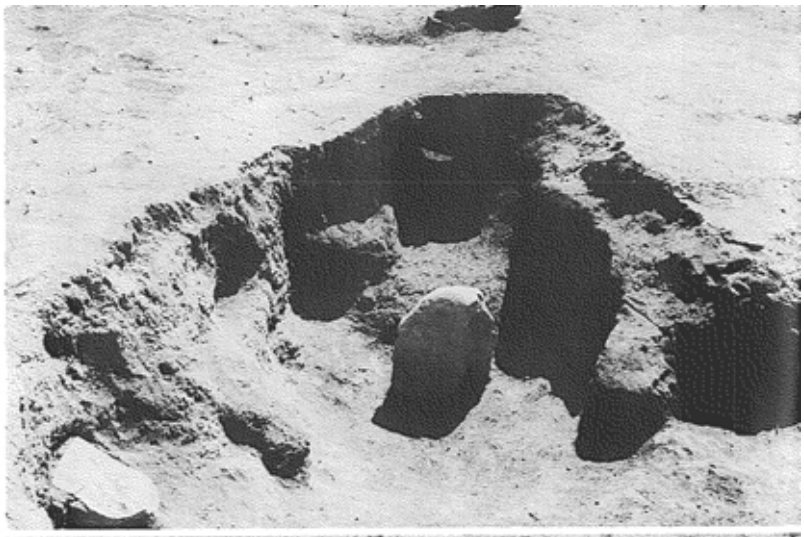
2：同カマド



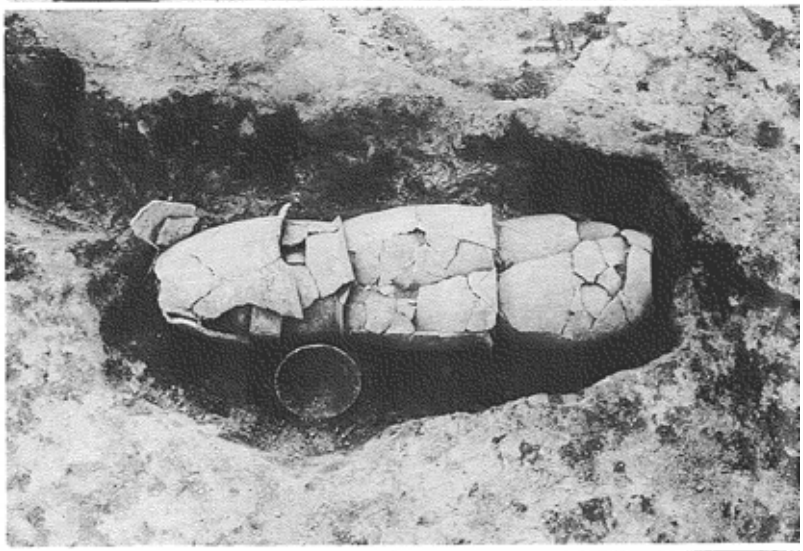
3：第５住居跡

図版８　手取遺跡
第４Ａ・５住居跡

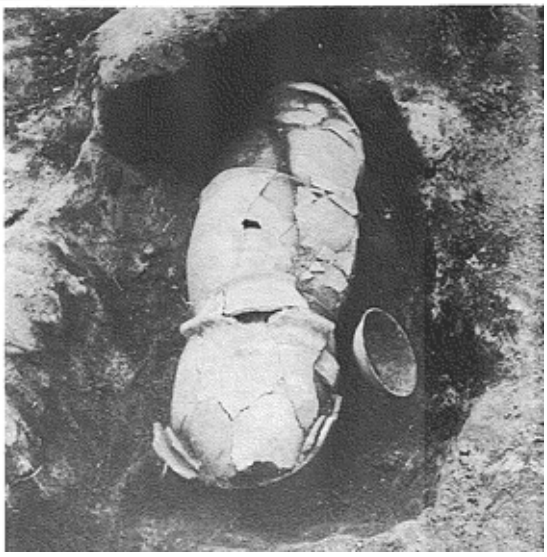
1：第5住居跡　カマド



2：埋甕を伴う　土壙
（合口甕棺墓・東より）



3：同（南より）



図版9　手取遺跡
第5住居跡
埋甕を伴う土壙

1

2

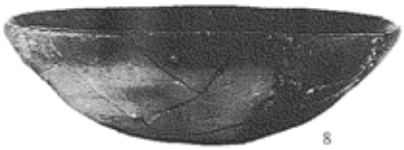
3

4

5

6

7


8

9

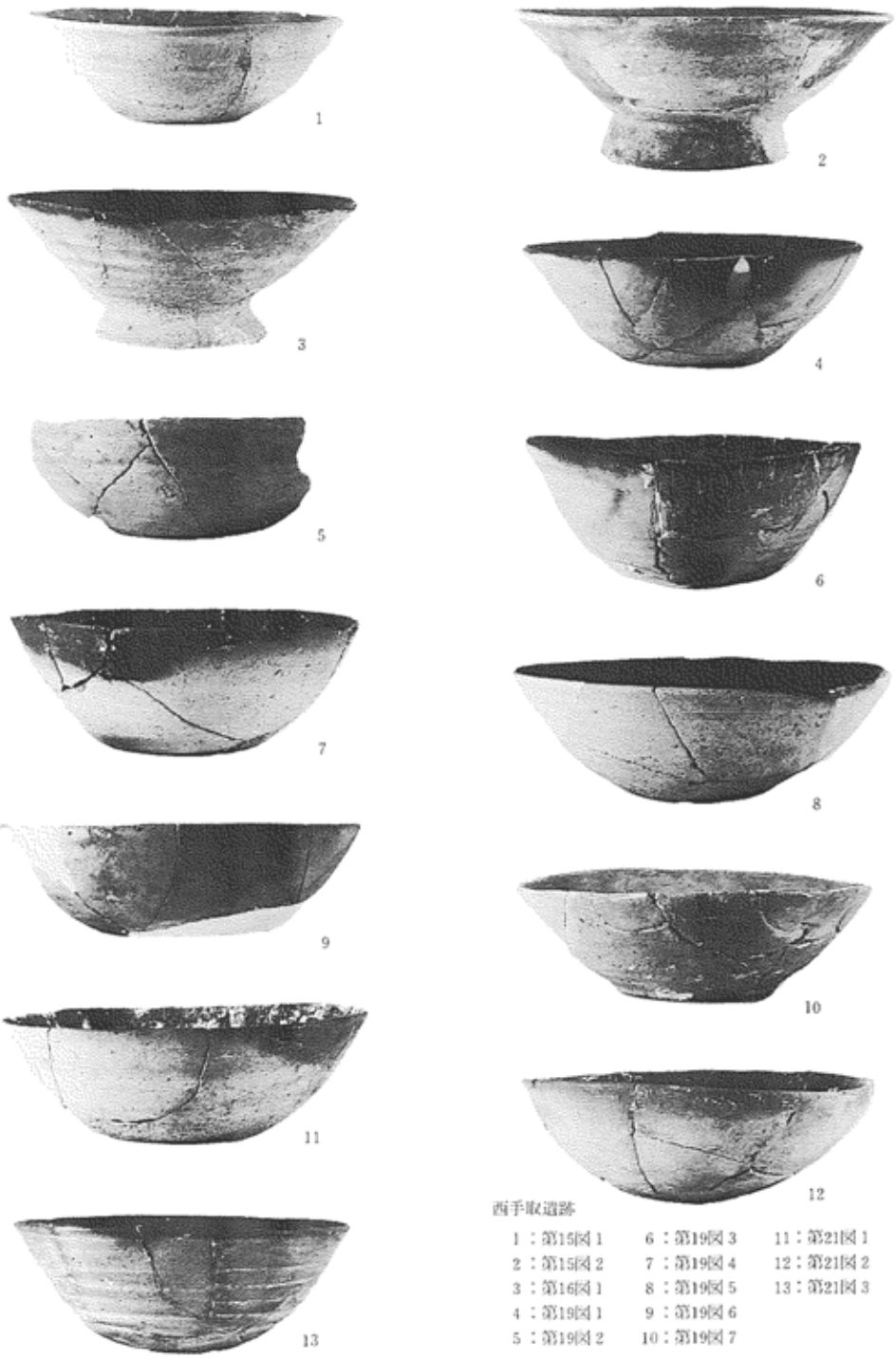
10

11

西手取遺跡　1：第11図1　7：第13図1
2：第11図2　8：第13図2
3：第11図3　9：第13図3
4：第11図4　10：第13図4
5：第11図5　11：第13図5
6：第11図6　12：第13図6

12

図版10　土師器杯・高台付坏



西手取遺跡

1：第15図1　6：第19図3　11：第21図1
2：第15図2　7：第19図4　12：第21図2
3：第16図1　8：第19図5　13：第21図3
4：第19図1　9：第19図6
5：第19図2　10：第19図7

図版11　土師器坏・高台付坏

1

2

1：第25図29
2：第23図3

3

4

5

6

7

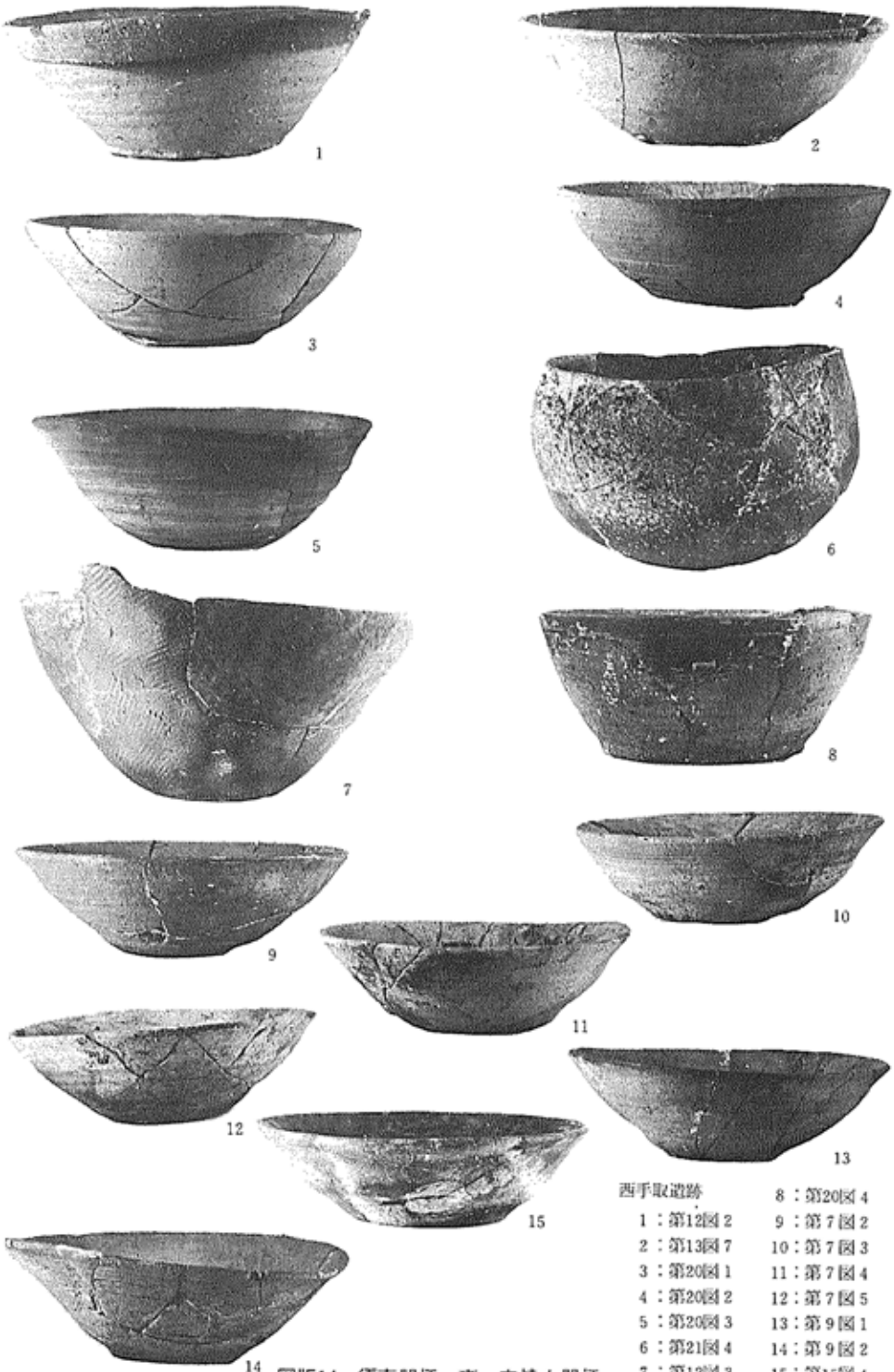
西手取遺跡　3：第7図7
4：第7図6
5：第8図1
6：第8図2
7：第9図3

図版12　土師器坏・手づくね土器・甕

西手取遺跡

1：第11図8　6：第15図3
2：第11図9　7：第19図9
3：第12図1　8：第19図11
4：第13図9　9：第19図10
5：第23図1

図版13　土　師　器　甕



西手取遺跡

1：第12図2　8：第20図4
2：第13図7　9：第7図2
3：第20図1　10：第7図3
4：第20図2　11：第7図4
5：第20図3　12：第7図5
6：第21図4　13：第9図1
7：第12図3　14：第9図2
15：第15図4

図版14　須恵器杯・甕・赤焼土器杯

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

手取遺跡

1：第30図1　8：第30図8
2：第30図2　9：第30図9
3：第30図3　10：第30図10
4：第30図4　11：第34図1
5：第30図5　12：第36図1
6：第30図6　13：第36図2
7：第30図7

図版15 土 師 器 坏

1：第36図3

2：第36図4

3：第36図5

4：第37図1

5：第40図1

6：第40図2

7：第40図3

8：第41図1

9：第41図2

10：第41図4

11：第43図1

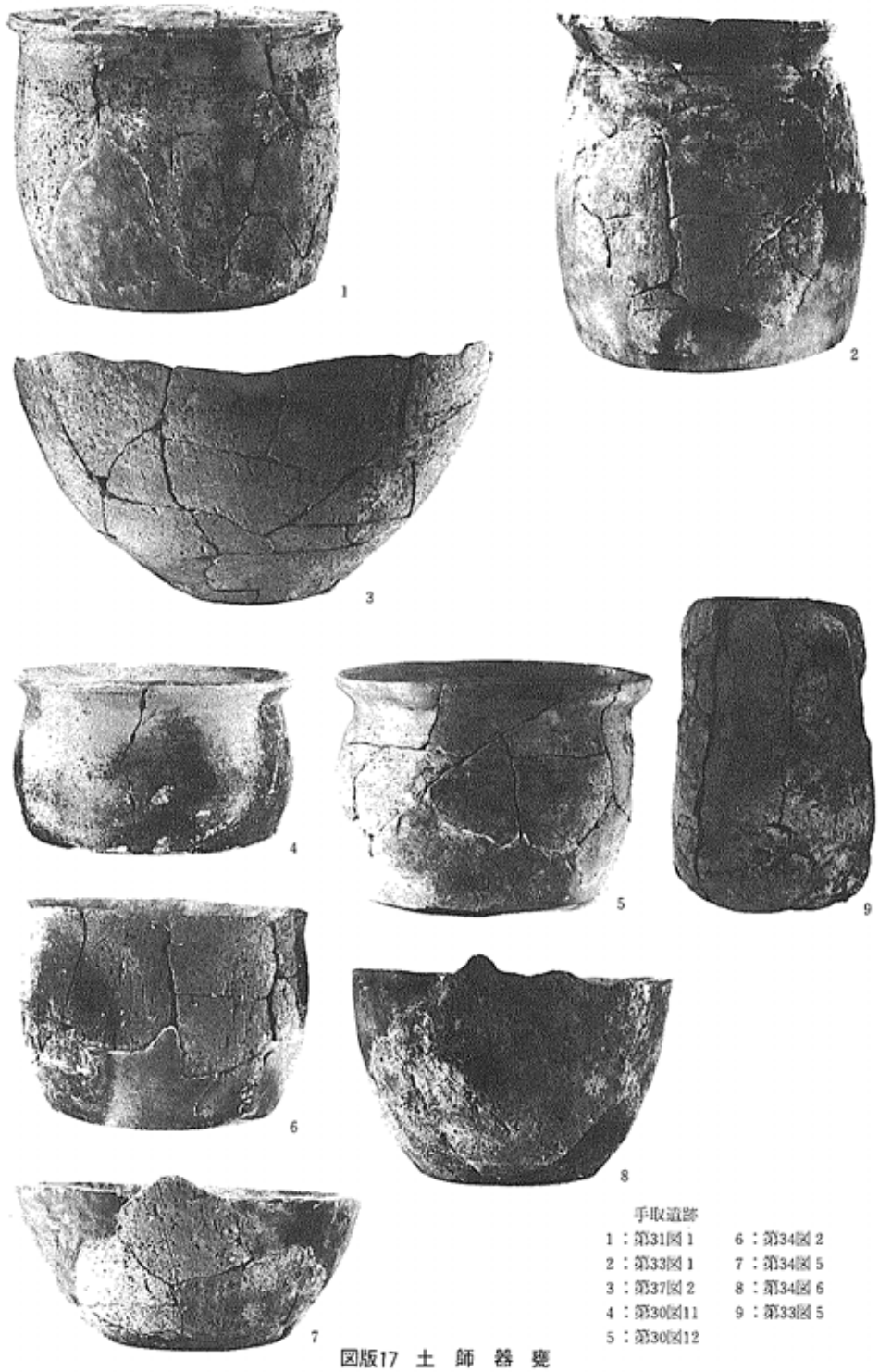
12：第43図2

13：第43図3

手取遺跡

14：第47図1

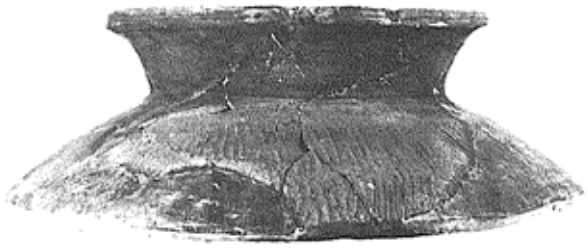
図版16　土師器坏・高台付坏



手取遺跡

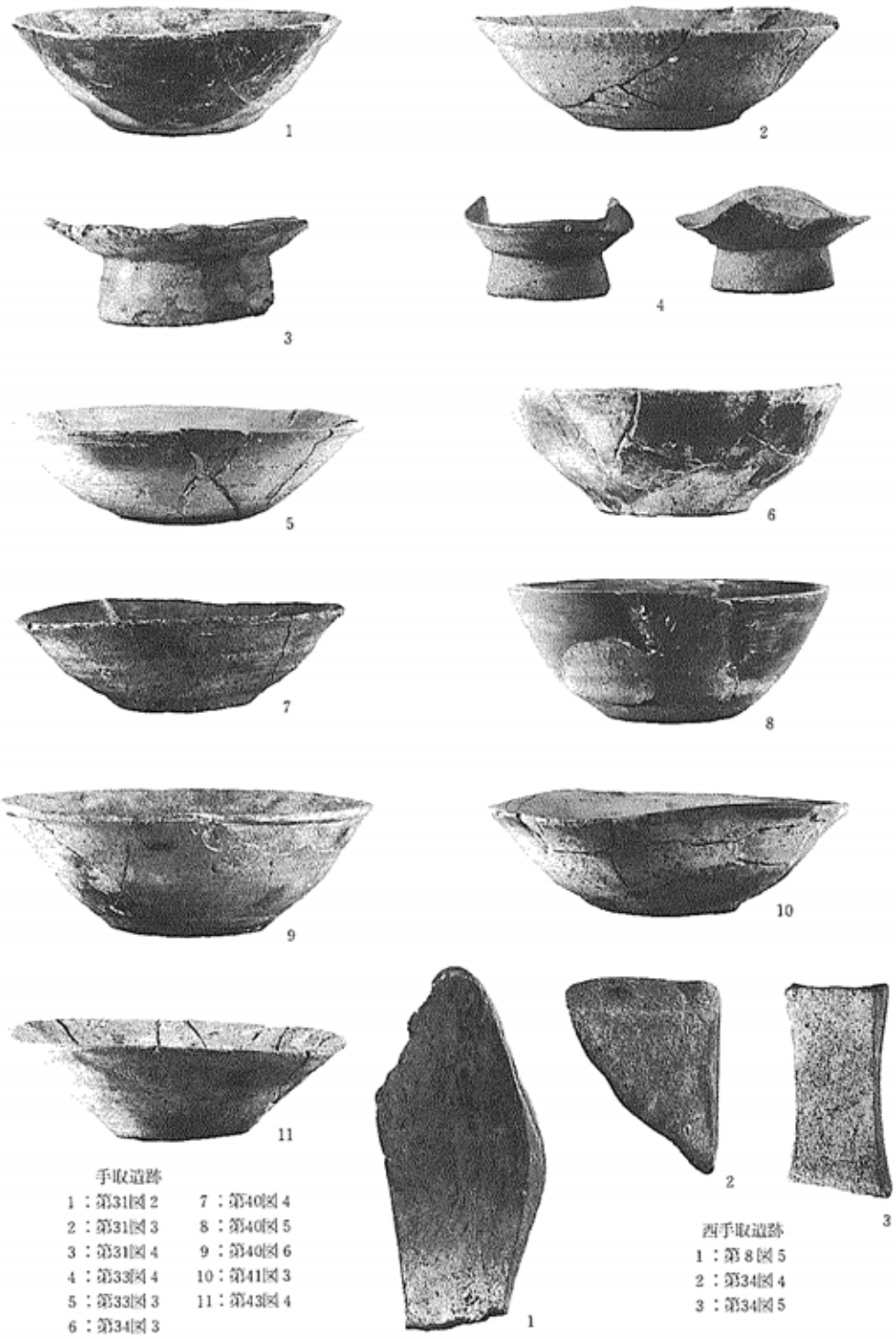
1：第31図1　6：第34図2
2：第33図1　7：第34図5
3：第37図2　8：第34図6
4：第30図11　9：第33図5
5：第30図12

図版17 土 師 器 甕



手取遺跡
1：第45図1
2：第45図2
3：第45図3
4：第45図4
5：第43図7
6：第33図2

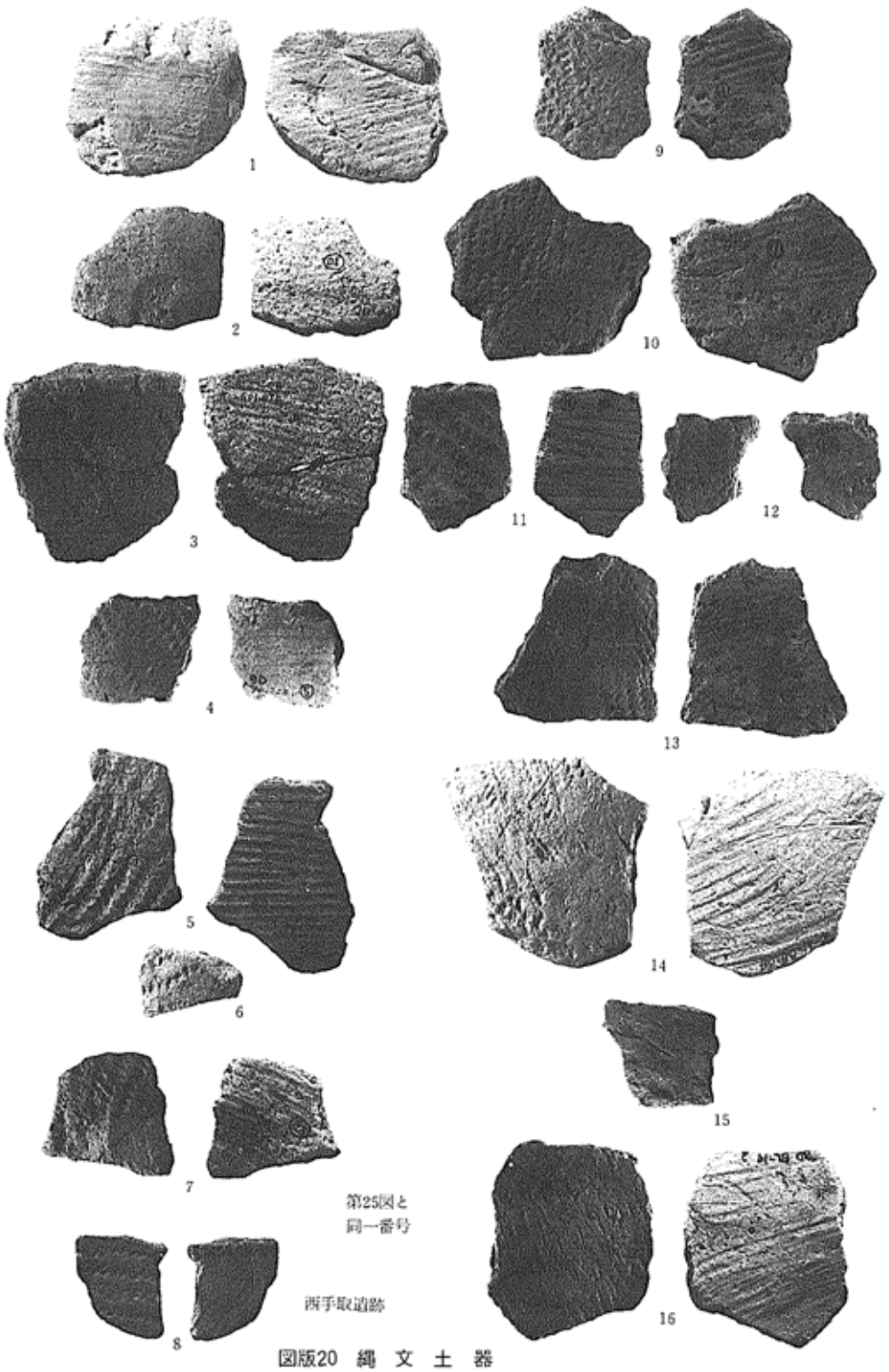
図版18　土師器・須恵器甕



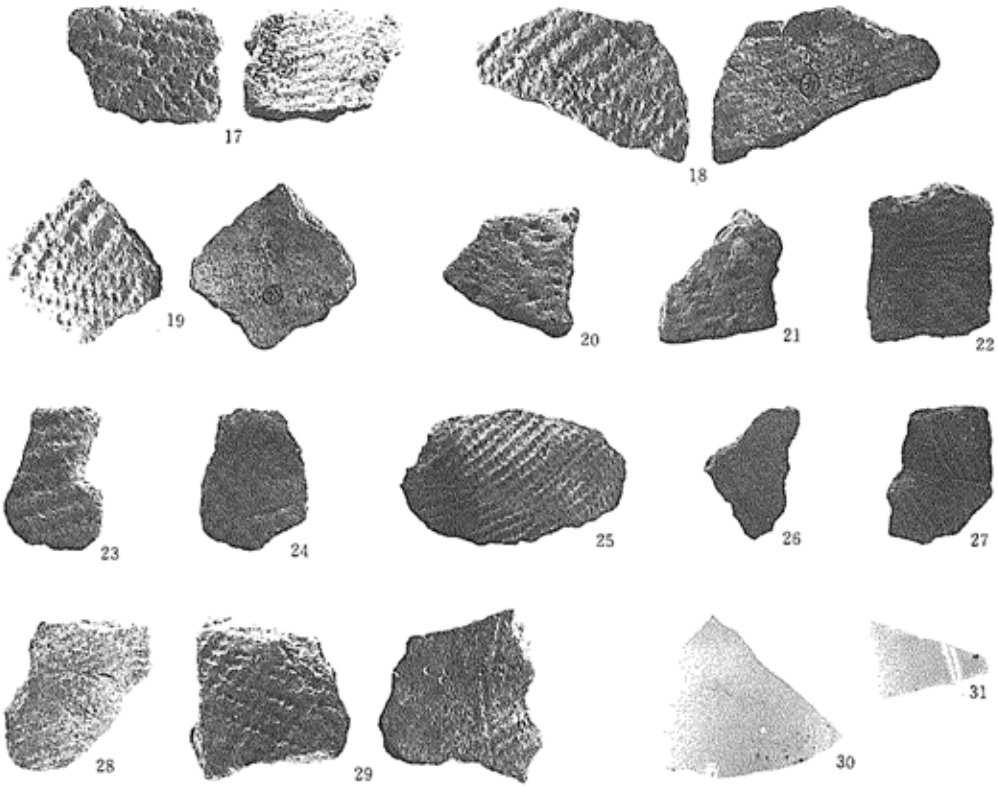
手取遺跡
1：第31図2
2：第31図3
3：第31図4
4：第33図4
5：第33図3
6：第34図3
7：第40図4
8：第40図5
9：第40図6
10：第41図3
11：第43図4

西手取遺跡
1：第8図5
2：第34図4
3：第34図5

図版19　赤焼土器坏・高台付坏・耳皿、砥石



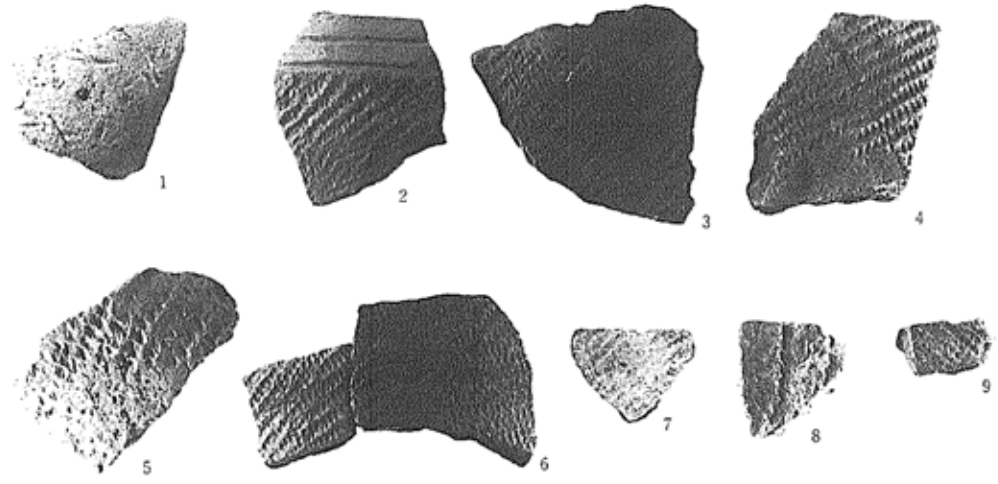
図版20　縄　文　土　器



17～28：第25図と同一番号　　29：第９図５　　30：第４住居跡堆積土

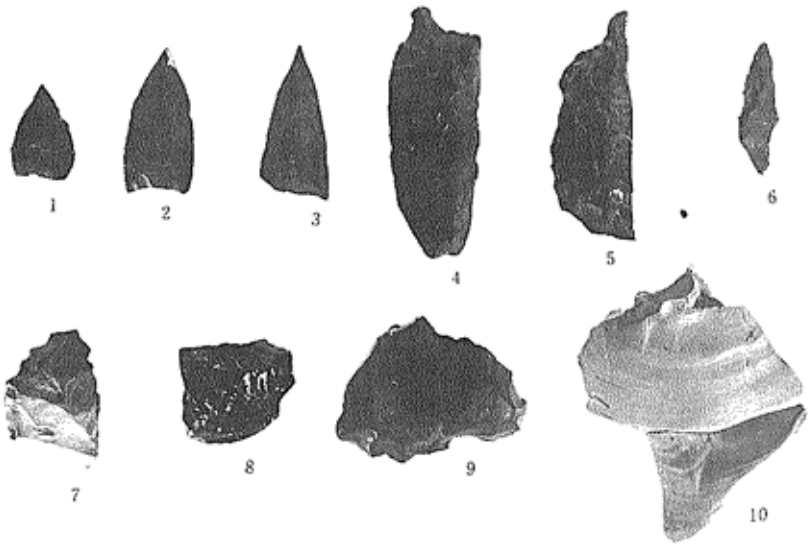
31：第５住居跡堆積土

以上、西手取遺跡

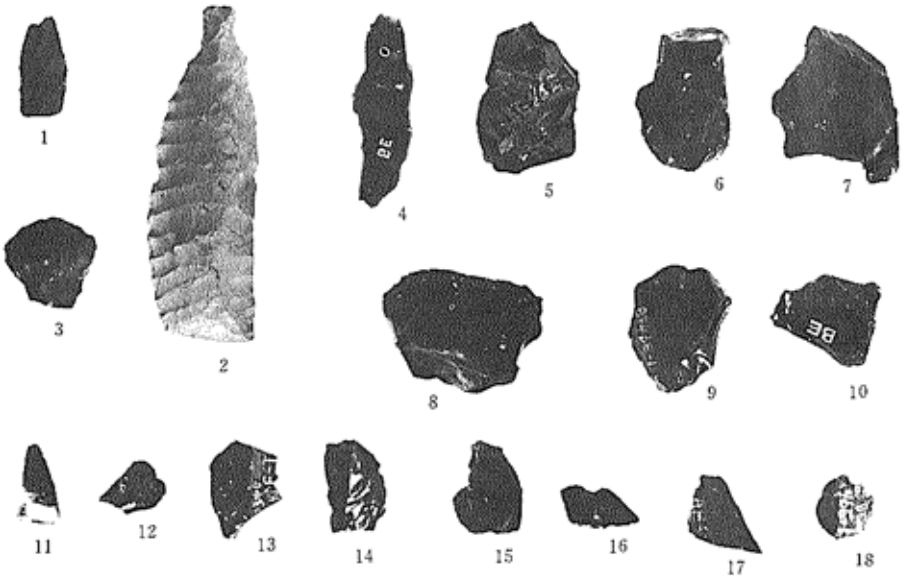


１～９：第48図と同一番号　手取遺跡

図版21　縄文土器・磁器



西手取遺跡　1～7：第26図1～7　　8：第9図7
9：第26図8　、10：第26図9



手取遺跡　1～18：第49図1～18

図版22　石　　器